機動戦士ガンダム MS IGLOO Mission Complete

角川書店 Media Books Special

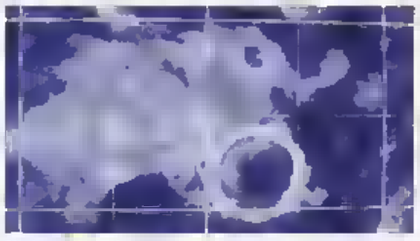
MOBILE SUIT GUNDAM MS IGLOO Mission Complete

機動戦士ガンダム MS IGLOO
Mission Complete

1年戦争通史

History of The 1year War

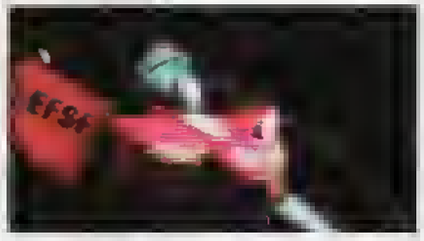
ジオン独立戦争、後に1年戦争と呼ばれるこの戦争は、地球圏全域を戦場とした。開戦から数ヵ月で地球圏の人口の半数以上が失われ、多くの都市やコロニーが戦災に見舞われた。この戦争において、投入されたMSは既存の兵器を上回る威力を発揮し、戦場の主役となった。しかし、その陰には戦果を期待されながらも、歴史の表舞台に立つことなく、消えていった兵器も数多く存在したのである。



開戦直後に、ジオン公国軍は地球へのコロニー落しを決行した。コロニーはシドニーに落着し、都市を直径500kmのクレーターに変えた。



MSはジオン公国軍によって開発された。その性能は絶大で、圧倒的な軍事力を持つ地球連邦軍を壊滅状態に追い込んだ。



1年戦争中期以降、地球連邦軍もMSの開発に成功している。こうして軍事的バランスは地球連邦軍に傾いていったのである。

年	月日	時間	出来事
0075			ZEONIC社のYMS-05ザクIとZIMMAD社のEMS-04ヅダの間で競合試作が行われる
0079	1月3日		1年戦争、勃発。ジオン公国、地球連邦に対し独立を宣言、宣戦布告と同時に、サイド1、2、4に奇襲攻撃を行う
	4日		ジオン公国軍、ブリティッシュ作戦において、コロニー落としを実施、コロニーは10日、オーストラリアのシドニーに落着
	15日		ルウム戦役、サイド5「ルウム」宙域において、地球連邦軍艦隊とジオン公国軍艦隊の艦隊戦が行われる
			第603技術試験隊、QCX-76Aヨルムンガンドの実戦評価試験を実施
		9:00	地球連邦軍第1連合艦隊、サイド5への航海中に艦隊編成を完了
		11:20	ジオン公国軍第1連合艦隊、サイド5・11バンチ「アイランド・ワトホート」に核パルスエンジンの取り付け作業を開始
		22:14	地球連邦軍第1連合艦隊、サイド5付近に到達、ジオン公国軍艦隊を目視で確認、攻撃を開始
		22:40	ジオン公国軍第1連合艦隊司令ドズル・ザビ中将、コロニーへの核パルスエンジンの装着を断念、地球連邦軍艦隊との戦闘を開始
	16日	1:00	地球連邦軍第1連合艦隊、艦艇の半数以上を失う
		3:10	地球連邦軍第1連合艦隊旗艦マゼラン級宇宙戦艦「アナンケ」撃沈、艦隊指揮官のレビル中将（当時）は脱出時にジオン公国軍特務部隊「黒い三連星」に捕縛される
		4:10	「アナンケ」より艦隊指揮を引き継いだマゼラン級宇宙戦艦「ネレイド」のロドニー・カニンガン准将、戦域からの撤退を指示
		4:24	連邦軍艦隊、3方向に分かれて戦域より離脱を開始
		4:55	「ネレイド」反転。撤退する味方艦艇の盾となる
		5:14	「ネレイド」撃沈、ロドニー・カニンガン准将戦死
		6:00	ドズル・ザビ中将、作戦の中止を決定。艦隊を宇宙要塞ソロモンとサイド3へと帰還させる
	31日		南極条約締結

■EMS-04 ヅダ、競合試作

ZIMMAD社が開発したEMS-04ヅダと、ZEONIC社のYMS-05ザクIの間で、次期主力機を巡っての競合試作が行われた。ヅダは圧倒的な性能を示し、当初の下馬評もヅダ有利と語られていた。しかし、公的飛行試験で空中分解事故を起こし、パイロットを務めたフランツが死亡、この結果、主力機はザクIに決定した。



開発費が高コストであったことも、ヅダが採用されなかった理由のひとつとされた。また、ZEONIC社の政治的妨害もあったとされる。

地上に刻まれた痕 （MS IGLOO 603 8話）

■ヨルムンガンド、運用評価試験

UC0079 01 15、第603技術試験隊は、ルウム戦役において試作艦隊決戦砲「ヨルムンガンド」の運用評価試験を実施していた。しかし、本来の作戦計画はヨルムンガンドではなく、MSによる敵艦隊への襲撃が決定事項となっていたのである。味方からも欺かれ、自分たちが戦場の囮役であることを知った試験隊のメンバーは落胆を隠せないでいた。しかしヘンメ砲術長は、その事実を受け入れながらもヨルムンガンドを発射、マゼラン級を撃破するが自身も戦死している。



ルウム戦役においてヨルムンガンドは、決戦の趨勢を決するとされた。



たった一撃で艦艇を撃破。これが唯一の戦果となった。



ヨルムンガンドは、艦隊の後方に展開、砲撃の機会をうかがっていた。

第1話 大蛇はルウムに消えた （1年戦争秘録）

年	月日	時間	出来事
0079	2月 7日		ジオン公国軍、地球侵攻作戦を開始
	3月		キシリア・ザビ少将、地球降下作戦および「重力戦線」形成の演説を行う
		1日	ジオン公国軍、第1次降下作戦開始、ヨーロッパ方面に第1地上機動師団（後の欧州方面軍）を展開
		4日	ジオン公国軍、資源探査部隊（マ・クベ部隊）を降下させる
		11日	ジオン公国軍、第2次降下作戦を実施、第2、第3地上機動師団（後の北米方面軍、緊急即応軍）を北米に降下させる
		13日	ジオン公国軍、キャリフォルニアーベースを占拠
		14日	ジオン公国軍、第3次降下作戦を実施。第4地上機動師団（後の中央アジア方面軍、東アジア方面軍、豪州方面軍）を東南アジア、オセアニア方面に降下させる
	4月 1日		地球連邦軍、「V作戦」、「ビンソン計画」を発動
		4日	ジオン公国軍、補充部隊（後のアフリカ方面軍）をアフリカ方面に降下させる
		26日	地球連邦軍第44機補化混成連隊に所属する対MS特技兵小隊、MS-06Jザク II J型と交戦
	5月	—	サイド1と同じ軌道上に宇宙要塞ソロモン完成
		9日	第603技術試験隊、北米においてMT-05ヒルドルブの再評価試験を実施
	6月	—	ジオン公国軍、月面都市グラナダ、宇宙要塞ア・バオア・クー、ソロモンを結ぶ本土防衛ラインを完成
	7月	—	地球連邦軍、エネルギーCAP技術を確立、ビーム兵器の小型化に成功
		—	ペガサス級強襲揚陸艦「ホワイトベース」進宙
		—	RX-78 ガンダム一号機、ロールアウト
		25日	地球連邦軍第44機械化混成連隊戦車小隊、ジオン公国軍のエルマー・スネル大尉のMS小隊と戦闘

■1年戦争における大規模戦闘

ルウム戦役

コロニー落し作戦「ブリティッシュ作戦」で、当初の目的を果たせなかったジオン公国軍は、サイド5「ルウム」において地球連邦軍との艦隊戦に挑んだ。当初は地球連邦軍が優勢であったが、MSの投入によって形勢は逆転、ジオン公国軍が圧勝した。



ジオン公国軍は偽情報を流して、地球連邦軍艦隊をルウムに誘い出した。

■対MS特技兵小隊の死闘

U.C 0079.04 26、味方部隊の撤退支援ため、ベン・バーバリー中尉が率いる対MS特技兵小隊は前線へと赴いた。小隊は味方の退路を分断した2機のザクIIと戦端を開き、奇襲によって1機の撃破に成功する。しかし、MSの圧倒的な戦闘力の前に次々と味方は戦死していった。ひとり生き残った中尉は、対MS重誘導弾リジーナでザクIIの撃破に成功する。作戦は成功したかに思われたが、地下からザクIIが出現　中尉はMSに拳銃を向けるが、それは彼の最期の攻撃となった。



対戦車用のミサイルを改修したM-101A3 リジーナ。ジオン公国軍のMSの前に急遽編成された対MS特技兵が使用する。



多くの部下を失った中尉は、自責の念に苛まれていた。



部隊は全滅し、中尉はたったひとりでザクIIと対峙するが、　。

第1話　あの死神を撃て！（重力戦線）

■復帰を掛けた戦車兵の孤独な戦い

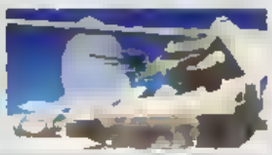
U.C 0079 5月、ヨーツンヘイムは地球に展開する部隊への補給任務にあたっていた。その頃、第603技術試験隊のオリヴァー・マイ技術中尉は次なる試験品目としてMT-05 ヒルドルブを受領していた。ヨーツンヘイムと合流した中尉は、ヒルドルブとそのテストパイロットであるデメジエール・ソンネン少佐と共に再評価試験のため地球へと降下。しかし、地球連邦軍の鹵獲MS部隊に発見され、そのまま戦闘へと発展。ソンネン少佐はひとりで6機ものMSを対峙することとなった。



巨大陸戦兵器として開発されたヒルドルブ、30サンチ砲を装備し、遠距離からの前線拠点への攻撃などを期待された。



戦車兵であるソンネン少佐は、ヒルドルブの性能を十分に引き出した



MSに対抗するため、ビルドルブには変形機構が取り入れられた。

第2話　逆襲は今日に始まった（1年戦争秘録）

■白いザクとの決着を望むヤンデル中尉の執念

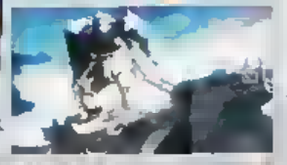
U.C.0079.07.25、ジオン公国国営放送は、地球侵攻作戦の進展と`ホワイトオーガー`ことエルマー・スネル大尉の戦果を華々しく報じた。このスネル大尉に撃破された経験を持つ地球連邦軍のハーマン・ヤンデルは、その際に植え付けられた恐怖の記憶に囚われていた。それをぬぐい去るために、彼は`ホワイトオーガー`との戦いに固執していた。そして遂にその時が訪れた。特別編成の戦車部隊を率いて出撃したヤンデル中尉の前に、スネル大尉の駆る白いザクが姿を現したのだ。



地球連邦軍の主力戦車である61式戦車5型。優れた火力を誇るが、MSに次々と撃破された。



偽情報で敵をおびき出し、戦場跡でスネル大尉と艦艇を決しようとした。



ヤンデル中尉は、かつての戦闘で負傷を負い、片脚を失っていた。

第2話　陸の王者、前へ！（重力戦線）

年	月日	時間	出来事
0079	8月	—	地球連邦軍、サイド7にてRXシリーズの最終テストを開始
	22日		第603技術試験隊、南太平洋地区において、QEX-04Mエーギルの運用試験を実施
	9月 18日		サイド7において、史上初のMS同士による戦闘が行われる
	10月 4日		ジオン公国軍地球制圧軍司令ガルマ・ザビ大佐戦死
	6日		サイド3、ズム・シティにおいて、ガルマ・ザビ大佐の国葬が執り行われる。ジオン公国総帥ギレン・ザビ、地球圏規模の演説を行う
	10日		ジオン公国軍、潜水母艦マッド・アングラー級を完成、試験航海を実施
	24日～11月7日		第603技術試験隊、地球軌道上において、EMS-10ヅダの最終評価試験を実施
	11月 7日		地球連邦軍、オデッサ作戦を実施
		6:00	地球連邦軍各部隊、行動を開始、航空機隊も順次発進する
		13:40	地球連邦軍第3軍、ジオン公国軍第1陣の防衛網の突破に成功、これを受けたジオン公国軍は、後退を開始、防衛網の縮小を行う
		20:00	突出した地球連邦軍第3軍、ジオン公国軍の反撃を受ける
	8日		終日、静謐状態
	9日	3:35	北に展開する地球連邦軍第4軍、包囲網を突破。抵抗を受けることなく進撃
		5:00	地球連邦軍第4軍の突入をきっかけに、地球連邦軍の攻撃がはじまる
		11:00	ジオン公国軍、防衛網を縮小
			地球連邦軍第3軍、カルバチア山脈の東のキシニョフに到達
			RTX-440ガンタンク小隊、タブデ陸戦艇と交戦
		17:00	マ・クベ少佐、オデッサを放棄
			オデッサ作戦終結、以降、ミリタリーバランスは地球連邦軍に傾き始める
	10日	14:00	オデッサ作戦に参加した地球連邦軍、臨戦態勢から警戒態勢に移行。以降、残敵の掃討を開始
	30日		ジオン公国軍、ジャブロー降下作戦を実施
		3:20	ジオン公国軍の水陸両用MS部隊、ジャブロー基地入口捜索の任務を受け、「マッド・アングラー」より出撃
		5:40	ジオン公国軍MS、ジャブローの入口を思われる金属反応を察知
			地球連邦軍、ジオン公国軍MS部隊の存在を確認。警戒警報を発令
		7:20	キャリフォルニアベースより出撃したガウ級攻撃空母の編隊、ジャブロー上空へ到達
		7:30	ガウより降下したMS部隊、散開後に地上戦を開始
		8:20	ジャブローに降下したMSのうち、約半数がこの時点で撃破される
		8:30	ジオン公国軍、MS部隊の撤退開始
		9:00	MS部隊の撤退は完了するが、地球連邦軍の追撃を受ける。ジャブロー攻略作戦、失敗

■海洋でのビーム砲評価試験

U.C 0079 08 22、オリヴァー・マイ技術中尉は、ジオン公国軍の偽装船「フォルケッシャー号」を拠点として、南太平洋地区でQEX-04M エーギルの評価試験を行っていた。エーギルは敵潜水艦の撃破に成功するが戦闘で失われ、エーギルを運用するザク・マリンタイプも敵モビルポッドとの交戦で大破、パイロットのギュンター・ローズマン曹長も戦死した。



水中でのビーム発射を可能としたエーギル、ザク・マリンタイプによって運用された。

水中用ポール「フィッシュアイ」。各地でジオン公国軍艦艇への攻撃を行っていた。

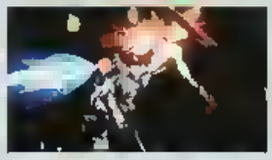
第7、8話　南海に竜は潜む　(MS IGLOO 603)

■ゴーストファイターの運命

U.C.0079 10月下旬～11月上旬、第603技術試験隊は、新鋭機として喧伝されるEMS-10 ヅダの評価試験を行っていた。しかし、3番機の事故によってヅダが欠陥機であることが判明し、試験は中止。テストパイロットを務めるデュバル少佐は弁明を口にするが、その言葉は欠陥機という事実の前に空しく響くだけだった。その後、味方の救助のため、地球軌道上に進出したヨーツンヘイムはヅダを出撃させるが、そこへ地球連邦軍の主力MS、ジムが姿を現した。



ヅダの加速にジムは追従できず、機関不調で3機が行動不能となっている。



ヅダを知り尽くしたデュバル少佐は、その性能を引き出し、敵機を撃破した。



EMS-04の改修機と謂われたヅダだが、実際はプロパガンダに利用されただけだった。

第3話　地球上に知る者は居ない　(1年戦争秘録)

■オデッサにおける機甲戦

U.C.0079 11 09、独立混成第44旅団に配備されたアリーヌ・ネイズン中尉指揮のRTX-440 陸戦強襲型ガンタンク部隊は、第144高地を巡る戦いに投入された。中尉はスパイ容疑により投獄された囚人兵であり、その嫌疑は中尉の元恋人がRTX 440の情報を漏洩させたためにかけられたものであった。敵艦のタブデ級の砲撃から彼が戦場にいることを確信した中尉であったが、そこへ攻撃中止の命令が下される。命令を無視した中尉は、タブデ級へと突撃するが、　。



220ミリキャノン砲やポップガンなど多彩な兵器を有するが、そのすべてが間に合わせの急造兵器であった。



ネイズンは技術中尉であったが、RTX-440を手足のように操り戦果を挙げた。



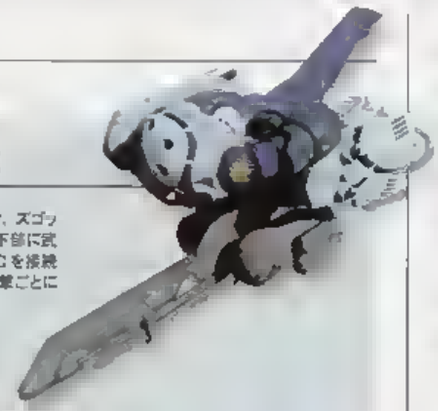
中尉の元恋人クライド・ベタニーは二重スパイとしてジオン公国軍側に潜入。

第3話　オデッサ、炎の海!　(重力戦線)

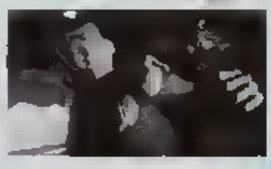
年	月日	時間	出来事
0079	12月2日		地球連邦軍、ジャブローよりホワイトベースを含む4隻の艦艇を順次発進させる
			地球連邦軍、第二連合艦隊（ティアンム艦隊）を発進させる
	2日～7日		第603技術試験隊、MSM-07Diセーゴックによる機動迎撃作戦を実施
	5日		地球連邦軍、アフリカと北米においてジオン公国軍の掃討作戦を実施
			ジオン公国軍、地球連邦軍の攻撃目標がソロモンと察知
	11日～14日		第603技術試験隊、ゲム カモフおよび対艦ライフルの運用試験をソロモン宙域において実施
	20日		第603技術試験隊、サイド4暗礁宙域においてYOP-04バロールの運用評価試験を実施
	24日		地球連邦軍、ソロモン攻略戦を開始
		18 10	地球連邦軍第3艦隊、サイド4の残敵を利用し、ソロモン近海に到達、ビーム攪乱膜を展開
		18'35	第3艦隊司令ワッケイン少佐、ビーム攪乱膜の展開後、MS部隊への出撃を命令
		18 50	第2連合艦隊、サイド1の残敵に隠れ、ソーラ・システムを展開、ソロモンに向け照射
		19 10	第2連合艦隊、MS部隊を出撃させつつソロモンに接近
		19:30	ドズル・ザビ中将、残存MSに後退を命令、自身はMA 08ビグ・ザムで出撃
		20'20	ホワイトベース隊のRX-78-2に続き、地球連邦軍MS部隊もソロモン内部に侵攻
		20:25	ソロモン救援のため、マ・クベ部隊がグラナダより出撃
		20:40	ドズル・ザビ中将、ソロモンの放棄を決定
		20:55	第2連合艦隊旗艦「タイタン」、MA-08の攻撃を受け撃沈
		21 15	ドズル・ザビ中将、戦死。ソロモン残存部隊のほとんどが撤退を完了する、ソロモン攻防戦終結
	25日		地球連邦軍、宇宙要塞ソロモンを接収、「コンペイトウ」と改名し、駐留を開始
			ジオン公国軍、ソーラ・レイ・システムの使用準備を完了する
	29日		地球連邦軍、ア・バオア・クーとジオン公国への侵攻を目的とした「星一号」作戦を発令

■起死回生を狙った軌道遊撃作戦

U.C.0079 12月上旬、第603技術試験隊はジャブローから打ち上げられる敵艦艇の迎撃を目的とした、モビルダイバーシステムによる軌道遊撃作戦を実施した、テストパイロットはヴェルナー・ホルバイン少尉であった、少尉は祖父の言葉を行動の指針としている人物で、大気圏を「海」に例えていた。1度目と2度目の作戦の失敗、さらに作戦中の少尉の精神状態を鑑みて、マイ技術中尉は作戦中止の具申も考えていた、しかし、少尉は3度目の出撃を決行するのだった、



MSM-07Di ゼーゴック、ズゴックを改修した機体で、下部に武装コンテナであるLWCを接続する、このLWCは出撃ごとに投棄されていた。





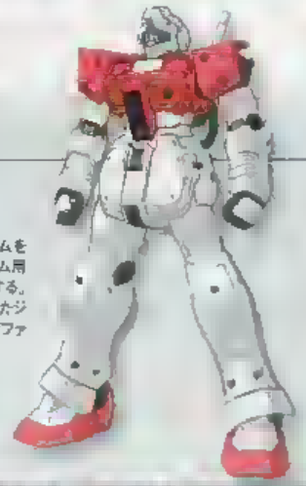
少尉は優れた感覚と操縦技術を有し、降下中に敵の迎撃を察知、回避している。

3度目の降下中に少尉は海の中で漂うような感覚に包まれている、

第1話　ジャブロー上空に海原を見た　（放送時0079）

■ジオンの窮状を示す欺瞞用MS

U.C 0079 12月上旬、ソロモン宙域において第603技術試験隊は、ゲム カモフと135mm対艦ライフルの実戦試験を実施、テストパイロットは地球連邦からジオン公国軍に義勇兵として参加したエンマ・ライヒ中尉が務めた、テストは成功するが、味方の誤射で中尉は戦死。ライヒ中尉はこの機体を「戦場の狂気」と呼んでいたが、それは彼女自身のことを表してもいたのである。



地球連邦軍のRGM-79 ジムを模した欺瞞用MS。武装もジム用に似せた外観のものを装備する。なお、ジオン公国軍は鹵獲したジムを使用しており、それは「ゲファンナー ゲム」と呼ばれた。

第3.5話　ソロモンにかえりたく　（MS IGLOO 603）

■暗礁宙域で行われた評価試験

サイド4の暗礁宙域において、5隻ものジオン公国軍艦艇が撃破されるという事件が勃発。12月20日に行われたYOP-04 ハロールの試験は、この調査も兼ねていた、開発者であるリヒャルト ヴィーゼ教授が外部からの操縦を担当し、結果、サイド4 6バンチ24に設置された地球連邦軍の秘匿ビーム砲台を発見、その性能を証明するが　、



ヴィーゼ教授が心血を注いで開発した新型の観測機、1機のみが試作されただけで、開発は中止された。

第11、12話　視線つらぬく先に　（MS IGLOO 603）

■1年戦争における大規模戦闘

地球降下作戦

ルウム戦役後の南極条約で終戦に持ち込めなかったジオン公国軍は、地球制圧軍を設立すると地球降下作戦を実行に移した。0301から計4度に亘って行われた降下作戦において、ジオン公国軍は地球の大半を勢力化に置くことに成功したのである。



ジオン公国軍の快進撃はプロパガンダ放送でも大きく取り上げられた。

History of The 1year War

年	月日	時間	出来事
0079	12月30日		ジオン公国軍、地球連邦軍レビル艦隊に向け、ソーラ・レイを照射、敵艦隊の30%を殲滅する、レビル将軍が戦死、この際、射線上のグレート・デギンも巻き込まれ、ジオン公国公王デギン・ソド・ザビも戦死する
			第603技術試験隊、MP-02Aオッゴの評価試験を月上空にて実施
	31日	0:00	地球連邦軍、残存艦隊での星一号作戦の続行を決定、
		1:25	ギレン・ザビ総帥、ア・バオア・クーにて演説を行う
		5:00	地球連邦軍、残存艦隊の再編を完了
		8:10	ア・バオア クー攻防戦開始。地球連邦軍、突撃艇を中心とした第1次攻撃隊を発進させる
		8:40	地球連邦軍MS部隊を出撃させる
		9:25	ギレン・ザビ総帥戦死
		9:40	ジオン公国軍のドロス級大型空母「ドロス」撃沈、地球連邦軍MS部隊、ア・バオア・クーへの上陸を開始
		10:10	ドロス級大型空母の二番艦「ドロワ」撃沈。
		12:05	キシリア・ザビ少将、ア・バオア・クーからの離脱を図るも戦死
		12:15	ア・バオア・クー内部のミサイル工場で火災、直下にある発電施設の機能が停止、ア・バオア・クー陥落
			第603技術試験隊、ア・バオア・クー Eフィールドにおいて、MA-05Adビグ・ラングの運用評価試験を実施
0080	1月1日		月面都市グラナダにおいて、地球連邦政府とジオン共和国臨時政府の間で終戦協定が締結される、一年戦争終結
不明			試作プロペラントタンクユニット評価試験

■1年戦争における大規模戦闘

オデッサ作戦／ジャブロー降下作戦

戦力を整えた地球連邦軍は「オデッサ作戦」において、ジオン公国軍の鉱山基地の攻略を目指した、3日間の激闘の末、最終的にはジオン公国軍が敗北、鉱山基地を放棄している、この後、起死回生を狙った公国軍はジャブロー降下作戦を実施するが、これも失敗、結果、地球上におけるジオン公国軍の勢力は大幅に減じた。



オデッサ作戦では、少数ではあるが地球連邦軍もMSを投入している、

■1年戦争における大規模戦闘

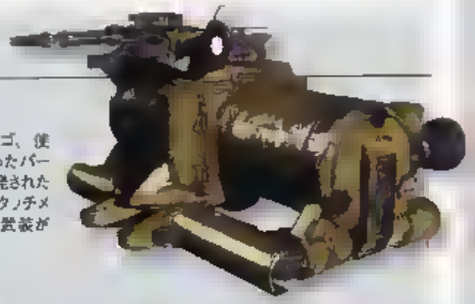
ソロモン攻防戦／ア・バオア・クー攻防戦

宇宙に進出した地球連邦軍は、宇宙要塞ソロモンを陥落させた、この戦闘で宇宙攻撃軍のドズル・ザビ中将が戦死、ジオン公国軍は防衛網の一角を失った、そして、次なる目標をア・バオア・クーに定めた地球連邦軍は、同要塞で公国軍と激戦を展開する。その最中、ジオン公国軍の首脳であるギレン ザビ、キシリア ザビが戦死、要塞も陥落し、1年戦争は終結した。



陥落寸前のア・バオア・クーからは多数のジオン公国軍艦艇がサイド3へと撤退した、

■駆逐ポッドと年少兵の戦い



MP-02A オッゴ、使用されなくなったパーツを用いて開発された急造兵器。アタッチメントでMS用の武装が使用可能。

UC0079 12.30、ア・バオア・クーでMP-02A オッゴを受領すると同時に、第603技術試験隊は力スペン戦闘大隊に編入された、パイロットとして着任したのは10代の年少兵であり、その中にモニク・キャディラック特務大尉の弟、エルヴィン・キャディラックの姿もあった、グラナダ管制区において彼は、小隊を率いて出撃、ボールを撃破、さらに1機を捕虜とするが、サラミス級の砲撃を受け戦死、その一部始終を見たキャディラック特務大尉は、一時的に混乱状態に陥った、





カスペン戦闘大隊の指揮官であるカスペン大佐。自身はゲルググに搭乗する

エルヴィン曹長が率いるオッゴ第2小隊は、ボール2個小隊を相手に戦った、

第2話　光芒の昨を越えろ　（本示唆0079）

■第603技術試験隊、最後の戦い



戦場におけるオッゴやMSへの補給、整備を目的とした機体、ピクロを管制ユニットとし、Adユニットや専用大型ブースターから構成される。

UC0079 12 31、ア・バオア・クー攻防戦においてEフィールド防衛の任務についた第603技術試験隊に、MA-05Ad ビグ・ラングが配備された、戦場における味方部隊への補給を主眼とした本機は、マイ技術中尉に預けられ、オッゴ部隊が展開するEフィールドを維持、味方部隊の撤退に尽力した、戦闘の中、技術中尉は数々の試作兵器と、そのパイロットの記録を後世に残すことが自らの務めであることを悟る、そして、ア・バオア・クー戦は終結し、第603技術試験隊も解散された、





比較的攻撃が少なかったEフィールドだったが、彼我の戦力比は6 1と算出された。

ビグ・ラングは前線を支え、味方艦隊が撤退する時間を稼いだ、

第3話　[illegible]に光を　（本示唆0079）

■兵器の本質を示唆した機器



このプロペラントユニットは、革新的な構想といえた。しかし、総合的な運用システムが整っておらず、それが事故に繋がったのである。

地球連邦との戦争準備が進められる中、ジオン公国軍は主力MSであるザクIIの行動時間や作戦半径延長のための手段を模索していた、のちにズム工科大学の教授となるウェインツ氏は、画期的なプロペラントユニットを提案、テストでは良好な結果を残し、制式採用されるかと思われたが、複雑なシステムが災いして爆発、テストパイロットも死亡した、

第13話　戦[illegible]に光を見た　宇宙世紀0078　（MS IGLOO 603）

第603技術試験隊 第44機械化混成連隊（独立混成第44旅団）、活動記録

ジオン公国軍の第603技術試験隊は、地球圏の各地で活動した。一方の地球連邦軍の第44機械化混成連隊は、ヨーロッパ方面での活動のみが知られるが、オデッサ作戦などの激戦に投入されている。以下の地図では両者が活動を行った地域を示すものである。なお、第603技術試験隊は、試験品目とその結果も付記した。



宇宙軌道上から月上空、ア・バオア・クーまで、宇宙における第603技術試験隊は地球圏のほぼ全域で活動を行っていることが分かる。

❶ルウム —— 01.15. ルウム戦役において、QCX-76A ヨルムンガンドの運用試験を実施。ヨルムンガンドは、照準用の観測データのない状態で計3発を発射。うち1発がマゼラン級に戦艦に命中し、これを轟沈せしめた。

❷地球軌道上 —— 10.24～11.09にかけて、EMS-10 ツダの評価試験を実施。対艦攻撃試験中に3番機が空中分解するという事故が発生。これを受けツダの試験は一時中止される。しかし、地球軌道上での味方の救助時に試験を再開。この際、敵MS部隊と交戦し全機撃破した。

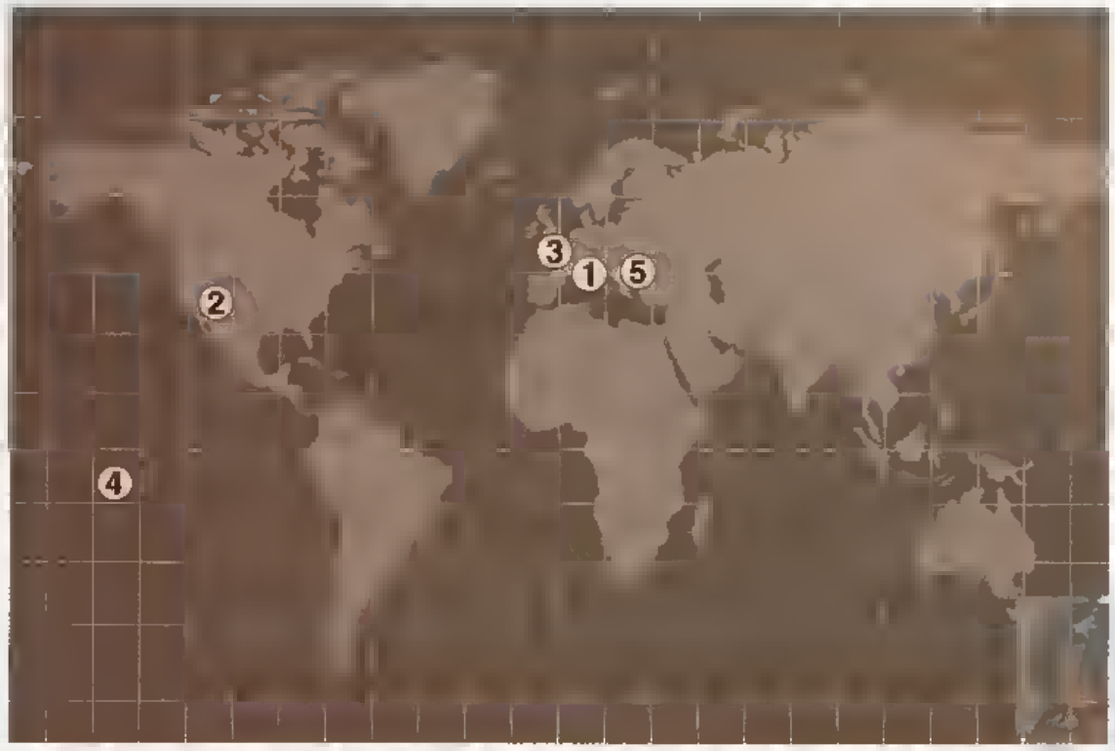
❸ジャブロー上空 —— 12.02～12.07. ジャブローから打ち上げられる敵艦隊への攻撃のため、軌道遊撃作戦を実施。モビルダイバーシステムによって4機が投入された。この結果、最後の降下作戦で敵戦艦を含む、計5隻を撃沈している。

❹ソロモン宙域 —— 12.11～14にかけて行われた戦闘用MSであるゲム カスタム135mm対艦ライフルの運用試験。味方機を装って地球連邦軍部隊に接近したゲム カモフは、135mm対艦ライフルを用いてこれを攻撃。敵MS部隊と敵艦艇を撃破する。

❺サイド4周辺宙域 —— 12.20に試作観測ポッドYOP-04 バロールの運用評価試験が行われた。バロールは哨戒宙域内に設置された地球連邦軍の固定砲台を発見し、高度な観測能力と機動性を示した。また、ヨーツンヘイムの電磁宙域からの脱出を先導している。

❻月上空 —— 12.30. 飛行モビルポッドMP-02A オッゴの評価試験を実施。敵陽動艦隊から出撃したボール2個小隊とオッゴ1個小隊が戦闘を行った。オッゴは急造兵器以上の性能を示し、6機のボールのうち5機を撃破した。しかし、オッゴもパーツ精度の問題で1機が撃破された。

❼ア・バオア・クー —— 12.31. ア・バオア クーのEフィールドに投入されたMSA-005 ヒグ・ラングは、前線においてオッゴへの補給を行った。これによりオッゴの戦闘継続時間と稼働率の延長に成功している。同時に防衛戦闘を行い、多数の敵機を撃破した。この際に使用したビーム攪乱膜は、味方部隊の生存率の向上に役立った。



宇宙が主な活動場所であった第603技術試験隊も、試験品目によっては地球でも活動した。一方、地球連邦軍の第44機械化混成連隊は、欧州方面を支える部隊のひとつとして各地を転戦している。

❶ヨーロッパ北方戦線　マリアージュ近郊 —— 味方の後退を援護するため第44機械化混成連隊対MS特技兵小隊を前線に派遣。小隊は2機のザクIIの撃破に成功するが、隊長ひとりを残して全滅してしまう。そして、戦闘後に現れた3機目のザクIIとの戦闘によって隊長も戦死した。

❷北米大陸　第67物資集積所近辺 —— 05.22. 第603技術試験隊は北米大陸において試作モビルタンク、MT-05 ビルドルブの再評価試験が行われた。降下中に敵部隊に発見されたため、戦闘に突入。結果、ビルドルブ1機、強襲MS（ザクII J型）と61式戦車2輌を撃破、敵部隊を全滅させた。

❸ヨーロッパ北方戦線 —— 敵MS部隊によって機甲部隊の大半を失った第44機械化混成連隊は、敵を陽動するために偽情報を流した。特別編成された部隊は、"ホワイトオーガー" ことエルマー スネル大尉のザク小隊と戦闘を開始。敵MS小隊の殲滅には成功するが、戦車部隊も全車輌が失われた。

❹東太平洋地区 —— 08.22. 水中でのビーム発射を目的に開発されたAMX-AM ユーギルの運用評価試験を実施。ビームの発射には成功。これにより敵水艦部隊を撃破するが、ユーギルも戦闘中のダメージにより爆発。管轄であるザク・マリンタイプも大破した。

❺オデッサ —— 11.09. オデッサ作戦に投入された独立混成第44旅団は、RTX-440 陸戦強襲型ガンタンクの配備を受け、前線へと進出した。次々と敵機を撃墜、ダブデ級も撃破するが、それまでに2機のRTX-440が失われた。また、2隻目のダブデ級を破壊するため、残る1機のガンタンクも自爆した。

CONTENTS

MOBILE SUIT GUNDAM MS IGLOO Mission Complete

002 1年戦争史

007 第603技術試験隊, 第44機械化混成連隊活動地図

009 第1章

010 ヨーツンヘイム(第603技術試験隊)

018 QCX-76A ヨルムンガンド

025 ムサイ級軽巡洋艦　グワジン級大型戦艦

026 ワプア級補給艦　MS-06F ザクⅡF型

027 マゼラン級宇宙戦艦　サラミス級宇宙巡洋艦

028 MT-05 ヒルドルブ

036 コムサイ／MS-06J ザクⅡJ型

037 MS-06J ザクⅡJ型(セベモンテ隊)　61式戦車　セベモンテ隊

038 EMS-10 ヅダ

046 ホートル／RGM-79 ジム

047 RB-79 ボール／サラミス級宇宙巡洋艦(ボール搭載型)

049 第2章

050 MSM-07Dl ゼーゴック

058 ガウ級攻撃空母／コアブースターⅡ インターセプト

059 マゼラン級宇宙戦艦(ブースター装備)
サラミス級宇宙巡洋艦(ブースター装備)

060 MP-02A オッゴ

067 MS-14 ゲルググ(カスペン専用機)　RB-79 ボール

068 MA-05Ad ビク・ラング

074 チベ級高速重巡洋艦／グワジン級大型戦艦／ムサイ級軽巡洋艦

075 MS-05 ザクⅠ／MS-06F ザクⅡF型

076 MS-09R リック・ドム、MS-14 ゲルググ

07 RGM-79C 後期型ジム／サラミス級宇宙巡洋艦

079 第3章

080 M-101A3 リジーナ

084 地球連邦軍 歩兵　61式主力戦車

085 M72 1/2tトラック ラコタ　4 1/2 6×6カーゴトラック

086 MS-06J ザクⅡJ型　PVN.42/4 マゼラ・アタック／ドップ戦闘機

087 中型汎用バイク B.M.C.Z78/2／リュッセル 11/2 セブ

088 軽機動車PVN 3/2サウロペルタ／ジオン公国軍 歩兵

089 PVM 4/3 ワッパ

090 61式主力戦車5型

098 MS-06J ザクⅡJ型 "ホワイトオーガー"

099 ジオン公国軍 歩兵

100 RTX-440 陸戦強襲型ガンタンク

106 ヘビィ・フォーク級陸上戦艦　ビッグ・トレー級陸上戦艦

107 RGM-79 [G] 陸戦型ジム／M353A4 ブラッドハウンド

108 ダブデ級陸戦艇　MS 09 ドム

109 MS-07B-3 グフ・カスタム／PVN.44/1 ヴィーゼル

110 マゼラ・アイン空挺戦車 トーチカ

111 死神

113 設定資料集

COLUMN

048 EMS-04 ヅダ／QEX-04M エーギル

078 ゲム カモフ／YOP-04 パロール

112 ザクⅡ用試作プロペラントユニット／RB-79N フィッシュアイ



第1章 1年戦争秘録

第1話 大気はルウムに消えた
第2話 遠吠えに落日に染まった
第3話 軌道上に幻影は疾る

Jotunheim ヨーツンヘイム



試作兵器の行く末を見守った試験支援艦



SPECIFICATION

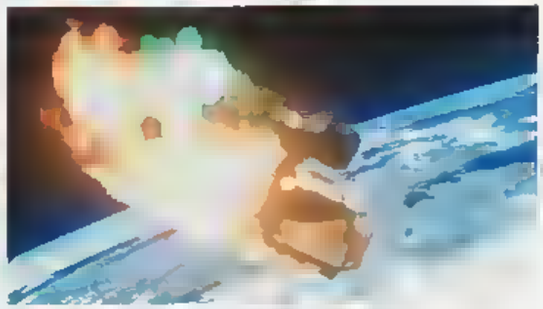
全長 292.6m
全幅 170.5m
全高 97.0m
船体乾重量 13,700t
全装備重量 22,000t（標準装備、推進剤搭載時）
主推進システム 熱核ロケット×5
武装 単装メガ粒子砲×1、連装機関砲×4







ヨーツンヘイムは運用時期によって、外装にも違いが見られる。YMT-05フヒルドルブの評価試験の際には、ダークグレー系の迷彩塗装が施された（U.C 0079.05.09頃とされる）。



ヨーツンヘイム以外の試験支援艦として、第604試験支援艦「ムスペルヘイム」が知られている。

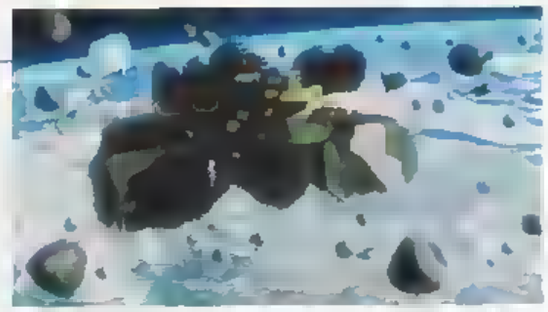
開発経緯 | DEVELOPMENT

ジオン独立戦争は、ジオン公国にとって文字通り総力戦であった。国家の総力を挙げて完遂すべき戦争の実施には民間の協力も不可欠であった。このためジオン公国軍は、多数の民間船を徴用、輸送や補給といった任務に従事させた。このヨーツンヘイムもそうした軍に徴用された民間の艦艇の一隻である。

元々、ヨーツンヘイムはスペース・コロニー間の物資輸送を行っていた民間の貨客船である。こうした民間の貨客船はスペース・コロニーにとっての生命線であり、各コロニーの経済活動の大部分は、往来する貨客船によって成り立っていたともいえる。特にジオン公国はU.C.0059の地球連邦による経済封鎖以降も、ヨーツンヘイムをはじめとする貨客船の活躍により国力を増強させていたのである。また、こうした貨客船は軍艦と連携することも多く、軍と密接な関係にあったことも徴用後の運用に有利に働いたといえる。

徴用後、ヨーツンヘイムとその同型艦には補給や輸送といった任務以外にも、「試作兵器の運用評価試験」を担当する試験支援艦という任務が与えられた。これは300m近い船体のほぼすべてが積載スペースで占められていること、格納庫が最長部で幅45m、高さ33mもの大きさを持つことも、こうした任務が与えられた理由と考えられる。しかし、民間の貨客船（徴用にあたって改修を施したとはいえ）に試作兵器の評価試験を行わせていたという事実は、ジオン公国、そして軍の窮状を示すものでもあった。

ヨーツンヘイムは、評価試験の対象となった試作兵器に合わせ、幾度かの改装が施され、地球圏の各地に派遣された。その戦局の悪化に伴い任務の内容も変化していき、1年戦争中期以降は実戦部隊に組み込まれ、ア・バオア・クー攻防戦にも投入されている。こうした激戦を経験したにもかかわらず、ヨーツンヘイムは人的な被害をほとんど受けることなく、サイド3へと帰還、終戦を迎えることになった。



地球圏各地で評価試験を行っており、EMS-10ヴダの最終評価試験時には、地球軌道上まで進出している。



貨客船であるため、艦内のスペースは広く、特に格納庫はMSが直立しても余裕があるほどであった。



05 09以降、迷彩塗装が変更されることはなかった。これは、地球近海で任務を行っていたことなどが理由と考えられる。



U C 0079.10 24から行われたEMS-10 ヅダの運用評価試験時も、ヒルドルブの評価試験の際と外見上の変化は見られない。





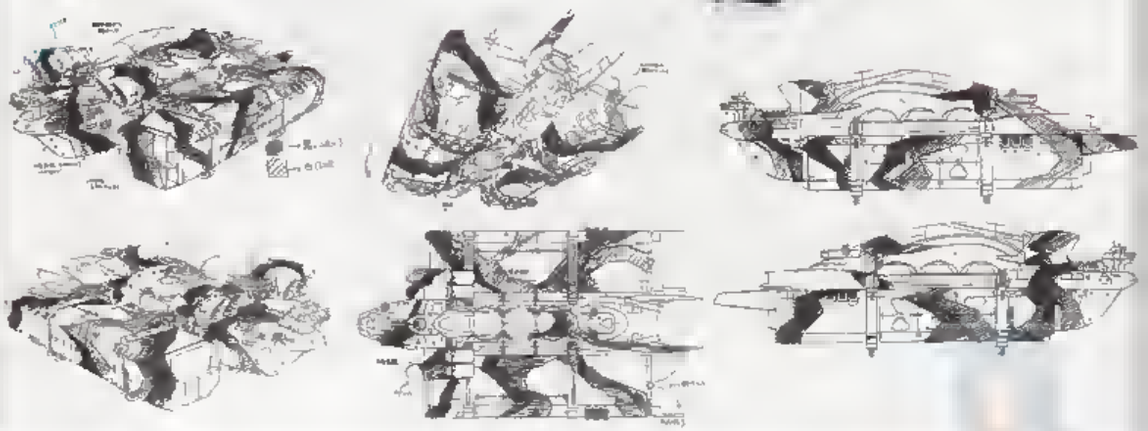
U.C.0079 12.02から3度に亘って実施された機動襲撃作戦に際しては、ブースターが設置されている。



戦局によって変更された外装

ヨーツンヘイムは時期によって塗装や装備が異なっている。これは評価試験を実施した地域や戦局に合わせて行われたと考えられる。この中でもEMS-10 ヅダの評価試験時に設置されたMSの発着艦システムや、MP-02A オッゴの搭載に合わせて取り付けられた発進システムなどが大きな変更として知られている。こうした装備が必要になった背景には、評価試験の内容が多岐に亘ったこと、そして、逼迫した戦況によりヨーツンヘイムが評価試験以外に実戦部隊として運用されたことも理由とされる。

■迷彩パターン



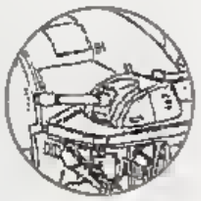
ヨーツンヘイムの装備

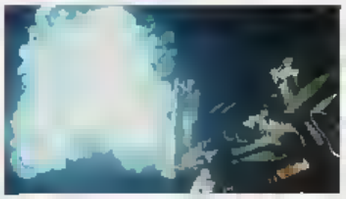
■ ■ ■

改用にあたってヨーツンヘイムには、単装メガ粒子砲1基と連装機関砲4基が設置された。さらにブリッジには評価試験を担当する技術試験隊が使用する「観測指揮所」が設けられている。評価試験をサポートする小型観測艇や観測ポッドなどの装備もこの時点で搭載されたと考えられる。後にブースターが追加され、機動性の低さを軽減させているが、目立った改修はそれのみで、兵器や装甲が追加されることはなかった。

単装ビーム砲

ブリッジ後部の一段高くなった位置には単装メガ粒子砲が装備されている。連装機関砲と同じく改用後に設置された兵装で、砲雷科によって運用された。小口径であったため、威力は高くなかったと思われる。

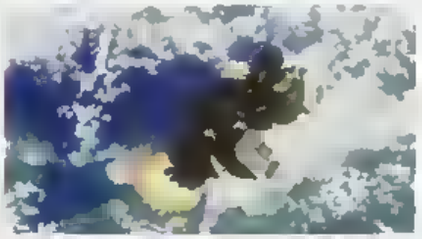




ヨーツンヘイムでは最高の威力を誇る兵装だが、艦の性質上、積極的に運用されることはなかった。

コンテナ

艦の左右に設置された格納庫。艦の全長に匹敵し、艦長部で幅45m、高さ33mというサイズによる圧倒的な積載量を誇る。各種試作兵器のほか、コムサイや投下コンテナなど、多種多様な機器を搭載可能であった。



格納庫は可動式で、前後のレールに沿って90度稼動する。ブースター使用時などに可動させていた。



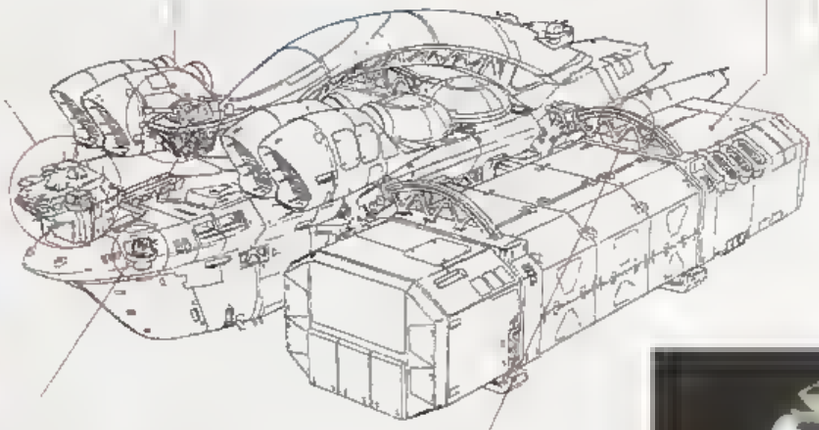
格納庫は後部の側面ハッチが開閉可能で、物資の搬出入やMSなどの出撃時には任意の箇所が開かれた。

ブリッジ

艦首最前部に艦橋が設置されている。こうすることで広い視野を確保していると思われる。観測指揮所が設置できるほどのスペースもあったことから、内部のスペースにも余裕があったと



ブリッジ上部にはレーダーやアンテナなどの機器が設置されていた。

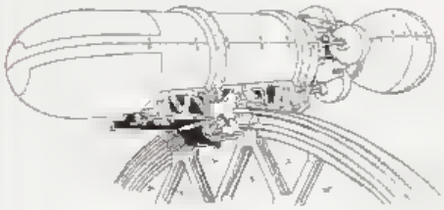




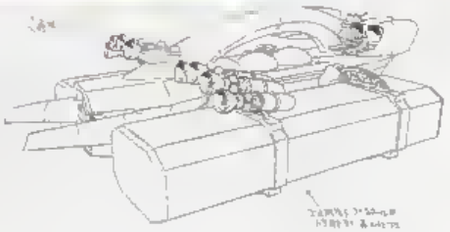
軌道遊撃作戦時に装備され、ゼーゴックの投下後に戦域からの離脱などで用いられた。

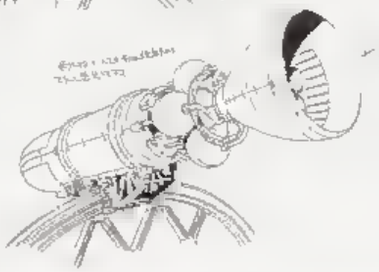
ブースター

軌道遊撃作戦（モビルダイブ）に際し、設置された、左右の格納庫の上部に各4基ずつを搭載、戦域からの高速離脱などに主に用いられた。全長は40mで、HLV用のブースターを改良したものと思われる。

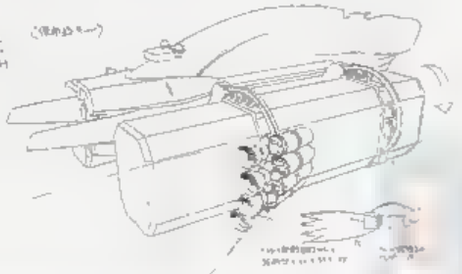


ブースターは同一方向ではなく、放射状に設置されている点が特徴、使用時には巨大な噴射炎が発生する。





ブースターは40mもの全長を有する。ノズル内部には5基の小型ノズルが内装されている。



対空機銃

艦首下部ブリッジ後部の左右には、連装機関砲を1基ずつ装備されていた。低高度程度なら対応可能であったと思われるが、基本的には防御用で宇宙艦艇に対しではほとんど効果がなかったと思われる。





計4基を装備し、弾幕を展開することも可能であった。運用は砲雷科が担当した。

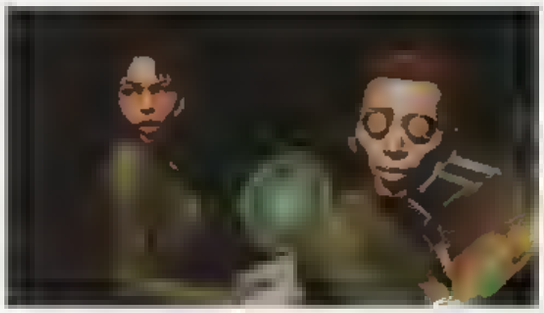
艦橋――艦と評価試験の中枢

■ ■ ■

ヨーツンヘイムの艦橋には艦長をはじめ、副長や操舵手などが常駐していた。また、モニク・キャディラック特務大尉をはじめとする第603試験隊の要員の多くもここに詰めていた。



艦の中枢といえる場所であったが、最小の人員が配置されているだけであった。



ヨーツンヘイムは航海科をはじめ、5つの分隊と甲板を取り仕切る部署　　計6つの科で運用されていた。

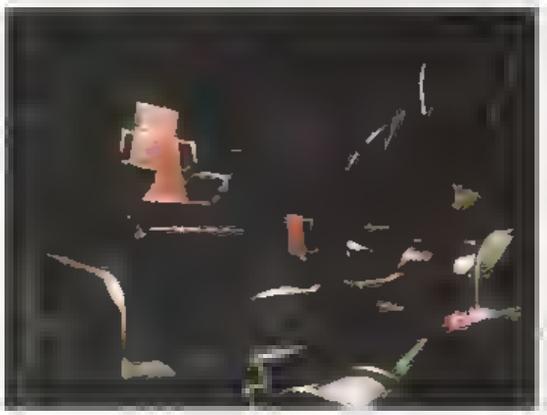


観測指揮所にはオリバー・マイ技術中尉以外に、4人が常駐しており、試験時にはデータの収集にあたっていた。

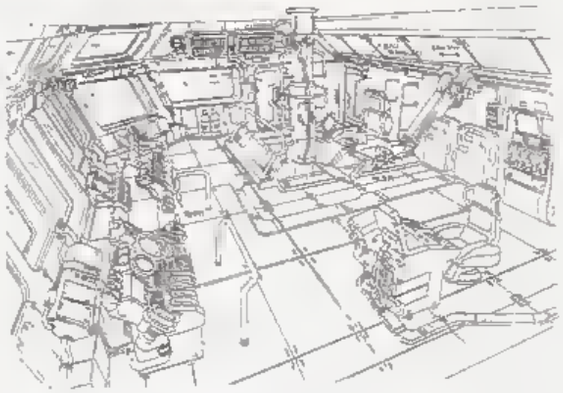
■艦橋



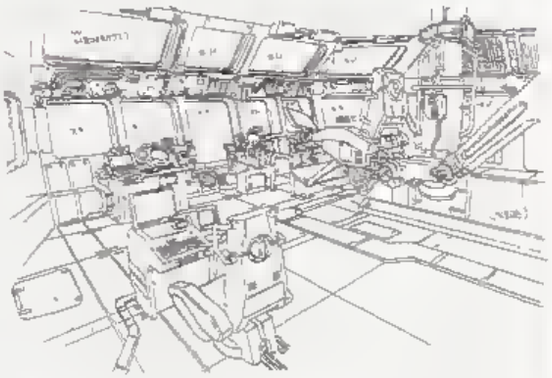
左舷方向から見た艦橋内部。艦長席をはじめ、各種コンソールが配置されていることが分かる。また、手前は増設された特務大尉の席。



艦長席は一段高い場所に設置されている。特務大尉の席が増設される以前は、艦橋に座席はこれのみであったと思われる。

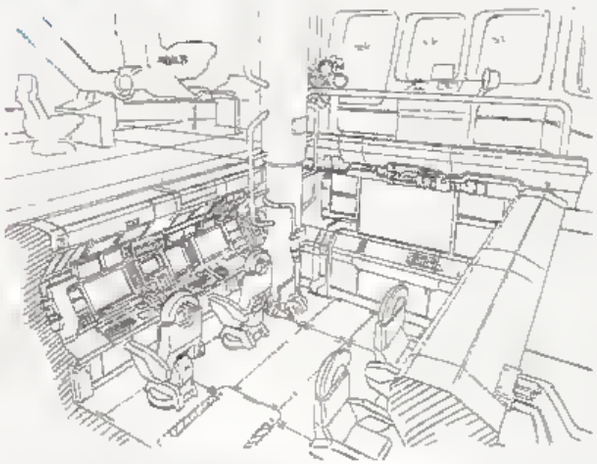


左のコンソールと、操舵は航海科のジーン・ザビエル2等航海士（曹長相当官）とドメニコ・マルケス3等航海士（曹長相当官）がそれぞれ担当した。

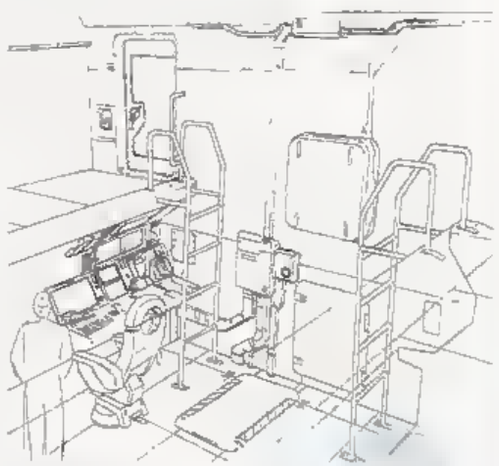


艦橋後方からのアングル。多数の窓が設けられていることが分かる。正面には大型のスクリーンが内蔵されており、必要に応じて展開された。

■観測指揮所



艦長席の右に増設された観測指揮所。一段低くなっており、各種コンソールが設けられていることが分かる。



観測指揮所に出入りするための梯子が設置されている。貨客船時代にここにどういった機器が設置されていたかは不明。

格納庫――数々の試作兵器の運用拠点

■ ■ ■

ヨーツンヘイム最大の特徴である箇所がこの格納庫である。膨大なスペースを有しており、試作兵器だけではなく、発着艦システムなど運用に必要な様々な機器が搭載された。



単純な構造であったことも、用途に応じた改修を容易にした最大の要因といえる。

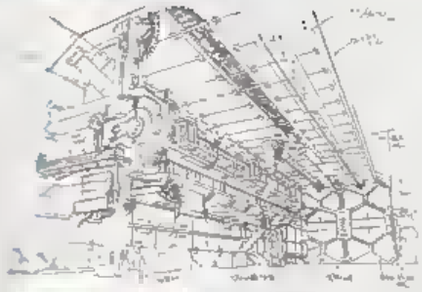


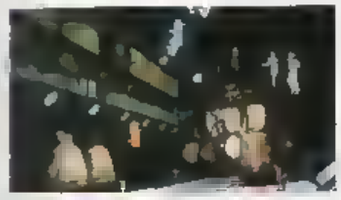
MSの発進時にはブラスト・ディフレクターを展開する。これは熱や噴煙などを船外に排出するシステムで、格納庫外部に噴射口が設けられている。



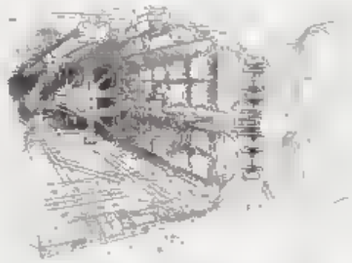
通常時にはブラスト・ディフレクターは閉じた状態となる。天井部にはクレーンが設置されているが、MS懸架用のアームに改良された。

■格納庫及び各部ハッチ

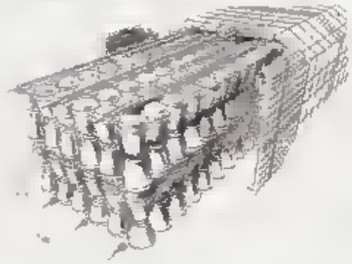




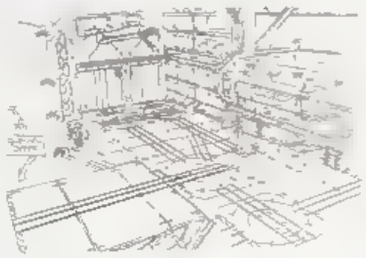
上、格納庫を艦首方向から見た図。船体側（左）の中央には管制室と思われる施設が見られる。



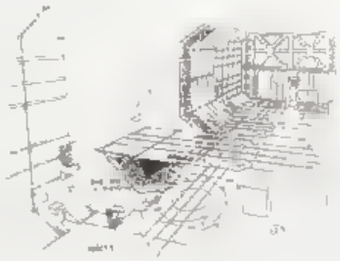
後部ハッチを開いた状態。大型、中型、小型の3種類のクレーンがある。また、上部にはコントールデッキが設けられ、床にはレールや回転台が設けられている。



地球へのコンテナ投下任務に合わせ、フレームが設置された。このフレームには左右合わせて500個（528個ともいわれる）のコンテナを搭載可能であった。

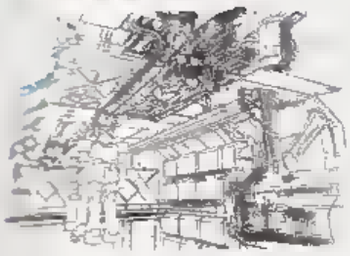


左舷側のハッチを開いた状態　側面のハッチはヨルムンガンド受領時や、オノゴの発進時に使用している。

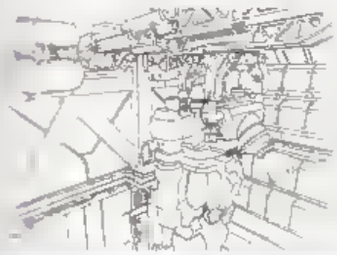


艦後方から左舷側のハッチを開いたところ。側面の壁がハッチを兼ねている。4枚のパネルが上下2枚ずつ開く仕組みとなっている。

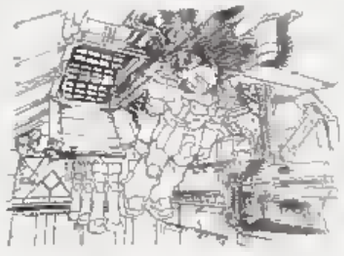
■MS着艦システム



発進時、MSは上部のクレーンを改良した懸架アームに固定される。ここは3機分の待機スペースとなっている。



懸架された状態のEMS-10ツダ。肩とランドセルに懸架アームが接続されていることが分かる。

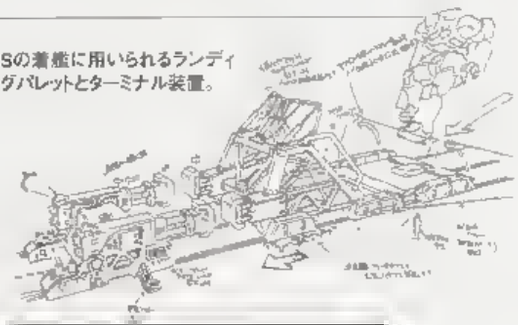


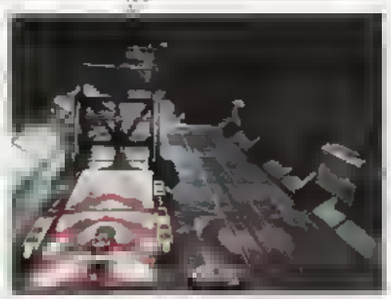
発進時には、ブラスト・ディフレクターが展開し、MSはやや前のめりの姿勢を取る。武装はこれ以前に装備する。



壁面に設けられたコンテナには、ザク・マシンガンやザク・バズーカなどの武器やシールド、MSのパーツ類が収められている。

MSの着艦に用いられるランディングパレットとターミナル装置。

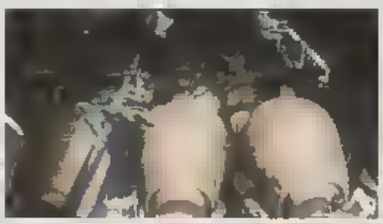




艦尾方向から見たランディングパレット。最奥部には、バリアネットなどが設けられていることが分かる。

第603技術試験隊とヨーツンヘイムの編成

第603技術試験隊はヨーツンヘイムを試験支援艦としていたが、隊と艦のそれぞれは別系統の部隊として運用されていた。第603技術試験隊は技術本部に属し、他の技術試験隊同様、アルベルト・シャハト技術少将の統括下にあった。また、両者の任務も異なっており、第603技術試験隊は試作兵器のデータ収集と評価、ヨーツンヘイムは試作兵器や物資の運搬であった。このため、艦内にはヨーツンヘイムと第603技術試験隊、そして1年戦争末期にはカスペン戦闘大隊が加わったことで、3つの指揮系統が混在することとなった。



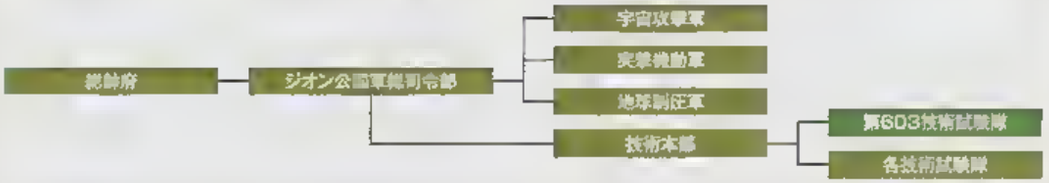
地上部隊への物資補給はヨーツンヘイムの任務であり、第603技術試験隊とは別個のものであった。



1年戦争後期に実戦部隊に組み込まれたのちも、複数の指揮系統が統合されることはなかった。

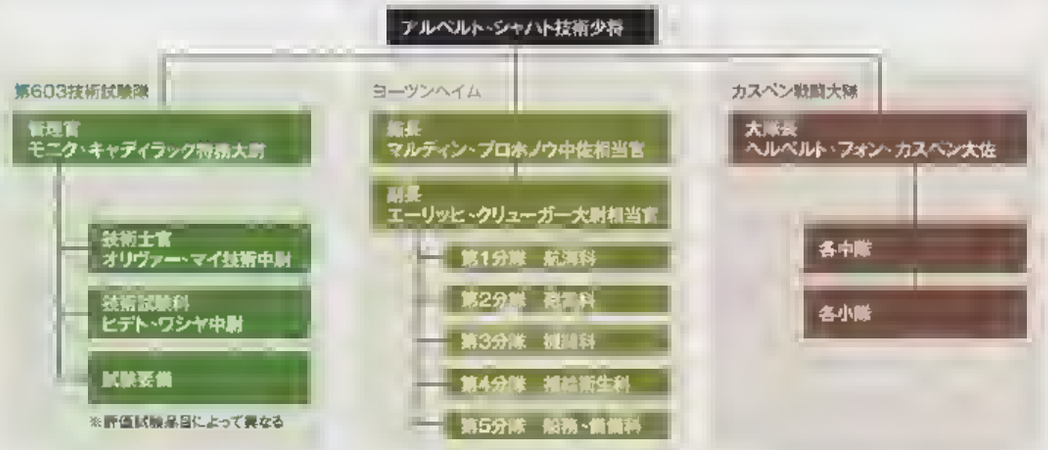
ジオン公国内部での指揮系統

ジオン公国軍内において第603技術試験隊は技術本部に所属していた。ヨーツンヘイムにはマイ技術中尉をはじめ数名の乗船が確認されている。また、ヨーツンヘイムと同系艦のムスペルヘイムを試験支援艦とした第604技術試験隊も知られている。



ヨーツンヘイム内の指揮系統

当初、ヨーツンヘイムにはふたつの指揮系統が混在していた。その後、カスペン大佐とカスペン戦闘大隊の配置に伴い、最終的には3つの指揮系統が存在することになった。カスペン大佐が最上級者にあたるため、彼が事実上の指揮官といえた。



技術本部(第603技術試験隊)



アルベルト・シャハト

技術本部長で、階級は技術少将、冷静な人物て、戦局を分析し、それをマイ技術中尉に語ることもあった、



オリヴァー・マイ

第603技術試験隊に所属する技術中尉。ズム工科大学を繰り上げ卒業し、技術本部に配属された、兵器やシステムに対して深い造詣を持つ、



モニク・キャディラック

総帥府から監理官として第603技術試験隊に派遣された女性、高いMS操縦技術の持ち主でもある、階級は特務大尉。



ヒデト・ワシヤ

士官学校出身のパイロットで階級は中尉。傷った成績のため技術試験科への配属となった、のちにツダ2番機のパイロットを任ぜられる、

試験支援艦ヨーツンヘイム

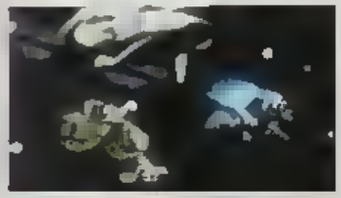


マルティン・ブロホノウ

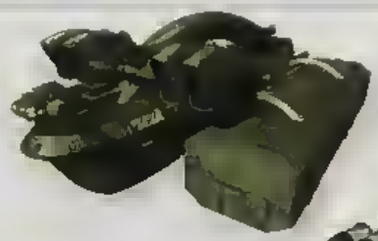
ヨーツンヘイムの艦長で、中佐相当官。サイド3の空間商船大学を卒業後、貨客船の艦長として20年以上に亘るキャリアを持つ。

運用艦

第603技術試験隊はヨーツンヘイムを母艦として任務を行っていた。試験を行う試作兵器の特性によって、艦には随時、改修が加えられた。のちには実戦部隊へと編入されている。



1年戦争末期には実戦部隊に組み込まれ、ア・バオア・クー攻防戦にも参加している。





最終的には迷彩塗装が施され、ブースターが装着されている。MSも配備され、実戦部隊とほぼ同じ扱いであった。

装備

当初、ヨーツンヘイムには評価試験を行う際に使用する観測艦や観測ポッド程度しか配備されていなかった。その後、ヅダが正式配備されたのち、カスペン戦闘大隊の着任に伴いMS-14ゲルググとオッゴが装備され、さらにア・バオア・クー攻防戦直前にはMA-05Adビグ・ラングも受領している。



OP-02c

各種センサーなどを搭載した無人の観測ポッド。カメラ部分には、ザクのモノアイが流用されている。



[illegible]

[illegible]ントの評価試験の際にデータ収集のために出撃。ア・バオア・クー戦時には、友軍兵士[illegible]も用いられた。



EMS-10ヅダ

評価試験ののち、2番機と予備機がヨーツンヘイムに配備された。高い基本性能を持つ機体だが、耐久性に問題を抱える。



MS-14ゲルググ

カスペン大佐の専用機で、彼のパーソナルカラーであるグレーに塗られている。ランドセルが高機動型のそれに換装されている。



[illegible]ヒ・クリューガー

[illegible]ムの副長。サイド[illegible]等専門学校を[illegible]でヨーツンヘイム[illegible]る。徴用後は大[illegible]となった。



ジーン・ザヒエル

2等航海士で軍属になったのちは曹長相当官。空間商船高等専門学校を卒業しており、ヨーツンヘイムでは情報の収集や分析を主任務とした。



ドメニコ・マルケス

航海科に所属する三等航海士で曹長相当官。操舵を担当しており、高い操船技術を有している。オレンジの髪とゴーグルが特徴。

カスペン戦闘大隊



ヘルベルト・フォン・カスペン

カスペン戦闘大隊の大隊長で階級は大佐。ソロモン攻防戦ののち、再編された部隊と共にヨーツンヘイムに乗船する。左腕は義手だった。

試験品目

QCX-76A ヨルムンガンド

艦隊戦の趨勢を決定する火砲をとして開発された超大型プラズマ・ガン。ルウム戦役において運用試験が実施され。マゼラン級を一撃で撃破した。



YMT-05 ヒルドルフ

30サンチ砲のよる攻撃力と。キャタピラによる高い不整地走破性能を持つモビルタンク。北米での運用試験ののち、そのまま現地配備される予定であった。



EMS-10 ヅダ

ZIMMAD社のEMS-04ヅダを改修した機体で。高い機動性とザクIIに匹敵する性能を持つ。運用試験の様子は、プロパカンタ放送として地球圏で放映された。



MSM-07Di ゼーゴック

「モビルダイバーシステム」と呼ばれる試作兵器。ズゴックを流用した管制ユニットのゼーゴックと兵装コンテナであるLWCとで構成される。



MP-02A オッゴ

技術本部が開発した駆逐モビルポッド。ザクIIJ型のジェネレーターを流用しており。武装もザクIIのものを使用可能であった。カスペン戦闘大隊に配備された。



MA-05A ビグ・ラング

前線での補給や修理を行う「機動構頭堡」。MA-05ビグロと可搬補給艦。大型のブースターを組み合わせた急造兵器。ビーム攪乱膜の展開などが可能。



QCX-76A Jormungand QCX-76A　ヨルムンガンド



艦隊戦での戦果を期待された超大型決戦砲

ムサイ級軽巡洋艦に匹敵するサイズを持つ巨大ビーム砲で、当時のエネルギー兵器では射程、火力共に最高レベルの性能を有していた。

移動能力がなく、運用試験では分解して戦域に運ばれた。このため、発射には現地での組み立てが必要であり、即応性は低かった。



運用試験では、マゼラン級宇宙戦艦を一撃で撃沈。だが、戦術の主流はMSへと移行しており、本機が制式採用されることはなかった。



弾体は超小型のミノフスキー・イヨネスコ型核融合炉で、これを暴走させることで核融合プラズマ・ビーム、プラズモイドを発生させる。

SPECIFICATION

種別:超大型核融合プラズマ・ガン
全長:231.0m
有効射程:300km
初速:2,000km／s
最大射程:1,800～2,000km（計画値）
生成弾体:プラズモイド
ビーム出力:500テラジュール（計画値）
装填弾体:ミノフスキー・イヨネスコ型核融合炉
（出力150,000kW相当品）
照準方式:観測機による間接照準ならびに直接目視照準



ビームの加速と安定化は、砲身だけでなく各部に設置されたアシスト・インジェクターも担っていた。これはメガ粒子砲などでは見られない機構だ。

開発経緯 | DEVELOPMENT

一年戦争開戦以前、ジオン公国軍が開発した巨大核融合プラズマ・ビーム砲が、QCX-76A ヨルムンガンドである。「試作艦隊決戦砲」と呼ばれたことからもうかがえるように宇宙艦隊戦を意識した兵器で、一部では戦争の帰趨を決するものと考えられた。

ヨルムンガンドが開発された背景には、宇宙艦隊戦こそが宇宙世紀の戦争形態と考えられていたこと、そして既存の指向性エネルギー兵器への対抗策が高度化した結果、有効な打撃を与え難くなったことなどの事情があった。

圧倒的な国力を誇る地球連邦との戦争を想定していたジオン公国は、戦力差を覆すため既存の兵器体系を強化するミノフスキー粒子と、その散布環境において新兵器モビルスーツ（以下MS）の戦力化を進めたが、保険としてMSとは別に艦隊戦を優位に進められる兵器も求められた。ここに新型指向性エネルギー兵器の必要性が加わることで、次世代攻撃兵器開発総合プロジェクトの一環としてのヨルムンガンドの開発が開始されたのだった。

核融合プラズマ・ビームを発射するヨルムンガンドは、超小型ミノフスキー・イヨネスコ型核融合炉をカートリッジとして使用し、これを暴走させて発生した超高温プラズマをビームとして発射する。当初は従来型水爆を起爆、発生させたプラズマを使用する予定であったが、制御の容易さや電磁シールドおよび砲身への負担を考慮して、ミノフスキー・イヨネスコ型核融合炉が用いられることになった。

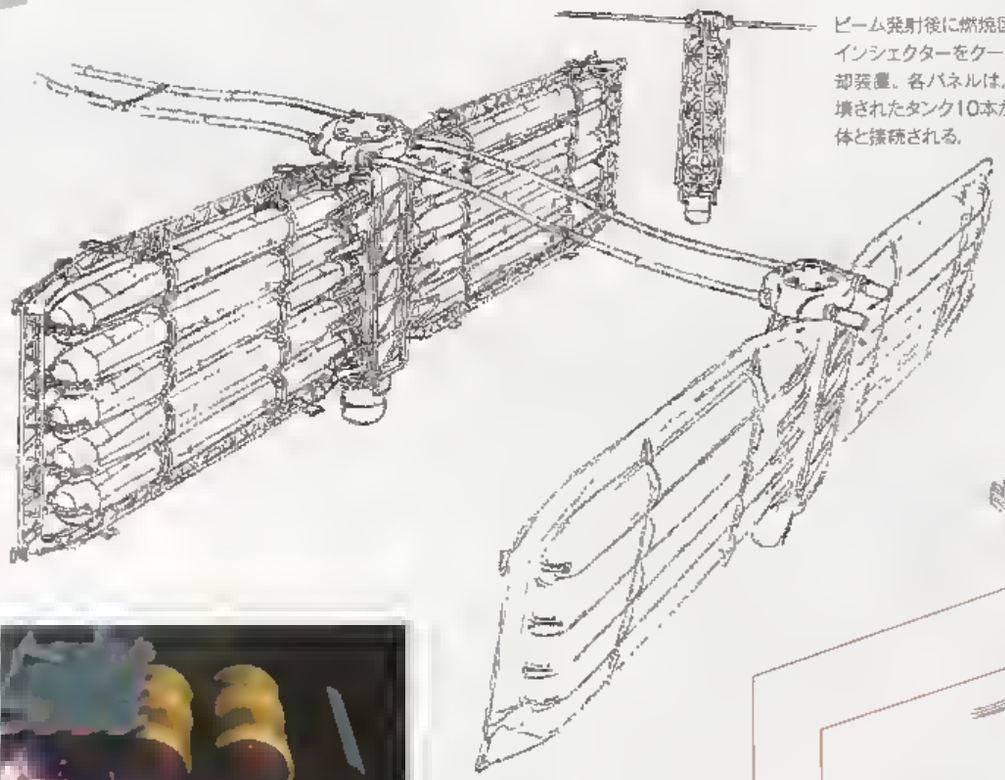
ヨルムンガンドの火力と射程は宇宙艦艇に搭載された艦砲を遥かに上回っており、宇宙艦隊戦の要として大きな期待をかけられている――と思われていた。



プラズマ・ビーム砲としての機能のみが追求された兵器であり、自力移動能力はなく、管制を担当する指揮所も簡易なものとなっていた。

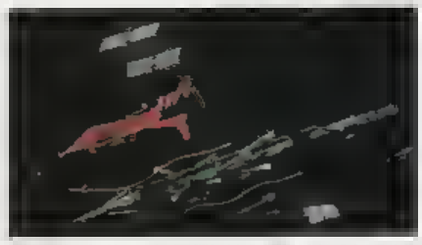


極めて強力な火器であるが、それに伴い発熱量も大きくなっていた。これに対処するため、ヨルムンガンドには充実した冷却システムが搭載された。



冷却パネル

ビーム発射後に燃焼区画と蓄積区画，アシスト・インジェクターをクールダウンする外装式の冷却装置。各パネルは，冷却用の液体金属が充填されたタンク10本から構成され，パイプで本体と接続される。

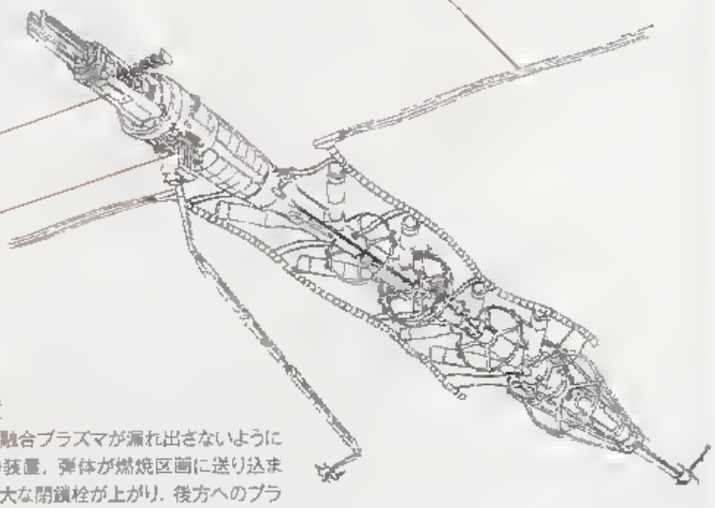


パネルと呼ばれるが，正確には冷却用液体金属のタンクを束ねたもの。4基がパイプを介して接続されている。

弾体は装填装置の右側面に露出状態で配置される。装填時には弾体を固定しているパネルがスライドし，装置に送り込む。

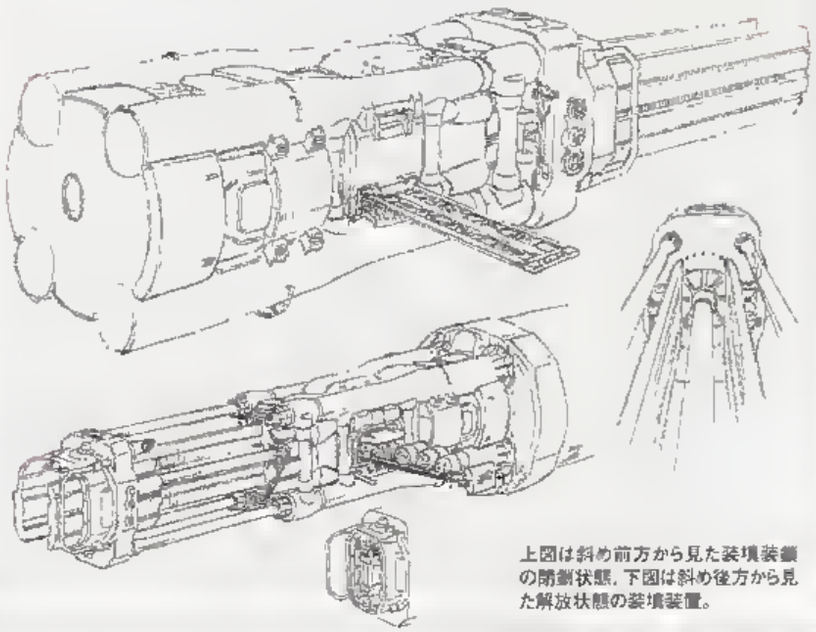
装填装置

弾体である小型ミノフスキー イヨネスコ型核融合炉を装填する区画。砲尾に位置している。尾部のシリンダーが伸縮し，弾体を燃焼区画に装填する。シリンダーは冷却用ポンプとしての機能も兼ねていた。

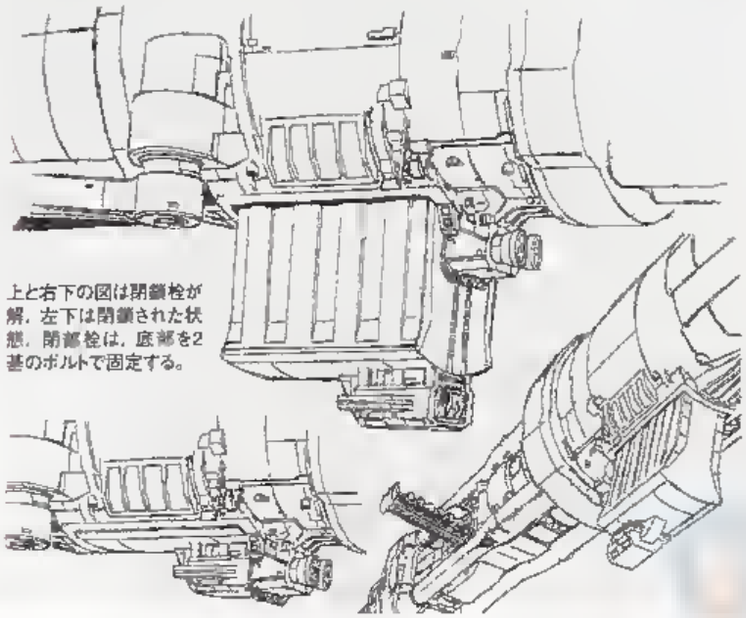


閉鎖装置

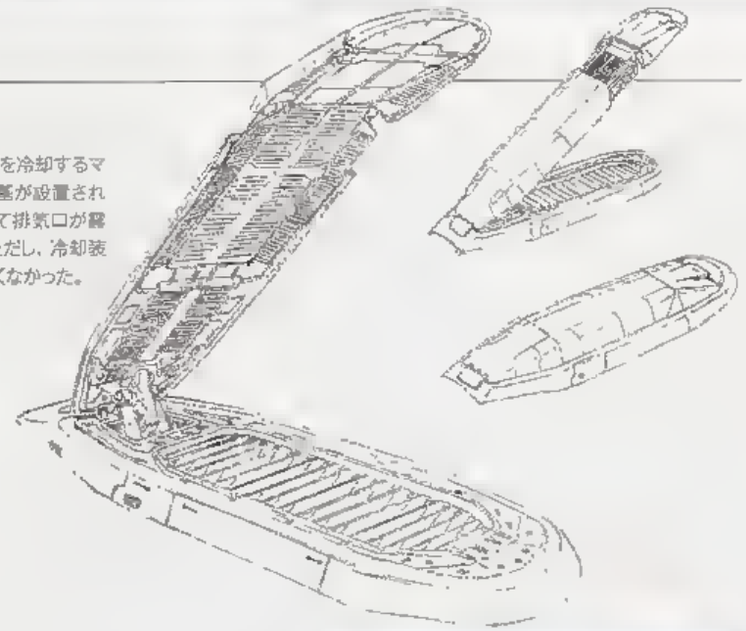
発生した核融合プラズマが漏れ出さないようにするための装置。弾体が燃焼区画に送り込まれた後，巨大な閉鎖栓が上がり，後方へのプラズマ漏れを防ぐ。射撃指揮所を接続するクレーンの基部でもある。



上図は斜め前方から見た装填装置の閉鎖状態，下図は斜め後方から見た解放状態の装填装置。



上と右下の図は閉鎖栓が解，左下は閉鎖された状態。閉鎖栓は，底部を2基のボルトで固定する。



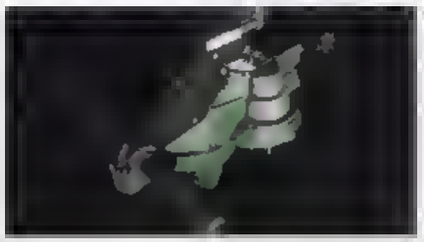
冷却フィン

ビームの発射により、帯熱した砲身を冷却するマズル フラッシュ冷却装置。計10基が設置されている。発射後にカバーが展開して排気口が露出、熱を帯びたガスを排出する。ただし、冷却装置を駆使しても砲の連射性能は高くなかった。





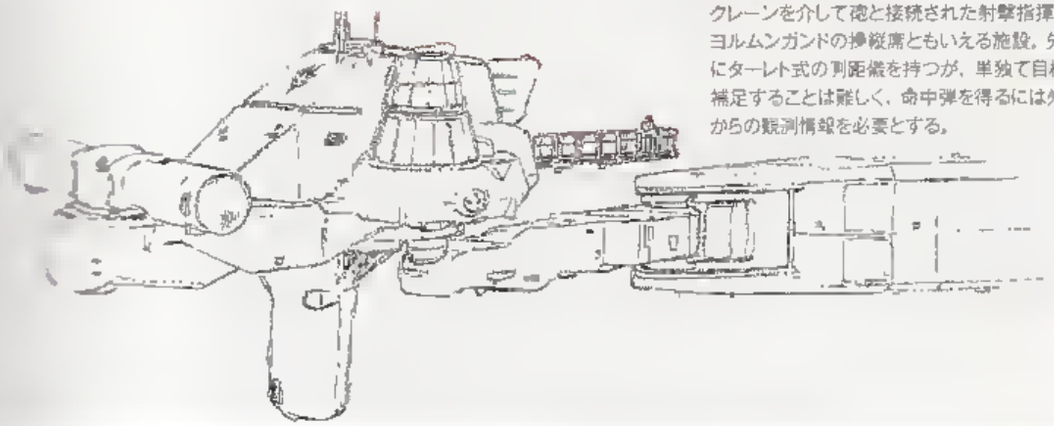
ビーム発射直後、全冷却フィンが解放され、帯熱したガスを排出する。冷却終了後、フィンは再び閉鎖される。



砲システムの左側面にクレーンで接続されている。気密式ではないため、乗組員にはノーマルスーツが必須。

射撃指揮所

クレーンを介して砲と接続された射撃指揮所。ヨルムンガンドの操縦席ともいえる施設。先端にターレット式の測距儀を持つが、単独で目標を補足することは難しく、命中弾を得るには外部からの観測情報を必要とする。



宇宙艦隊戦を制する巨大プラズマ・ビーム砲

核融合プラズマ・ビームを撃ち出すヨルムンガンドは、ミノフスキー粒子を圧縮、融合させたメガ粒子を発射するメガ粒子砲とは異なる種類のビーム砲である。その威力と射程は、宇宙戦艦の主砲として搭載される大型メガ粒子砲をも凌駕している。

破壊力は500テラジュールで、最大有効射程時でも大型艦砲の10倍以上と見積もられており、その火力は通常兵器としては当時最強といってよかった。具体的には、たった一撃でマゼラン級戦艦を「粉砕」する火力を持っている。

射程も当時の火砲としては突出していた。ミノフスキー粒子散布時の有効射程は300kmで、これはマゼラン級宇宙戦艦の主砲メガ粒子砲の有効射程を超えている。さらに理想的環境なら2万km強、地球磁場圏の月軌道昼側で1,200km、昼夜境界線領域で800km、深夜側で400km、ヴァン・アレン帯または地球近傍の電離層であっても200km以下という圧倒的な有効射程を有していた。

こうしたヨルムンガンドの性能を確立していたのが、核融合プラズマ・ビームとそれを加速、安定化して発射できる砲システムである。

核融合プラズマの発生源となるのは、定常出力20万kW級のミノフスキー・イヨネスコ型核融合炉の心臓部を転用した弾体だった。弾体の出力だけを見ても、その威力をうかがい知ることができる。

弾体を暴走させることで、発生した超高温プラズマは渦輪状に集束し、ヴォーテックス・プラズマ「プラズモイド」となる。プラズモイドは砲身内で、アシスト・インジェクターでの加速と安定化が行われ、発射される。

こうした砲システムはメガ粒子砲より複雑かつ大型であるが、大火力と長射程のために必要だった。



ヨルムンガンドの全長231mの内、約200mが加速器兼安定器の砲身である。核融合プラズマ・ビームの制御が、いかに難しいかが理解できる。



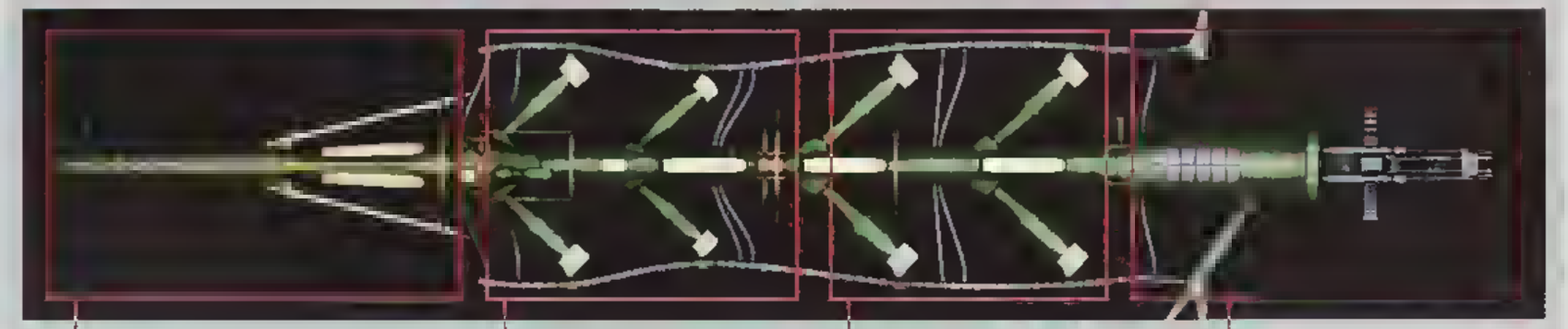
ルウム戦役では、試験支援艦ヨーツンヘイムに分解状態で搭載。艦隊の展開予定宙域後方で、組み立て作業が行われた。

分割と組み立て、および発射プロセス

ムサイ級軽巡洋艦に匹敵する全長を持つにもかかわらず、航行能力を持たないヨルムンガンドは、単独での展開が不可能である。このため前線への移動は、分割しての輸送という形態が採られた。主要部が4区画、放熱パネルと冷却液循環パイプは左右のふたつに分割される。

輸送艦などで運搬されたヨルムンガンドのパーツは、会戦予定宙域の後方で組み立てられる。長大な射程を活かすためだが、宇宙艦と異なり自力防御能力がない点も理由であったと考えられる。

ヨルムンガンド各区画



1 プラズマ射出部
核融合プラズマ・ヒームを噴出させる部位で、一般的火砲の砲口部分に相当する。高熱に晒されるため、全区画で最も多い4基もの冷却フィンが設置されており、冷却性能が重視されていたことが分かる。

2 前部ブースト区画
砲身の前部。小型核パルス エンジン内蔵のアシスト インシェクター4基が設置されており、プラズモイドの威力や安定性を向上させる。経路調整用イオンを与える。小型のブースト インジェクターも設置されている。

3 後部ブースト区画
砲身の後部にあたり、プラズマ生成部から出たプラズモイドが最初に通過する区画である。4基設置されたアシスト・インジェクターがプラズモイドに増強プラズマを与え、破壊力と回転速度を増大させる。

4 プラズマ生成部
プラズモイドを発生させる部位で、機関部に相当。弾体を暴走させての核融合プラズマの発生、蓄積、ヴォーテックス技術での束束などが行われる。装填装置や閉鎖装置、燃焼区画、蓄積区画などで構成されている。

砲撃シークエンス

❶冷却フィン閉鎖

組み立て時やチェック時には開放状態だった、マズル・フラッシュ冷却装置の冷却フィンが閉鎖される。続いて作業員の退去や冷却液の準備も行われる。



プラズマ射出部の4箇所、砲身の6箇所の計10箇所の冷却フィンが閉鎖される。この直後、冷却材が各部に送り込まれるようである。

❷弾頭の装填

ミノフスキー・イヨネスコ型核融合炉を転用した弾体が、燃焼区画に送り込まれる。同時に閉鎖装置が作動し、閉鎖栓が閉められる。指揮所ではトリガーがホップアップする。



弾体が燃焼区画に送り込まれると、後はトリガーを引くだけで発射できる。この状態で間接射撃指示を待つことになる」

❸照準

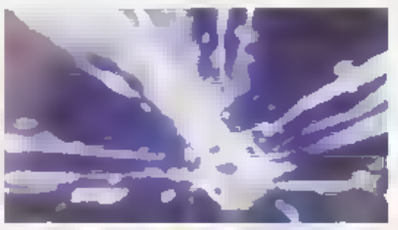
前方の艦艇や観測機からの間接射撃指示を受けて、照準を行う。指揮所からの直接観測での照準も可能だが、特にミノフスキー粒子散布環境では命中精度が著しく低下する。



レーザー通信による間接射撃指示を受けての照準が基本。直接照準ではノイズが酷く、超遠距離の射撃は磁場偏差の影響を受けやすい。

❹砲撃

照準後、指揮所のトリガーを引くことでプラズモイドが発射される。発射直後、冷却フィンが展開され強制冷却が開始されるほか、弾倉がスライドして次弾が装填位置へと移動する。



トリガーを引くとプラズモイドの形成と発射が短時間でわれる。プラズモイドの初速は、秒速2,000kmに達する。

「大蛇」を任されたベテラン砲術士官

ヨルムンカンドの運用試験は、試験支援艦ヨーツンヘイムの砲術科に任された。ヨルムンガンドのトリガーを握ることになったのが、砲術長のアレクサンドロ・ヘンメ大尉である。

ヘンメ大尉はジオン公国成立以前から軍籍にあったベテランで、1年戦争開戦時で約20年もの艦上勤務経験を持っていた。砲術士としての腕は一級で、ヨルムンガンドを操る能力にも不足はなかったが、間接射撃指示を受けられなかったうえ、運用試験中の至近弾が原因で戦死した。



ヨルムンガンドの運用試験にはヨーツンヘイムの砲術科の全員が投入され、射撃指揮所などに配置された。

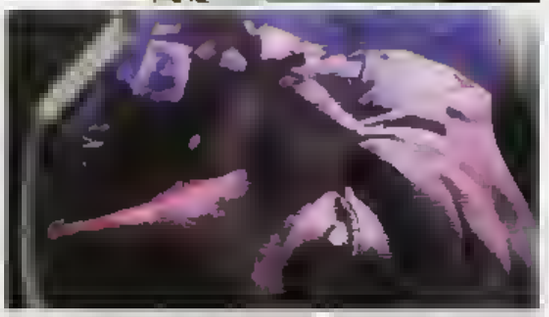




アレクサンドロ・ヘンメ大尉
試験支援艦ヨーツンヘイムの砲術長。当時38歳。生粋の「大砲屋」であり、自身の任務と艦砲に誇りを持っていた。ルウム戦役で戦死。

国家徽章付きの略帽を愛用したヘンメ大尉。言動が粗野で、上官への態度も悪かったが、生え抜きの軍人ゆえにその腕は確かだった。





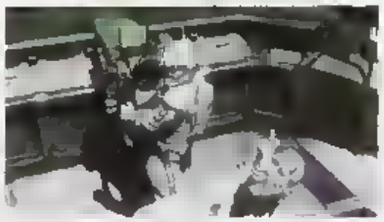
致命傷を負いながらも、突入してきたマゼラン級をヨルムンガンドで撃沈。大艦巨砲主義の最期を看取り、自身も命を散らした。

大蛇を操る指揮所

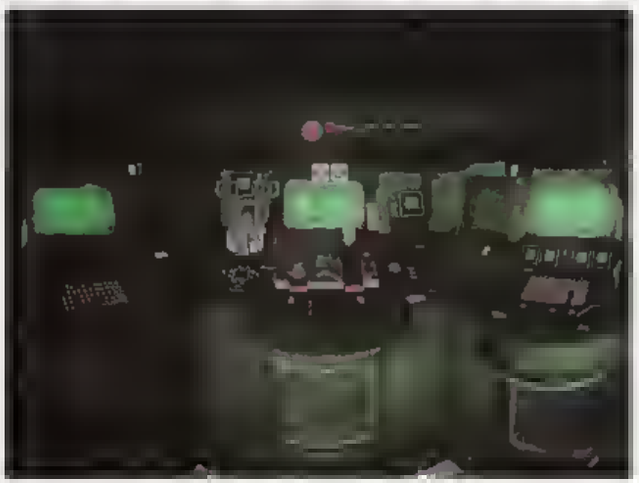
ヨルムンガンドはあくまで「砲」であり、宇宙艦艇やMSのように自律、完結した兵器ではない。しかし、運用には「CIC（戦闘指揮所）」や「コクピット」に相当する操作中枢が必要である。このためヨルムンガンドにはクレーンを介して射撃指揮所が設置された。試作艦だったためか露天式の簡単なものだったが、弾体装填から間接射撃指示の受信、発射までの一連の操作が可能であった。ただし、露天式であるゆえに、緊急時の生存性は低いものだった。

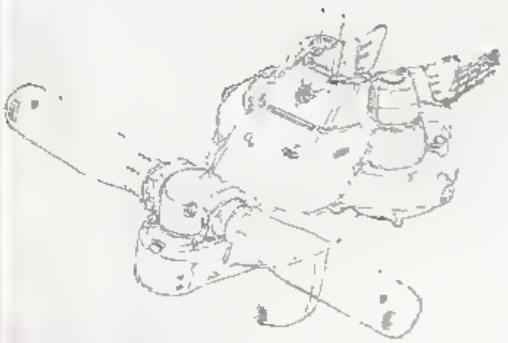


艦艇のCICに相当する場所で、運用試験ではヘンメ大尉を含め5名の人員が配置された。

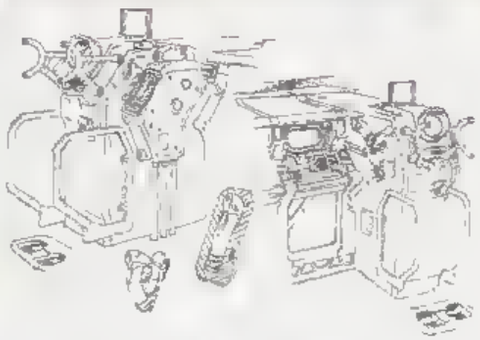


[illegible]は宇宙[illegible]されており[illegible]ない[illegible]ノ[illegible]ス ノを必[illegible]いた。

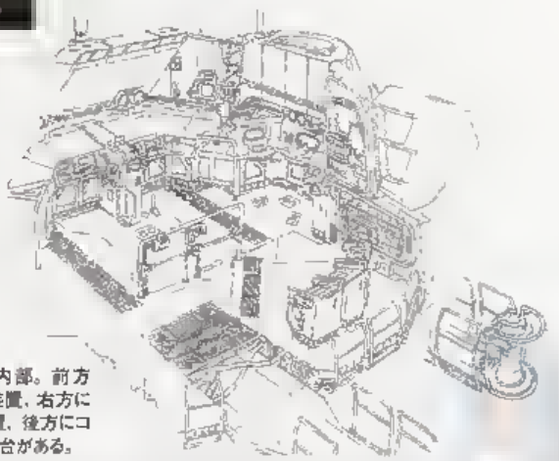




斜め前方から見た射撃指揮所。左右に張り出した筒は、光学式の測距儀である。



トリガーやスコープなどが配置された発射装置。通信や情報受信がこの席に座ったままでも可能。



指揮所内部。前方に発射装置、右方に装填装置、後方にコンソール台がある。

■ルウム戦役におけるヨルムンガンド運用評価試験戦域図



Musai-class ムサイ級軽巡洋艦

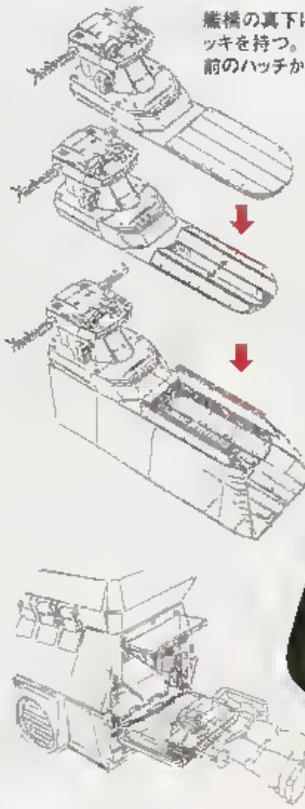
ジオン公国軍の宇宙艦艇のひとつで主力艦。MS運用を想定して設計された初の艦艇（MS母艦）であると共に、メガ粒子砲を初めて搭載した艦でもあった。ミノフスキー粒子散布環境下での運用を想定し、目視能力を強化してもいる。先端には大気圏再突入カプセル「コムサイ」が接続されており、運用柔軟性にも秀でていた。

SPECIFICATION

全長 234m
全幅 103.2m
全高 76.9m
乾燥重量 13,000t
全備重量 26,200t
推進システム 熱核ロケットx2
武装 連装メガ粒子砲x3
艦種 軽巡洋艦



連装メガ粒子砲塔を3基搭載するほか、ミサイルも多数装備し、戦闘艦としても優秀である。



艦橋の真下にはMS用のハンガーデッキを持つ。艦後方、あるいは艦橋前のハッチからMSを射出できる。

傾斜して配置された砲塔と艦橋、左右に張り出したエンジンが特徴。



Gwazine-class グワジン級大型戦艦

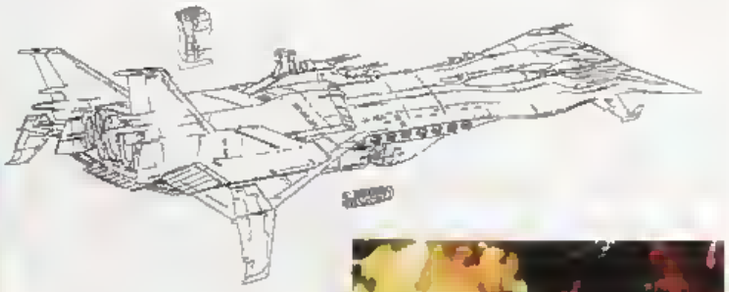
ギレンなどジオン公国の要人の乗艦、あるいは艦隊旗艦として用いられたジオン公国軍の宇宙戦艦。連邦宇宙軍のマゼラン級戦艦を越える高性能艦であり、航続距離が特に長く、地球と小惑星帯の間を無補給で往復できるほどであった。ムサイ級同様、MS運用艦として設計されており、艦底のハッチからMSが出撃することができた。

SPECIFICATION

全長 445m
全幅 165.5m
全高 [illegible]
乾燥重量 84,600t
全備重量 108,000t（標準装備/推進剤）
武装 連装メガ粒子砲x3/155ミリ連装機銃x18
艦種 ムサイ改F型
艦隊 [illegible]

赤い塗装とムサイ級の2倍近い艦体は、数が少ないこともあって一際目を引いた。





ルウム戦役でも艦隊旗艦として投入されており、艦隊の中心となった。





Papua-class パプア級補給艦

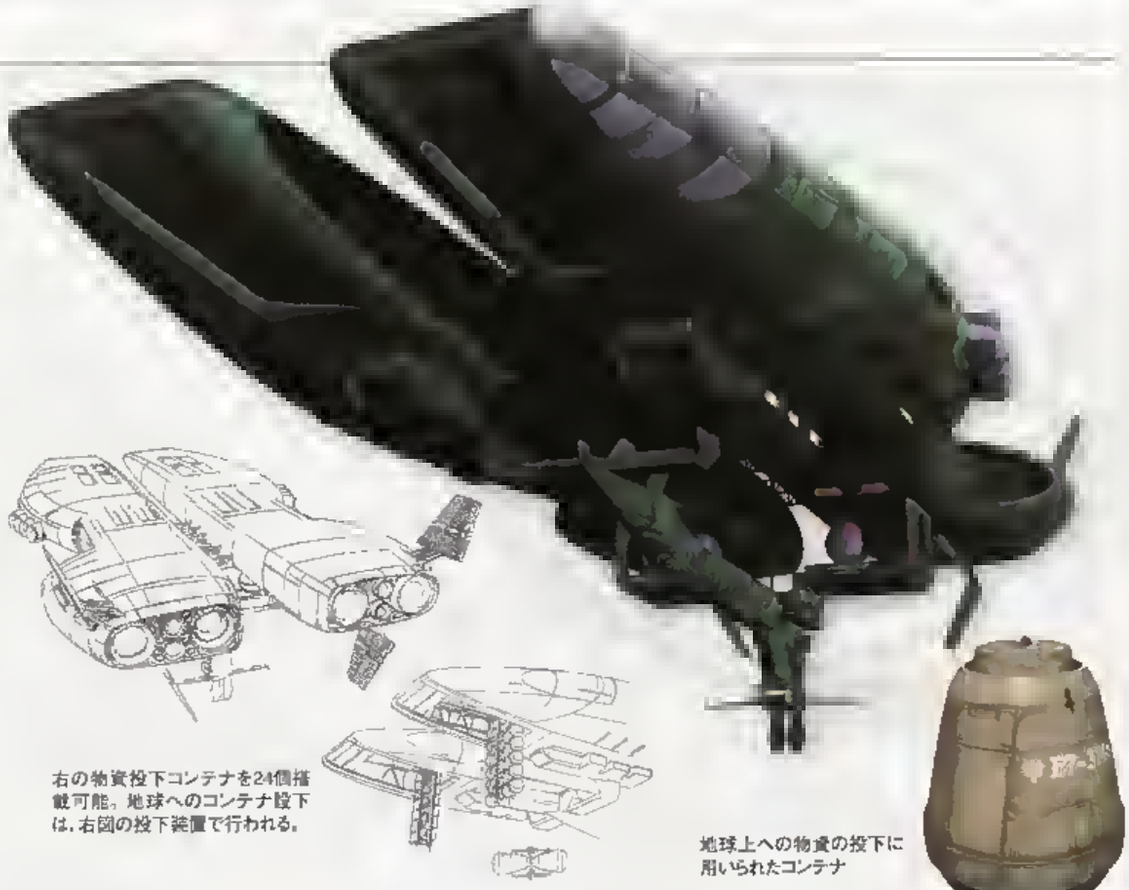
ジオン公国軍の補給艦で，双胴式の艦体と下部に突き出た艦橋が特徴。宇宙での物資輸送だけでなく，地球上への物資投下などにも用いられた。元はミサイル戦艦だったが，ミノフスキー粒子散布環境下では有効でなかったほか，老朽化もあって補給艦に転用されたといわれる。ペイロードが極めて大きく，単独で分解状態のヨルムンガンドを搭載できた。

SPECIFICATION

全長 253m
全幅 119.2m
全高 75m
船体乾重量 12,000t
全装備重量 19,000t（標準装備　推進剤）
主推進システム 熱核ロケット・エンジン×2
標準積載重量 8,000t



基地施設や宇宙要塞などへの物資運搬だけでなく，宇宙空間での物資引渡しも可能だった。



右の物資投下コンテナを24個搭載可能。地球へのコンテナ投下は，右図の投下装置で行われる。

地球上への物資の投下に用いられたコンテナ



Zaku Ⅱ F Type MS-06F ザクⅡF型



ザクⅡは，鉄壁の攻防力を誇ったはずの地球連邦軍宇宙艦隊に取り付くと，瞬く間に撃沈していった。

■武装

人型兵器のザクⅡは，武装も人間用を模したものだった。口径は120～280mmに達し，対艦用としも充分な威力があった。



▲120mmザク・マシンガン



▲280mmザク・バズーカ



▲シュツルム・ファウスト

1年戦争開戦時のジオン公国軍主力MS。本機は数あるザクⅡの中でもスタンダードなF型で，ワークホースとして長く活躍した。汎用性や拡張性が極めて高く，兵装およびオプション類も豊富である。ミノフスキー粒子散布環境の目視戦闘に対応した機動兵器で，レーダーや誘導兵器を封じられた地球連邦軍宇宙艦隊を鎧袖一触に葬り去っている。

SPECIFICATION

頭頂高 17.5m
本体重量 58.1t
全備重量 73.3t
ジェネレーター出力 951kW
スラスター推力 43,000kg
装甲材質 超硬スチール合金
兵装 120mmザク・マシンガン，280mmザク・バズーカ／ヒート・ホーク／シュツルム・ファウスト



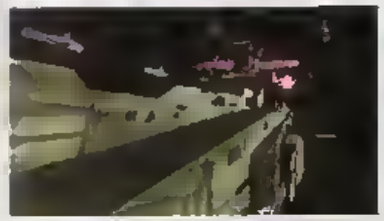
火力では宇宙艦艇に敵わないが，ミノフスキー粒子対応能力と機動性が高かった。

Magellan-class マゼラン級宇宙戦艦

地球連邦軍が70年代軍備増強計画で配備した宇宙戦艦。サラミス級と比べて数が少なく、旗艦として用いられることが多かった。7基もの連装メガ粒子砲塔を搭載しており、打撃力が極めて高いのが特徴である。大艦巨砲主義を体現する艦で、宇宙艦隊戦の要となるはずだった。しかし、MSの機動性の前に敗れ去り、その価値を著しく減じた。

SPECIFICATION

全長 327m
全幅 94.5m
全高 88m
艦体乾重量 41,000t
全装備重量 62,900t（標準装備／推進剤）
主推進システム 熱核ロケット・エンジン×4
兵装 連装メガ粒子砲×7／連装機関砲×20



ルウム戦役序盤の宇宙艦隊戦では、ジオン公国軍艦隊と互角以上の撃ち合いを演じた。



上方から見た図。巨大な艦橋構造物や多数の砲塔が設置されていることが分かる。

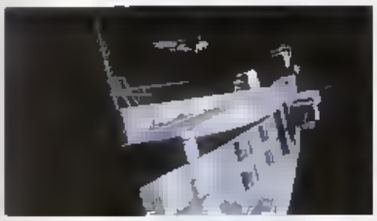
左が連装式のメガ粒子砲、右が対空用の連装機関砲。機関砲は20基を搭載する。

Salamis-class サラミス級宇宙巡洋艦

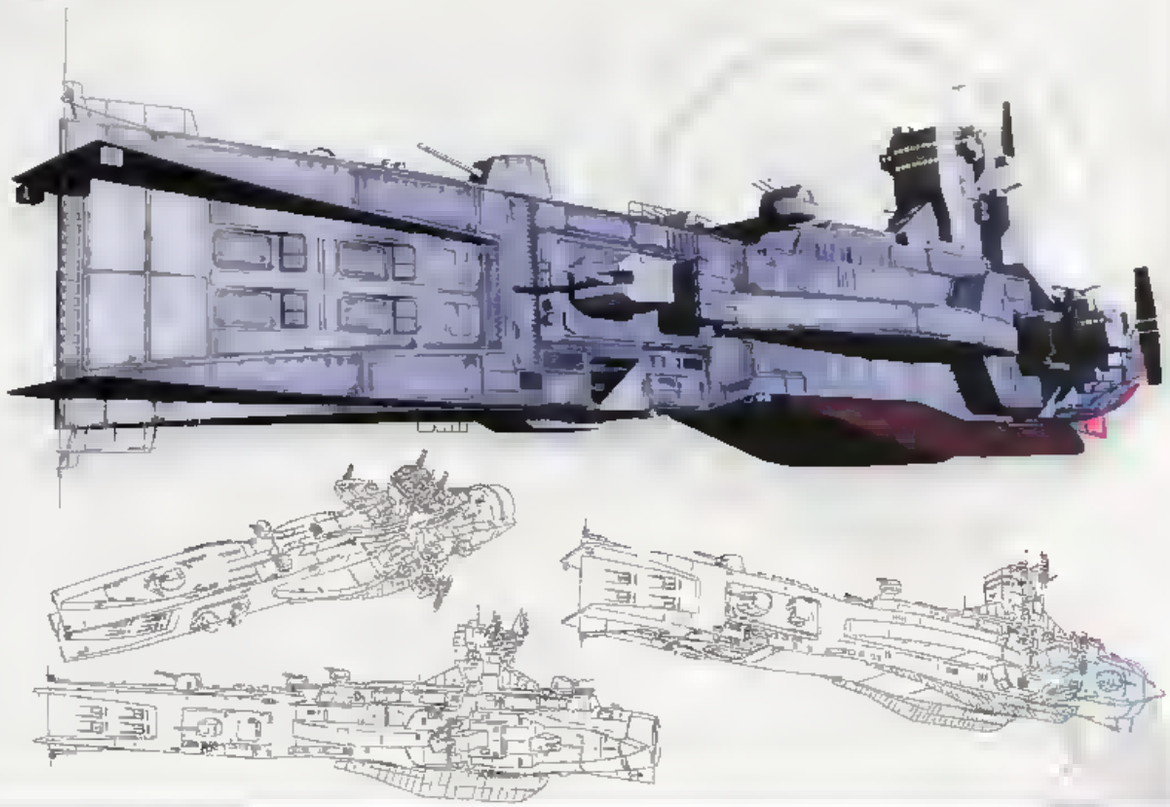
マゼラン級と同じく、70年代軍備増強計画で就役した地球連邦軍の宇宙巡洋艦。地球連邦軍の主力艦であり、建造数も多い。単装式ではあるが6門ものメガ粒子砲を装備するほか、ミサイルと機銃による迎撃機構「ファランクス・システム」を搭載しており、電子戦環境での性能はムサイ級を上回る。だが、やはりMSの敵ではなかった。

SPECIFICATION

全長 212m
全幅 62.2m
全高 71.4m
艦体乾重量 12,100t
全装備重量 22,000t（標準装備　推進剤）
主推進システム 熱核ロケット・エンジン×1
兵装　単装メガ粒子砲×6／連装機関砲×6　8連装ミサイル・ランチャー×2



楔形の艦首や左右の補助艦橋、連装機関砲などにマゼラン級との共通点が見られる。

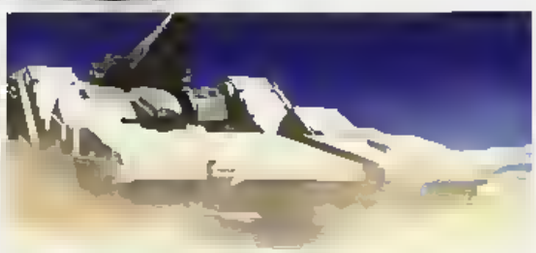


YMT-05 Hildolfr YMT-05　ヒルドルブ



地球侵攻を見据えた核動力の超弩級戦車





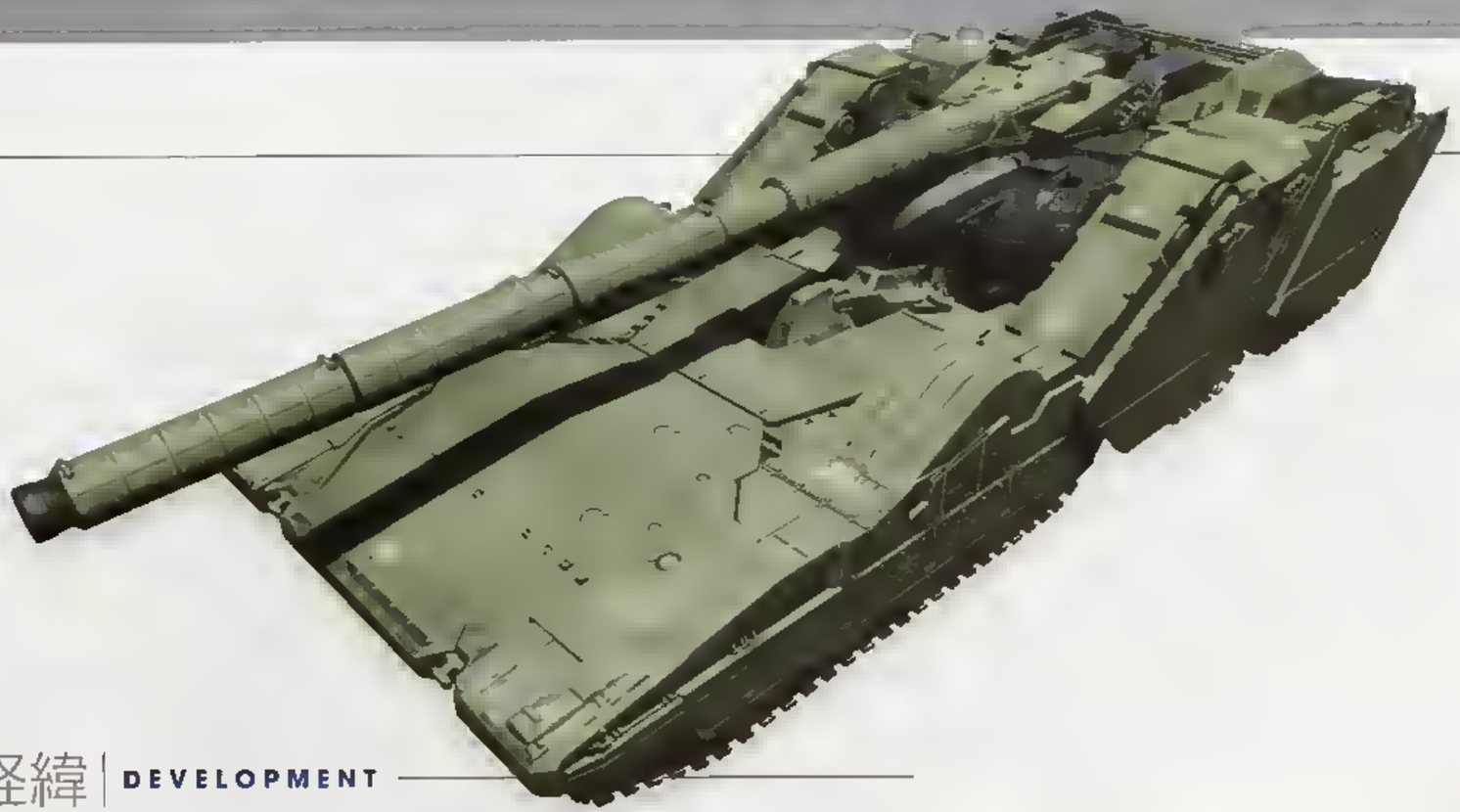
一般的な主力戦車の数倍の巨体とは裏腹に、核融合炉と多数の駆動輪、大面積の履帯を持ち、高い機動力を発揮した。



巨大陸戦艇や要塞への攻撃を想定して、宇宙戦艦から30サンチ砲を流用。10km以上の距離からでもMSを撃破できる。

SPECIFICATION

種別	モビルタンク
全長	35.3m
全幅	14.7m
標準車高	8.6m
最大車高	13.3m
全装備重量	220t
ミノフスキー型核融合炉出力	3,300kW
主砲口径	30cm
最大射程	32km
有効射程	20km以下（有視界、ミノフスキー環境下）
最高速度	110km　h
装弾種別	通常榴弾（HE弾）、対戦車榴弾（HEAT弾）対戦車焼夷榴弾（HEAT／I弾）、粘着榴弾（HESH弾）、徹甲弾（AP弾）、装弾筒型徹甲弾（APDS弾）　装弾筒型翼安定徹甲弾（APFSDS弾）　対空榴散弾（Type3）



開発経緯 | DEVELOPMENT

YMT-05 ヒルドルブは、ジオン公国軍が開発した陸戦用試作機動兵器である。機動兵器と呼ばれる兵器分類には、人型のMS以外にも定型フォーマットが存在しないモビルアーマー、簡易機動兵器のモビルポッドなども含まれる。だが、ヒルドルブはそのどれでもなく、装甲戦闘車輌型の「モビルタンク」にカテゴライズされる。

「モビルタンク＝機動戦車」という種別からも分かるように、ヒルドルブは履帯（キャタピラ）式の無砲塔戦車のようなシルエットを持つ。しかし、そのサイズは一般的な主力戦車を遥かに上回っており、全長は35.3mに達していた。車体規模に相応しく火力も強大で、宇宙戦艦用を流用した30サンチ砲を搭載。単独で巨大陸戦艇の撃破すら可能だった。ここまでの巨大車輌ともなると、通常は機動性が劣悪になる。しかし、ヒルドルブは、核融合炉を動力としてこれを解決。全備重量220tの巨体にもかかわらず、時速110kmもの最高速度を達成している。

規格外の戦闘車両であるヒルドルブは、ジオン公国軍の地球侵攻作戦が既定路線となる中、陸戦兵器の必要性が高まった結果、開発された。U.C.0072に開始された、巨大陸戦艇や要塞への攻撃を目的とした核融合炉搭載型超弩級戦車の開発がそれである。

だが、超小型ミノフスキー・イヨネスコ型核融合炉が完成する以前の開発だったため大型化を余儀なくされたこと、そしてヒルドルブの任務を兼任可能で、さらに高い運用性と汎用性を有するMSの出現によって、本機は存在価値を失った。その後、半MS化ともいうべき改修も加えられたが、U.C.0077の評価試験の結果、不採用となった。

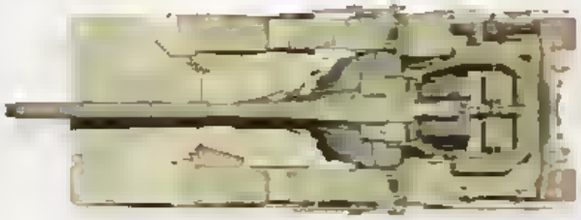


MS完成後、ヒルドルブには「モビル形態」と呼ばれるモードが追加された。大型戦車に近い通常のモードは「タンク形態」と呼ばれる。



3ブロックに分かれた各車体には、それぞれ1対、計3対の履帯が設置されている。これにより、優れた不整地走破能力を発揮した。

■TOP



■SIDE



■FRONT



■REAR



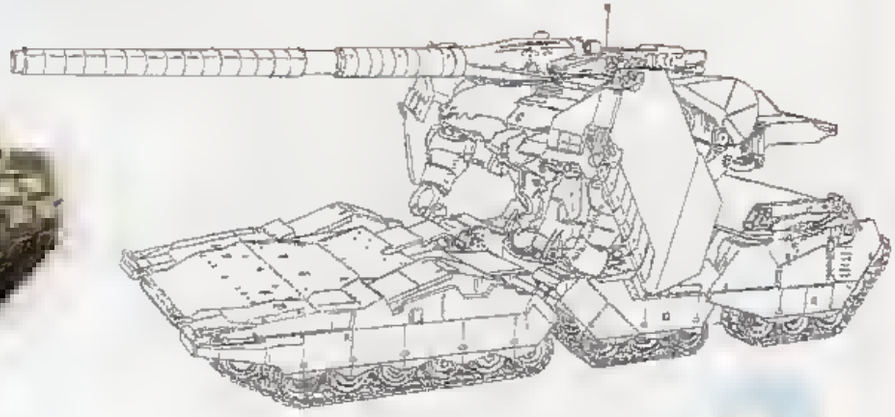


タンク形態では砲とモノアイ周辺しか露出していなかった、砲塔部分が完全に姿を現す。砲塔部分はMSの上半身のような形状を持っている。

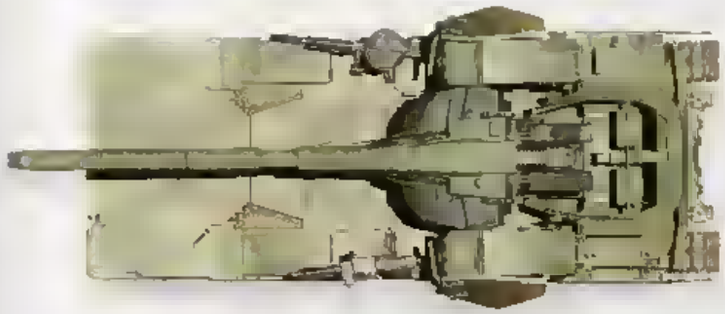
不要論への対抗から生まれた半MSモード、モビル形態



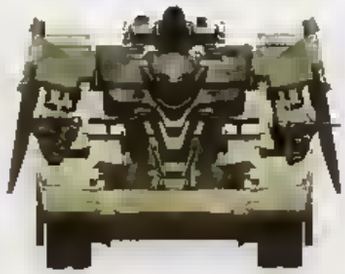




■TOP



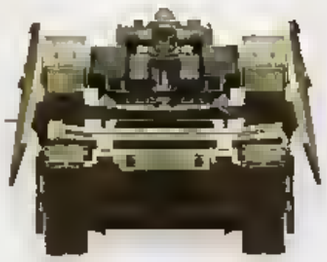
■FRONT

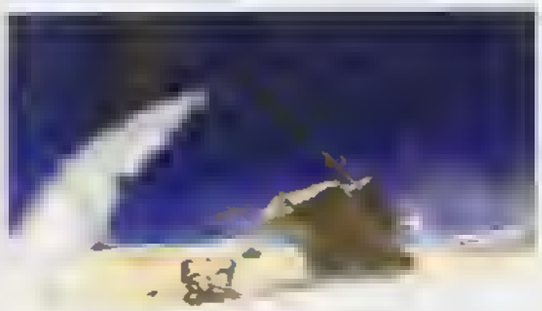


■SIDE



■REAR





モビル形態の砲塔部分は360度旋回可能で、極めて広い射撃範囲を持つ。発射の反動を利用した片輪装甲も可能だ。

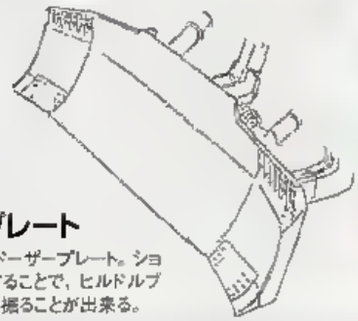


腕部を展開することで、ザク・マシンガンなどのMS用火器を使用できる　ショベルアームは近接格闘用として使用可能。



■マニピュレーター

設計変更時に追加された腕部。前腕はザク系を流用し、上腕はタンク形態での収納を意識してパンタグラフ式となった。



■ドーザープレート

車体後部に収納のドーザープレート。ショベルアームと併用することで、ヒルドルブに適した大型塹壕を掘ることが出来る。

運用性の向上を目指したモビル形態

1年戦争開戦以前、核融合炉搭載の超弩級戦車として開発されたヒルドルブだが、究極の汎用兵器であるMSの登場は、それ以外の機動兵器の必要性を著しく低下させた。軍部で超弩級戦車不要論が唱えられるようになるのも、当然の成り行きだった。

結果、延命策を必要としたヒルドルブには、大幅な設計変更が加えられた。射程延長のための車高可変機構、そしてMSと同等の腕部マニピュレーターの追加がそれである。

これらの追加機構により、ヒルドルブの砲塔部は腕部を搭載したホップアップ式とされた。腕部を折り畳み、砲塔を車体と一体化するまで下げたモードが「タンク形態」、砲塔がせり上がり腕部を露出したモードは「モビル形態」と呼ばれる。

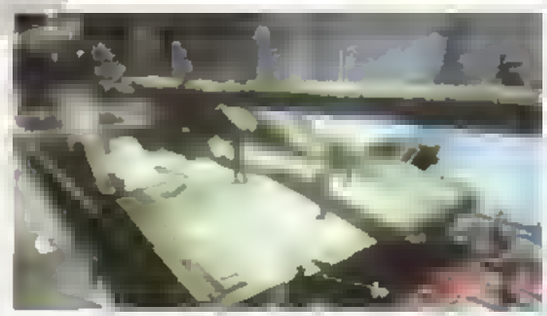
タンク形態は、砲塔が車体にめり込むように配置されているため射角は狭いが、車高が低く、待ち伏せに適している。また、ショベルアームを安定装置として使えるため、中長距離での高精度射撃にも適していた。

モビル形態は、腕部マニピュレーターと大きくせり上がった砲塔、そして砲塔先端の外部認識装置モノアイによって、「MSの上半身を持つ戦車」といえるスタイルを持つ。重心が高くなるためか、接地圧を下げるよう中央の履帯の配置も変更される。

本来は射程延長を目的とした形態だが、砲塔が全周囲に旋回可能なうえ、自由度が高い腕部マニピュレーターでMS用火器を扱えるため、近接戦で高度な戦闘能力を発揮する。塹壕を掘ったり、タンク形態では支持架としても使用するショベルアームを格闘兵装として転用できる点、側部防弾板が肩部懸架式シールドのように配置される点も、モビル形態の近接戦闘能力を高めている。



タンク形態からモビル形態への変形は、砲塔相当部がせり上がり、腕部を露出、ショベルアームを肩部に配置することで完了する。



30サンチ砲は、ヒルドルブとほぼ同じ全長を持ち、当時の機動兵器用実体弾式兵装としては、最強の存在だった。



タンク形態では左右の射角は狭いが、90度近い仰角で発射できる。さらに、モビル形態では上半身を旋回させ、より広範囲を射界に収める。

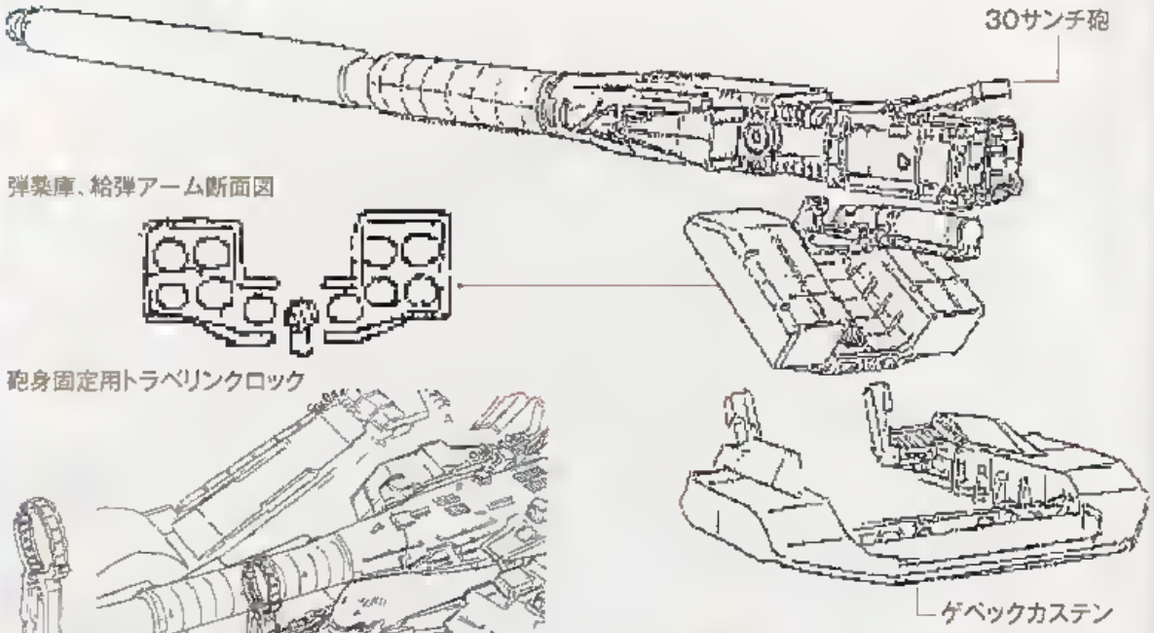
旧式ながら強力な戦艦用火砲

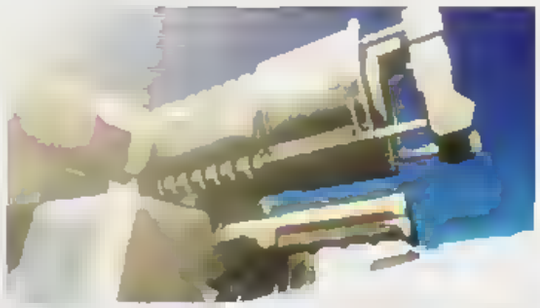
ヒルドルブの火砲として搭載された30サンチ砲は、旧式化した宇宙戦艦用の実体弾式火砲を転用したものである。メガ粒子砲ではなく実体弾式火砲が採用された背景には、ヒルドルブ開発当時はメガ粒子砲の小型化が困難だったこと、核融合炉が走行用の動力だったことなどがあった。メガ粒子砲では地上戦で重要な曲射が難しいこと、ミノフスキー粒子散布環境下での戦闘が大前提となるため誘導式の兵器が使いにくい点も、実体弾式火砲が選ばれた理由と考えられる。

いわば消去法的に採用された30サンチ砲だが、突出した火力を有している。これによりヒルドルブの攻撃目標として想定された、巨大陸戦艇や要塞に対しても充分な攻撃力を発揮できた。射程も極めて長く、最大射程は32km、有視界およびミノフスキー粒子散布環境下でも20km以下の有効射程を誇る。

砲弾は、ヒルドルブへの転用にあわせて、新たに開発されたものである。弾種は装弾筒型翼安定徹甲弾（APFSDS）や通常榴弾のHE、対戦車榴弾のHEATや粘着榴弾（HESH）など、戦車砲用と同系のものが多い。それ以外にも対空榴散弾Type3が用意されており、多様な状況に対応可能だった。

■30サンチ砲各部



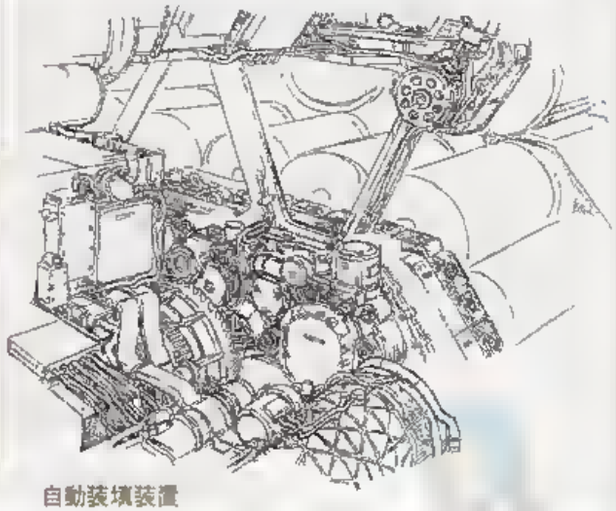


上図のように、30サンチ砲とそのシステムは、砲身、自動装填装置兼弾薬庫、ゲベックカステン（雑具などを収納した道具箱）の3つで構成されている。移動時には左の図のようにトラベリングロックで砲身を固定しておく。



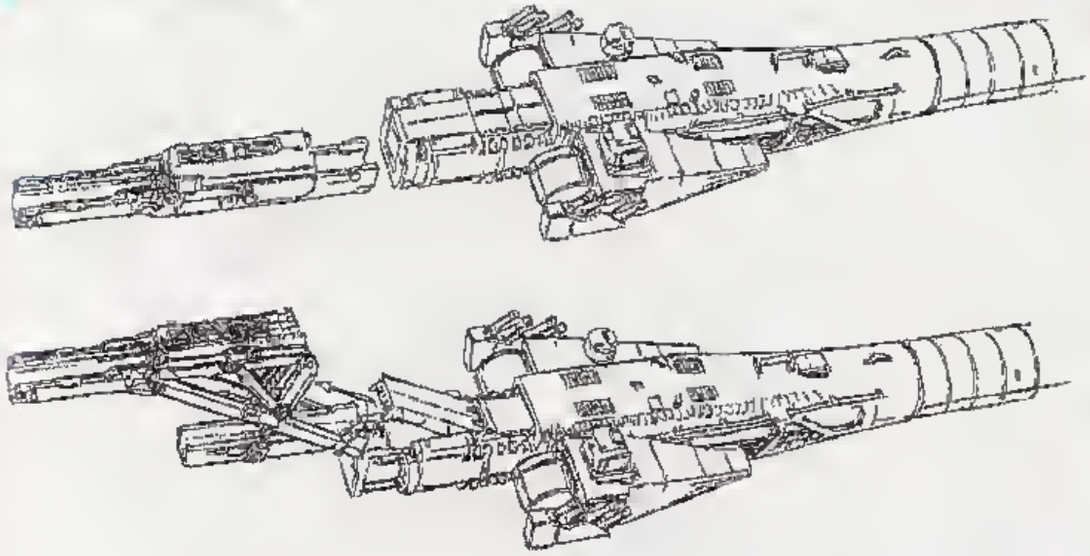


装弾は自動装填装置によって行われる。弾種はパイロットが選択可能で、順番を指定すれば異なる砲弾を連続して発射することも可能。

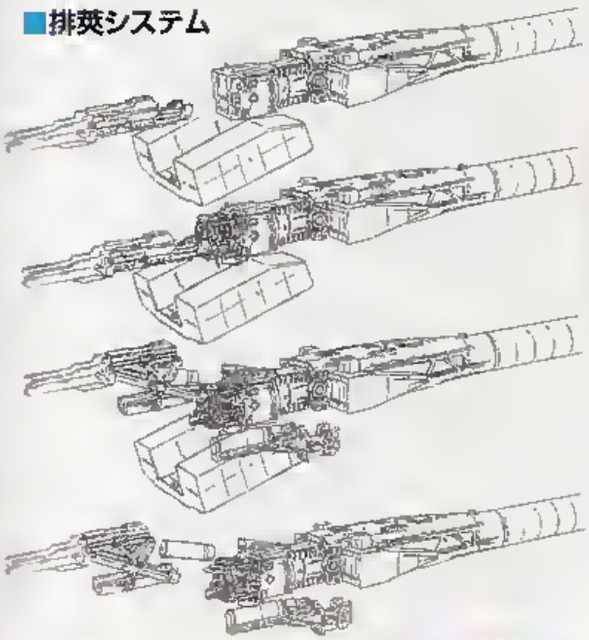


自動装填装置

■30サンチ砲排莢装置



■排莢システム





発射後、空薬莢は装弾口を兼ねる砲尾から、排莢レールを介して車外部へと運ばれる。これは大仰角時でも同じだが、空薬莢は機関部上部のパネルが開いて排出される。モビル形態ではレールとの位置が変わるため、砲尾から直接投棄する。



1年戦争時の評価試験では、モビル形態用としてMS-05 ザクI用のザク・マゾンガンZMP-47Dを搭載していた。



肘から先のマニピュレーターはザク系MSと同規格であるため、地球連邦軍の鹵獲ザクIIから奪った120mmザク・マシンガンを使用できた。



徹甲弾の一種であるAPFSDSは、10km以上の距離からMSを破壊。ほかの砲弾も強力で、障害物を貫通しG1式戦車を撃破した。



対空榴散弾のType3は起爆タイミングを調整可能。多様な砲弾を搭載しており、戦況に合わせて使い分けた。

■各種砲弾



焼夷榴弾

ナパームとも呼ばれる。広範囲に燃焼物質を散布、燃焼温度は1000度を超える。





榴弾

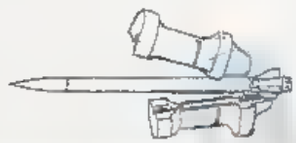
炸薬を内蔵した砲弾で、爆発後、破片によって目標やその周辺にダメージを与える。





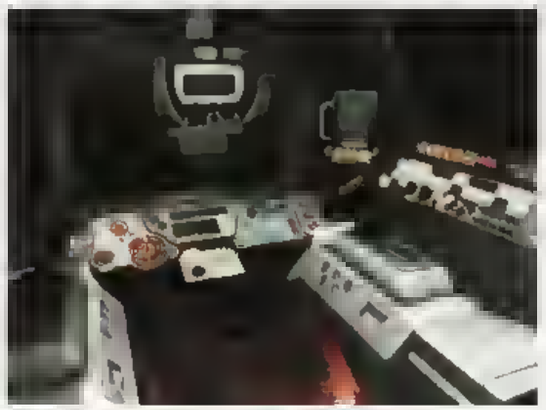
徹甲弾

装甲の貫通を目的とした砲弾で、図は装弾筒型調安定徹甲弾（APFSDS）。発射後、ケースが分離し、針状の砲弾が射出される。

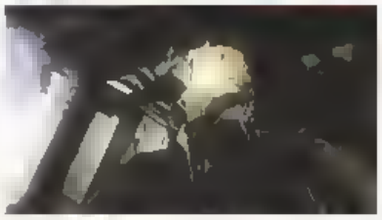


コクピット

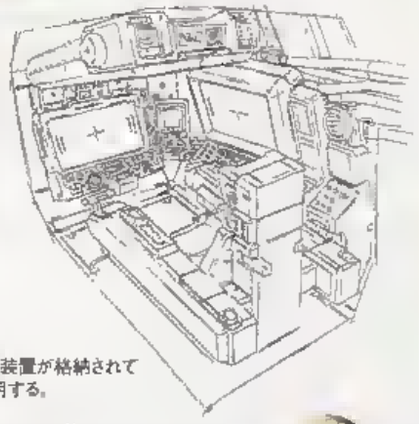
一般的な主力戦車と異なり，ヒルドルブはパイロットひとりで運用可能であった。このため，コクピットは単座仕様であった。大部分が自動化されていたと考えられるが，それでもこれほどの巨大戦車をひとりで運用するには高い操縦技術が必要であった。



コックピットレイアウト
正面と左右に大型のモニターが配置されている。これはモノアイで外部の情報を収集するためと考えられる。



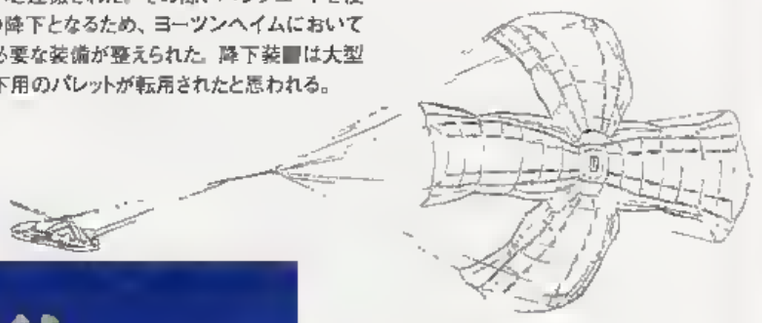
操縦系には音声入力も採用されるなど，パイロットの負担を軽減するために各部が自動化されていた



コクピットの天井部分には照準装置が格納されている。砲撃時は引き下げて使用する。

投下装置

評価試験の実施にあたり，ヒルドルブはコムサイで地球へと運搬された。その際，パラシュートを使用しての降下となるため，ヨーツンヘイムにおいて事前に必要な装備が整えられた。降下装置は大型貨物投下用のパレットが転用されたと思われる。



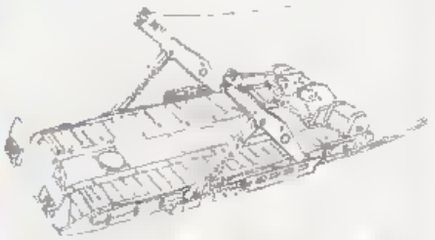
パラシュート展開図
パラシュートは十字型で後方に広がって，ヒルドルブをコムサイ外へ引き出したのち，降下させた。



再評価試験では投下装置を使用し，高度700フィートからの降下が実施された。投下はコムサイの後部ハッチから行われた。



コムサイからの降下用として，投下装置が用意された。これは台座と固定アーム，パラシュートなどから構成されている。



ヒルドルブが固定された投下装置
ヒルドルブが固定された投下装置。左右のテンショナーはウインチを内蔵する。これを上下させることで装置の水平を保つことができた。

ヒルドルブに望みを託した戦車兵

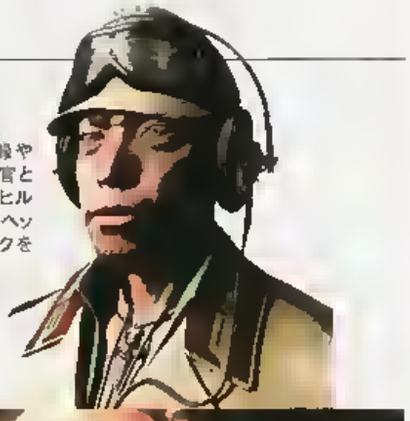
ヒルドルブの再評価試験でテストパイロットを務めた人物が，機動師団に所属していたデメジエール・ソンネン少佐である。ソンネン少佐は優秀な戦車兵で，かつては戦車教導隊で教官を務めたほどの人物だった。しかし，MSパイロットへの転科適性試験に失敗したことが，彼の人生を狂わせた。戦車兵としての自分に誇りを抱きながらも，自身の失敗と，若手戦車兵のMSパイロットへの転科を目にしたソンネン少佐は，自暴自棄におちいり，自堕落な生活を送ることになったのだった。

少佐の転機となったのが，ヒルドルブの再評価試験である。戦車兵としての腕を買われて，ヒルドルブのテストパイロットとなったソンネン少佐は，自身の再起をかけて再評価試験に臨んだ。だが，試験の実態は泥縄式の戦力投入に過ぎなかった。





ディジェール・リンネン少佐
ジオン公国軍機動師団所属の戦車兵。その腕は一流で，ヒルドルブを駆り，地球連邦軍の鹵獲ザクII 6機と61式戦車2両を撃滅した。



試験データ記録や評価試験担当官との交信のため，ヒルドルブ操縦時はヘッドフォンやマイクを着用していた。



優秀な戦車兵のソンネン少佐だが，自堕落な生活を続ける中で体を壊しており，発作を抑える錠剤が不可欠だった。

■北米におけるヒルドルフの再評価試験における実戦運用

地球降下作戦の成功により、ジオン公国軍はU.C.0079.5月の段階で地球上の大部分を勢力化に治めていた。プロパガンダ放送では、地球降下作戦時の快進撃の様子が流され、ジオン公国軍の勝利も間近と謳われていた。しかし、実際には急速な勢力の拡大によって補給線は伸びきっており、戦線は膠着状態に陥っていた。ジオン公国軍は、最も危惧していた消耗戦へと突入していたのだ。国力に劣るジオン公国は、この状況を打開するため、様々な兵器や機材を地球へと送り込んだ。そうした兵器群の中に、「YMT-05 ヒルドルフ」の姿があった。ヒルドルフはU.C.0077に行われた試験の結果、不採用となった兵器だった。再評価試験という名目ではあったが、試験後は現地配備が決定していた。それはジオン公国軍の窮状を露にするものでもあった。

❶第67物資集積所、襲撃を受ける
北米に点在するジオン公国軍の物資集積所のひとつである。第67物資集積所が地球連邦軍歯獲MS部隊の攻撃を受け全滅。この集積所がヒルドルフのテスト地域の付近であった。

❷ヒルドルフ、コムサイから降下
第603技術試験隊を載せたコムサイは、降下中に地球連邦軍部隊から攻撃を受けたため、ヒルドルフを緊急降下させた。降下後、ヒルドルフはショベルアームを使用、塹壕を作ると、敵の監視を開始する。監視の結果、地球連邦軍部隊は鹵獲したザクIIで構成されていることが判明。この情報はコムサイのマイ技術中尉とキャディラック特務大尉にももたらされた。

❸ヒルドルフ、地球連邦軍歯獲MS部隊に攻撃を開始
塹壕から敵を捕捉したヒルドルフは、APFSDSを発射。10kmもの距離があったにも関わらず一撃で歯獲MSを撃破。続く第二射も命中するが、着弾が上方にずれたため、小破させただけであった。これは加熱した砲身に制御が追い付かなかったためで、弾着の修正はパイロットであるデメジエール・ソンネンツ佐の経験で補うほかなかった。

❹地球連邦軍歯獲MS部隊、ヒルドルフを追撃
攻撃を受けた歯獲MS部隊は、敵の移動経路や潜伏地点を予測すると61式戦車を迂回させ、アウト・ミサイルを発射。ヒルドルフを牽制すると同時に、距離を詰めるために移動を開始した。これに対しヒルドルフは、曲射榴弾を発射しながら後退を行っている。なお、アウト・ミサイルの至近弾により、この時点でコムサイとの通信は途絶した。

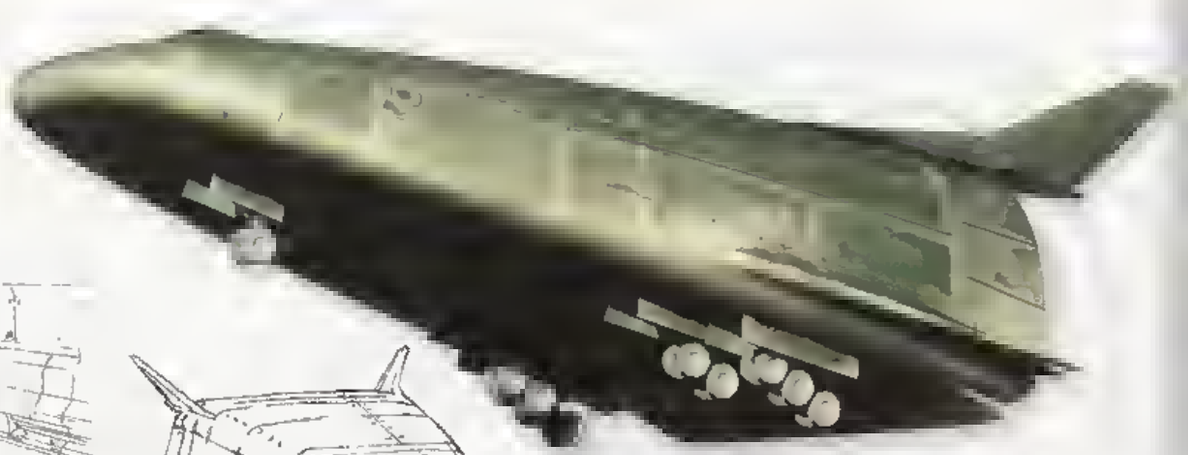
❺接近する歯獲MSを撃破
移動後、新しい塹壕に入ったヒルドルフは、右翼より接近する歯獲MSに対し、焼夷徹甲弾を発射。敵の足を止め、さらに1機を撃破している。その直後、再度移動を開始した。

❻ヒルドルフ、モビル形態に変形
歯獲MS部隊は、ジャンプと同時に射撃を繰り返しながらヒルドルフへと肉薄した。攻撃を受けたヒルドルフは、キャタピラを損傷する。敵の接近を許したヒルドルフは、自機の周りにスモークを散布するとモビル形態へと変形。その直後、ザクマシンガン装備機を小破させ、さらに2機を歯獲MSに撃破に成功している。

❼ヒルドルフ、歯獲MS部隊を撃破
61式戦車2輌を撃破したヒルドルフは再び移動を試みるも、撃破した敵MSのパーツを履帯に巻き込み、移動不能となる。HE弾を発射し、その反動で姿勢を変えると片輪走行の状態で敵機に体当たりを行っている。転倒した敵機に対し、ゼロ距離でType 3を発射、これを撃破した。この直後、ヒルドルフは小破した隊長機の攻撃を受けるが、これも撃破。しかし、この戦闘でヒルドルフも大破に近いダメージを受け、ソンネン少佐も戦死している。たった1輌で6機ものMSを撃破したヒルドルフの戦闘能力は、過去の不採用評価を払拭するに足るものであった。だが、陸戦の主役がMSである現実が覆されることはなく、これ以降、モビルタンクの開発は行われてはいない。

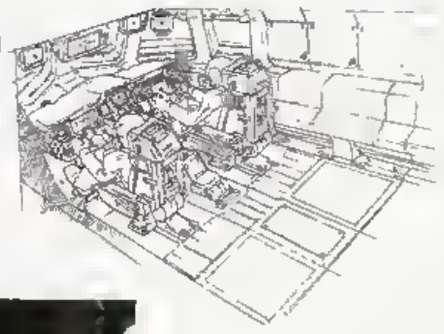
Komusai コムサイ

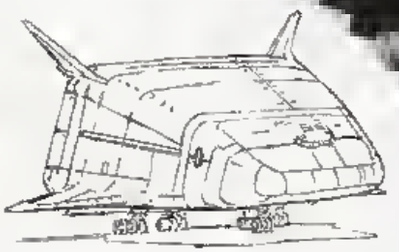
ムサイ級軽巡洋艦に備えられた大気圏突入カプセル。MSを搭載可能なカーゴ・スペースを有し、リフティングボディ構造によって大気圏内でもある程度の飛行能力を発揮する。単独で物資輸送などの任務に運用されるケースもあり、YMT-05 ヒルドルブの地上試験においては第603技術試験隊にコムサイ280が配備された。

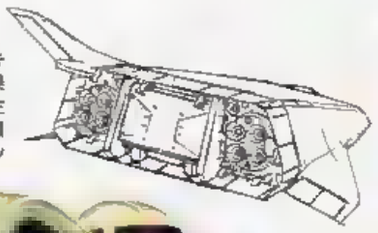


SPECIFICATION

全長 不明
重量 不明
兵装 機関砲







左上がコクピットの気密キャビン。2名の乗員で操縦される。機体後部は左右に8基のエンジンを備え、中央にはカーゴのハッチが位置する。



ヨーツンヘイムから再突入を行うコムサイ。この姿勢のまま大気圏に投下される。



ヒルドルブの地上試験では、降下直後にセモベンテ隊からの攻撃を受けた。

Zaku Ⅱ J-Type MS-06J ザクⅡJ型

MS-06F ザクⅡF型をベースとして重力下の運用に対応した陸戦用MS。空冷式反応炉への換装や防塵フィルターの追加といった改修が施されている。第2次降下作戦から前線投入が本格化し、地上戦の主力MSとして活躍した。また、第1次降下作戦で投入されたF型も、J型への現地改修が行われた。

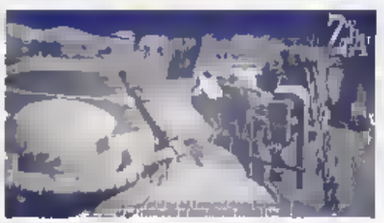


SPECIFICATION

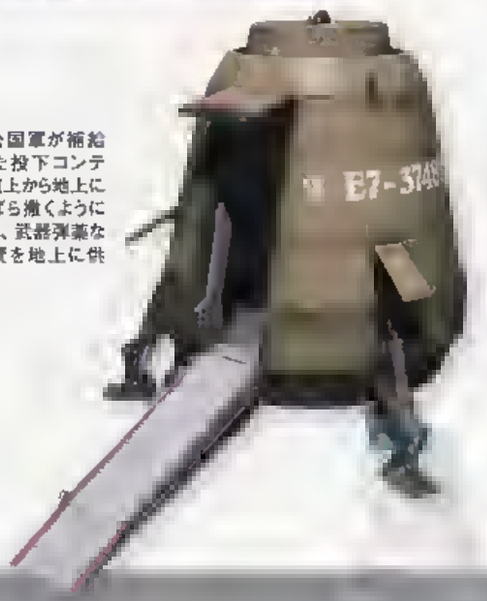
全高 17.5m
本体重量 56.2t
全備重量 74.5t
ジェネレーター出力 976kW
装甲材質 超硬スチール合金
兵装 120mmザク・マシンガン／280mmザク・バズーカ、ヒート・ホーク／クラッカー／脚部3連装ミサイル・ポッド



地上におけるザクⅡの戦果はジオン公国国営放送によって国内外に喧伝された。



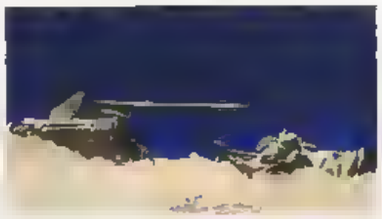
J型は地球連邦軍を圧倒したが、プロパガンダ映像が語るほど戦況は優勢ではなかった。



ジオン公国軍が補給に用いた投下コンテナ。軌道上から地上に向けてばら撒くように投下され、武器弾薬などの物資を地上に供給した。

Zaku Ⅱ J-Type MS-06J ザクⅡJ型（セベモンテ隊）

地球連邦軍コマンド部隊「セモベンテ隊」に運用されたMS-06J ザクⅡJ型。鹵獲機をそのまま運用しているが、通信装置は傍受を防ぐために自軍製のものに換装していたとされる。北米大陸のアリゾナ砂漠を中心にゲリラ戦を展開したセモベンテ隊には、6機のザクⅡJ型が配備され、3機で1個小隊を構成していた。



第67集積所を襲撃した際にヒルドルブとの遭遇戦に突入し、最終的に全滅した。





SPECIFICATION

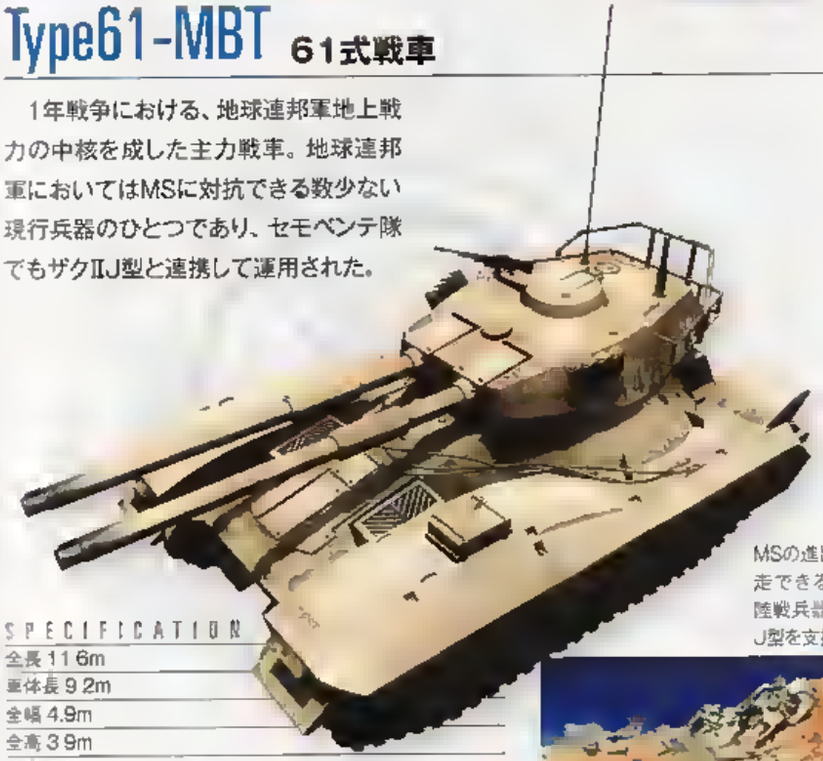
全高	17.5m
本体重量	56.2t
全備重量	74.5t
ジェネレーター出力	976kW
装甲材質	超硬スチール合金
兵装	120mmザク・マシンガン／280mmザク・バズーカ／ヒート・ホーク／ハンド・グレネード／脚部3連装ミサイル・ポッド他



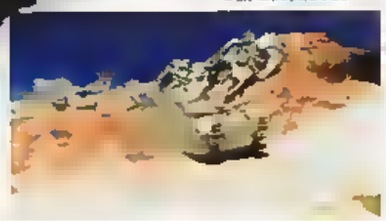
セモベンテ隊のザクⅡは、友軍を偽装して奇襲を行う「汚れ仕事」に従事した。

Type61-MBT 61式戦車

1年戦争における、地球連邦軍地上戦力の中核を成した主力戦車。地球連邦軍においてはMSに対抗できる数少ない現行兵器のひとつであり、セモベンテ隊でもザクⅡJ型と連携して運用された。



MSの進出速度に追走できる数少ない陸戦兵器で、ザクⅡJ型を支援した。



SPECIFICATION

全長	11.6m
車体長	9.2m
全幅	4.9m
全高	3.9m
乗員	2名
兵装	連装式155mm滑腔砲／13.2mm重機関銃 M-60HMG 7.62mm主砲同軸機関銃×2　M-299分隊支援機関銃

※データは61式主力戦車5型（M61A5 MBT）のもの

■セベモンテ隊

鹵獲したザクⅡを装備した地球連邦軍の実戦部隊のひとつで、ゲリラ戦とそれに並行して対MS戦技研究を進めた。任務の性質上特殊部隊の性格が強く、正確な情報は残されていない。ザクⅡJ型3機と61式戦車1両で1個小隊を編成し、部隊は2個小隊で構成されていたという。

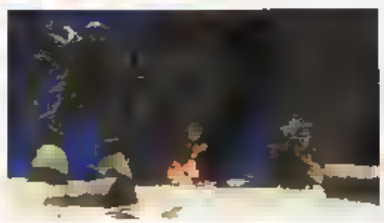
フェデリコ・ツァリーノ中佐

セモベンテ隊の指揮官を務めた隻眼の連邦軍中佐。冷静な戦略眼と優れた戦技を駆使して部隊を率いた。





ツァリーノ中佐のヘルメットのマーキングは、セモベンテ隊の部隊章である。



奇襲を多用し、敵を殲滅する苛烈な戦いに徹したとされる。

EMS-10 Dudah EMS-10 ヅダ



不採用の試作機EMS-04を改修したヅダは、敗色が強まる戦況から国民の目を逸らすため、大々的に喧伝された。

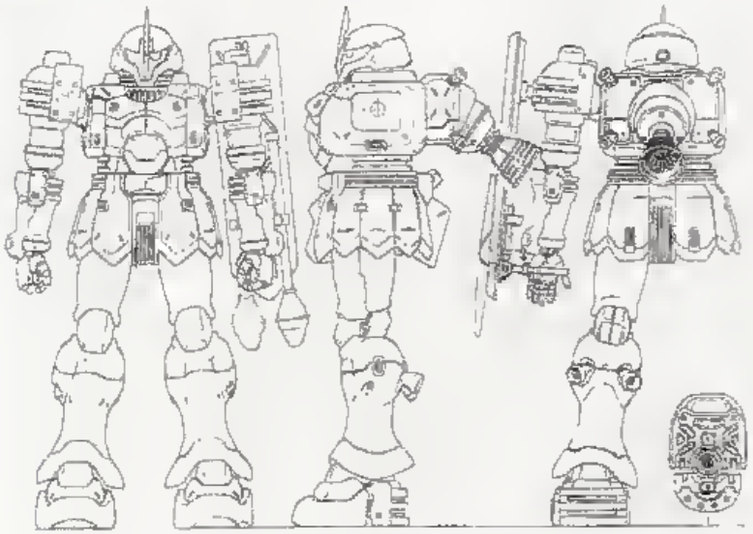
プロパガンダ用として蘇った ZIMMAD（ツィマット）社の高機動MS

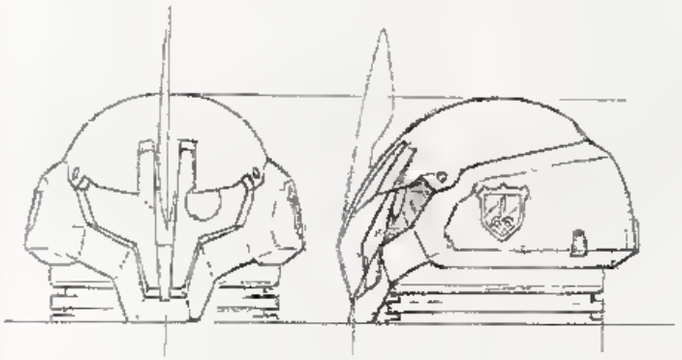




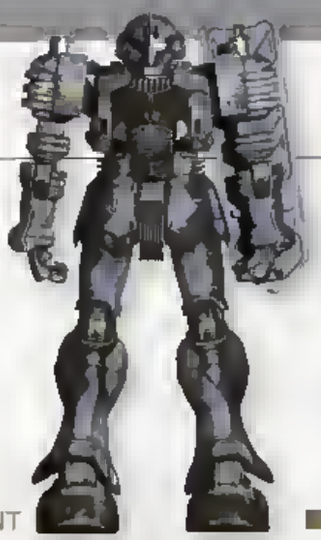
SPECIFICATION

全高 17.3m
本体重量 61t（浅宇宙運用時）
融合炉出力 1,150kW
最大主推力 58 700kg
主装備 120mmザクマシンガン／ザクバズーカ，シュツルムファウスト（携行ロケットランチャー）／ 135mm対艦ライフル／ヒートホークなど、MS用兵装を携行可能





ヅダ1号機の頭部。保護バーが配されているが、モノアイ走査レールは同社のMS-09ドムに近い十字型である。



■FRONT



■BACK



■LEFT



■RIGHT



実態こそ欠陥機と呼んで差し支えないものだったが、機体強度が許す範囲での機動性は、ザクⅡすら上回るものだった。



EMS-10は4機が製造された。プロパガンダ報道では、ジャン・リュック・デュバル少佐の1番機が紹介されることが多かった。

開発経緯 | DEVELOPMENT

EMS-10 ヅダは、ジオン公国の機動兵器メーカーのひとつ、ZIMMAD（ツィマット）社が開発したMSである。しかし、完全な新設計機ではなく、MS開発黎明期に試作されたEMS-04 ヅダの改修機だった。

EMS-10の原型機であるEMS-04は、ZEONIC（ジオニック）社のMS-05 ザクIと同時期に開発された機体だった。EMS-04は、重元素を推進剤とする熱核ロケット・エンジンである「木星エンジン」を搭載、ザクIを上回る機動性を発揮した。ザクIとの制式化競争を優位に進めたが、公的飛行試験中に空中分解事故を起こしてしまう（「木星エンジン」の加速力に対して、機体強度の不足が原因と考えられた）。

これに加えてザクの1.8倍という高コストが会計監査院から問題視された結果、EMS-04の制式化は見送られ、史上初の実戦用MSの座をザクIに譲ることになった（ZEONIC社の裏工作があったともいわれる）。それでもEMS-04の開発は中止されず、改修が続けられた。

改修の末、エンジンが「土星エンジン」へと換装されるなどして、EMS-10 ヅダが誕生した。同社のドム系MSに搭載されたという「土星エンジン」を搭載するヅダは、新型高性能MSとして大いに喧伝された。

しかし、前述のようにEMS-10はEMS-04の改修機で、しかも原型機の問題点だった機体強度不足が解決されていない「欠陥機」だった。EMS-10は、劣勢になりつつあるジオン公国軍が、地球連邦・地球市民に対して放つプロパガンダとして利用されたに過ぎなかったのだ。

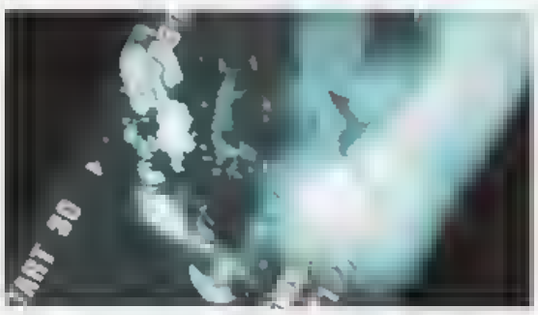




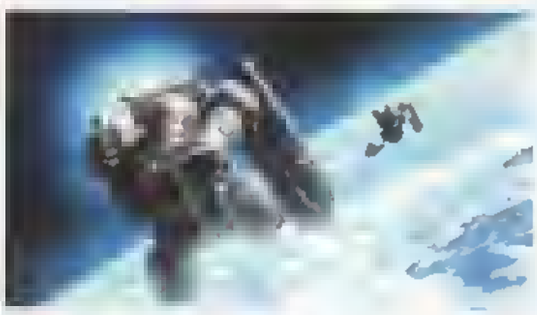
頭部のモノアイ走査レールの形状は2種類ある。1番機と予備機、2番機と3番機でそれぞれモノアイ走査レールの形状が同じ。



3番機喪失後、予備機を含む3機の全機が、オデッサから軌道上に離脱したジオン公国軍脱出部隊の支援にあたった。



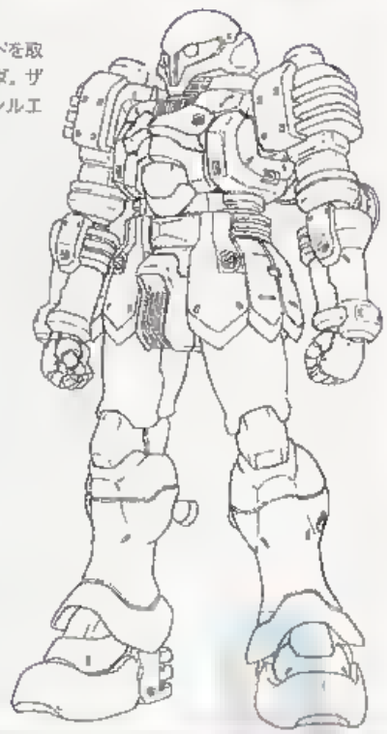
評価試験中、3番機が空中分解事故を起こし、EMS-04の問題点が未解決であることが判明。直後に1番機も空中分解した。

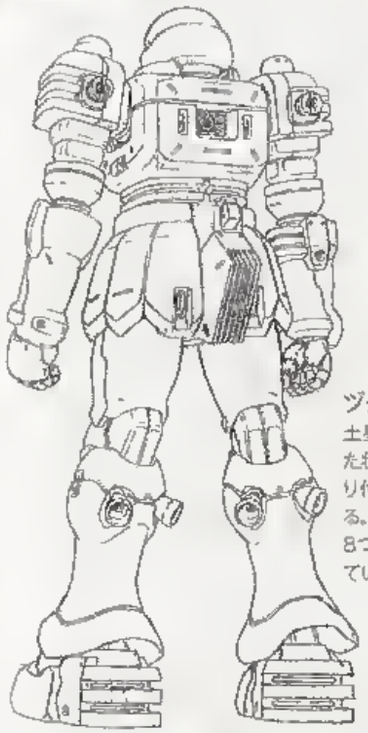


評価試験後、残された2番機と予備機はヨーツンヘイムの艦載機となり、各種評価試験のサポートや敵の防衛に用いられた。

ツダ正面

武装およびシールドを取り外した状態のツダ。ザク系よりも細身のシルエットが特徴。





ヅダ背面
土星エンジンを取り外した状態の背部からは、取り付け基部が見て取れる。中心とその周辺に計8つのラッチが設置されている。

4機のEMS-10 ヅダと各機の相違点

U.C.0075に行われた主力MSを巡る競争試作において、ザクIに敗れたEMS-04 ヅダではあるが、ヅダを推していた軍部トップの面子を保つため、開発は中止されなかったといわれる。新型の「土星エンジン」への換装などの改良が続けられたヅダは（実際は「土星」が搭載されなかったという嫌疑もかけられている）、EMS-10として少なくとも4機が製造され、第603技術試験隊へと送られた。

4機はそれぞれ1番機、2番機、3番機、予備機とナンバーが付けられ、各機にはIからIVの機体ナンバーが記された（IVは予備機）。

1番機はいわば隊長機であり、モノアイの保護バー上にマルチブレードアンテナを装備する。モノアイ走査レールの形状は、予備機と同じで、2番機および3番機とは異なっていた。

2番機と3番機は同一の仕様と考えられ、シールドのスプリッター迷彩（迷彩塗装の一種）以外は機体ナンバー程度しか違いがない。ただし、評価試験では2番機がザク・バズーカとザク・マシンガン（マシンガンは副武装）を、3番機がザク・マシンガンのみを装備するといった兵装面での違いが見られた。

予備機は1号機と同系の頭部を持つほか、当初はスプリッター塗装が施されていなかった。



評価試験の初期段階では、1番機、2番機、3番機の3機による試験が行われた。試験は1番機を中心に実施された。



予備機はスプリッター迷彩が施されていなかったが、ヨーツンヘイムの艦載機となった後、2番機に近い塗装パターンとなった。







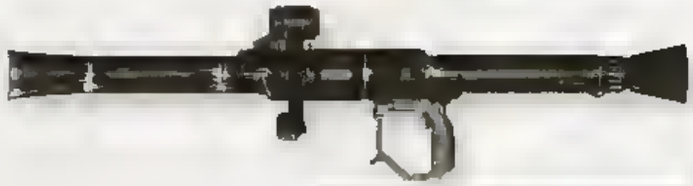




▲ザク・マシンガン

120mmザク・マシンガンZMC38Ⅲ M-120A1。120mm砲弾を連射するMS用マシンガンで、ヅダでも主兵装として多用された。銃本体は脚部に、マガジンは腰部にマウントできる。





▲ザク・バズーカ

280mmザク・バズーカH&L-SB25K 280mmA-P。280mm弾を発射する無反動砲あるいはロケット・ランチャーで、単発の威力に秀でる。評価試験では、2番機が使用している。





▲シュツルム・ファウスト

シュツルム・ファウスト60M。またはMarkⅧと呼ばれるモデルと考えられる。装弾数は1発で射程も短いが、一撃で宇宙戦艦を撃破可能。ヅダではシールド裏に装備したままでも発射できた。

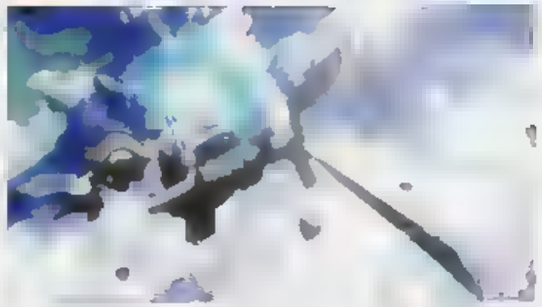


流用品が多いヅダの兵装

■ ■ ■

ヅダはプロパガンダのための機体だったためか、専用の火器は開発されなかったようだ。ヅダが使用した兵装は、主にザクⅡ用として開発されたザク・マシンガンやザク・バズーカ、シュツルム・ファウスト、ヒート・ホークなどであった。ヅダのマニピュレーターは、ほかのジオン公国系MSと互換性があったらしく、他機種用兵装の使用に問題はなかった。

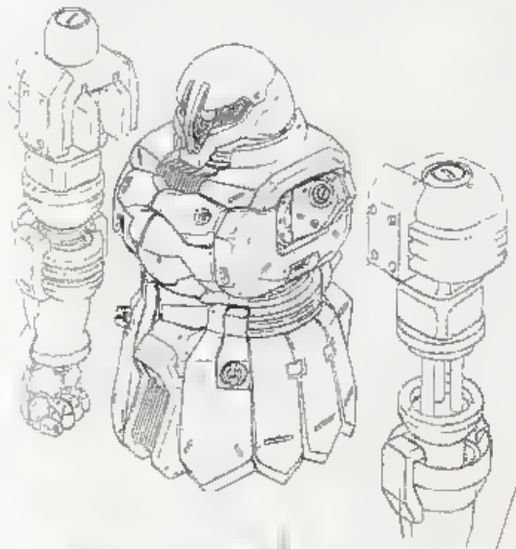
ヅダと欺瞞用MSであるゲム カモフ程度しか装備例が知られていない火器としては、試作兵器の135mm対艦ライフルが存在する。これはヅダの全高を遥かに上回る長大な火器で、艦艇の装甲を撃ち抜くほどの攻撃力を誇った。火器ではないが、固定装備のシールドには白兵戦用ピックが装備されており、これが数少ないヅダの専用兵装であった。

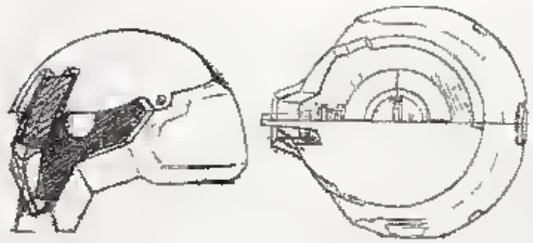


EMS-04から受け継いだ肩部懸架式のシールドには、白兵戦用ピックを装備。裏面にはシュツルム・ファウスト2基を搭載可能。

ヅダ分解図

EMS-10ヅダの腕部を取り外したところ。腕部は伸縮機構を持つ。これはほかのMSにはないもので、脚部にラッチが設けられたため、この機構が採用されたと思われる。





マルチブレードアンテナを取り外した1番機の頭部。予備機と同一形状。図は保護バーを透過させた状態である。



上はヅダの腕部の断面。3本のフレームが内蔵されており、これが伸縮する仕組みとなっている。この機構は、脚部にマウントした各種装備（ザク・マシンガンやヒート・ホーク）を取り出すためのものである。

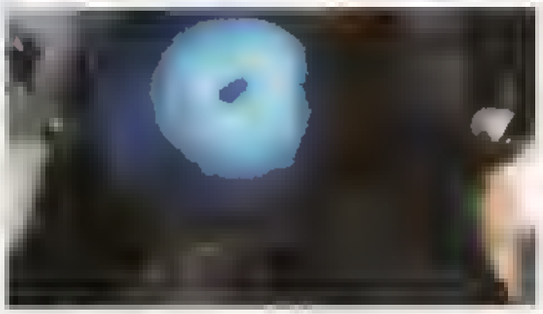
土星エンジン

ランドセルの中心に大型のノズルを、四隅に小型のスラスターが取り付けられている。整備性向上のためか、取り外しも可能だった。





一般的な熱核ロケット・エンジンと異なり、重元素を推進剤にできる「土星エンジン」は、特に接近戦闘で優れた機動性を発揮した。



通常のMSは複数のノズルを持つが、ヅダは1基のみである。自由度の高いノズルが、高度な機動性を担保としている点も特徴だ。

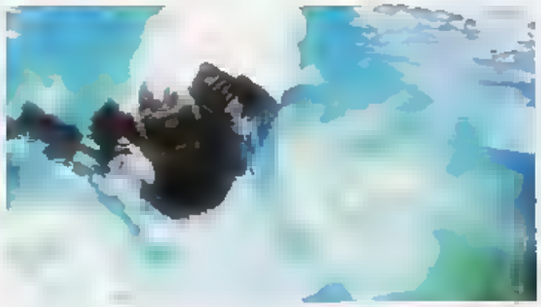


土星エンジン以外にも、ふくらはぎ部分にも計4つのスラスターが設置されている。こうした装備により、高度な機動性を獲得していた。

高性能新型エンジン、「土星エンジン」

EMS-04の「木星エンジン」に代り、主推進器としてドム系MSにも採用された「土星エンジン」をEMS-10ヅダは搭載する。試作エンジン「水星エンジン」から実用原型システム「木星エンジン」、そして実用化された「土星エンジン」に至るZIMMAD社の熱核エンジンは、広帯域推進剤技術を導入して開発されている。

広帯域推進剤技術とは、亜鉛や鉛などの重元素を接近戦闘用の推進剤としており、比較的軽い物質を推進剤とする一般的な熱核エンジンと比べて、大推力が得られた。こうした特性を持つ「土星エンジン」、及びドム系MSの技術を投入したといわれるEMS-10 ヅダは、ごく短時間で200m／秒以上の加減速を可能としており、地球周辺の浅い軌道で真価を発揮する、とされていた。



足底部にもスラスターを装備している。これらは加速のほか、急制動などにも用いられた。

シールド

シールドの表面には、ジオン公国の国家マークとヅダ各機の機体番号、第603技術試験隊のエンブレムが記された、シールド表面の迷彩塗装は、機体によって異なる。



シールドの番号は「Ⅰ」がデュバル機、「Ⅱ」がワシヤ機、「Ⅲ」がオノチナン機、「Ⅳ」が予備機を示していた。

「欠陥機」と共に戦ったパイロットたち

ヅダの評価試験に際してテストパイロットとなったのが、第603技術試験隊所属のヒデト・ワシヤ中尉、オッチナン・シェル中尉、そしてEMS-04時代にもテストパイロットを務めたジャン・リュック・デュバル少佐である。この際、デュバル少佐が1番機、ワシヤ中尉が2番機、シェル中尉が3番機を任されていた。

この中で、ヅダの技術的問題が解消されていなかったこと、そして評価試験の目的がプロパガンダに過ぎなかったことを知っていたのはデュバル少佐だけだった。これが3号機の空中分解事故とシェル中尉の死に繋がり、デュバル少佐の命をも奪うことになったのである。



デュバル少佐とヅダの名は、ジオン国営放送（ZwPA）のプロパガンダ報道の中で大々的に宣伝された。



3番機を任されていたオッチナン・シェル中尉は、対艦攻撃試験中に命令を無視。直後、空中分解事故で死亡した。



予備機に専属パイロットはいなかったようで、キャディラック特務大尉や技術試験隊の要員が適宜パイロットを務めた。





容姿、人物、技量共に優れた軍人。ヅダへの思い入れが強く、愛機と共に最期の時を迎えた。



◀ジャン・リュック・デュバル少佐

12年間、ZIMMAD社のテストパイロットを務めた後、ジオン公国軍に任官した人物。EMS-04のテストパイロットでもあった。ヅダの評価試験の真相を隠しつつ、英雄を演じていた。

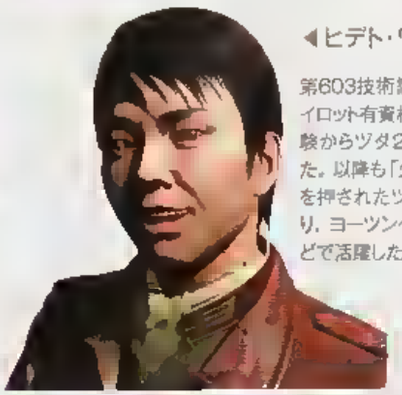






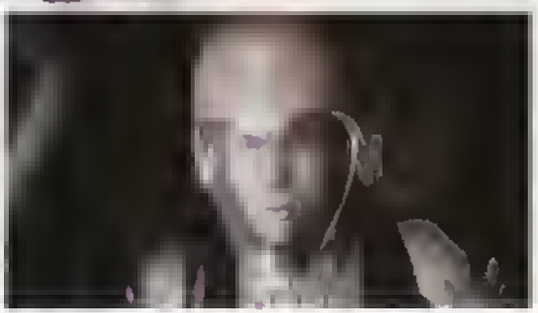
▲モニク・キャディラク特務大尉

お目付け役として第603技術試験隊に派遣された、総帥府の士官。MSの操縦技術を持ち、オデッサ撤退部隊救助やア・バオア クー戦時のEフィールド防衛ではヅダ予備機を駆った。



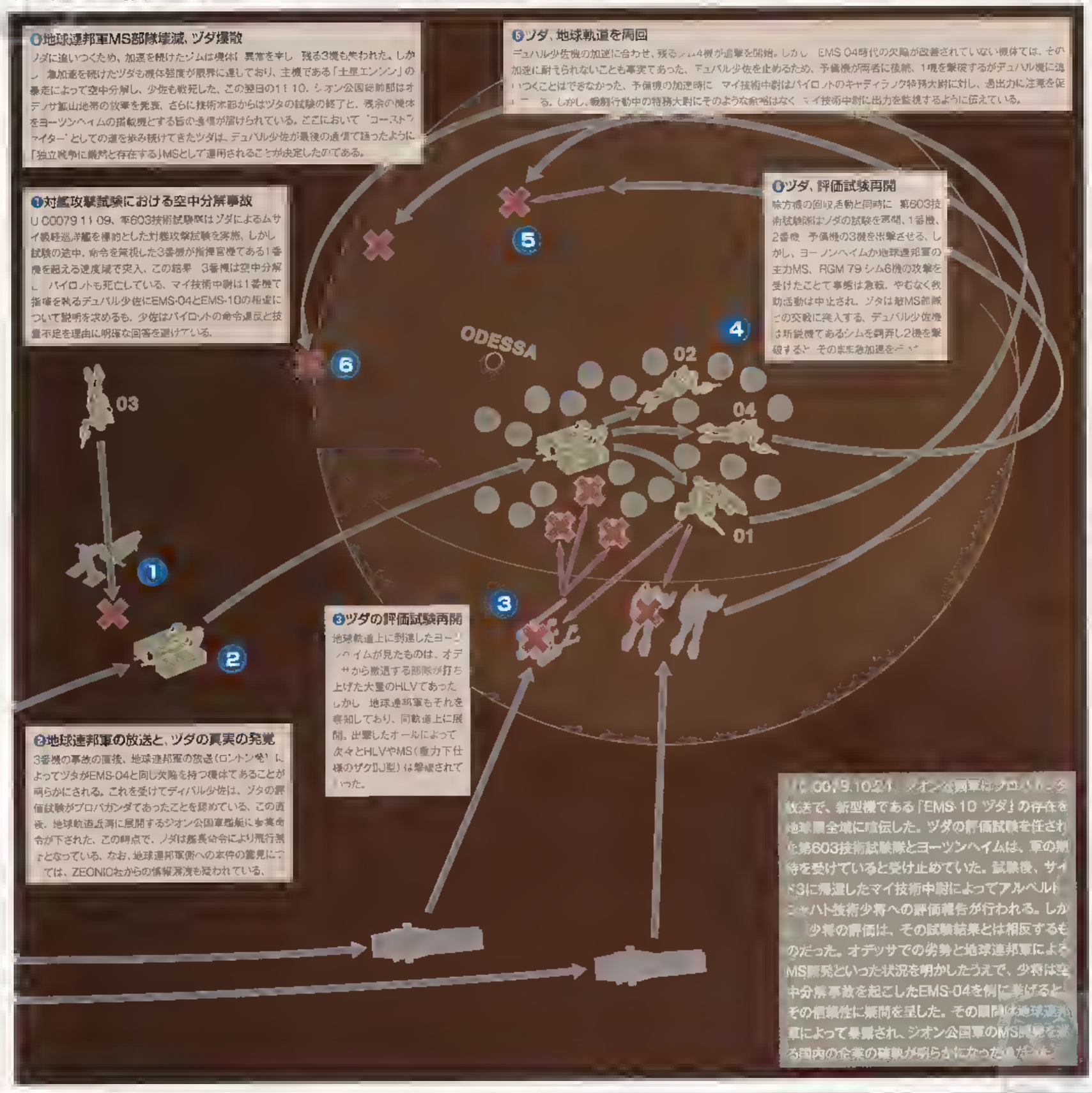
◀ヒデト・ワシヤ中尉

第603技術試験隊のMSパイロット有資格者で、評価試験からヅダ2番機を任された。以降も「欠陥機」の烙印を押されたヅダを無難に操り、ヨーツンヘイムの防衛などで活躍した。





ツダの運用評価試験と地球軌道上における実戦



❶対艦攻撃試験における空中分解事故

U.C.0079 11.09、第603技術試験隊はツダによるムサイ級巡洋艦を標的とした対艦攻撃試験を実施。しかし試験の途中、命令を無視した3番機が指揮官機である1番機を超える速度域で突入、この結果、3番機は空中分解し、パイロットも死亡している。マイ技術中尉は1番機で指揮を執るデュバル少佐にEMS-04とEMS-10の相違について説明を求めるも、少佐はパイロットの命令違反と技量不足を理由に明確な回答を避けている。

❷地球連邦軍の放送と、ツダの真実の発覚

3番機の事故の直後、地球連邦軍の放送（ロンドン発）によってツダがEMS-04と同じ欠陥を持つ機体であることが明らかにされる。これを受けてデュバル少佐は、ツダの評価試験がプロパガンダであったことを認めている。この直後、地球軌道近辺に展開するジオン公国軍艦艇に参集命令が下された、この時点で、ツダは指揮命令により飛行禁止となっている。なお、地球連邦軍側への本件の露見については、ZEONIC社からの情報漏洩も疑われている。

❸ツダの評価試験再開

地球軌道上に到達したヨーツンヘイムが見たものは、オデッサから撤退する部隊が打ち上げた大量のHLVであった。しかし、地球連邦軍もそれを察知しており、同軌道上に展開。出撃したオールによって次々とHLVやMS（重力下仕様のザクII J型）は撃破されていった。

❹地球連邦軍MS部隊壊滅、ツダ撮散

ツダに追いつくため、加速を続けたジムは機体に異常を来し、残る3機も失われた。しかし、加速を続けたツダも機体強度が限界に達しており、主機である「土星エンジン」の暴走によって空中分解し、少佐も戦死した。この翌日の11.10、ジオン公国総帥部はオデッサ撤退地帯の放棄を発表、さらに技術本部からはツダの試験の終了と、残余の機体をヨーツンヘイムの指揮艦とする旨の通信が届けられている。ここにおいて「コースト・ライター」としての道を歩み続けてきたツダは、デュバル少佐が最後の通信で語ったように「独立戦争に厳然と存在する」MSとして運用されることが決定したのである。

❺ツダ、地球軌道を周回

デュバル少佐機の加速に合わせ、残るジム4機が追撃を開始。しかし、EMS-04時代の欠陥が改善されていない機体では、その加速に耐えられないことも事実であった。デュバル少佐を止めるため、予備機が両者に接続、1機を撃破するがデュバル機に追いつくことはできなかった。予備機の加速時に、マイ技術中尉はパイロットのキャディラック特務大尉に対し、過出力に注意を促す。しかし、戦闘行動中の特務大尉にそのような余裕はなく、マイ技術中尉に出力を監視するように伝えている。

❻ツダ、評価試験再開

除方機の回収活動と同時に、第603技術試験隊はツダの試験を再開、1番機、2番機、予備機の3機を出撃させる。しかし、ヨーツンヘイムから地球連邦軍の主力MS、RGM-79 ジム6機の攻撃を受けたことで事態は急転、やむなく救助活動は中止され、ツダは敵MS部隊との交戦に突入する。デュバル少佐機は新鋭機であるジムを撃墜し2機を撃破するも、その直後被弾を受け

U.C.0079.10.21、ジオン公国軍はプロパガンダ放送で、新型機である「EMS-10 ツダ」の存在を地球圏全域に宣伝した。ツダの評価試験を任された第603技術試験隊とヨーツンヘイムは、軍の期待を受けていると受け止めていた。試験機、サイド3に帰還したマイ技術中尉によってアルベルト・ハント技術少将への評価報告が行われる。しかし、少将の評価は、その試験結果とは相反するものだった。オデッサでの劣勢と地球連邦軍によるMS開発といった状況を明かしたうえで、少将は空中分解事故を起こしたEMS-04を例に挙げるとその信頼性に疑問を呈した。その開発は地球連邦軍によって暴露され、ジオン公国軍のMS開発を支える国内の企業の確執が明らかになったのだった。

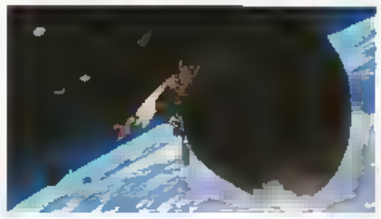
Hotol ホートル

ジオン公国軍が運用した地球往還機。HOTOLは「HOrizontal Take Off and Landing」の略で、その名称が示すように水平離着陸による大気圏離脱と突入を可能としている。物資輸送に運用されたが、HLVや投下コンテナに比べると数は少なかった。また、オデッサから宇宙に脱出した部隊の中にも、HOTOLが確認されている。

SPECIFICATION

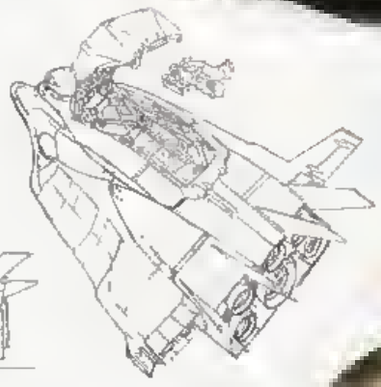
全長:不明
重量:不明
武装:不明
種別:地球往還機





オデッサから脱出したHOTOL090は、整備不良のためか制御不能に陥っていた。





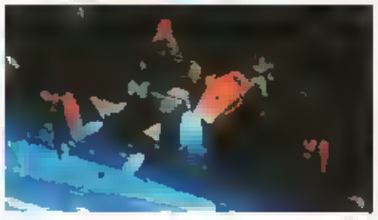


RGM-79 GM RGM-79 ジム

「V作戦」に基づき、1年戦争後期に実用化された地球連邦軍主力MS。先行量産型と後期生産型に大別され、前者は迅速な戦力建て直しのための生産期間短縮とコストダウンが災いし、要求性能の達成はならなかった。それでも、地球連邦軍の初期MS戦力構築に大きく貢献し、オデッサから脱出する公国軍部隊の掃討にも投入された。

SPECIFICATION

頭頂高 18.0m
本体重量 41.2t
全備重量 58.8t
ジェネレーター出力 1,250kW
スラスター推力 55,500kg
装甲材質 チタン系合金
兵装 頭部バルカン×2 /ビーム・サーベル/ 90mmマシンガン ハイパー・バズーカ/シールド



地球軌道上での公国軍脱出部隊の掃討戦には、2個小隊6機のジムが投入された。





ジム部隊はヅダとの交戦に及んだが、デュバル機に翻弄されて全滅している。

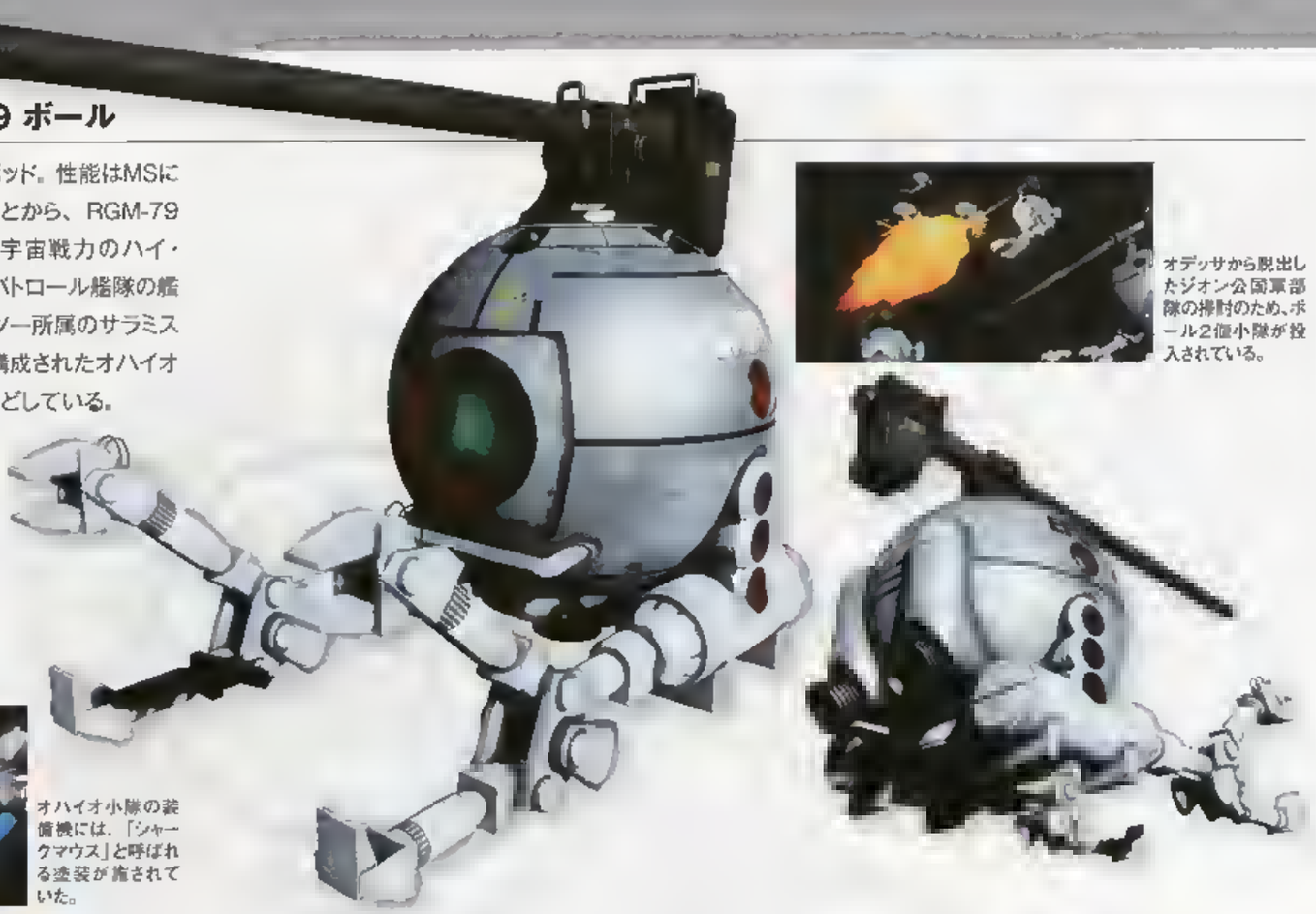


RB-79 Ball RB-79 ボール

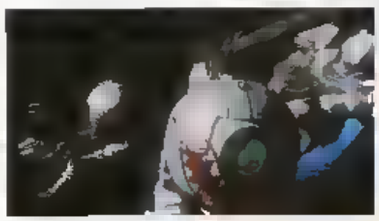
地球連邦軍のワンマンモビルポッド。性能はMSに遠く及ばないが生産性に優れることから、RGM-79ジムの支援機として地球連邦軍宇宙戦力のハイ・ロー・ミックスを形成した。また、パトロール艦隊の艦載機としても運用されているルナツー所属のサラミス級巡洋艦を母艦とする、ボールで構成されたオハイオ小隊がEMS-10 ツダと遭遇するなどしている。

SPECIFICATION

全高:12.8m
本体重量:17.2t
ジェネレーター出力:400kW
兵装:180mm低反動キャノン砲



オデッサから脱出したジオン公国軍部隊の掃討のため、ボール2個小隊が投入されている。



オハイオ小隊の装備機には、「シャークマウス」と呼ばれる塗装が施されていた。

Salamis-class サラミス級宇宙巡洋艦(ボール搭載型)

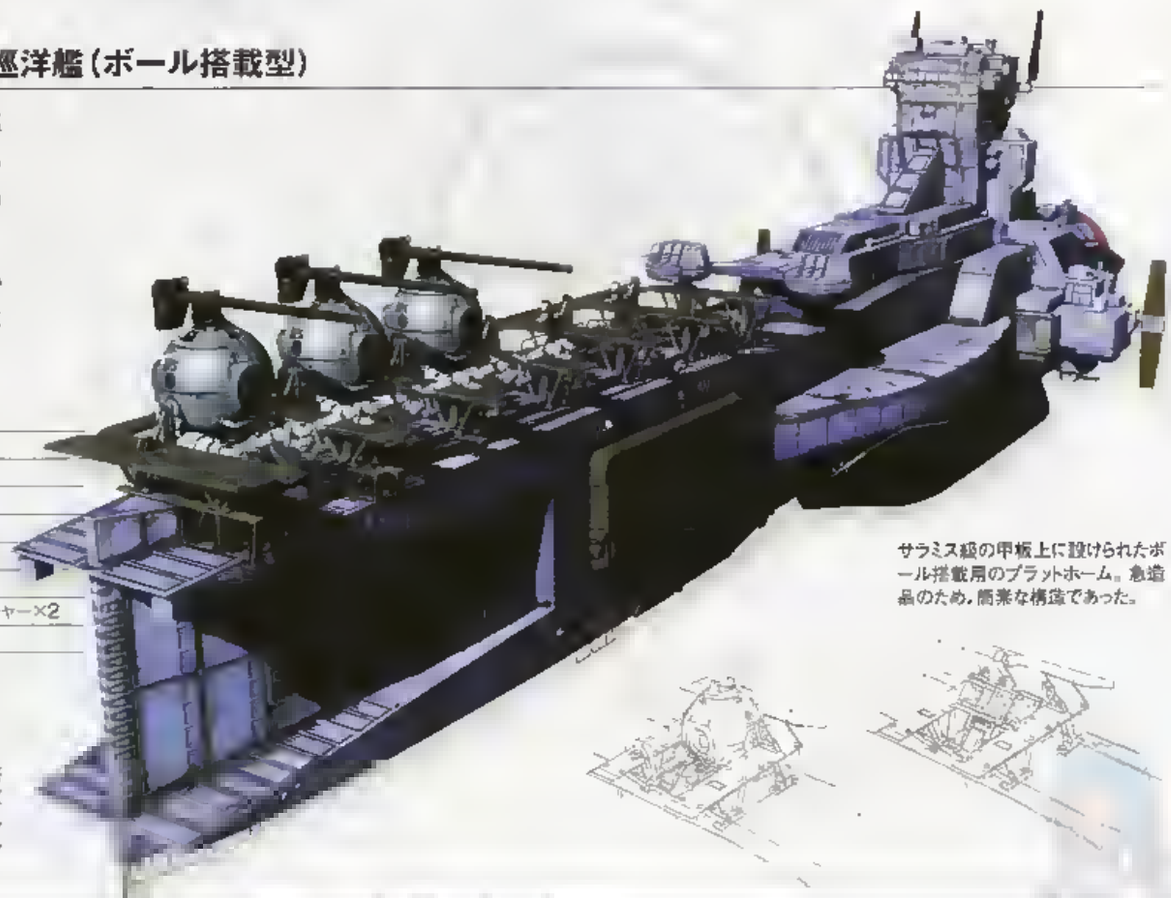
地球連邦軍の主力艦であるサラミス級宇宙巡洋艦に小改造を施し、RB-79 ボールの運用能力を付与した艦。上部甲板の単装メガ粒子砲を外し、最大6機のボールを搭載可能な簡易カタパルトを装備している。宇宙での反攻が本格化するまでは、単艦ないしは小規模のパトロール艦隊を構成して哨戒任務に就くことが多かった。

SPECIFICATION

全長:212m
全幅:62.2m
全高:71.4m
船体乾重量:12,100t
全装備重量:22,000t (標準装備　推進剤)
主推進システム:熱核ロケット・エンジン×1
兵装:単装メガ粒子砲×5／連装機関砲×6／8連装ミサイル・ランチャー×2
搭載MS:ボール



オハイオ小隊を搭載した艦が公国軍輸送艦隊を捕捉した際、ツダと接触している。



サラミス級の甲板上に設けられたボール搭載用のプラットホーム。急造品のため、簡素な構造であった。

EMS-04 ヅダ

MS開発史の闇に消えた ゴーストファイター

EMS-04 ヅダは、ZIMMAD社が次期主力兵器として開発した機体である。本機に搭載された「木星エンジン」による出力とパワーは、競合試験でYMS-05 ザクIを圧倒した。しかし、公的飛行試験において空中分解事後を起こしたため、ザクIに敗れることとなった。ヅダの開発は細々と継続され、本機で培った推進機技術によって、「土星エンジン」が開発されている。そして、悪化する戦局はヅダにEMS-10というもうひとつの姿を与えたのである。



ランドセルの上に設置されたタンクや肩の形状など、EMS-10との違いが見て取れる。





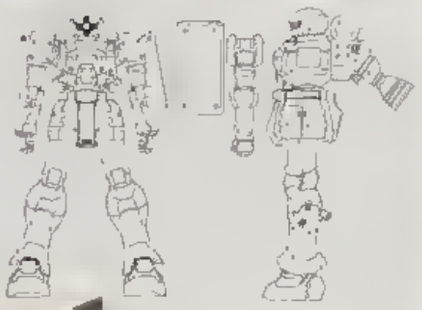
◀デュバル機のマーキング



◀フラン・ツ機のマーキング

SPECIFICATION

全高:17.3m
本体重量:61t（浅宇宙運用時）
融合炉出力:1,150kW
最大主推力:58,700kg
武装:不明



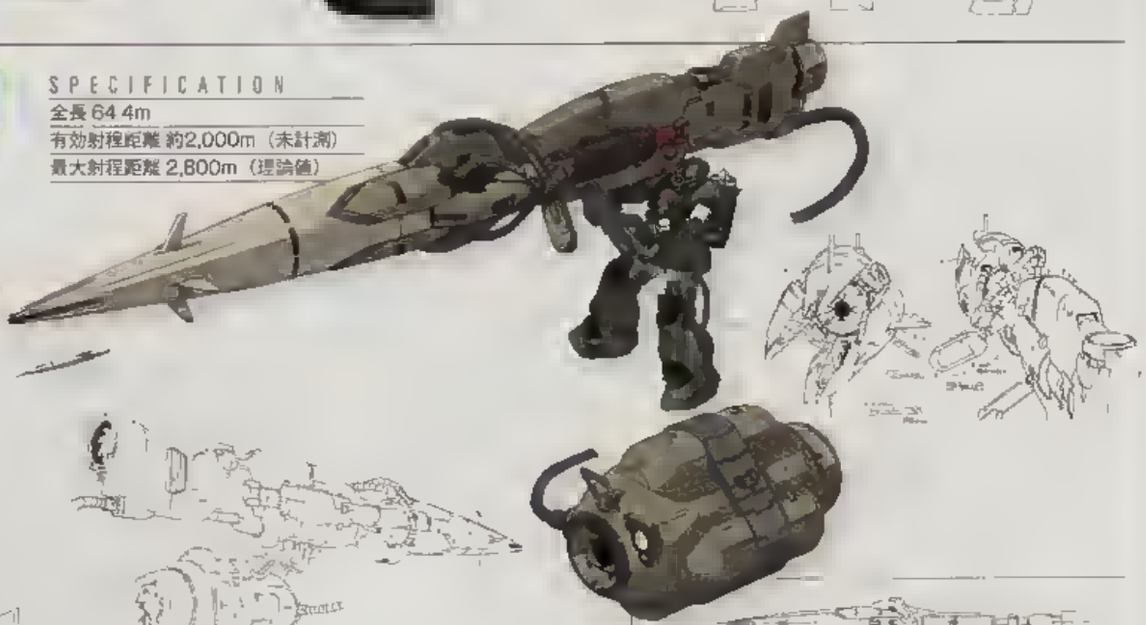
QEX-04M エーギル

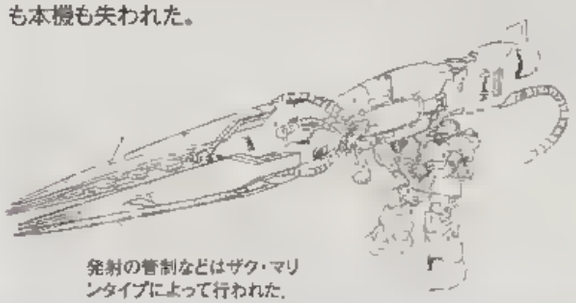
水中でのビーム発射を成功させた 画期的な火砲

このQEX-04Mエーギルは、水中でのビームの発射を目的に開発された機体である。開発は技術本部が担当し、彼らは画期的な方法――水中に空気のトンネルを作り、そこにビームを発射する――を考案、水中でのビームの発射を実現したのである。こうして完成したエーギルは、地球に運ばれフォルケッシャー号を母艦として運用試験を行っている。最終的には、地球連邦軍の潜水艦と水中用モビルポッド部隊との戦闘で、敵艦を撃沈するも本機も失われた。

SPECIFICATION

全長:64.4m
有効射程距離:約2,000m（未計測）
最大射程距離:2,800m（理論値）

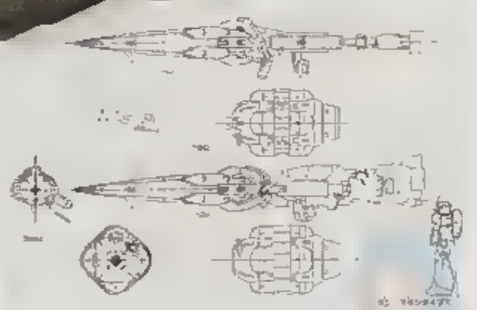




発射の管制などはザク・マリンタイプによって行われた。



巡航状態。エーギルは砲とサブ・システムのふたつによって構成される。





第2章 黙示録0079

第1話　ジャブロー上空に海原を見た
第2話　光芒の峠を越えろ
第3話　雷鳴に魂は還る

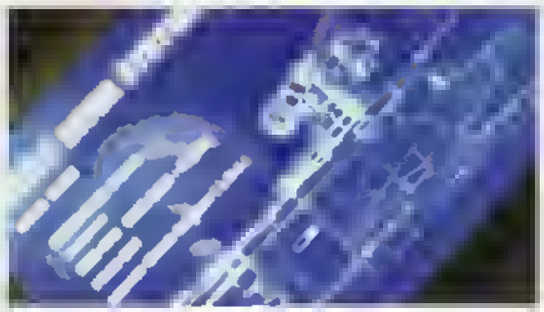
MSM-07Di Ze'Gok MSM-07Di ゼーゴック



軌道邀撃作戦の要となった ジオン公国軍のハンター

当初は第604技術試験隊で運用されていたが、試験支援艦の撃沈に伴い、ヨーツンヘイムで試験が行われることとなった。

ゼーゴックは飛行能力を持つ。攻撃後はL.W.C.を投棄し、味方機との回収ポイントまで飛行した。



L.W.C.とゼーゴックのふたつを合わせて「モヒルダイバーシステム」と総称される。

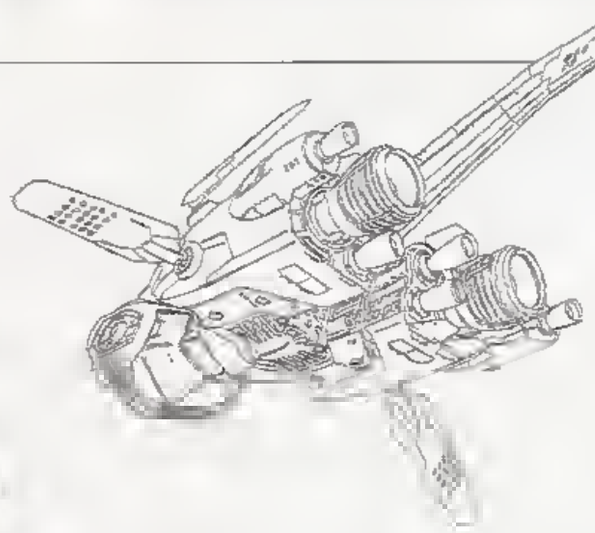


ゼーゴックはズゴックの左腕だけを残しており、腕部メガ粒子砲を使用することも可能であった。

SPECIFICATION

全長	27.3m
全幅	15.6m
全高	13.2m
全重量	212t
核融合炉出力	
	ズゴック・ユニット×2 452kW×1
	ダイブマヌーバー・ユニット(熱核ジェット・エンジン):4,680kW×2
熱核ジェット最大出力	285,000kg
バイロン・ブースター	
	化学ロケット最大推力 193,000kg (×2)
大気圏内水平巡航距離	1,400km
主兵装	腕部メガ粒子砲×1





■ゼーゴックの各部



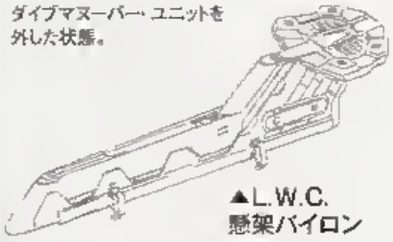
▼ダイブマヌーバー・ユニット



▲ズゴック・ユニット
胸部、センサーユニット、ダイブマヌーバー・ユニットを外した状態。



▲バインダー



▲L.W.C.
懸架パイロン

上の図のようにゼーゴックは大きく4つに分解される。L.W.C.懸架パイロンには、ブースターとプロペラント・タンクを設置する。

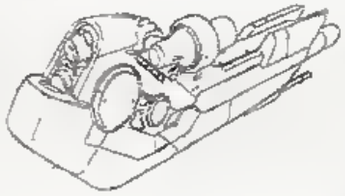
開発経緯 | DEVELOPMENT

ジャブロー攻略作戦の失敗は、ジオン公国軍の地上での勢力をさらに低下させた。それは地球連邦軍の反撃につながり、事実、12月2日以降、多数の宇宙艦艇がジャブローより宇宙へと打ち上げられている。地球連邦軍の宇宙への戦力展開を阻止するため、ジオン公国軍はモビルダイバーシステムによる軌道遮撃（モビルダイブ）作戦を計画、実施に移した。

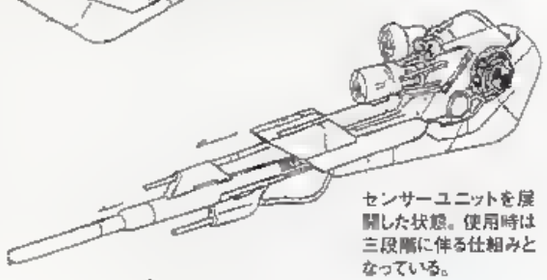
モビルダイバーシステムとは、宇宙から地上に物資を輸送する大型コンテナである「L.W.C.（Logistics Weapon Container）」に管制システムを設置した急造兵器である。L.W.C.を兵装コンテナに改装する案を煮詰めた結果、モビルダイバーシステムの構想が生まれた。

管制システムには当初予定されていた専用機ではなく、戦線の後退により不要となったMSM-07 ズゴックの使用が決定。水陸両用MSであるズゴックは、水圧などに耐えるために耐圧構造を採用、さらにそれを耐圧ジョイントで接続しているため、モビルダイバーシステムの管制システムへの換装が容易であった。さらにズゴックに搭載されていた熱核ハイブリット・エンジンはダイブマヌーバー・ユニット（下半身にあたるブースターを中心とした推進ユニット）との組み合わせにより、L.W.C.に十分な機動性を与えたのである。また、地上での戦線の後退に伴い不要となった水陸両用MSを流用しているため、使用後に投棄できる点も有効であった。

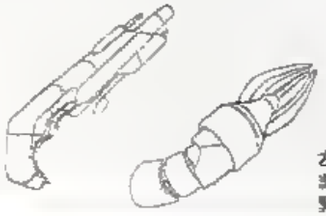
こうしてズゴックを流用し、MSM-07Di ゼーゴックが完成した。このゼーゴックは2機のみの試作で開発は中止されるはずであった。しかし、最終的には追加で7機が生産されている。



右腕部に取り付けられたセンサーユニット。L.W.C.の火器管制用のデータを収集する。



センサーユニットを展開した状態。使用時は三段階に伴る仕組みとなっている。



左腕部はズゴックの腕がそのままとなっている、メガ粒子砲は緊急時に使用された。

L.W.C.——モヒルダイブ作戦の中核を成すユニット

前述したとおり、輸送コンテナであるL.W.C.は、最大で540tから670tもの貨物を搭載可能であった。しかし、自律飛行能力を持たないため、HLVなどに比べ使用頻度は低かったとされる。この問題を解決するためにL.W.C.に機動性を付与するアイデアが提案され、それを大型兵器コンテナとして使用する案が考え出されたのである。この結果、いくつかの武装の搭載が決定したが、現在までに大型ミサイル(マルチ・ミサイル・バス)、28連装ロケット弾ポッド、試作拡散ビーム砲の3種類の存在が知られている。

■マルチ・ミサイル・バス

L.W.C.に4本を大型の空対空ミサイルを搭載。ミサイルの全長は60mにも及び、地球連邦軍の艦艇も撃破可能とされた。

■28連装ロケット弾ポッド

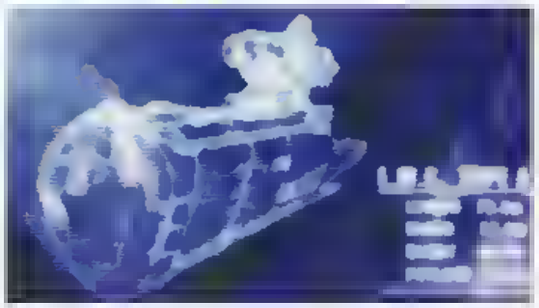
「R-1(アールアイン)」と呼ばれるロケット弾ポッド。射程は短いが、計12発ものロケット弾で敵が通過するであろう空域に弾幕の展開が可能。なお、本兵装を搭載するとL.W.C.は過積載となってしまう。

■試作拡散ビーム砲(クーベルメ)

5基の4連装収束粒子ビーム砲を搭載。各ビーム砲は発射角度を変更できるため、広範囲を攻撃できた。しかし、過積載に加え、5秒以上の照射ができないといった問題もあった。

SPECIFICATION

全長 73.7m (標準L.W.C.使用時)
全幅 17.7m (標準L.W.C.使用時)
全高 20.3m (標準L.W.C.使用時)
最大積載荷重(ペイロード) 540～670t
モビルタイバー用兵装:第1兵装 ミサイル・ベイ、第2兵装 ロケット弾ポッド/第3兵装:拡散ビーム砲(専用L.W.C.使用)など
兵装重量 マルチ・ミサイル・バス:445t/ロケット弾ポッド(R-1):632t/試作拡散ビーム砲「クーベルメ(Kuhblime)」:917t(過重積載)



3種類の兵装の使用しか確認されていないが、兵器の特性からほかのタイプの兵器が用意されていたと考えられる。

MSM-07Di Zeek

■L.W.C.



後部は開放されており、搭載物によってバイロンを変更する仕組みとなっている。





L.W.C.はリフティング・ボディ構造によって、大気圏内を滑空しながら降下を行う。

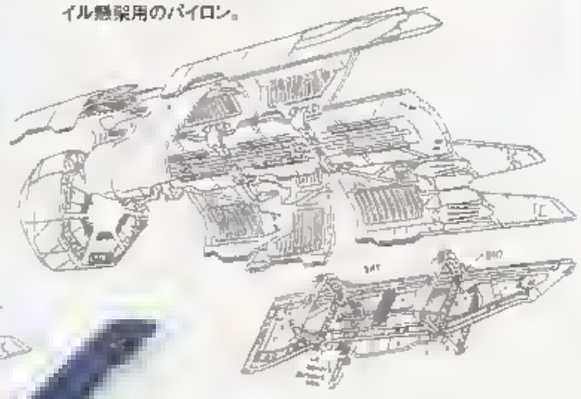
L.W.C.(第1兵装)
マルチ・ミサイル・バス



4本の大型ミサイルが搭載されている。L.W.Cは通常のタイプを使用する。



中距離空対空ミサイルを搭載したマルチ・ミサイル・バス。壁面を左右に展開して使用する。



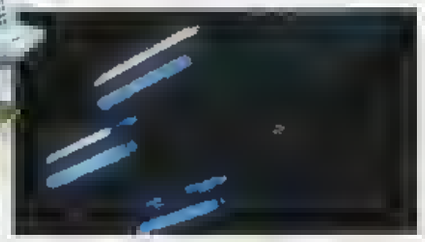
L.W.Cの内部構造。左右の壁面はそれぞれ3枚ずつに分解される。下はミサイル懸架用のパイロン。

L.W.C.(第2兵装)
28連装ロケット弾ポッド「R-1」

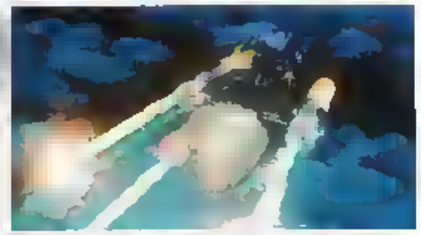


小型ロケット弾で、威力では大型ミサイルに劣るが、連続発射でその欠点をカバーしている。

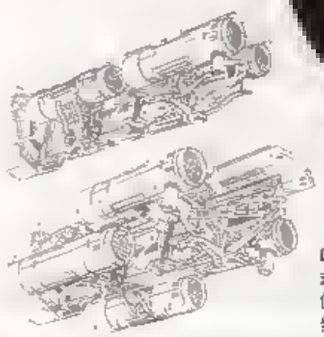




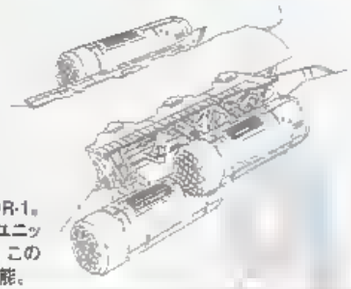
マルチ・ミサイル・バスと同じL.W.Cを使用するが、使用時には壁面が全て分離される。



4基のミサイルポッドから発射される計112発のミサイルによって、上昇中に敵艦に対し弾幕を展開する。



ロケット弾ポッドは折りたたまれて、収納されているが、使用時には引き出されて発射可能状態となる。



発射可能状態のR-1。ダイブマヌーバー・ユニットの出力によって、この状態でも飛行が可能。

特殊な運用を前提に開発された第3兵装

第1兵装と第2兵装と異なり、第3兵装の「クーベルメ」は兵器としての特性が大きく異なっている。この兵装の使用時、モビルダイバーシステムは地表に向かってほぼ垂直に降下、敵艦艇と交差後、反転し、後方からビームを照射するという攻撃法を採用している。この方法は敵の対空兵器からの攻撃を受けにくいという利点はあるが、相対速度の関係上、攻撃時間が極めて短いという欠点もあった。また、L.W.C.はロケット型をした独特の形状のものが使用され、後部にはエアブレーキも搭載されていた。



5秒以上の照射は爆散の危険性があったため、攻撃時間が極めて限定されていた。

L.W.C.(第3兵装)
クーベルメ



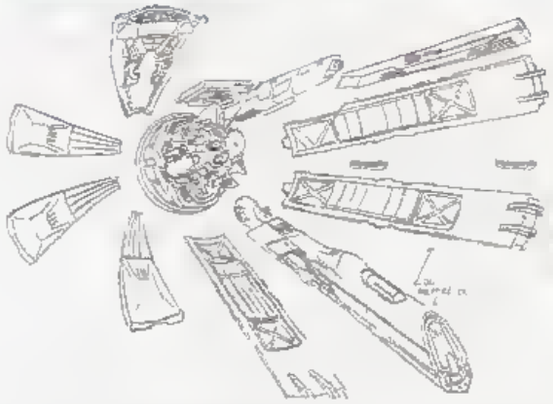
後部からの見たアングル。エネルギーセルユニットが折り畳まれて収納されていることが分かる。







クーベルメを展開した状態。L.W.C.を排除したのちもゼーゴックとバイロンで直接懸架されている。機体から延びる5本のスタビライザー状のものはエネルギーセル。また、クーベルメの後部にはスラスターが内蔵されている。



L.W.C.のパネルの構造図。第3兵装のL.W.C.はほかのタイプと異なり、複数枚のパネルで構成され、使用時はすべてが排除される。

ゼーゴック専用のコクピット

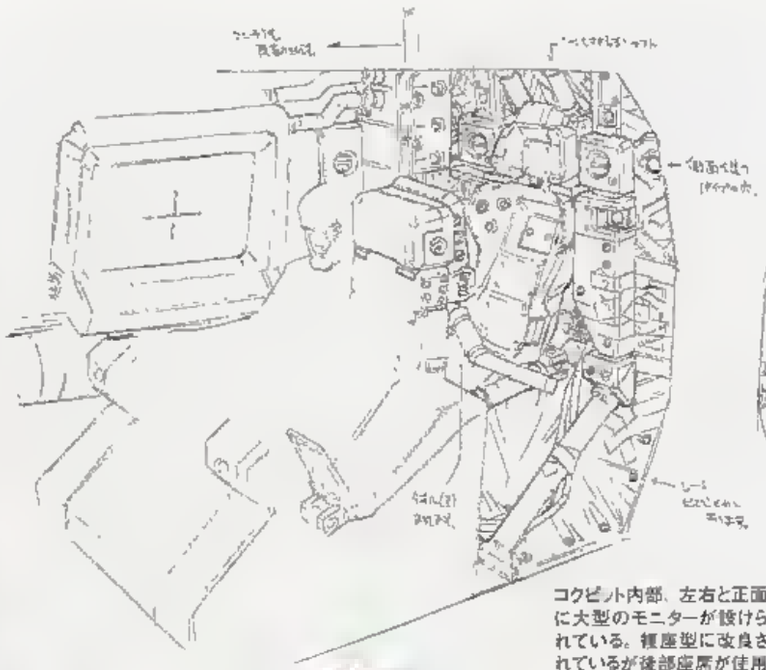
ゼーゴックのコクピットは、通常のズゴックのものではなく、統合整備計画に準拠したタイプに変更されている。この変更の意図は不明だが、水陸両用MSのコクピットではモビルタイプ作戦時の機体の運用や兵装の使用など、複雑な操作や機体の管制などが困難であったためだと推測される。



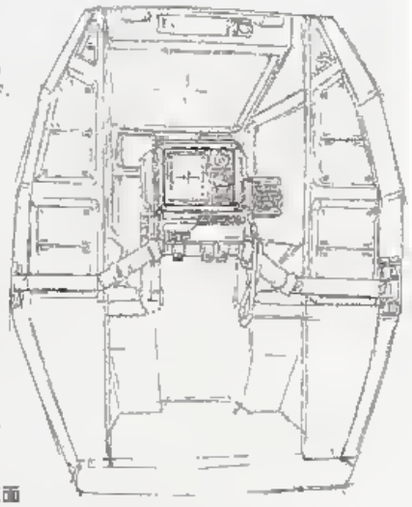
コクピット内には、大型のモニターが配置されており、敵の情報などが随時表示された。



第2運用試験ではヒデト・ワシヤ中尉が、アドバイザーとして後部座席に搭乗した。



コクピット内部、左右と正面に大型のモニターが設けられている。複座型に改良されているが後部座席が使用されるケースは稀で、ひとりでも操縦は可能。



後部座席はモニターがあるのみで、操縦系などは設けられていない。ふたりで乗る場合は、前部で操縦と火器の管制を、後部でデータの収集や分析などを行っていたようだ。

大気圏という海に飛び込んだ海兵隊員

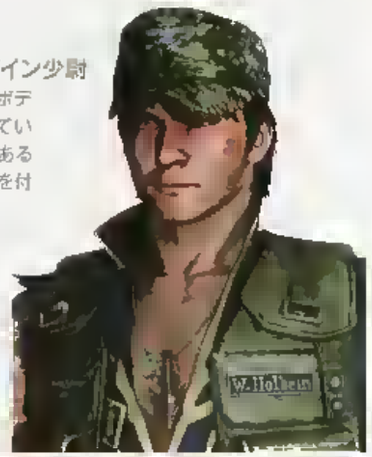
モビルダイバーシステムのパイロットはジオン公国軍の海兵隊に所属する、ヴェルナー・ホルバイン少尉が務めた。1年戦争における彼の活躍は知られていないが、機動兵器のパイロットを務めていたと考えられる。性格にクセのある人物だが優れた操縦技術の持ち主で、操縦が困難なモビルダイバーシステムを操っている。4度目の評価試験で5隻もの敵艦を撃沈するも、味方との回収地点付近で撃破され、戦死している。



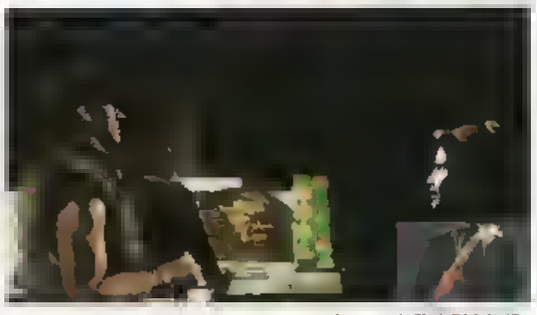
普段は表情を表に出さないが、降下作戦中に躁状態になり、性格を一変させ周囲を驚かせた。



ヴェルナー・ホルバイン少尉
袖を切った制服の上にボディーアーマーを着用している。手首には海兵隊であることを示すリストバンドを付けている。

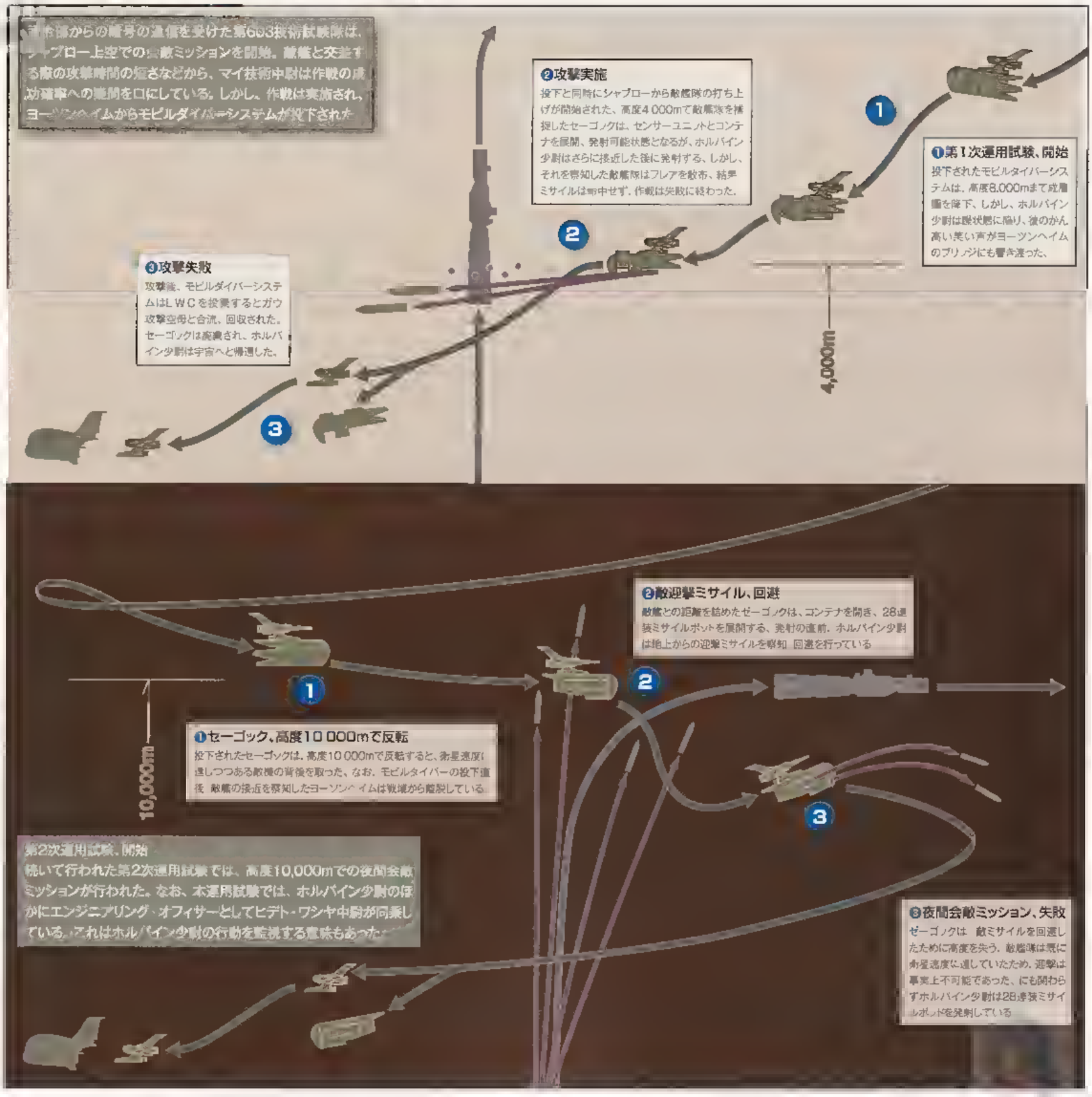


首から下げた認識票には、祖父の形見である鍵の先を付けている。



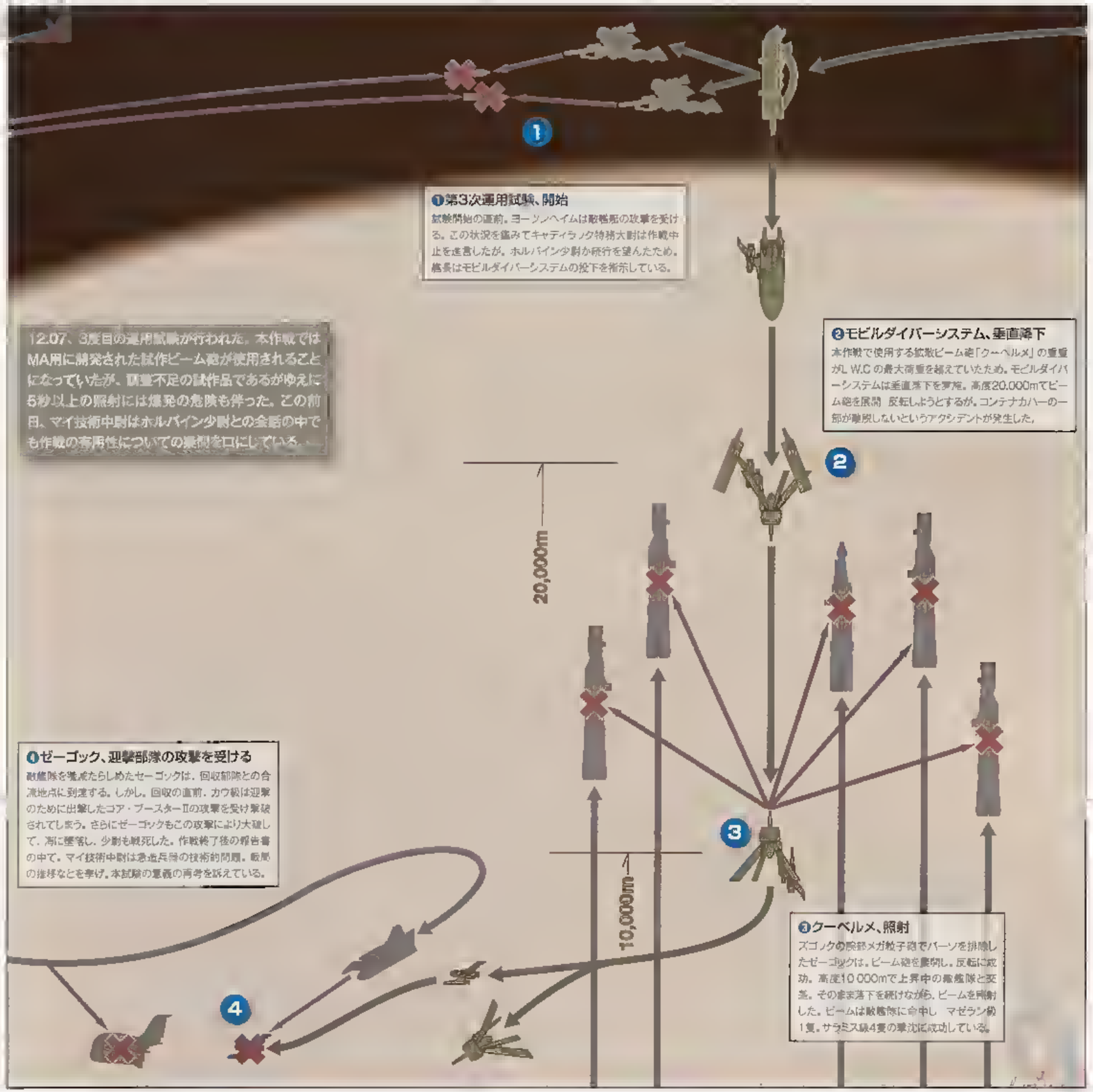
階級にこだわらず、着任時にモニク・キャディラック特務大尉を無視。彼女の怒りを買っている。

MSM-07Di Ze'Gok ■第1次、第2次運用試験



第2次運用試験、開始
続いて行われた第2次運用試験では、高度10,000mでの夜間会敵ミッションが行われた。なお、本運用試験では、ホルバイン少尉の他にエンジニアリング・オフィサーとしてヒデト・ワシヤ中尉が同乗している。これはホルバイン少尉の行動を監視する意味もあった。

■第3次運用試験



12.07、3度目の運用試験が行われた。本作戦ではMA用に開発された試作ビーム砲が使用されることになっていたが、調整不足の試作品であるがゆえに5秒以上の照射には爆発の危険も伴った。この前日、マイ技術中尉はホルバイン少尉との会話の中でも作戦の有用性についての疑問を口にしている。

❶第3次運用試験、開始
試験開始の直前。ヨーツンヘイムは敵艦隊の攻撃を受ける。この状況を鑑みてキャディラック特務大尉は作戦中止を進言したが、ホルバイン少尉が続行を望んだため、艦長はモビルダイバーシステムの投下を指示している。

❷モビルダイバーシステム、垂直降下
本作戦で使用する拡散ビーム砲「クーベルメ」の重量がL W.C の最大荷重を超えていたため、モビルダイバーシステムは垂直落下を実施。高度20,000mでビーム砲を展開 反転しようとするが、コンテナカバーの一部が離脱しないというアクシデントが発生した。

❸クーベルメ、照射
ズゴックの陽動メガ粒子砲でパーツを排除したゼーゴックは、ビーム砲を展開し、反転に成功。高度10,000mで上昇中の敵艦隊と交差。そのまま落下を続けながら、ビームを照射した。ビームは敵艦隊に命中し マゼラン級1隻、サラミス級4隻の撃沈に成功している。

❹ゼーゴック、迎撃部隊の攻撃を受ける
敵艦隊を殲滅たらしめたゼーゴックは、回収部隊との合流地点に到達する。しかし、回収の直前、カウ級は迎撃のために出撃したコア・ブースターIIの攻撃を受け撃破されてしまう。さらにゼーゴックもこの攻撃により大破して、海に墜落し、少尉も戦死した。作戦終了後の報告書の中で、マイ技術中尉は急造兵器の技術的問題、戦局の推移などを挙げ、本試験の意義の再考を訴えている。

Gaw-class ガウ級攻撃空母

ジオン公国軍の航空戦略の中核を担った超大型航空機。巨大な主翼に計18基の熱核ジェット・エンジンを備え、その推進力によって飛行する。胴体下部と両翼にはカーゴ・スペースを有し、戦略的な移動力に欠けるMSやドップの母艦となった。また、ゼーゴックの回収機としても運用された。

SPECIFICATION

全長	62m（異説50m）
重量	980t
推進システム	熱核ジェット・エンジン×18
最高速度	マッハ0.9
乗員	34名
兵装	2連装メガ粒子砲×2　2連装砲　爆弾
搭載機数	MS×3（異説4）　ドップ×8



1年戦争期最大級の航空機で、ジオン公国軍地上戦力の展開を助けた。しかし、戦争末期には運用すべき戦力そのものが存在しなかった。

胴体から左右に大きく伸びた主翼に片側2基のエンジンナセルを有する。空力特性は低いが、大推力でその巨体を飛行させる。



作戦を終えたゼーゴックを回収するため、降下地点周辺に展開した。

第4次評価試験ではジャブローからの迎撃機に撃墜されている。

Core-Booster II Intercept Type コア・ブースターII インターセプトタイプ

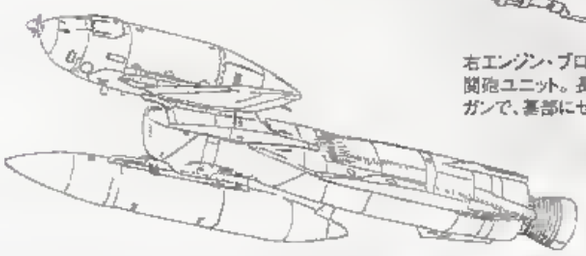
FF-X7Bst コア・ブースターを高高度迎撃用に改修した機体。ブースター部左右のエンジン・ブロックに仕様変更が施され、主翼形状も変更されている。機体底部に加速用のロケット・モーターを装着することもできる。運用例は極めて少なく、ジャブロー基地への配備機が確認されるのみである。

SPECIFICATION

全長	不明
重量	不明
兵装	機関砲



右エンジン・ブロックに装備される機関砲ユニット。長砲身のカトリング・ガンで、基部にセンサーを備える。



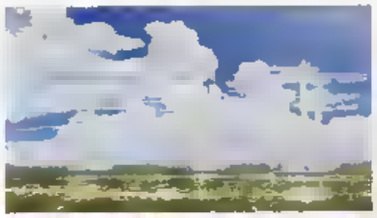
エンジン・ブロック（ポンツーンとも呼ばれる）は、先端下部にプロペラント・タンクを装着できる。

Magellan-class マゼラン級宇宙戦艦（ブースター装備）

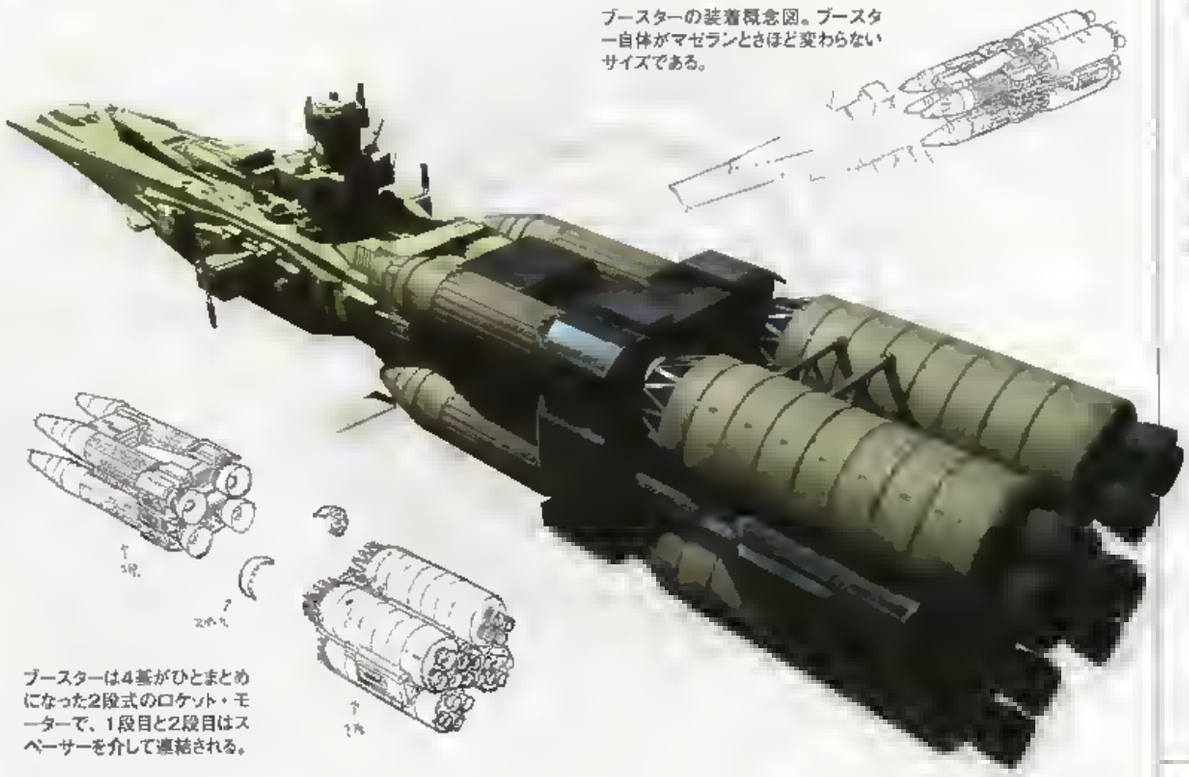
大気圏離脱用ブースターを装備したマゼラン級宇宙戦艦。1年戦争緒戦で艦隊戦力に大打撃を受けた地球連邦軍は「ビンソン計画」による宇宙艦隊の再建を図り、ジャブロー基地工廠を中心に艦艇の建造を進めた。それらの艦艇は、このようなブースターを用いて地上から打ち上げられた。

SPECIFICATION

全長 327m
全幅 94.5m
全高 88m
船体乾重量 41,000t
全装備重量 62,900t
兵装 連装メガ粒子砲×7／連装機関砲×20
※ブースター部を除く



ジャブロー基地で建造されたマゼラン級は、ブースターを用いて打ち上げられた。



ブースターの装着概念図。ブースター自体がマゼランとさほど変わらないサイズである。

ブースターは4基がひとまとめになった2段式のロケット・モーターで、1段目と2段目はスペーサーを介して連結される。

Salamis-class サラミス級宇宙巡洋艦（ブースター装備）

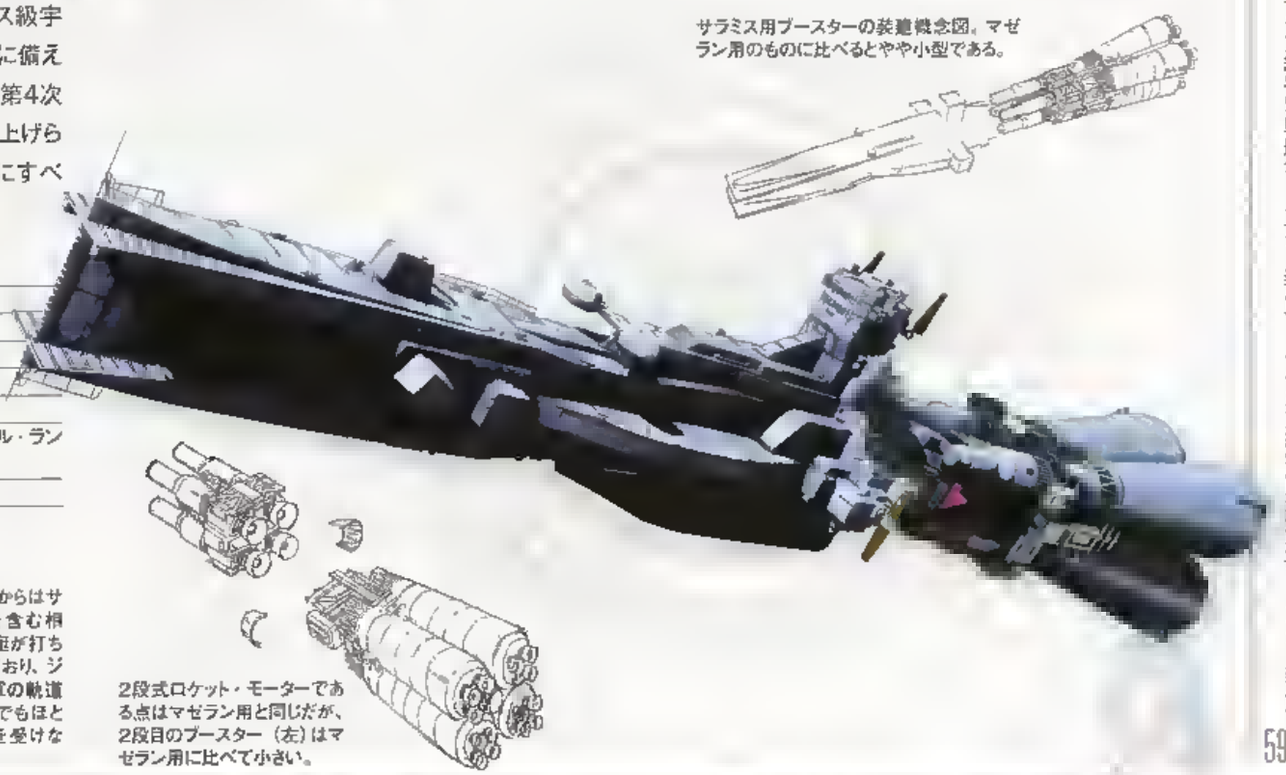
大気圏離脱用ブースターを装備したサラミス級宇宙巡洋艦。マゼラン級と同じく「星一号作戦」に備えて宇宙に送られた。モビルダイバーシステムの第4次評価試験においては、ジャブロー基地から打ち上げられた4隻のサラミス級がマゼラン級1隻とともにすべて撃沈された。

SPECIFICATION

全長 212m
全幅 62.2m
全高 71.4m
船体乾重量 12,100t
全装備重量 22,000t
兵装：単装メガ粒子砲×6／連装機関砲×6／8連装ミサイル・ランチャー×2
※ブースター部除く



ジャブローからはサラミス級を含む相当数の艦艇が打ち上げられており、ジオン公国軍の軌道遊撃作戦でもほとんど被害を受けなかった。



サラミス用ブースターの装着概念図。マゼラン用のものに比べるとやや小型である。

2段式ロケット・モーターである点はマゼラン用と同じだが、2段目のブースター（左）はマゼラン用に比べて小さい。

MP-02A Oggo MP-02A オッゴ

1年戦争の最終決戦に投入されたモビルポッド



戦時急造兵器であったが、地球連邦軍のRB-79 ボールを凌駕する戦闘力と汎用性を誇った。

SPECIFICATION

全長 11.6m
全幅 14.7m
全高 7.8m
本体乾重量 31.2t
全装備重量 57.8t
ジェネレーター出力 976kW
最大主推力 48,400kg
主装備：ザク・マシンガン／ザク・バズーカ（専用アタッチメントによる動的運用）／6連装ミサイル・ポッド／シュツルムファウストなど、ザク用携行兵器を装備

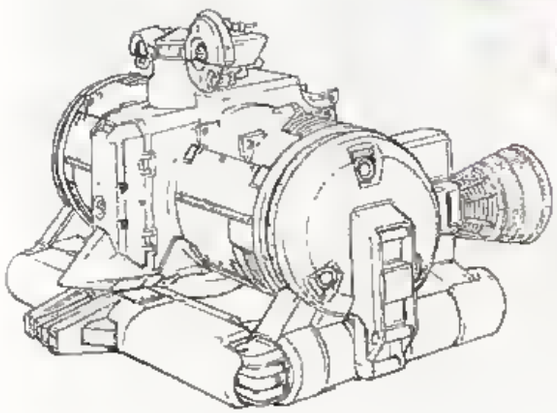


第603技術試験隊には、カスペン戦闘大隊機として34機が配備されている。



パイロットの大半は志願兵からなる年少兵たちで、わずかな訓練期間で実戦に投入されている。





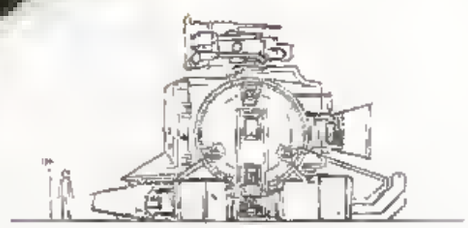
開発経緯 | DEVELOPMENT

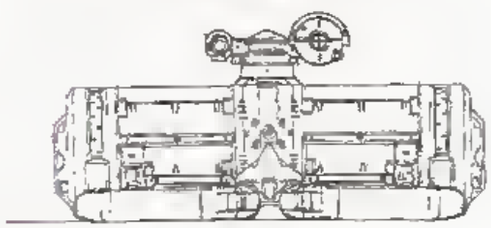
MP-02A オッゴは、ジオン公国軍の「モビルポッド計画」によって開発された機体である。開発は技術本部の下、異なる生産ラインや企業で行われていた複数のプロジェクトを統合する形で進められた。この結果、U.C.0079.11月にオッゴのプロトタイプとなる機体が完成すると、そのまま量産に移行した。こうして、MP-02A オッゴが完成したのである。

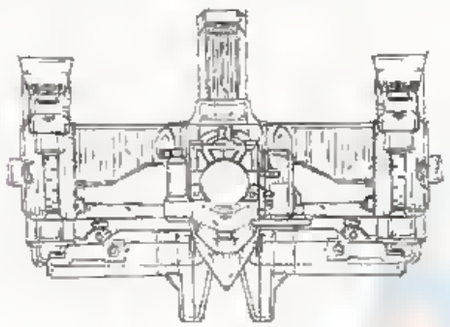
「モビルポッド計画」が推進された背景には、地球連邦軍のRB-79 ボールの存在がある。ボールはMSの補助兵器に過ぎないが、集団で運用した際には高い攻撃力を発揮する事例が散見された。さらに開発コストの低さや、短期間で生産が可能といったコストパフォーマンスの高さは注目に値するものがあった。ジオン公国軍はこの特性に注目したのである。さらに、ジオン公国軍はオッゴを生産することでMSの絶対数不足を補おうという目的もあった。

こうして完成したオッゴには、MS-06J ザクⅡJ型の核融合炉や、武装もザクのそれを流用するなど、戦線の縮小でデッドストックとなったパーツや、開発計画の中止で余剰となった機材が数多く利用されている。また、胴体の大半をプロペラントタンクとすることで、稼働時間の延長にも成功していた（これはオッゴの排熱問題の解決にも繋がった）。

このようにオッゴは、簡易急造兵器としては不相応なほど高い性能を獲得することに成功している。カスペン戦闘大隊における戦果がその好例となろう。これはひとえに、技術本部の高度な技術力を示すものであった。しかし、それ以上にほかの生産ラインを遅延させることなく、オッゴの開発と生産を成し遂げた技術部の管理、運営能力も評価すべきである。

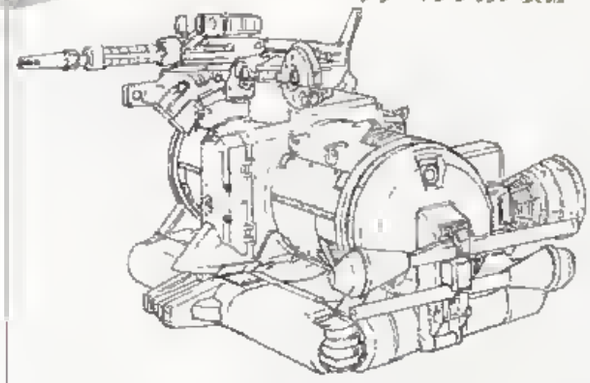


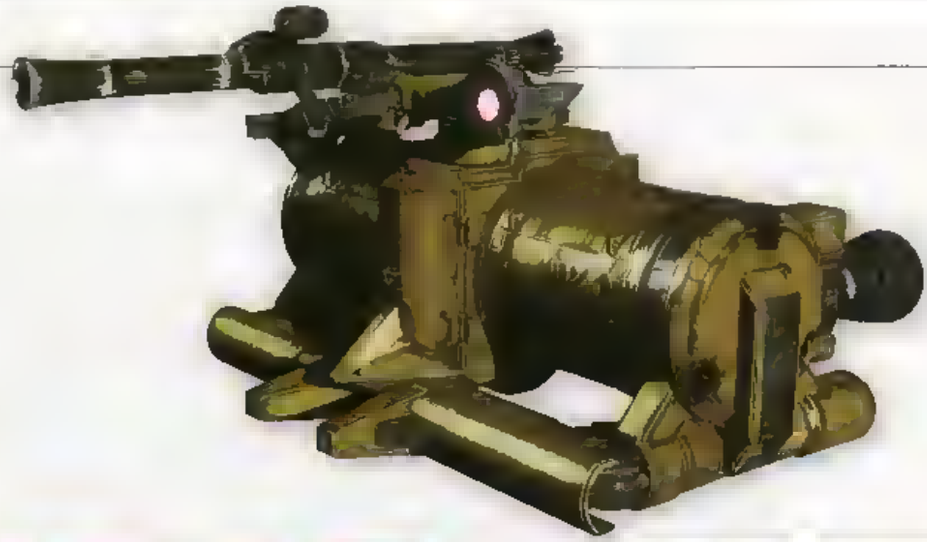




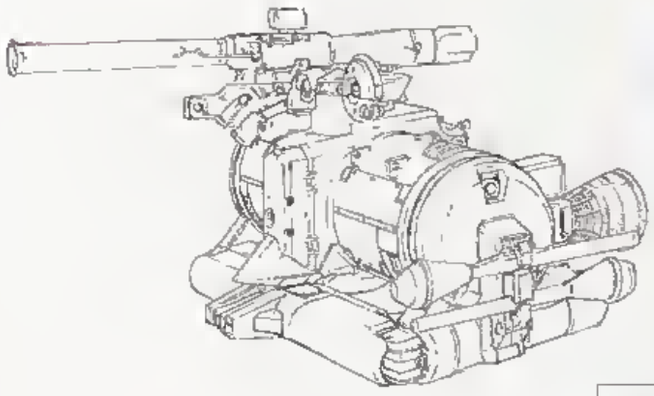
オッゴの三面図。円柱を横にした形状から、地球連邦軍の将兵たちからは「ドラム缶」とも揶揄された。

ザク・マシンガン装備





ザク・バズーカ装備



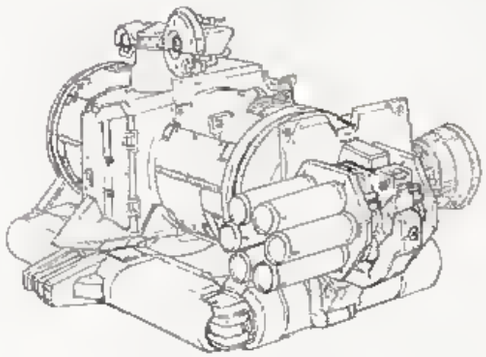


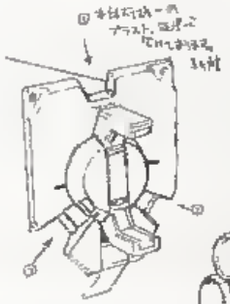
武装は回転式のガイドレールに接続されたアタッチメントを介して装備される。ガイドレールに沿って回転するため，後方も攻撃可能であった。



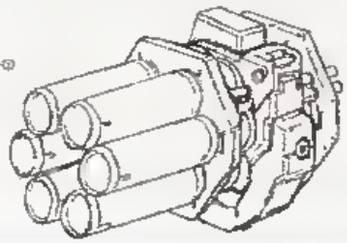
急造兵器ゆえにパーツの精度に問題を抱えており，戦闘中にガイドレールが動作不良を起こしたケースも発生している。

6連装ロケット・ポッド装備





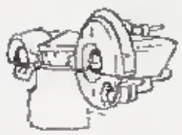
6連装ロケット・ポッドとシュツルム・ファウストは機体左側のラッチに取り付ける。装着時には，連結用のパーツを使用した。



■各部ギミック



兵器接続用
アタッチメント



モノアイ

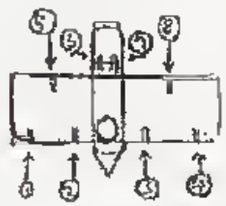


後部スキッド

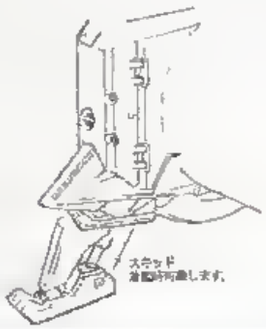
フック



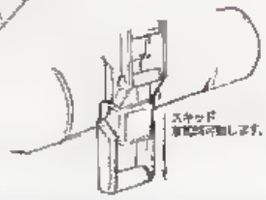
本図はオッゴの各部のギミックを示したものである。兵器接続用アタッチメントは，シリンダーの回転部に取り付ける。着艦用スキッドと艦架用フックは，機体各所に計8ヵ所が設けられている。



▲フック設置個所



前部スキッド

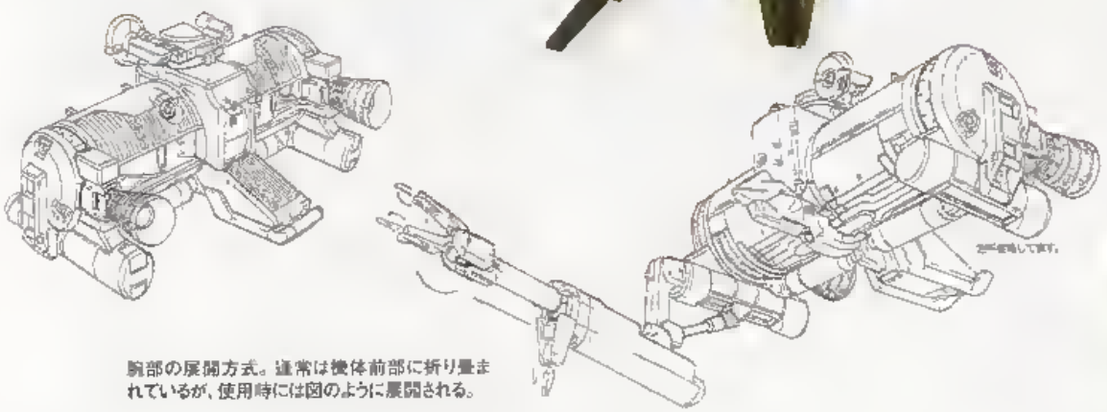


側面スキッド



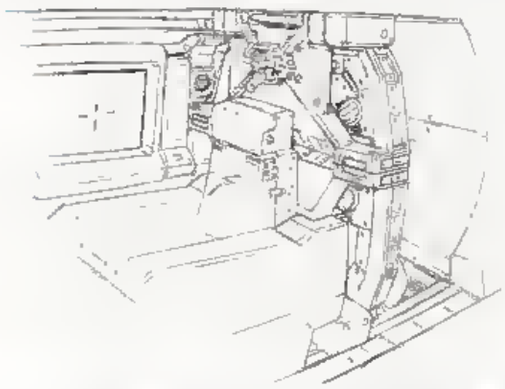
格闘戦も想定されていたが実用的ではなかった。また、腕部はシュツルム・ファウスト程度であれば運用可能であった。



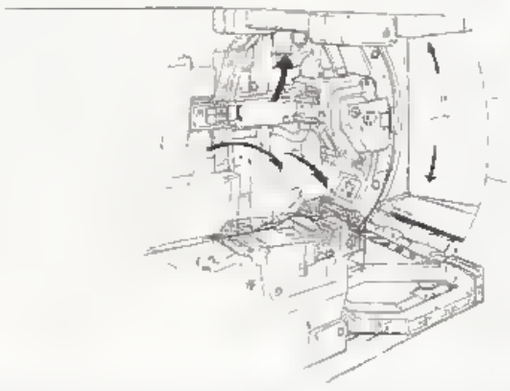


腕部の展開方式。通常は機体前部に折り畳まれているが、使用時には図のように展開される。

■コクピット



コクピットはジオン公国軍MSとほぼ同じであった。後部にはパイロットが白兵戦の際に使用するマシンガンが装備されていた。



コクピットハッチは上下に開く仕組みとなっている。内部ではシートとバックレストがリクライニングする。

兵器の流用による柔軟な運用性の確保

オッゴが使用する兵器は、ザク・マシンガンとザク・バズーカ、シュツルム・ファウスト、そして6連装ロケット・ポッドである。ザク・マシンガンとザク・バズーカは、機体の推進ユニットの外周部にある円形ガイドレールに取り付けたアタッチメントに装備することで、前方だけではなく上下や後方にも攻撃が可能な回転式砲塔として運用された。また、シュツルム・ファウストや6連装ロケット・ポッドはガイドレールの中央に取り付けた接続用のアタッチメントに設置する。こうした装備により、オッゴはザクIIに匹敵する攻撃力を獲得していた。特に複数機のオッゴによる6連装ミサイル・ポッドの一斉射撃は、宇宙艦艇に対しても効果を発揮した。しかし、各種兵器は実弾系の装備のため、弾薬が切れた場合は後は母艦で補給しなければならなかった。

オッゴにもボール同様、簡易マニピュレーターが装備されている。通常時は機体前部に折り畳まれているため、MSのそれのようにAMBAC肢としては機能しなかった。さらに5本指マニピュレーターでもなかったことから精密作業はできなかった。

その形状のために機能的な制限はあったものの、オッゴの戦闘能力や運用性は極めて高いレベルに達しており、1年戦争末期におけるジオン公国軍を支える戦力として活躍したのである。



6連装ロケット弾ポッドの一斉射は、宇宙艦艇にも有効で、オッゴに対艦用兵器としての攻撃力を与えていた。



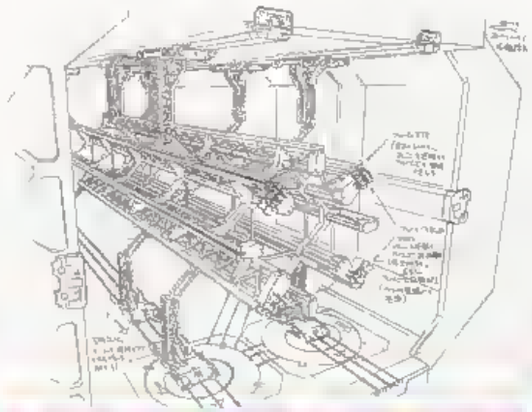
小隊内で異なる武装を装備することで、より高い運用性を発揮した。

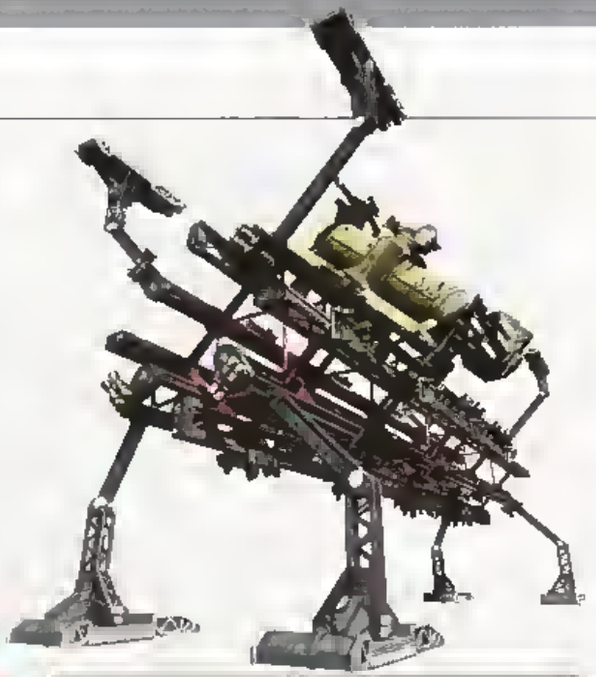
オッゴの運用システム

ヨーツンヘイムにおけるオッゴの運用は、同艦のMS用の発着艦システムが流用されたが、それ以外にも「全力散布フレーム」が用いられた。これは戦域にオッゴを大量に展開（ヨーツンヘイムの艦長マルティン・プロホノウ少佐相当官は「ばら撒く」と表現した）させるための装備である。ヨーツンヘイムの格納庫後部より射出され、ブースターによって回転、オッゴを散布した。本装備はア・バオア・クー攻防戦におけるEフィールド防衛で用いられ、オッゴ部隊を迅速に展開させることに成功している。

全力散布フレーム

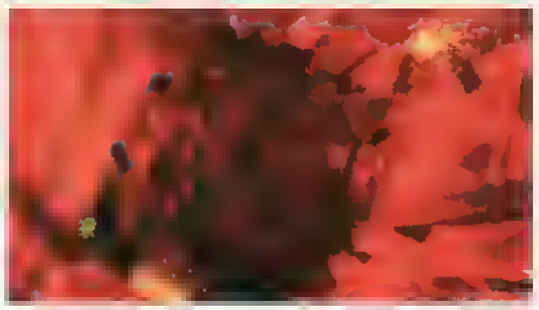
ア・バオア・クーにおいて搭載された。これにより、Eフィールド防衛時にはカスペン戦闘大隊の32機のオッゴを出撃させた。







格納庫内の全力散布フレームにオッゴを接続し、この状態で戦域まで運搬する。

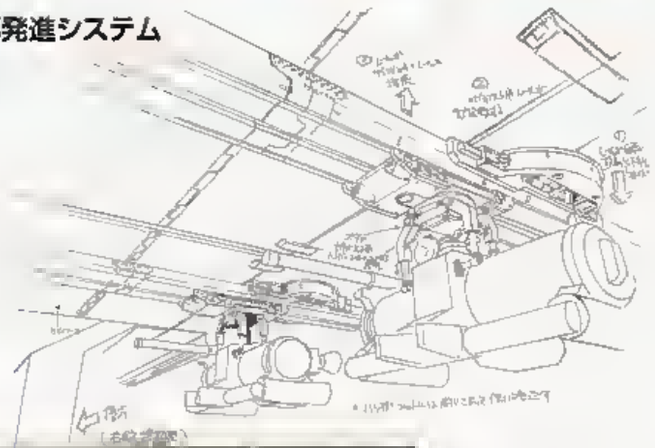


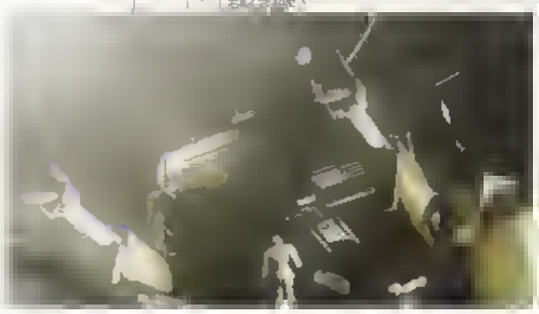
出撃に際しては、支持フレームが甲板上のレールに沿って高速で移動、全力散布フレームを射出する。



射出後、ブースターが点火し、全力散布フレームが回転、オッゴを広域に展開させる。

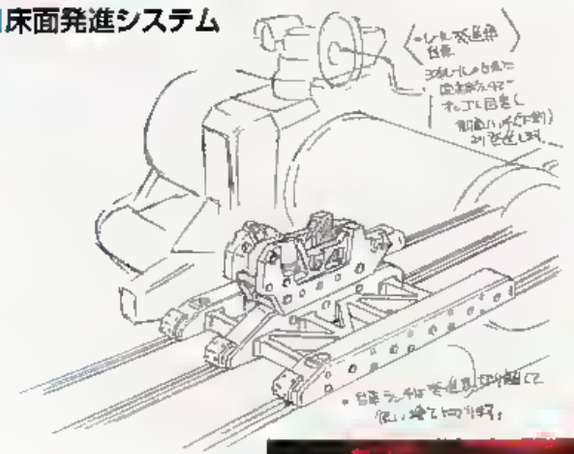
■天井部発進システム





格納庫天井部のMS用発進システムを流用することが可能で、整備にも使われた。連結用のハンガーシャトルは使い捨てである。

■床面発進システム





床面のレールで出撃する際は、オッゴとレールを接続するための台車とラッチを使用する。この台車とラッチも使い捨てであった。

カスペン戦闘大隊

オッゴを運用して最も戦果を挙げた部隊が、ヨーツンヘイムを母艦としてア・バオア・クー攻防戦を戦った「カスペン戦闘大隊」である。大隊はソロモン攻防戦で人員と装備のほとんどを失っていたようで、ア・バオア・クー防衛の任を受けて再編され、ヨーツンヘイムに着任したのである。指揮官はカスペン大佐で、3名の先任准尉と30名の年少兵で構成されていた。ア・バオア・クー攻防戦でカスペン大佐をはじめ、年少兵の多くが戦死したが、若干名がヨーツンヘイムへと帰還している。

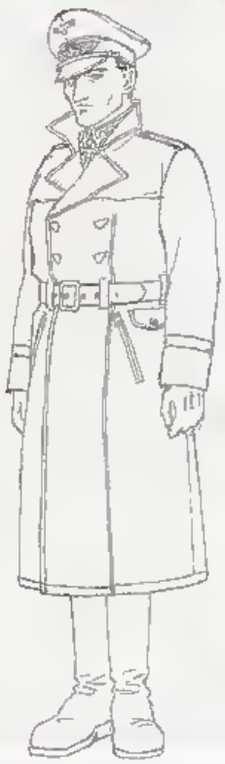


着任した「精鋭」が年少兵であったことを知り、カスペン大佐は司令部に怒りの声を上げている。



エルヴィンを含め、ヨーツンヘイムには33名の年少兵（一部は年長兵）が配属された。彼らの多くがア・バオア・クー攻防戦で命を散らした。

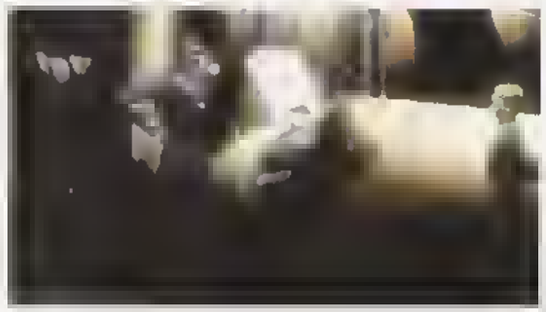




エルヴィン・キャディラック

カスペン戦闘大隊に着任した年少兵で、モニク キャディラック特務大尉の実弟。月上空の遭遇戦で戦果を挙げるも戦死した。





年少兵を前に怒りを口にするカスペン大佐に対しても、臆することなく「やってみせます」と年少兵らしからぬ意志の強さを見せた。



ヘルベルト・フォン・カスペン大佐

宇宙攻撃軍の士官だと思われるが詳細は不明。大時代的な物言いをする人物であったが、ジオン公国軍にはこうしたタイプの軍人も多かった。左手は義手となっている。



「戦いこそジオンそのもの」と嘯くほどだったが、誇り高い軍人でもあり、最期は年少兵をかばって戦死した。



パーソナルカラーともいえるグレーの士官服を着用し、襟元にはジオン十字勲章を佩用していた。



MP-02A Oggo ■グラナダ管制区における戦闘

宇宙要塞ソロモンが陥落、ジオン公国軍が、残る宇宙要塞であるア・バオア・クーで背水の陣を敷く中、第603技術試験隊に配置モビルポッド「MP-02A オッゴ」の評価試験の命令が下る。「決戦兵器」といわれていたオッゴだが、その実情は急造兵器であり、逼迫する戦局が生産化が決定された機体であった。そのため、本来であれば第603技術試験隊が取り扱うべき兵器ではなかった。U.C.0079.12.28、ア・バオ・クー防衛司令部は、すべての技術試験隊をア・バオア・クーへと配備。同時に、防空司令部は第603技術試験隊に対し、再編中のカスペン戦闘大隊に編入という命令を下している。さらに再編にあたってカスペン戦闘大隊に補充された兵は、年少兵ばかりであり、それだけでもジオン公国軍の窮状が見て取れた。そして、第603技術試験隊もオッゴの評価試験とは名ばかりの実戦を行うこととなった。

❶第603技術試験隊、月方面へと進出

ア・バオア・クーで34機のオッゴと全力散布フレームを受領した第603技術試験隊は、12.30 敵陽動部隊の撃破とグラナダ基地から増援を確認するために月方面へと向かった。オッゴ部隊の出撃準備が進められていた21:05、ジオン公国軍はソーラ・レイを使用、敵主力艦隊に甚大な被害を与えている。その後、月上空のグラナダ管制区で敵艦隊と接触した第603技術試験隊は、エルヴィン・キャディラック曹長のオッゴ第2小隊を出撃させた。

❷オッゴ小隊、敵ボール小隊と交戦

出撃したオッゴのうち、エルヴィン機がサラミス級に対しロケット弾を発射するが、これは命中しなかった。その後、僚機が発射したロケット弾によって3機のボールを撃破したが、オッゴも1機が失われている。

❸モビルポッド同士の格闘戦

続いて展開された格闘戦では、エルヴィン機が1機を破壊、僚機も1機を撃墜しているが、機体に損傷を受けたためヨーソンヘイムへと帰還している。これで戦域にはオッゴ、ボールが1機ずつ残された。

❹戦闘の終結とグラナダからの艦隊の出撃

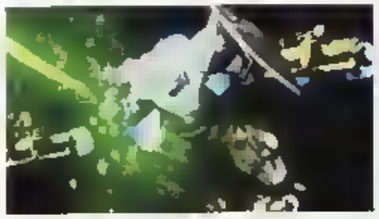
ニル・ノン機とボールは格闘戦を行ったのち、敵はエルヴィン曹長の挑発に応じ離脱、しかし、離脱を伴い帰還途中のエルヴィン機は月を周回したサラミス級の砲撃を受け爆発、エルヴィン曹長も戦死している。同時にヨーソンヘイムもサラミス級からの攻撃を受けるが、グラナダから出撃したシオン艦艇によって敵艦が撃破されたため、事なきを得た。一連の戦闘で、オッゴは予想以上の戦闘能力を見せたが、急造されたパーツの精度に問題があることも判明、これらのデータはア・バオア・クー防空司令部に送られた。

MS-14 Gergoog MS-14 ゲルググ（カスペン専用機）

ヘルベルト・フォン・カスペン大佐の専用機として運用されたゲルググ。高機動仕様機のランドセル（細部が異なるため同一のものではないとも考えられる）を背部に装備した機体で、グレーを基調としたパーソナルカラーと鷲鷹のパーソナルマークが施されていた。カスペン戦闘大隊の再編にあたって第603技術試験隊に合流し、ア・バオア・クー攻防戦に参戦した。

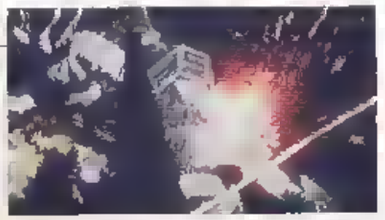
SPECIFICATION

全高 19.2m
重量 42.1t
兵装 ビーム・ライフル／専用シールド
種別 モビルスーツ



卓越した操縦技術を誇るカスペン大佐の手によって、優れた性能を発揮、オノゴ部隊を助けた。





Eフィールドの攻防で友軍の脱出を支援して連邦軍追撃部隊と交戦し、壮絶な最期を遂げた。

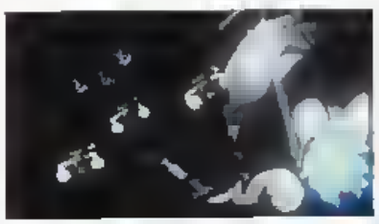


RB-79 Ball RB-79 ボール

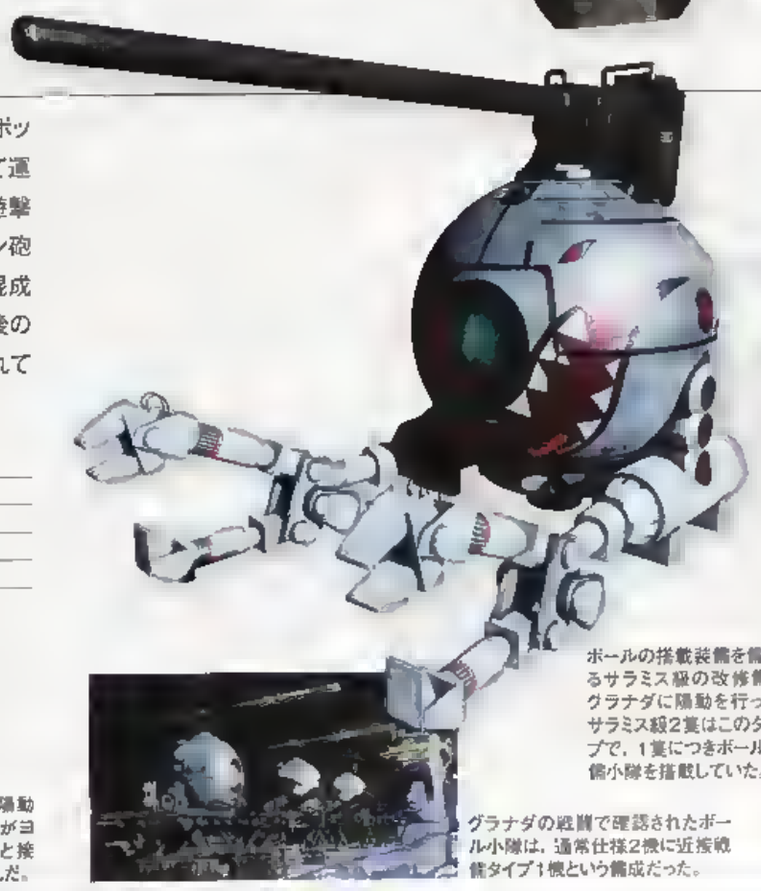
地球連邦軍の物量戦術の一角を担ったモビルポッド。1年戦争末期にはジムと連携する支援機として運用される一方、ボールのみの小隊でパトロールや遊撃任務に就いたケースもある。その場合は、キャノン砲を2連装機関砲に換装した近接戦闘タイプとの混成部隊で運用されることが多かった。ソロモン戦直後のグラナダへの陽動でも、ボール2個小隊が投入されている。

SPECIFICATION

全高 12.8m
重量 17.2m
兵装 低反動180mmキャノン砲／2連装機関砲
種別 モビルポッド



グラナダへの陽動を行った部隊がヨーツンヘイムと接触、交戦に及んだ。



グラナダの戦闘で確認されたボール小隊は、通常仕様2機に近接戦闘タイプ1機という編成だった。



ボールの搭載装備を備えるサラミス級の改修艦。グラナダに陽動を行ったサラミス級2隻はこのタイプで、1隻につきボール1個小隊を搭載していた。

MA-05Ad Big-Rang MA-05Ad ビグ・ラング

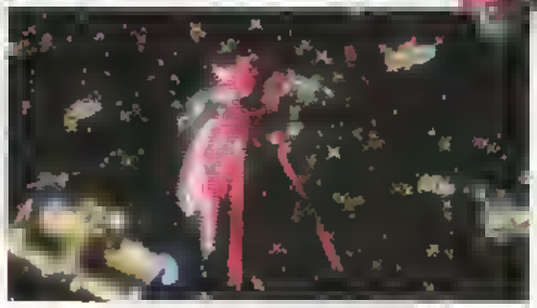


オッゴの前線での活躍を支えた
モビル・フロントヘッド 機動前線橋頭堡



SPECIFICATION

全長 203.0m
全幅 139.1m
全高 138.0m
（対敵対時形態）
乾重量 12,000t
標準装備重量 17,900t（推進剤含む）
最大積載重量 9,200t
最大ブースト推力 4,600t（アーマー、ホリゾント両ブースター使用）
主兵装 大出力メガ粒子砲×1／ミサイル・ランチャー×8 ガトリング砲×2 ビーム撹乱幕発射筒×4／3連装大型対（宇宙）艦ミサイル×2（ビーム撹乱幕発射筒、3連装大型対（宇宙）艦ミサイルは、状況に応じて換装が可能）

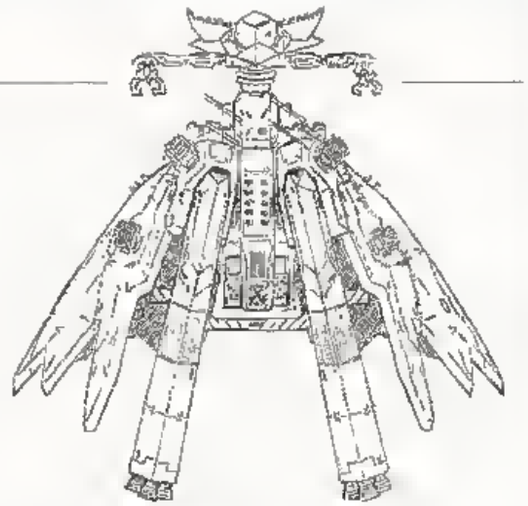


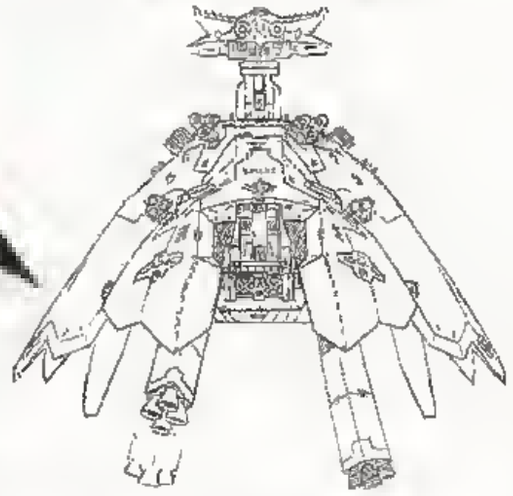
第603技術試験隊に配備された本機は、Eフィールド攻防戦においてオッゴ部隊の補給などを行った。

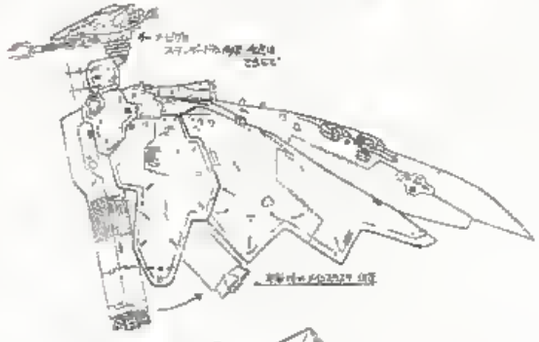


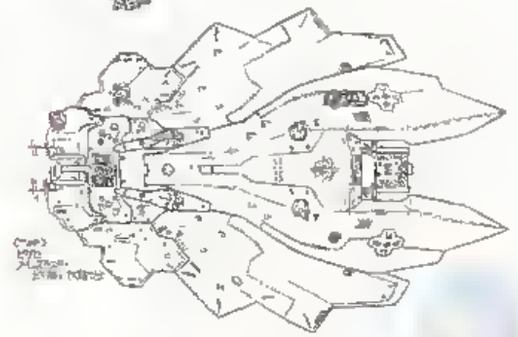
開発はU.C.0079.12月からスタートした。開発は短期間で行われ、ア・バオア・クー攻防戦の直前に完成している。











ビグ・ラングの四面図。管制ユニットであるビグロとして比較すると、Adユニットと弩級装甲ブースターの大きさがよく分かる。

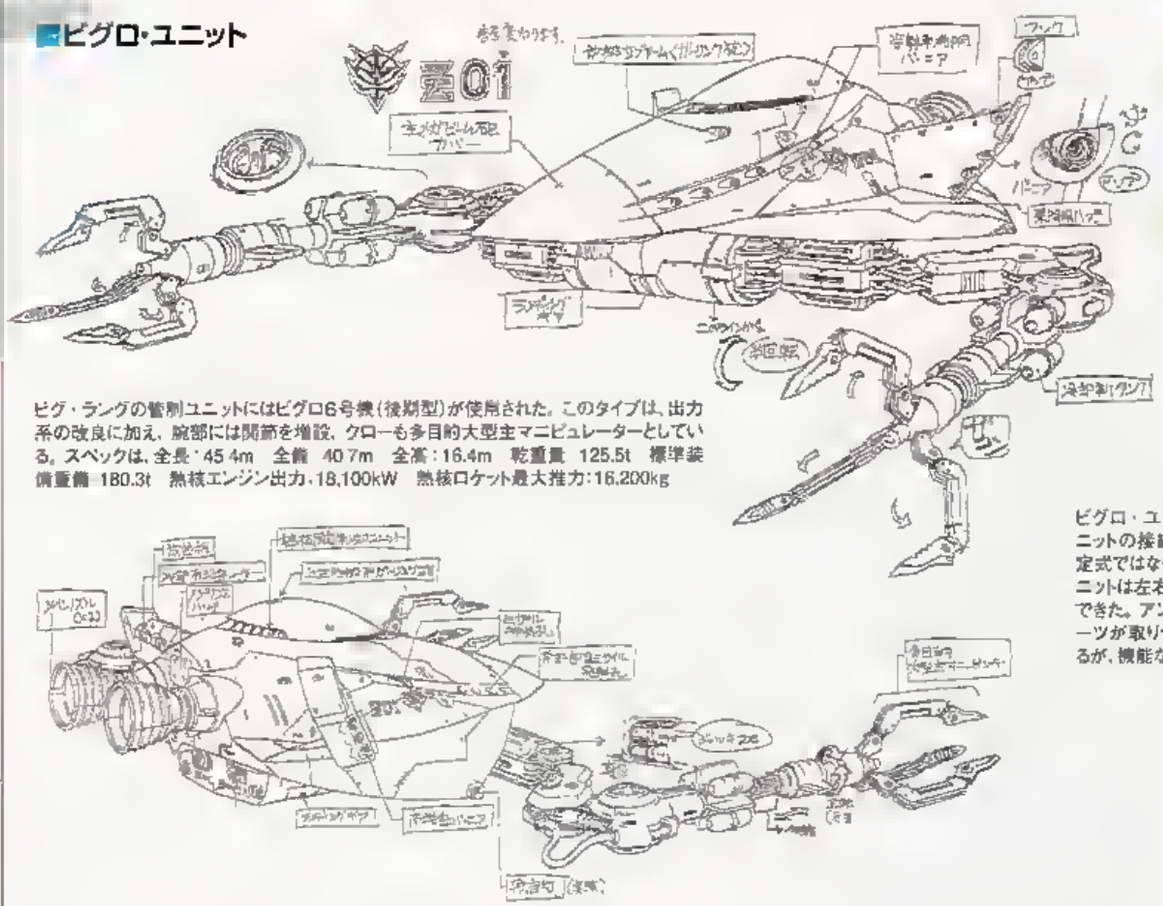
開発経緯 | DEVELOPMENT

MA 05Ad ビグ・ラングは、MS-05 ビグロを制御ユニットとし、重装甲が施されたAdユニット（Ad=Ammunition Dept／可搬補給廠）と弩級装甲ブースター（耐ビームコーティングが施されていたともいわれる）で構成された機動兵器で「機動前線橋頭堡（モビル・フロントヘッド）」に分類される。「機動前線橋頭堡」とは、補給、修理能力と重装甲を持つ機動兵器のことで、ジオン公国軍でのみ確認される兵器である。Adユニットは、開発初期においてはわずかな武装を装備しただけの、前線での補給拠点として考案されたものである。ビグ・ラングの開発は、このAdユニットを中核として進められた。

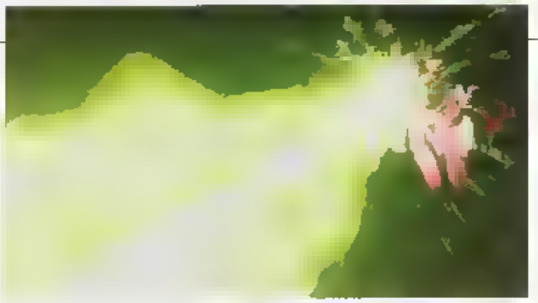
ビグ・ラングの開発は技術本部が担当した。彼らは中止、放棄された計画の中から数日から1週間程度で前線投入が可能な機器をピックアップすると、Adユニットと弩級装甲ブースターを組み合わせた機動兵器を考案した。この弩級装甲ブースターは、月からの大質量物の打ち上げ用として開発されたもので、大出力熱核ロケットエンジンと推進剤に重元素を使用していたこともあって、自走能力を持たないAdユニットに十分な機動性を与えると考えられた。また、耐ビーム防御が施されていたこともあり、高い防御力を有していたことも、選ばれた理由と考えられている。これらを統合する管制ユニットには、ビグロ6号機を改良して用いることが決定された。

各種の機器を組み合わせたビグ・ラングもオッゴと同じく急造兵器といえる。しかし、ア・バオア・クー攻防戦ではEフィールドの防衛を担当するオッゴ部隊の補給を行うと同時に、多数の戦艦やMSを撃破するなど、想定された能力以上の戦果を残している。

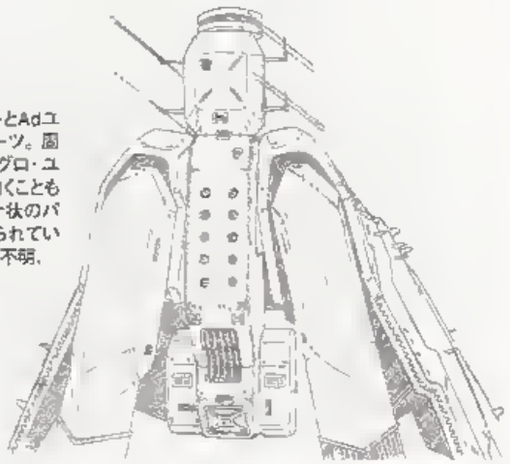
ビグロ・ユニット



ビグ・ラングの管制ユニットにはビグロ6号機（後期型）が使用された。このタイプは、出力系の改良に加え、腕部には関節を増設、クローも多目的大型主マニピュレーターとしている。スペックは、全長：45.4m　全幅　40.7m　全高：16.4m　乾重量　125.5t　標準装備重量　180.3t　熱核エンジン出力：18,100kW　熱核ロケット最大推力：16,200kg



出力系の改良に伴い、メガ粒子砲の威力も向上。兵装の多くはビグロ・ユニットに集中している。

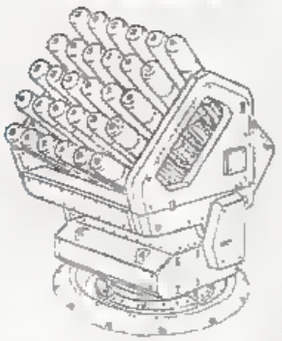


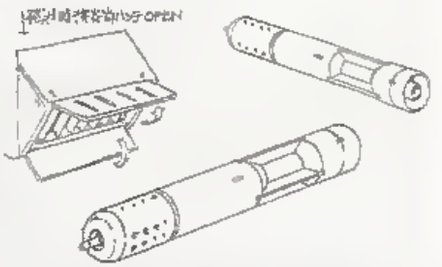
ビグロ・ユニットとAdユニットの接続パーツ。固定式ではなく、ビグロ・ユニットは左右を向くこともできた。アンテナ状のパーツが取り付けられているが、機能などは不明。



Adユニットの装甲は「スカート・シェル」と呼ばれる。スラスターが2基設備されているほか、ビーム攪乱弾発射筒が2基と3連装大型対（宇宙）艦ミサイルが1基ずつ取り付けられている。機後部中央には、オッゴの着艦および搬送用ゴンドラが設置されている。

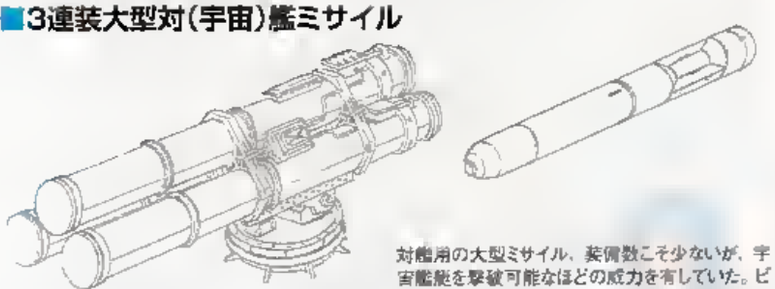
ビーム攪乱弾発射筒





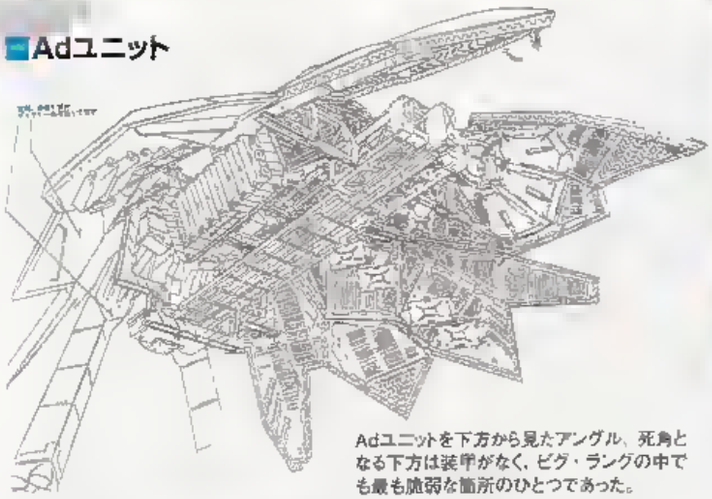
1基につき30発のビーム攪乱弾を搭載。発射後は機体の周囲にビーム攪乱幕を形成する。サラミス級宇宙巡洋艦のメガ粒子砲に対しても十分な防御力を発揮した。こうした装備が、機動兵器に搭載されることは珍しい。

3連装大型対（宇宙）艦ミサイル



対艦用の大型ミサイル。装備数こそ少ないが、宇宙艦艇を撃破可能なほどの威力を有していた。ビグ・ラングは本装備で、サラミス級を撃沈している。

Adユニット

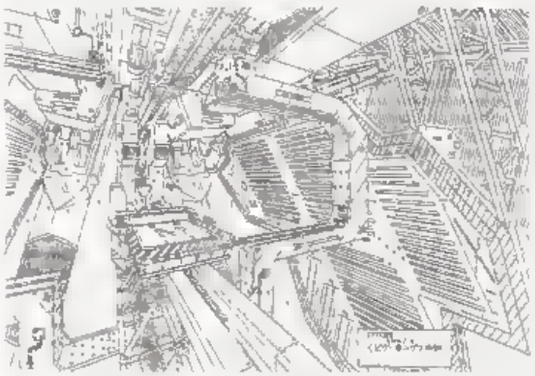


Adユニットを下方から見たアングル。死角となる下方は装甲がなく、ビグ・ラングの中でも最も脆弱な箇所のひとつであった。





ア・バオア・クー攻防戦では、下方に回り込んだ敵の攻撃を受けそうになるが、味方機の援護により窮地を脱している。



Adユニット内部は、レールやクレーンなどが配備されている。これはオッゴやMSなどの補給や修理を行うための設備である。

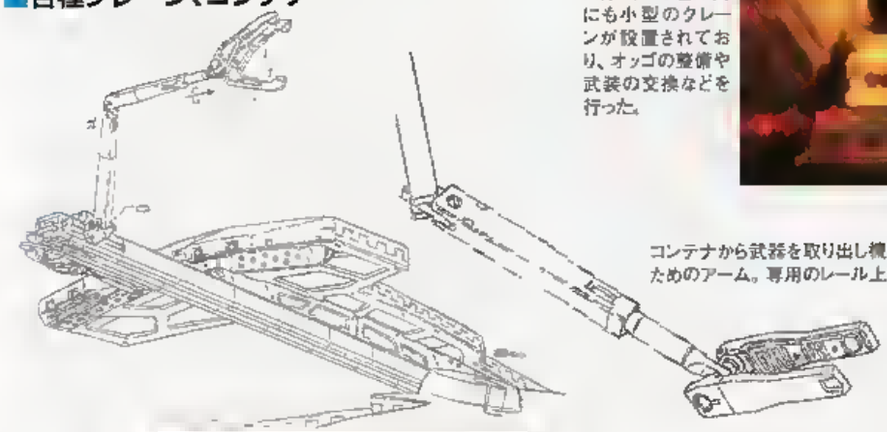


武装などもAdユニット内部に搭載されている。出撃前にクレーンによって機体に取り付けられた。

各種クレーン、コンテナ

スカート・シェル内にも小型のクレーンが設置されており、オッゴの整備や武装の交換などを行った。

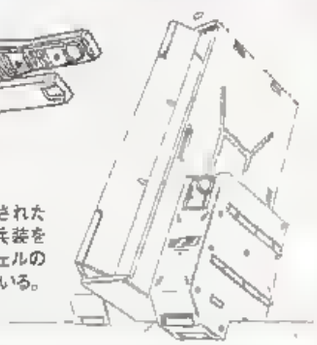




コンテナから武器を取り出し機体に装着するためのアーム。専用のレール上を移動する。



発進レールの先端に取り付けられたクレーン。着艦が困難なオッゴなどをこれで掴み、Adユニット内へと搬入した。通常時は折り畳まれて格納されている。



レールの左右に設置された武器コンテナ。各種兵装を格納する。スカート・シェルの内側に予備を搭載している。

ビグ・ラングとオッゴの生存性を高めた数々の装備

機動前線橋頭堡としての運用されたビグ・ラングの武装は、ビグロ・ユニットのメガ粒子砲やガトリング砲を主兵装としていた。特にメガ粒子砲は、照射時間や威力の面で原型機よりも性能が向上していた。さらに、それ以外にもスカート・シェルに3連装大型対宇宙艦ミサイルなどを装備した。こうした兵装により、ビク・ランクは高い攻撃力を有することとなり、ア・バオア・クー攻防戦ではそれを活かして宇宙艦艇を含む多数の敵機を撃破している。このほかにも、ビグ・ラングの特徴的な装備として「ビーム攪乱弾発射筒」がある。ビーム攪乱弾発射筒から発射された弾頭は炸裂後、周囲にビーム攪乱膜を展開。その効果は絶大で、宇宙艦艇のビーム砲をも防御している。この装備は、機動前線橋頭堡としての性質上、そして、その巨体故に激しい機動を行えない本機にとっては必要不可欠なものあった。さらに自機だけでなく、周囲で補給を待つ味方機にとっても重要な防御手段となった。なお、正規のパイロットではないオリヴァー・マイ技術中尉がア・バオア・クー攻防戦終盤まで機体を維持できたのも、ビーム攪乱膜の効果によるところが大きい。

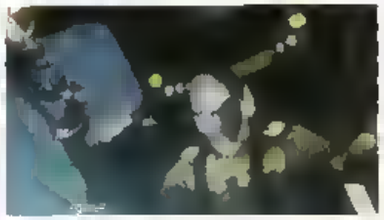
ア・バオア・クー攻防戦では、カスペン戦闘大隊のオッゴに対して補給を行っているが、MSにも可能であったと思われる。なお補給は以下の手順で行われた。まず、後部のゴンドラに機体が着艦、そのままゴンドラごとAdユニット内部を移動、この間に武器弾薬などが補給されるが、最前部に来ると上部レールのアタッチメントに設置される。その後、射出され、機体は戦域へと復帰する。この一連の流れは、ビク・ランクのコクピットに増設された専用のコントロールスティックで行われた。ビグ・ラングのこうした高い運用性は、Eフィールドに展開する部隊の戦力維持に貢献したのである。



ビーム攪乱膜は、その巨体のため自衛とされやすいビグ・ラングにとっては重要な装備であり、マイ技術中尉もその効果に言及している。

機動橋頭堡の中枢

ビグロ・ユニットのコクピットも改修されている。主な改修点はAdユニットの制御系を組み込んだことだが、これにより操縦が複雑になるという問題も生じていた。当初は、操縦担当と補給担当のふたりでの操縦を予定していたとも考えられる。



Adユニットの機能はほぼ自動化されていたが、それでもパイロットにかかる負担は大きかった。

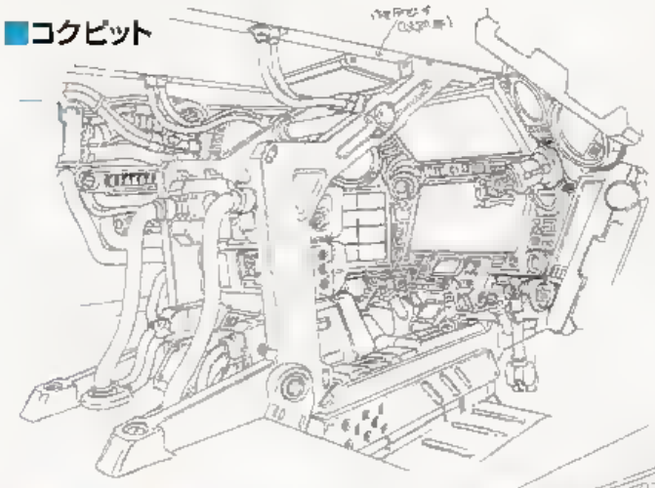


上部にあるコントロールグリップ。ダイヤルやレバーなどが設けられている。



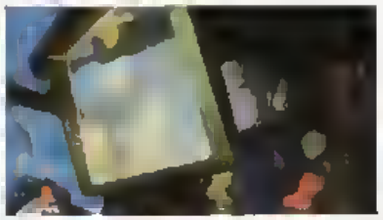
下部に設置されたグリップ。非使用時は折り畳まれている。

■コクピット

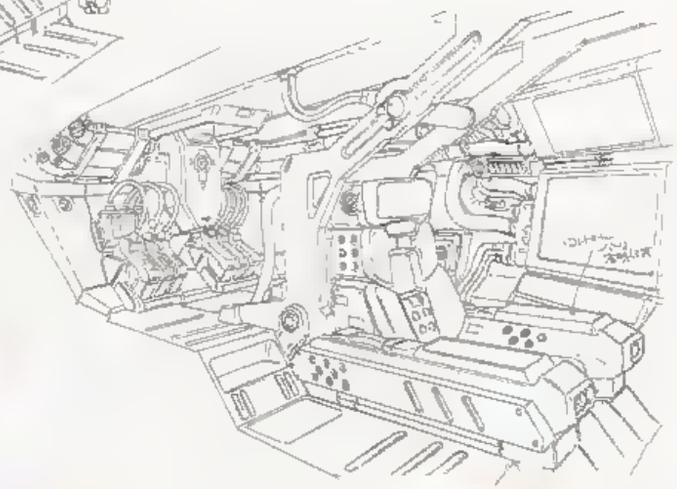




正面には8枚のモニターが展開。うち2枚はAdユニット内部を確認するためのもので、それぞれが8分割されている。



MSに比べてコクピットは広いが、その分、収納式の作業用ディスプレイやコントロールグリップが各所に配されている。



テストパイロットを務めた技術中尉

ビク・ラングはテストパイロットが未着任の状態で、ヨーツンヘイムに配備された。プロホノウ中佐相当官は、機体で調整を行うマイ技術中尉をパイロットに任命している。その後、調整を終えた技術中尉はビグ・ラングを駆ってEフィールドの戦闘に参加、オッゴ部隊と撤退する味方艦艇の離脱を支援している。



突然のテストパイロット任命には、マイ技術中尉も驚きを隠せなかった。その後、自失状態の特務大尉より試験内容を通達された。



オリヴァーマイ技術中尉
第603技術試験隊に所属する技術中尉。1年戦争最後の戦いで、自身がこれまでに果たした役割を知る。

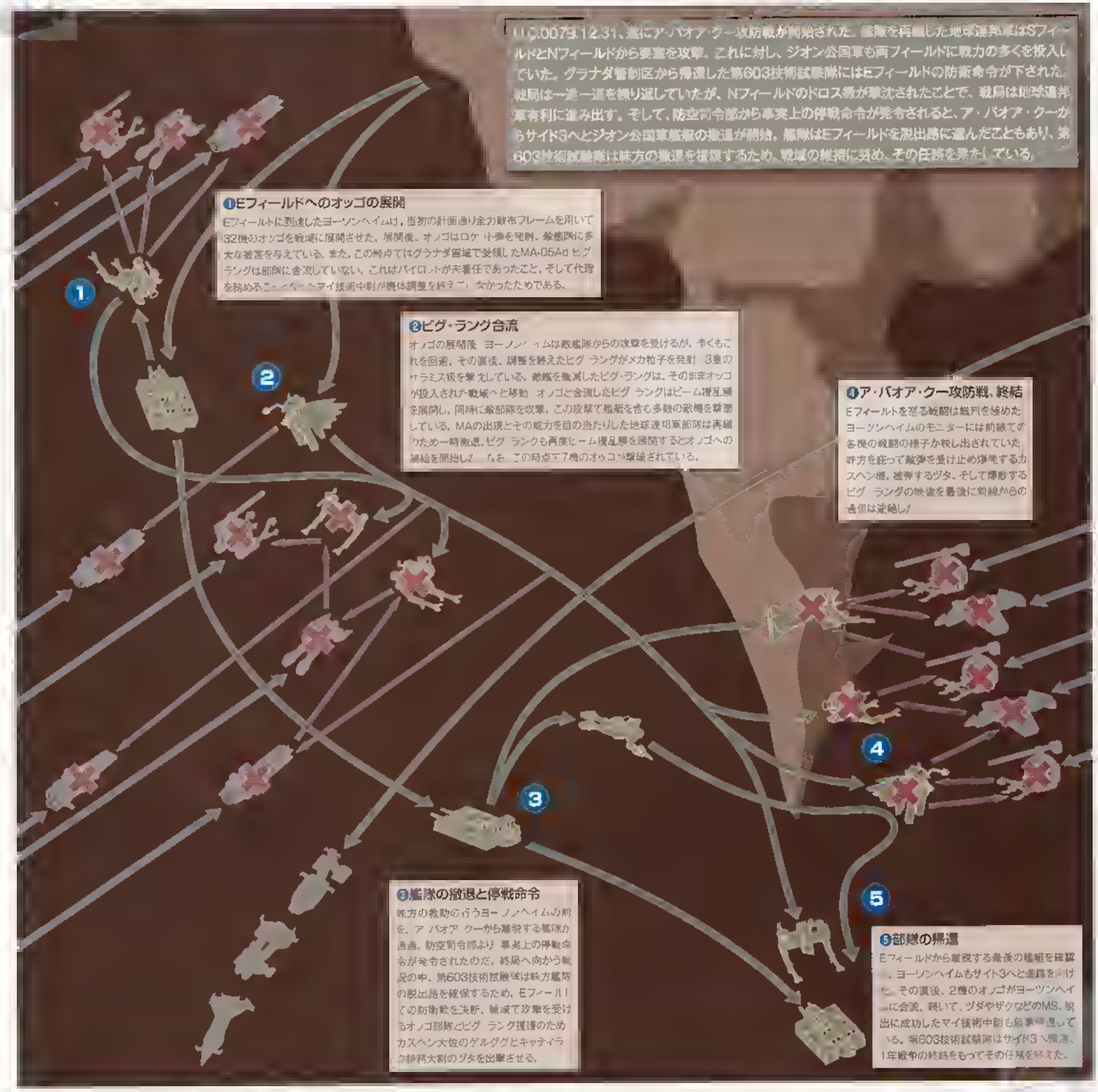


ビク・ラングは撃破されたが、脱出に成功。無事、サイド3に帰還している。



戦闘中であっても、ビグ・ラングの性能評価に努めた。パイロットとしての訓練は、最低限しか受けていなかったようだ。

Eフィールド防衛戦



UC.0079.12.31、遂にア・バオア・クー攻防戦が開始された。艦隊を再編した地球連邦軍はSフィールドとNフィールドから要塞を攻撃。これに対し、ジオン公国軍も両フィールドに戦力の多くを投入していた。グラナダ管制区から帰還した第603技術試験隊にはEフィールドの防衛命令が下された。戦局は一進一退を繰り返していたが、Nフィールドのドロス級が撃沈されたことで、戦局は地球連邦軍有利に進み出す。そして、防空司令部から事実上の停戦命令が発令されると、ア・バオア・クーからサイド3へとジオン公国軍艦艇の撤退が開始。艦隊はEフィールドを脱出路に選んだこともあり、第603技術試験隊は味方の撤退を援護するため、戦域の維持に努め、その任務を果たしている。

❶Eフィールドへのオッゴの展開

Eフィールドに到達したヨーツンヘイムは、当初の計画通り全力散布フレームを用いて32機のオッゴを戦域に展開させた。展開後、オッゴはロケット弾を発射、艦艇に多大な被害を与えている。また、この時点ではグラナダ宙域で受領したMA-05Ad ビグ・ラングは部隊に合流していない。これはパイロットが未着任であったこと、そして代理を務めるはずだったマイ技術中尉が機体調整を終えていなかったためである。

❷ビグ・ラング合流

オッゴの展開後、ヨーツンヘイムは敵艦隊からの攻撃を受けるが、すべてこれを回避。その直後、調整を終えたビグ・ラングがメガ粒子を発射、3隻のサラミス級を撃沈している。敵艦を殲滅したビグ・ラングは、そのままオッゴが投入された戦域へと移動、オッゴと合流したビグ・ラングはビーム攪乱膜を展開し、同時に艦部隊を攻撃。この攻撃で艦艇を含む多数の敵機を撃墜している。MAの出現とその威力を目の当たりした地球連邦軍部隊は再編のため一時撤退。ビグ・ラングも再度ビーム攪乱膜を展開するとオッゴへの補給を開始した。なお、この時点で7機のオッゴが撃破されている。

❸艦隊の撤退と停戦命令

味方の救助の行うヨーツンヘイムの前を、ア・バオア・クーから離脱する艦隊が通過。防空司令部より、事実上の停戦命令が発令されたのだ。終局へ向かう戦況の中、第603技術試験隊は味方艦隊の脱出路を確保するため、Eフィールドでの防衛戦を決断。敵味方で攻撃を受けるオッゴ部隊とビグ・ラング援護のためカスペン大佐のゲルググとキャティラク特務大尉のゾゴを出撃させる。

❹ア・バオア・クー攻防戦、終結

Eフィールドを巡る戦闘は熾烈を極めたヨーツンヘイムのモニターには前線での各機の戦闘の様子が映し出されていた。味方を庇って敵弾を受け止め爆発するカスペン機、被弾するゾゴ、そして爆散するビグ・ラングの映像を最後に前線からの通信は途絶した。

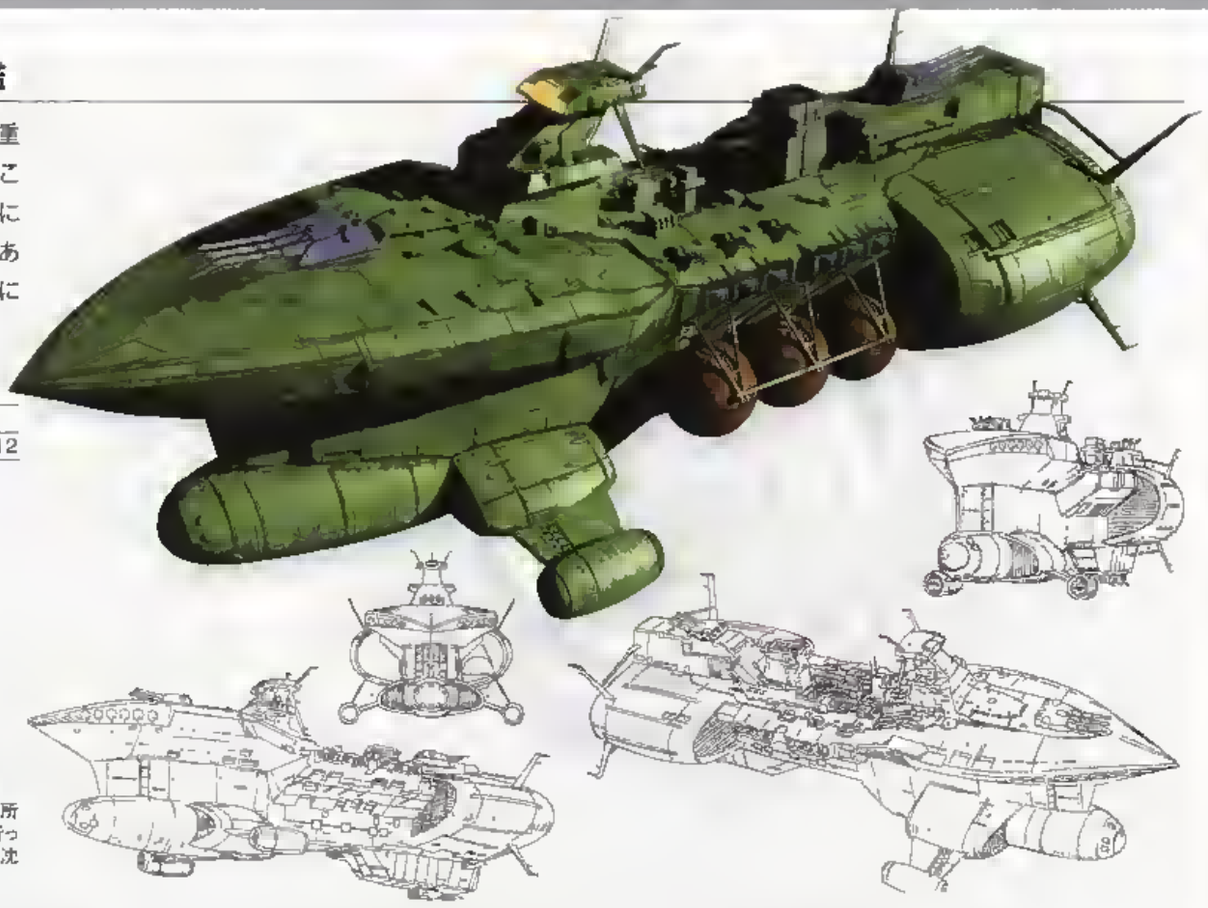
❺部隊の帰還

Eフィールドから離脱する最後の艦艇を確認後、ヨーツンヘイムもサイド3へと進路を向けた。その直後、2機のオッゴがヨーツンヘイムに合流、続いて、ゾゴやザクなどのMS、脱出に成功したマイ技術中尉も無事帰還している。第603技術試験隊はサイド3へ帰還、1年戦争の終結をもってその任務を終えた。

Tibe-class チベ級高速重巡洋艦

MSの開発以前に就役したジオン公国軍の高速重巡洋艦（就役当初の分類を戦艦とする説もある）。この仕様は一般的なチベ級とは細部が異なり、両舷に装備されたプロペラント・タンクが特徴のひとつである。グラナダ艦隊やア・バオア・クー戦の参加艦艇にもこのチベ級が確認された。

SPECIFICATION
全長 264.4m
兵装 3連装メガ粒子砲×3／2連装機銃×18／ミサイル発射管×12





グラナダ艦隊の所属艦は、隕動を行ったサラミス級を撃沈している。

Gwazine-class グワジン級大型戦艦

ジオン公国軍が誇る1年戦争期随一の大型戦艦。ア・バオア・クー戦にも数隻が参加していたことが確認されている。また、ア・バオア・クー陥落後には、Eフィールドから戦線を離脱するグワジン級が目撃されている（艦名は不明）。

SPECIFICATION
全長 440m
全幅 195.9m
全高 95.7m
船体乾重量 84,600t
全装備重量 108,000t
兵装 連装メガ粒子砲×3／155mm連装機関砲×18





サイド3へと撤退する残存艦隊の中にグワジン級の姿も見られた。

Musai-class ムサイ級軽巡洋艦

ジオン公国軍の主力宇宙艦艇として、1年戦争を通じ運用された軽巡洋艦。ア・バオア・クー戦にも多数が参加し、Eフィールドでは91パトロール艦隊のムサイ級2隻（うち1隻は「ケンブテン」）がヨーツンヘイムの護衛に就いた。

SPECIFICATION
全長 440m
全幅 195.9m



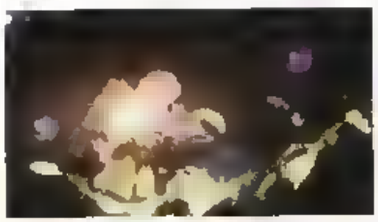
ヨーツンヘイムを護衛したムサイ級は、地球連邦軍艦隊との交差時の戦闘で撃沈された。

MS-05 Zaku I MS-05 ザクI

ZEONIC社が開発した史上初の実戦型MS。ザクIIが主力化されたのちも、後方で運用が続けられた。セモベンテ隊の襲撃を受けた北米アリゾナの第67物資集積所には、ザクIが歩哨として配備されていた。また、ア・バオア・クー戦においても、防衛戦力として投入された機体もあり、1年戦争終盤まで運用が確認されている。

SPECIFICATION

頭頂高 17.5m
本体重量 65.5t
ジェネレーター出力 899kW
スラスター推力 40,700kg
装甲材質 超硬スチール合金
兵装 105mmザク・マシンガン／ザク・バズーカ



ア・バオア・クー戦では、防衛にあたっていた機体が要塞に取り付いたジムを撃墜している。





第67物資集積所の機体はセモベンテ隊の不意打ちで撃破された。



MS-06F Zaku II F Type MS-06F ザクIIF型

ジオン公国軍を象徴する主力MS。優れた汎用性と拡張性を誇り、終戦まで公国軍主力MSの一角を守り続けた。また、地球連邦軍の「星一号作戦」に際して、ソロモン（コンペイトウ）を発した地球連邦軍艦隊の動向を探るために派遣された偵察部隊のひとつも、ザクIIで構成されていた。

SPECIFICATION

全高 17.5m
本体重量 56.2t
ジェネレーター出力 976kW
スラスター推力 43,300kg
装甲材質 超硬スチール合金
兵装 120mmザク・マシンガン　ヒート・ホーク／ザク・バズーカ



偵察部隊のザクIIは、猛攻に晒されながら敵の針路を明らかにした。



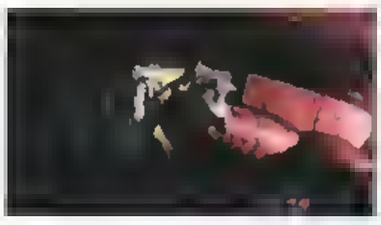
偵察部隊を率いた指揮官機　各部の構造からF型と推察される。また、黒系の塗装が施されており、シールドには目を象った特徴的なマーキングが見られる。

MS-09R Rick-Dom MS-09R リック・ドム

陸戦用であるMS-09 ドムの熱核ジェット・エンジンを熱核ロケット・エンジンに換装し、宇宙戦仕様に改修した機体。次期主力MSの開発遅延を補うために生産が進められ、1年戦争後期のジオン公国軍主力MSとして他機種と併用された。ア・バオア・クー戦にも相当数が投入された。

SPECIFICATION

頭頂高:18.6m
本体重量 43.8t
ジェネレーター出力 1,199kW
スラスター推力:53,000kg
装甲材質 超硬スチール合金
兵装 ジャイアント・バズ、胸部拡散ビーム砲　ヒート・サーベル



ア・バオア・クー攻防戦で、周辺宙域に展開するリック・ドムの部隊。



リック・ドムの多くは主戦場となったNフィールドとSフィールドに投入され、防戦にあたった。

MS-14 Gergoog MS-14 ゲルググ

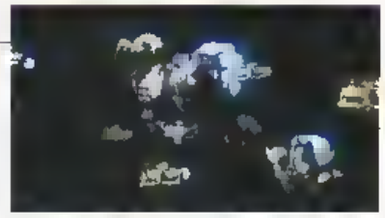
1年戦争末期に開発されたジオン公国軍の主力MS。ジオン公国軍MS開発技術の集大成ともいえる機体で、ビーム系兵装を標準装備している。しかし、開発の遅れから、本来の性能を発揮する機会を与えられなかった。なお、ア・バオア・クー戦では、高機動仕様機に近い機体も確認されている。

SPECIFICATION

頭頂高 19.2m
本体重量 42.1t
ジェネレーター出力:1,440kW
スラスター推力 61,500kg
装甲材質 超硬スチール合金
兵装:ビーム・ライフル　ビーム・ナギナタ　専用シールド
※データは「MS-14A」のもの



未熟な学徒兵が搭乗した機体も多く、その高性能を活かせなかった。



Eフィールドの攻防戦にも少数が参加し、一部はカスペン戦闘大隊の所属機と生還を果たした。

RGM-79C GM RGM-79C 後期型ジム

RGM-79 ジムの後期生産型に改修を施した、1年戦争末期の地球連邦軍主力MS。初期生産型で発生した技術的問題をフィードバックし、「V作戦」が目指した性能の実現が図られた。一説には、ルナツー工廠で独自に開発されていた宇宙用ジムをベースとした機体ともいわれる。

SPECIFICATION

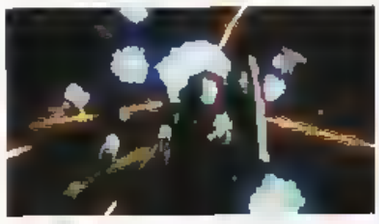
全高	18.0m
本体重量	41.2t
全備重量	58.8t
ジェネレーター出力	1,250kW
スラスター推力	57,480kg
装甲材質	チタン・セラミック複合材
兵装	頭部バルカン×2／ビーム・サーベル　90mmマシンガン／ハイパー・バズーカ／ビーム・ガン／シールド





Eフィールドにも大量に投入され、停戦命令後も戦闘を継続した機体もあった。





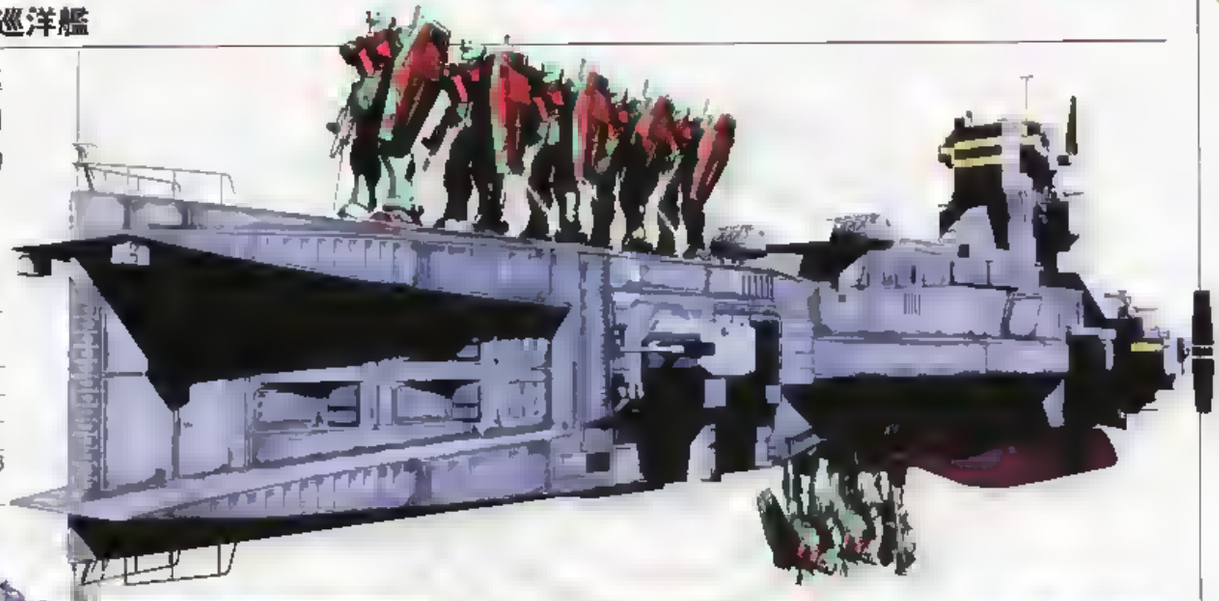
ア・バオア・クー戦では、集団戦術を用いて優位に戦闘を進めた。

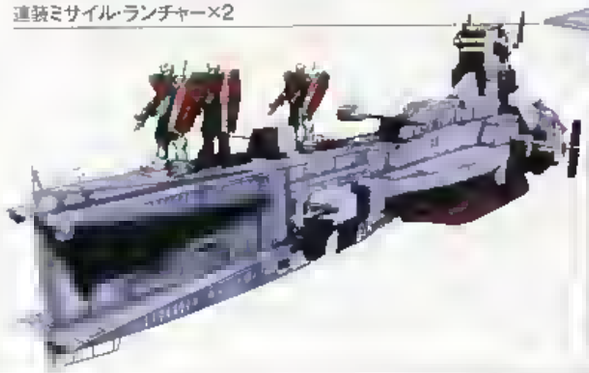
Salamis-class サラミス級宇宙巡洋艦

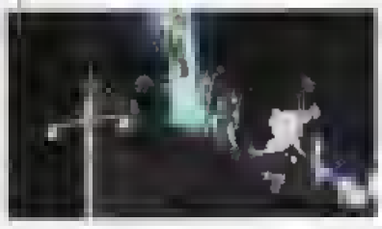
ア・バオア・クー戦に投入されたサラミス級宇宙巡洋艦。甲板にRGM-79C 後期型ジムをワイヤーで固定しているが、戦域まで運搬することが目的で本格的な運用能力はない。搭載能力を少しでも高めるため、上部甲板の単装メガ粒子砲を取り外していた。

SPECIFICATION

全長	212m
全幅	62.2m
全高	71.4m
船体乾重量	12,100t
全装備重量	22,000t
兵装	単装メガ粒子砲×5／3連装機関砲×2／2連装機関砲×6　8連装ミサイル・ランチャー×2







搭載されたジムはワイヤーを解除後、自機の推力で発進を行う。



ア・バオア・クーに侵攻する連邦軍艦隊　多くのサラミス級がジム搭載型だったことがわかる。

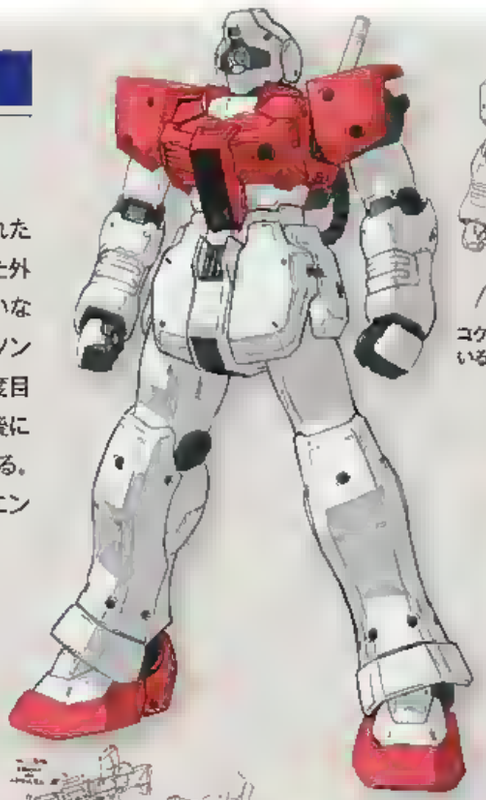
ゲム カモフ

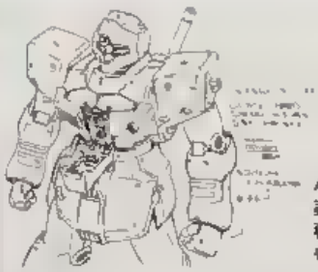
欺瞞用MS
その運用と戦果

ゲム カモフは「欺瞞」を目的として開発されたMSで、地球連邦軍のRGM-79 ジムに酷似した外見を持つが、ベースとなった機体は知られていない。本機は135mm対艦ライフルと共にヨーツンヘイムに配備され、評価試験が行われた。二度目の試験時に敵艦の撃破に成功するが、その直後に味方であるムサイ級に誤認され、撃破されている。なお、パイロットは地球連邦軍から亡命したエンマ・ライヒ中尉が務めた。

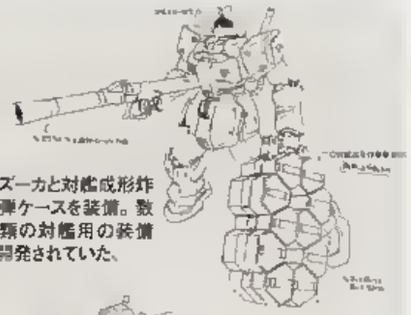
SPECIFICATION

全高:17.9m
本体重量:51.0t
ジェネレーター出力:976kW
最大主推力:47,800kg
武装:120mmマシンガン、バズーカ、135mm対艦ライフル、シュツルム・ファウスト、対艦成形炸薬弾、チェーンマイン

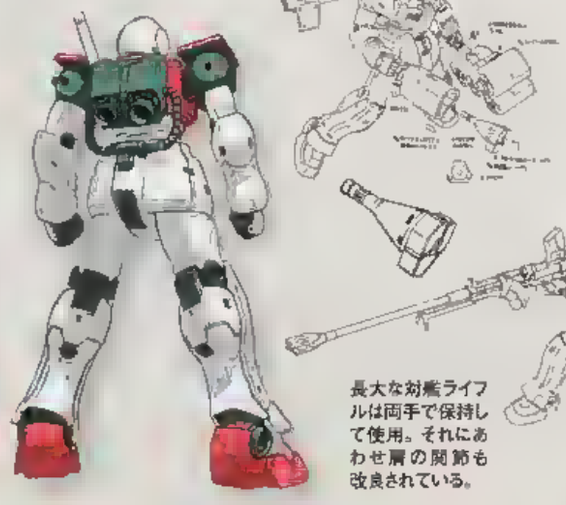




コクピットハッチは下に開く仕組みとなっている。胸部の形状は左右が異なっている。



バズーカと対艦成形炸薬弾ケースを装備。数種類の対艦用の装備も開発されていた。



対艦成形炸薬弾は1基ずつ使用した。ランドセルは武器ラックも兼ねていた。

長大な対艦ライフルは両手で保持して使用。それにあわせ肩の関節も改良されている。



135mm対艦ライフル。実体弾兵器だが、遠距離からサラミス級の砲塔を破壊するほどの威力を持つ。

YOP-04 バロール

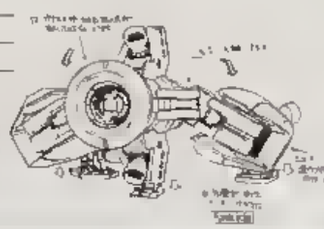
暗礁宙域の闇を見通した
新型観測機

このYOP-04バロールは、ミノフスキー粒子散布環境下における新型観測機として開発された機体である。開発はズム工科大学のリヒャルト・ヴィーゼ教授を中心に行われた。本機には新型の観測機が搭載され、その有効観測距離は従来機を超える510kmで、解析度は24倍にも達していた。さらに左右の高機動アームには各3基の補助推進器を設置、高い機動性を持つに至った。しかし、開発費の高騰と運用法が確立されなかったため、1機のみが試作されただけとなった。

SPECIFICATION

全長:10.2m
全幅:6.4m
全高:3.3m

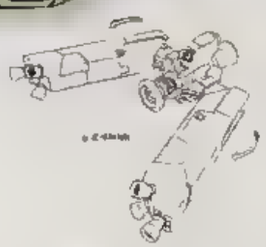




観測機器を中心に機体が構成されている。ザクのモノアイを流用した観測機のOP-02cよりも高い性能を持つ。



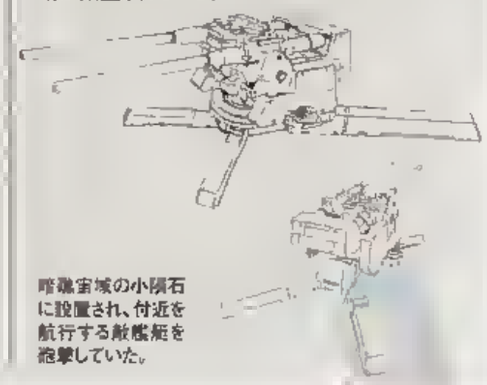
高機動アームは360度回転する。これにより、急な方向転換なども可能であった。



駐機する際は、左右の高機動アームは斜めになり、スキッドが展開する。

地球連邦軍ビーム砲台

マゼラン級宇宙戦艦の砲塔を固定砲台として改良したもの。砲塔の左右には対空防御用の砲塔が設置されている。



暗礁宙域の小惑星に設置され、付近を航行する敵艦艇を砲撃していた。


第3章 重力戦線
第1話 あの死神を撃て!
第2話 陣戦の王者、血
第3話 オ ベサ、鉄の

M-101A3 Regina 対MS重誘導弾 M-101A3 リジーナ

MSなき地球連邦軍の苦肉の策が生んだ歩兵用の対MS火器





歩兵が運用する火器としては強力だが，MSの正面装甲を破壊するには威力不足で，弱点を狙った同時攻撃が基本だった。



地球連邦軍の対MS特技兵分隊の5人で、リジーナ1基を運用した。移動や組み立て，発射といった行動は，分隊単位で行う。



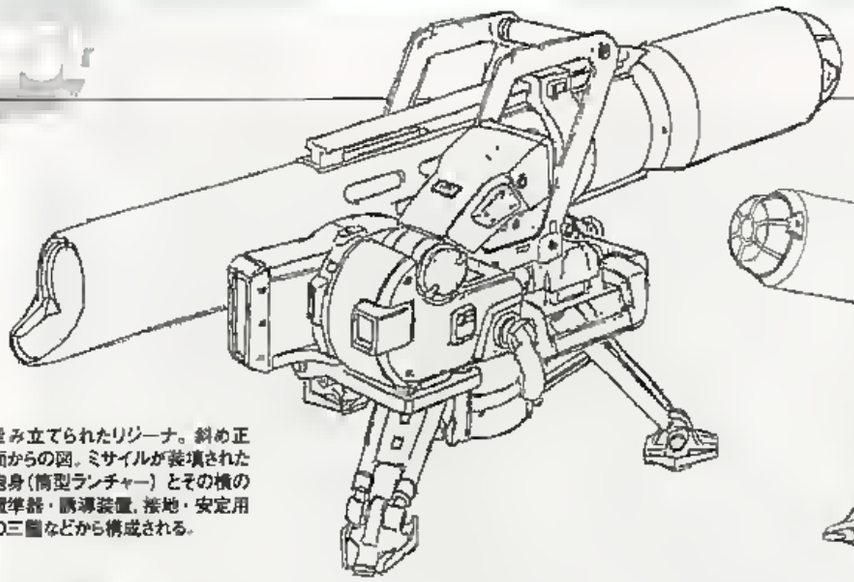
リジーナ自体はミサイル発射機に過ぎないため，M72 1　2t トラック「ラコタ」に搭載して運搬された。



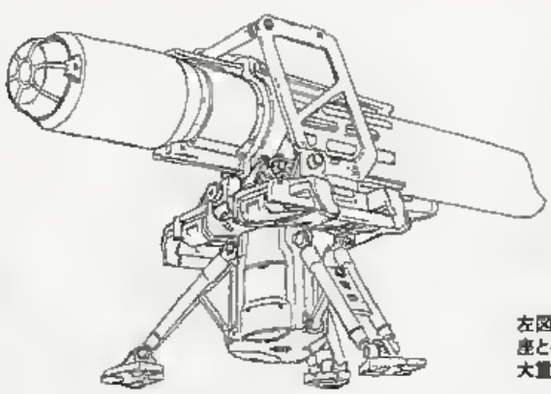
リジーナから発射される対MSミサイルは，有線誘導式である。このため，弾着まで射手が誘導し続ける必要があった。

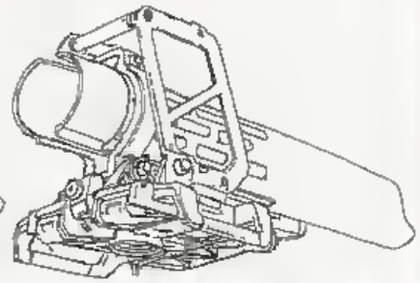
SPECIFICATION

全長	157cm
口径	139mm
重量	42kg（カートリッジ含む）



組み立てられたリジーナ。斜め正面からの図。ミサイルが装填された砲身（筒型ランチャー）とその横の照準器・誘導装置、接地・安定用の三脚などから構成される。



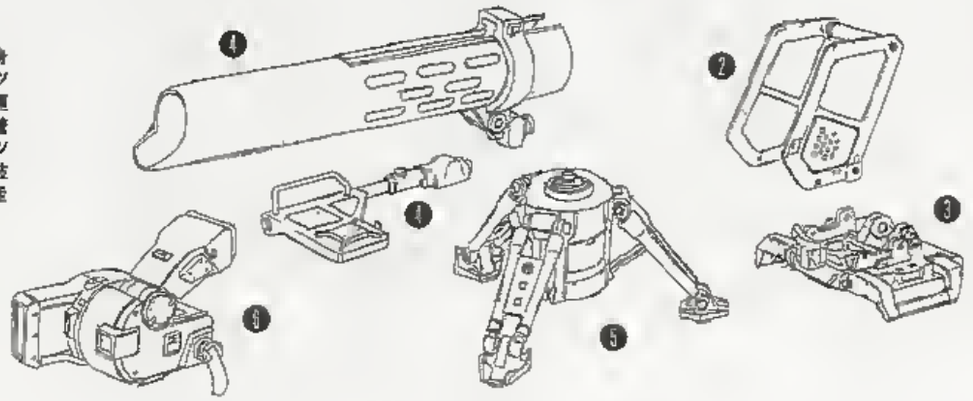


左図は斜め後方から見たリジーナの全システム。上図は台座と砲身のみ。台座の左右に運搬用のハンドルがある。大重量のため、組み立て後の調整はふたりで行う。

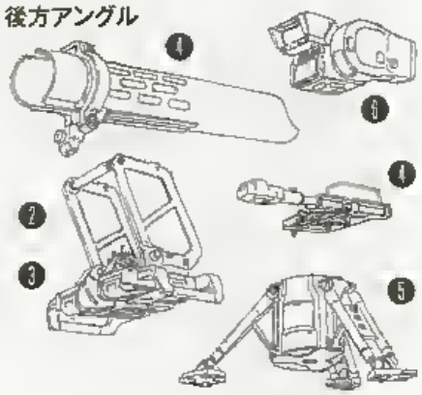
■分解状態

リジーナはその重量のため、砲身や照準器、三脚など6つのパーツに分解して、トラックに積載し、運搬される。待ち伏せ地点に到着後、特技兵たちがこれらのパーツを組み立てる。訓練された特技兵たちは短時間で、リジーナを組み立てることが可能であった。

①砲身
②、③砲身固定用の台座
④照準装置の接続部
⑤接地・安定用の三脚
⑥照準 誘導装置



後方アングル



開発経緯 DEVELOPMENT

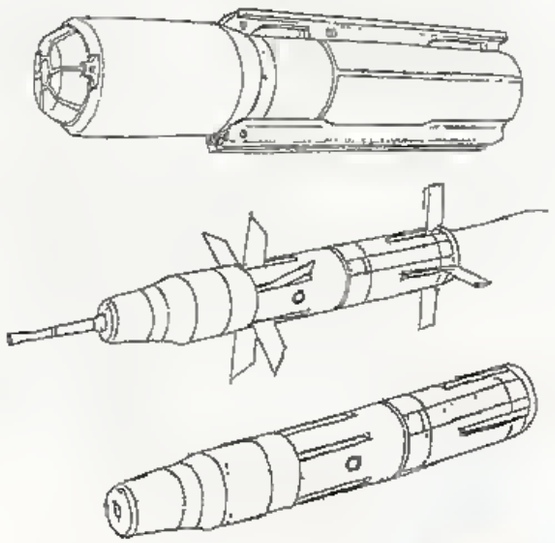
M-101A3 リジーナは地球連邦軍の対MS重誘導弾（AMSM）、つまりMSへの攻撃を想定したミサイルである。ただし、航空機や戦闘車両、艦艇などに搭載されるものではなく、対MS特技兵と呼ばれる歩兵が運用する火器だった。生身の人間が、直接扱う兵器だったのである。生身の人間による対MS攻撃という無謀な手段が採られた背景には、ジオン公国軍のMS-06 ザクⅡの存在があった。

1年戦争開戦からおよそ3ヵ月後、地球侵攻作戦を開始していたジオン公国軍は、遂に地球上に部隊を展開した。その戦力の中核を担ったのが、MS-06 ザクⅡであった。ザクⅡの戦闘能力は、地球連邦軍の主力戦車61式戦車すら凌駕するもので、地球連邦地上軍は瞬く間に戦力を消耗してしまったのである。

対MS戦力の拡充を模索した地球連邦軍であったが、短期間で自前のMS開発は難しく、同様に機甲部隊、航空部隊の整備も難しかった。そこで地球連邦軍は、対戦車特技兵分隊を対MS用に転科する案を採用。

こうして「対MS特技兵」部隊が誕生し、そこに配備された兵器が対戦車誘導弾を大型化したリジーナだった。1基のリジーナは対MS特技兵部隊によって運用された。対MS特兵分隊は、指揮官ひとり、分隊支援機関銃手ひとり、リジーナを扱う対MS特技兵3人の計5人で編成され、通常は3~4個分隊で構成された小隊で戦闘を行っていた。

生身の人間が運用する都合上、機動力が皆無で、待ち伏せ攻撃に徹するしかなかった対MS特技兵とリジーナは、味方部隊の後退支援に多用された。結果、相応の戦果をあげたが、同時に対MS特技兵も甚大な被害を受けている。



ミサイル

リジーナ用ミサイル。上段の図は輸送時や装填時のもので、ミサイル本体はチューブ型コンテナに収納されている。後端には誘導ケーブルを備え、発射後はこれを介して操作する。下段はケース内での状態。有効射程は3,500m、最大射程は4,200mだった。

リジーナと共に散った対MS特技兵小隊

初期の対MS特技兵部隊として有名なのが、第44機械化混成連隊の対MS特技兵小隊である。しかし、U.C.0079. 4月下旬の時点で、同連隊に残っていた唯一の対MS特技兵小隊はベン・バーバリー中尉の部隊だけだった。指揮官としてのバーバリー中尉の能力は卓越しており、MS通算撃破記録13を数えた。だが、連隊の後退支援のために投入されたマリアージュで部隊が全滅。中尉も戦死し、対MS特技兵の過酷さを知らしめるエピソードとなった。

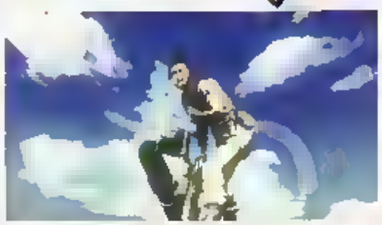


バーバリー中尉の対MS特技兵小隊は、4個分隊で構成された。人員補充後、展開中のザクII3機の内、2機を撃破している。

ベン・バーバリー中尉

第44機械化混成連隊の対MS特技兵小隊指揮官で、第1分隊長を兼任。指揮能力に秀で、多くの敵機を撃破したが、部下が次々と戦死したため「死神」と呼ばれていた。





中尉自身は対MS特技兵ではないが、リジーナの操作は心得ており、中尉自らもザクIIを撃破した。

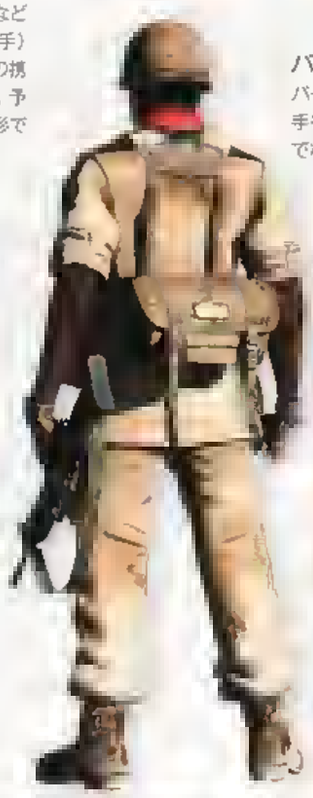




対MS特技兵

リジーナを扱う3名のみが対MS特技兵と呼ばれ、リジーナの組み立てや運搬、射撃などを直接担当する、砲手（射手）は内1名で、残りは予備弾の携行や装填、警戒などを行う。予備弾は、図のように背負う形で携行するのが普通だった。





ババ・シドニー・ルイス対MS特技曹長

バーバリー中尉直轄の第1分隊の対MS特技兵で、砲手を担当。中尉の副官的存在であり、砲手としてだけでなく、庶務や助言などのサポートも担っていた。





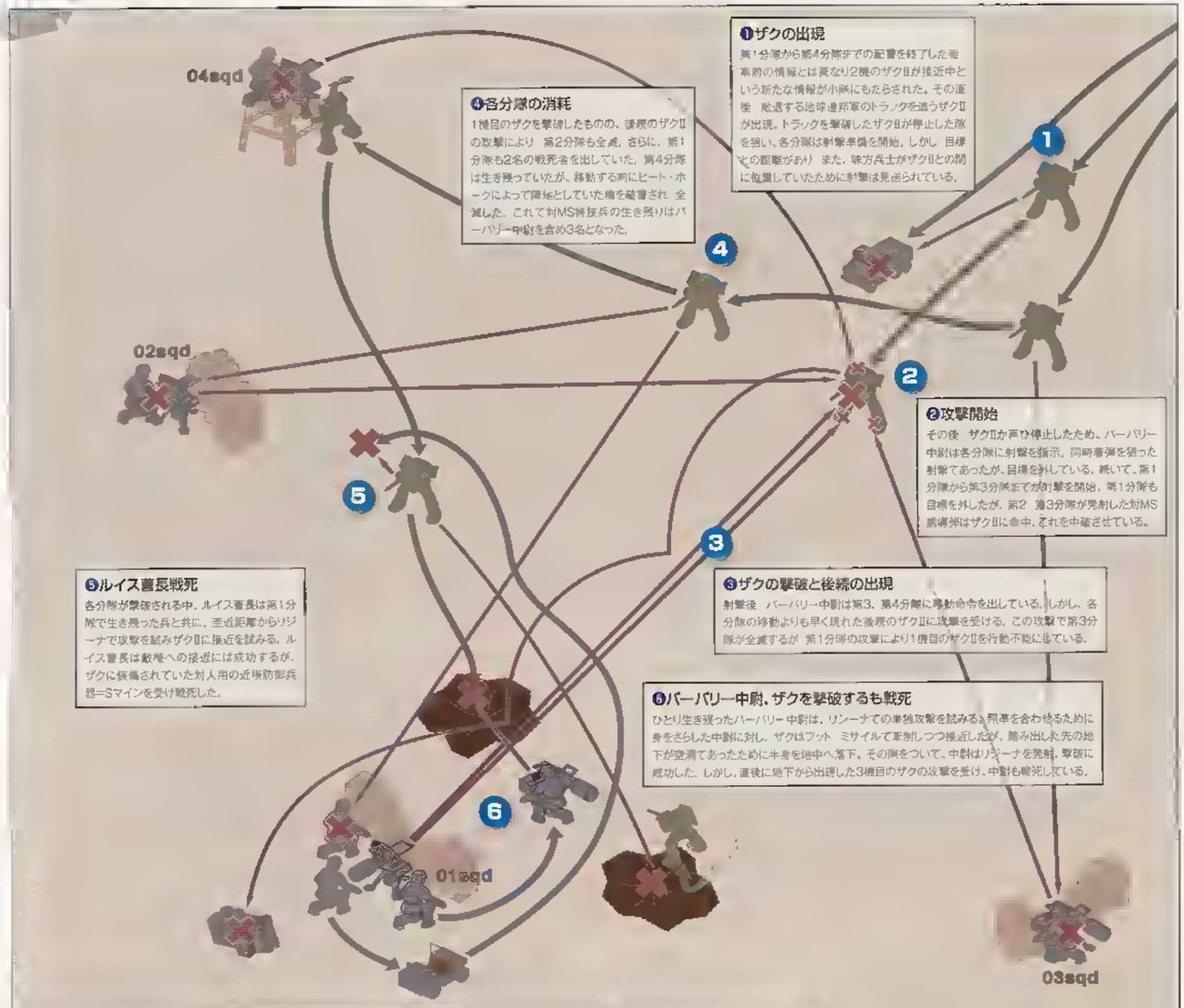
砲手としての技量と、対MS特技兵に必要な胆力を持ち合わせており、多くの敵機を撃破した。



指揮官1名と対MS特技兵3名のほか、分隊支援機関銃手1名が各分隊に配属。分隊は軽車両2台に分乗することが多い。



■マリアージュ郊外での対MS戦



U.C.0079.3月より開始されたジオン公国軍の地球降下作戦により、各地の地球連邦軍は敗走を重ねていた。ジオン公国軍の快進撃の原動力はMSであり、これに対抗手段を持たない地球連邦軍は機甲戦力を消耗し続けていた。この状況はヨーロッパ南方戦線でも同じで、同地域に展開する地球連邦軍第44機械化混成連隊は、補給と防衛線構築のために後退を余儀なくされている。しかし、味方の退路は3機のザクによって分断されていた。このため、ベン・バーバリー中尉の率いる対MS特技兵小隊には、前線に進出し、ザクを撃破、という命令が下された。出撃した分隊は04.27、マリアージュ近郊にまで進出すると、かつての石切り場に部隊を展開させ、「待ち伏せ」という唯一の戦法を用いてザクⅡの迎撃を図った。

Earth Federation Ground Force Infantry 地球連邦軍 将兵

地球連邦軍の基本をなす兵科で、小銃や拳銃、手榴弾などで武装する。右は地球連邦軍の将校と歩兵で、制服のデザインなどが異なっていることが分かる。ハーネスに多数の装具を付けた歩兵に対し、将校は比較的軽装となっている。また、右の将校は、第44機械化混成連隊（独立混成第44旅団）の指揮官を務めたミケーレ・コレマッタ少佐で、ショルダーホルスターを身に着けている。



地上に降下したジオン公国軍を前に、地球連邦軍歩兵部隊は瓦解した。



戦線の縮小に伴い、地球連邦軍歩兵部隊は撤退と再編を繰り返した。



ミケーレ・コレマッタ少佐
地球連邦軍の士官用の制服を着用している。彼はショルダーホルスターを身に付けている点が特徴であった。

一般歩兵
地球連邦軍の歩兵の一般的な装備。H型ハーネスを付け、そこに水筒や各種ポーチなどを装着している。

M61A5 MBT 61式主力戦車5型

1年戦争当時、地球連邦軍で運用された主力戦車。特徴のひとつであるデータリンクシステムをミノフスキー粒子で無効化され、苦戦を強いられた。しかし、2連装155mm滑腔砲の火力はMSに対しても有効で、各地の戦線で主力を担っていた。また、反攻に備えて温存されるケースもあり、第44機械化混成連隊では対MS特技兵小隊によって、再編のための時間稼ぎが行われた。

SPECIFICATION

全長 11.6m	
車体長 9.2m	
全幅 4.9m	
全高 3.9m	
乗員 2名	
兵装：連装式155mm滑腔砲	13.2mm重機関銃 M 60HMG
7.62mm主砲同軸機関銃×2	M-299 分隊支援機関銃



地球連邦軍地上部隊の主力であったが、ザクIIの汎用性と戦闘力には敵わなかった。



◀砲塔裏面
車体との接続部分は省略されているが、ここに装弾装置や砲塔の回転装置などか取り付けられる。



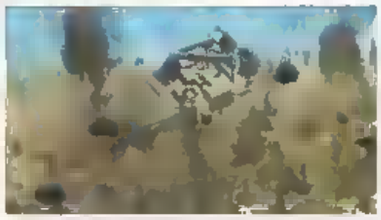
▶車体底面
キャタピラと車輪を外した状態の底面。車体側のディティールなども分かる。

Lakota M72 1/2tトラック ラコタ

地球連邦軍が運用した高機動車輌。対MS特技兵小隊の移動手段としても用いられ、1個分隊あたり2台のラコタが割り当てられた。荷台部分には支援機関銃を固定するための銃架や弾薬箱ラックを備え、分解したリジーナを固定、搭載することもできる。ただし、対MS特技兵の基本戦術は待ち伏せであるため、戦闘で運用されるケースは少なかったと見られる。



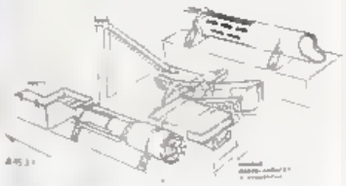
ベン・バーバリー中尉率いる対MS特技兵小隊が戦域へと進出する際にも用いている。

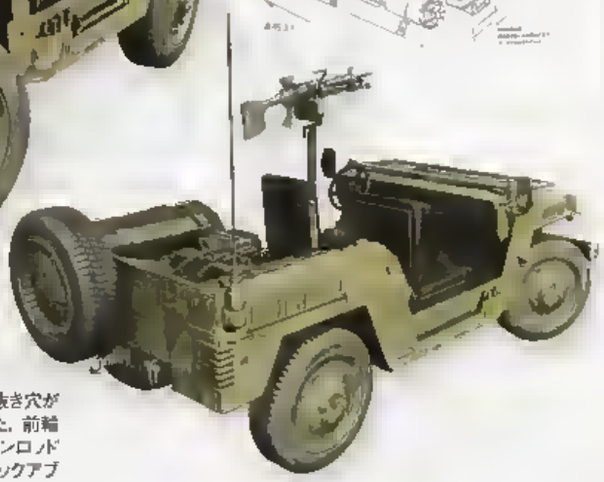


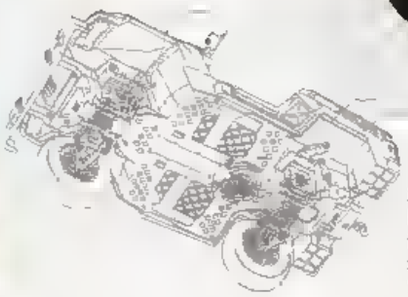
ルイス対MS特技曹長はラコタでザクIIに接近するも、Sマインで返り討ちに遭った。



▼荷台
M-299用の銃架に加え、分解されたリジーナが搭載されていた。







◀車体底面
底面パネルには肉抜き穴が開けられている。また、前輪部にはサスペンションロッドが、後輪部にはショックアブソーバーが設けられている。

CargoTruck 4 1/2t 6×6カーゴトラック

地球連邦軍の兵員輸送を担う6輪カーゴトラック。外観は旧時代的だが、キャビンには複数のモニターや通信機器を備える。また、キャビン上部には車載機関銃を装備し、乗員がハッチから出て手動で操作する。リアゲート中央のパネルはステップとして展開でき、可動式アームで接地面に降ろすこともできる。地球連邦軍地上部隊の足として、各地の戦線で活躍した。



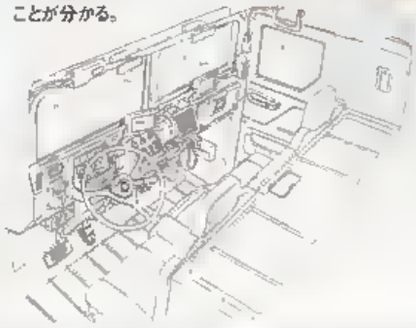
多数の兵員や荷物を搭載できたため、第44機械化混成連隊では部隊の後退時などでも役立てられた。



輸送用のため戦闘能力は低く、武装も自衛用として装備されたに過ぎない。



▼運転席
運転席には2名が乗車可能。2枚のサブモニターや通信機などが設置されていることが分かる。





MS-06J Zaku II J Typr MS-06J ザクIIJ型

ジオン公国軍の地球降下作戦において主力となったMSで、J型はF型をベースに重力下仕様の改修を施したザクIIのバリエーション機。地球連邦軍の現行兵器に対して圧倒的な威力を示し、「死神」と恐れられた。しかし、「ザクハンター」と呼ばれる対MS特技兵や61式戦車により撃破されるケースもあった。それでも、ザクIIが陸戦の覇者として君臨していたことは間違いない。

SPECIFICATION

全高 17.5m
本体重量 56.2t
ジェネレーター出力 976kW
スラスター推力 43,300kg
兵装 120mmザク・マシンガン／280mmザク・バズーカ／ヒート・ホーク／3連装ミサイル・ポッド／クラッカー／Sマインほか



一連の地球降下作戦で地球連邦軍を蹴散らし、ジオン公国軍の版図拡大に大きく貢献した。





J型の中には対人兵器のSマインを装備した機体もあり、歩兵の接近を許さなかった。



PVN.42/4 Magella Attack PVN.42/4 マゼラ・アタック

ジオン公国軍の主力戦車。地球降下作戦ではジオン公国軍機甲戦力の中核をなし、ザクIIの支援兵器としても運用された。

SPECIFICATION

全長 12.04m（車体長 10.74m）
全高 6.37m（全幅 7.31m）
重量 95.0t
兵装：175㎜無反動砲／33mm3連装機関砲　スモーク・ディスチャージャー



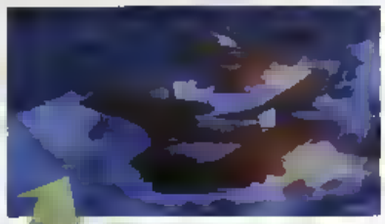
地球降下作戦においても地上部隊の一角を担い、ジオン公国軍の進撃を支えた。

Dopp ドップ戦闘機

ジオン公国軍の主力戦闘機として運用された局地戦用戦闘機。航続距離は短いが、片翼を失っても飛行可能な推力を有し、機動性に優れる。対空、対地任務の両方をこなし、幅広く運用された。

SPECIFICATION

全長 9.2m
全幅 13.69m
全高 4.22m
重量 5.2t
兵装：20mmバルカン砲×2／6連装ミサイル・ランチャー×2



夜間哨戒任務に就くドップ。航空戦力の中心として、様々な運用がなされた。

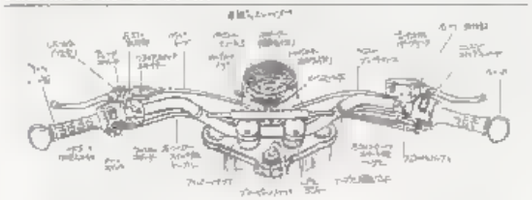


B.M.C.Z78/2 中型汎用バイク B.M.C.Z78/2

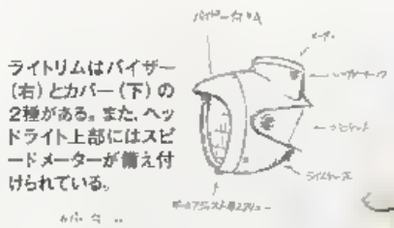
地上作戦における長距離偵察や伝令用の装備として新規設計された、B.M.C.（通称「ベンク」）社製の軍用バイク。駆動方式に信頼性の高いシャフトドライブを採用しており、さらに後輪の横幅を広げることでトラクションを向上させ、優れた不整地走破性を発揮する。耐久性や整備性にも優れていたことから、ジオン公国軍地上部隊で幅広く運用された。

SPECIFICATION

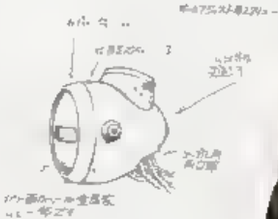
全長	1,800mm
全高	800mm
乾燥重量	120kg
最大出力	50馬力
始動形式	キック式
ブレーキ形式	マキシム式ドラムブレーキ
変速機形式	前5段、後2段

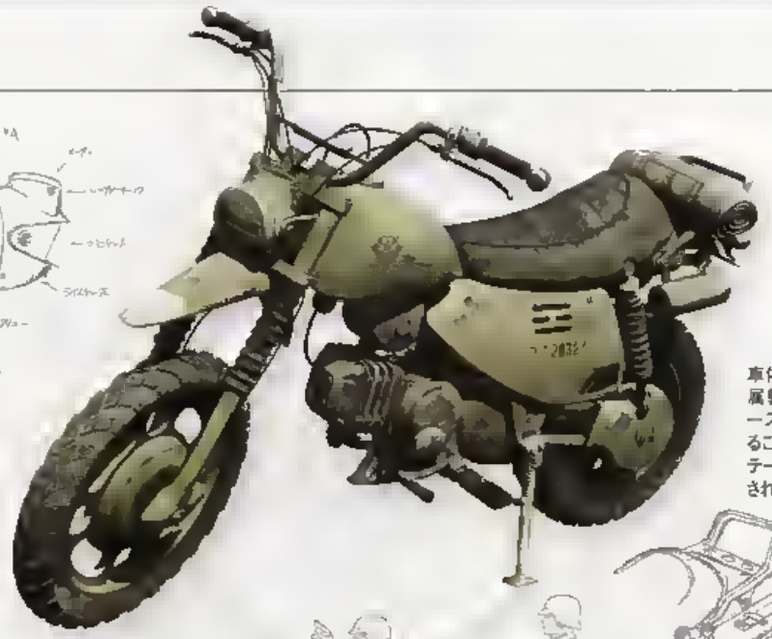


ハンドルブリッジはシンプルな構造で、中央に単眼式スピードメーター、左右のグリップ付近に各種スイッチを配する。



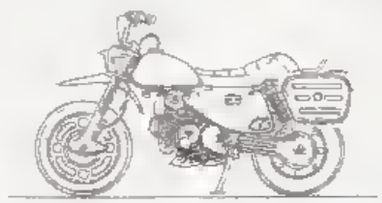
ライトリムはバイザー（右）とカバー（下）の2種がある。また、ヘッドライト上部にはスピードメーターが備え付けられている。

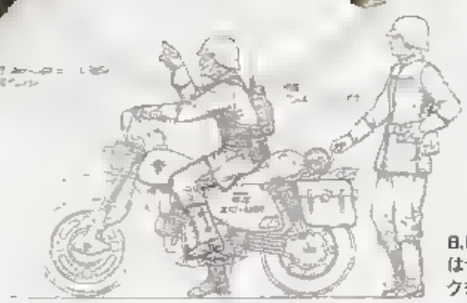




車体後部には金属製のサイドケースを備え付けることができ、ステーにネジ止めされる。





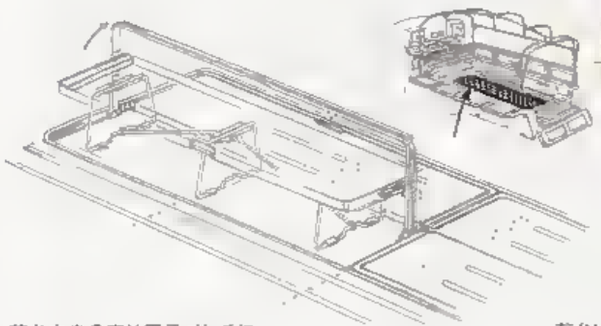


B.M.C.Z78/2と人間の対比図。右はサイドステーに革製のサイドバックを取り付けている。

Ruessel 11/2 Zebu リュッセル 11/2 ゼブ

ジオン公国軍が地上で運用した8輪トラック。開放式の荷台に幌を張った一般的なトラックだが、曲面構造の車体前部や1対のみサイズの異なるタイヤが特徴的である。荷台側面にツルハシやスコップ、ハンマーといった工具を備え付けることができ、車体底部には予備タイヤを装備する。武装は施されておらず、主に後方での兵員輸送に運用されたと考えられる。





荷台中央の床は簡易ベンチにもなる。ハンドルを床から引き上げ、脚を展開して固定する。

荷台は後方と側方のパネルが開く構造となっている。サイドパネル展開時には手すりも一緒に折れる。

PVN.3/2 Sauropelta 軽機動車 PVN.3/2 サウロペルタ

ジオンが公国制に移行する前後に開発された軽機動車。シンプルな構造でコストパフォーマンスに優れることから、1年戦争を通じてジオン公国軍歩兵部隊や偵察部隊に運用された。優れた機動性を誇り、車載火器としてマズラMG74を装備する。また、地球上の多様な環境に適応できる高い運用性を有し、地球降下作戦においても空挺戦力として大量に投入されることとなった。



SPECIFICATION

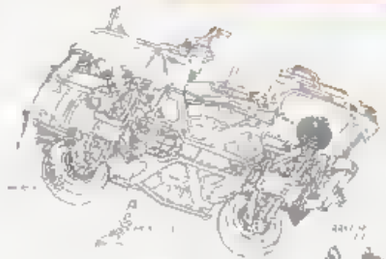
全長	3.6m
全幅	1.6m
全高	1.5m
標準搭載火器	マズラMG74
駆動方式	動力分散型4×4
乗員	3名
積載物	合計500kg



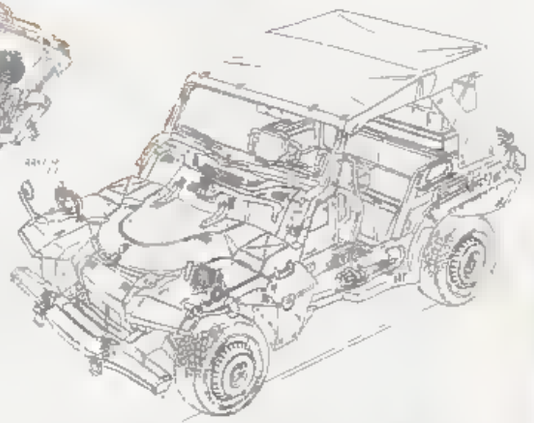
地球降下作戦では投下コンテナで地上に展開する様子が確認された。



車体後部に取り付けられた「パワーパック」と呼ばれる装置。詳細な機能は不明。

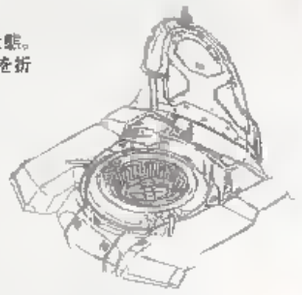


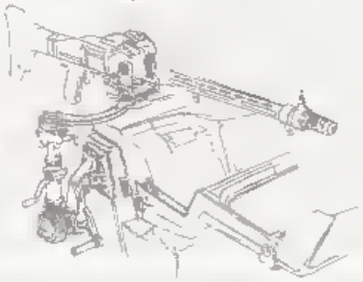
右は幌を展開した状態。上は車体底面で、足回りの頑丈な構造が見て取れる。





マズラMG74の機銃架収納状態。各部のハンドルを使って銃架を折り畳み、車体右側に収納する。





機銃架を展開した状態。車載機銃を用いる際には、フロントスクリーンが前方に倒れる。

ボンネット内部には予備タイヤを収納する。タイヤはホイールキャップとともに、固定ネジで止められる。

Principality of Zeon Infantry ジオン公国軍 歩兵

地球降下作戦に動員されたジオン公国軍歩兵。個人装備としてスマルツァMP-71マシンピストルなどの銃器とマガジンポーチ、雑嚢を装備するケースが多い。MSの活躍の陰で、着実な戦果を挙げていった。



地球降下作戦の開始当初は、ジオン公国軍兵士たちの士気もきわめて高かった。



支援火器のマズラMG74をはじめ、Stg78など、様々な火器を装備した。



PVN.4/3 Wappa 機動浮遊機 ワッパ

ジオン公国軍が開発したパーソナル・ホバー・バイク。車体前後に配した2基のファンを電動モーターで個別に駆動させ、柔軟な運動性を発揮する。また、短時間であれば十数メートルの高度まで上昇することも可能である。その機動力を活かし、哨戒任務などに運用された。標準装備としてブーム懸架式のマズラMG74/Sを有し、吸着式時限爆薬を併用した機動戦闘を行うケースもあった。

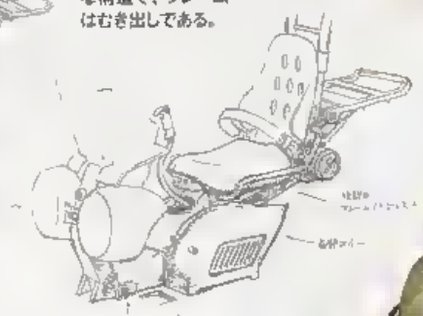
SPECIFICATION

全長:5.5m
全幅:2.1m
全高:2.7m
ファン直径:1.1m
兵装:マズラMG74/S





操縦席付近は単純な構造で、フレームはむき出しである。



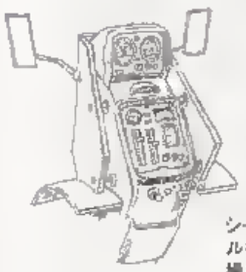


地面の状態を問わない機動力は、地球降下作戦でも威力を発揮した。

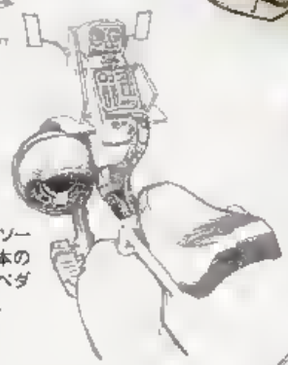




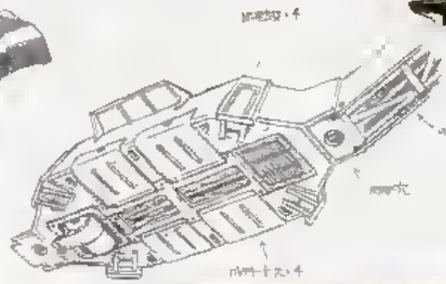
後部のフィンを覆うリアカウル。ライトやナンバープレートが取り付けられている。



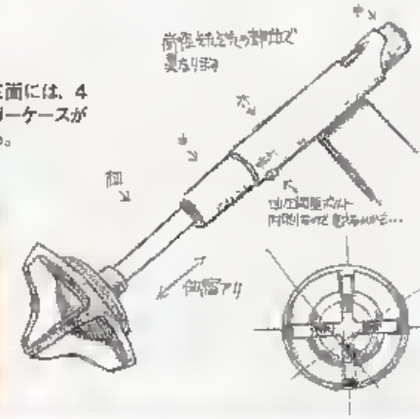
コンソール左右にはバックミラーを備える。



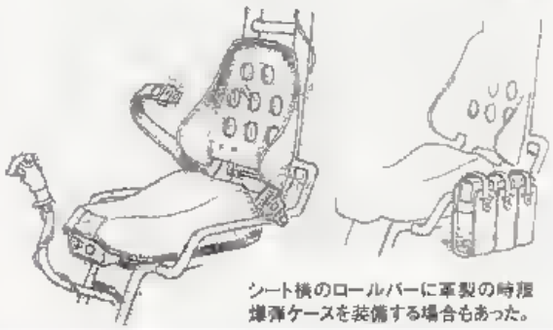
シート側からコンソールを見た図。1本の操縦桿とフットペダルで操縦を行う。



車体中央底面には、4基のバッテリーケースが配されている。



接地脚は油圧式で3段階の筒径に沿って伸縮する。接地部は鋲造となっている。



シート横のロールバーに革製の時限爆弾ケースを装備する場合もあった。

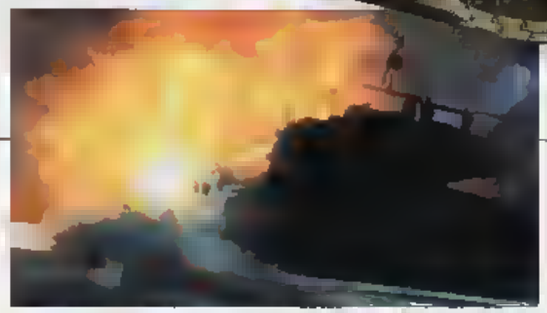


MSに接近し、吸着式の時限爆弾を取り付けるなど、その機動性を活かした作戦を実施した。

M61A5 61式戦車5型

電子戦環境最強を誇った悲運の陸の王者





2門の155mm滑腔砲は、地球連邦軍の陸戦用戦闘兵器の兵装としては当時最強級で、距離によってはザクの装甲を貫通する。



強力なエンジンと広面積の履帯がもたらす不整地走破能力、衝撃行動能力は極めて高く、ザクに劣らない走行速度を誇った。



耐弾性にも優れるはずだったが、易々とトップアタックを仕掛けてくるMS相手には、有効な防御力を発揮できなかった。



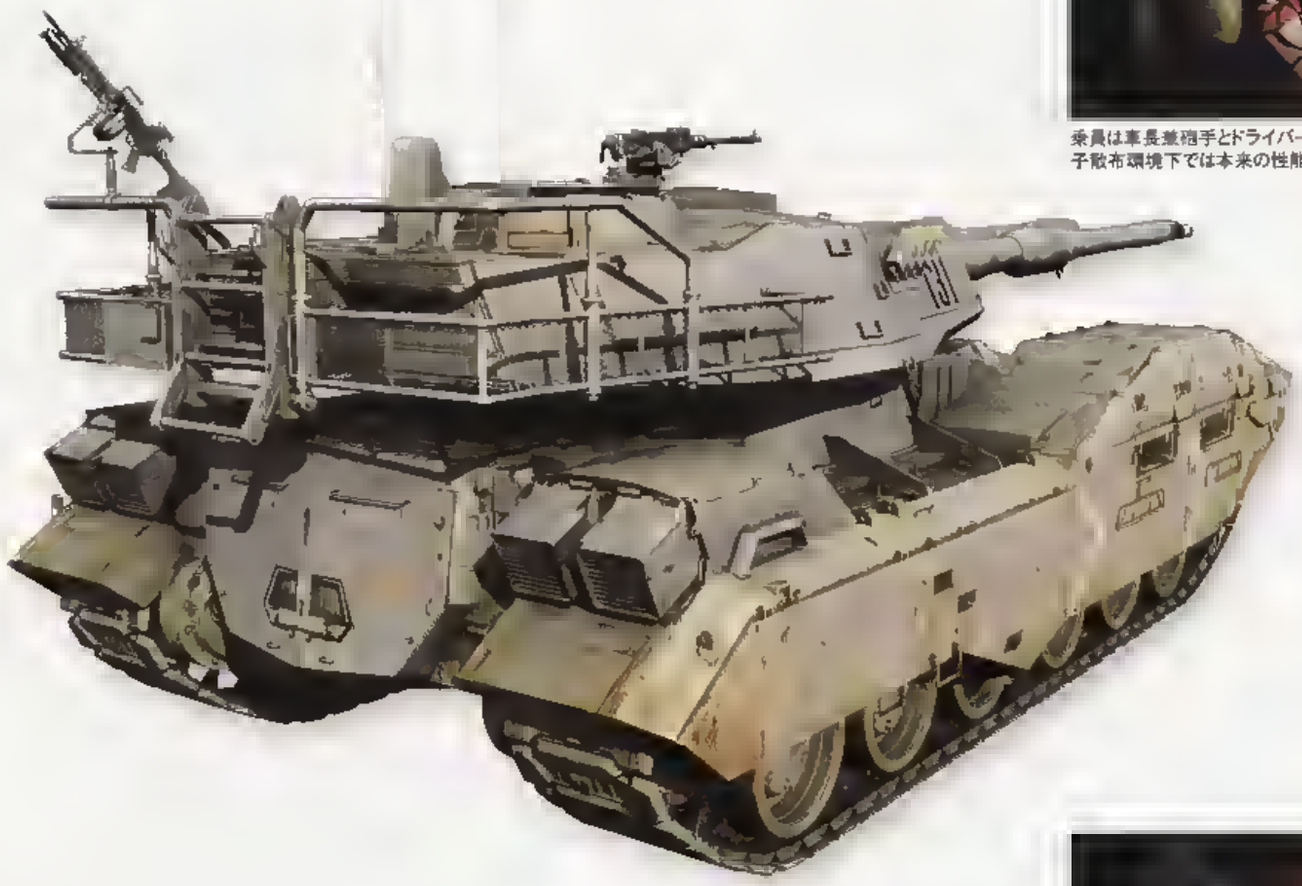
対MS戦術が確立されていなかった地球侵攻作戦初期には、特に多くの61式戦車がMSによって撃破されてしまった。

SPECIFICATION

全長 11.6m
車体長 9.2m
全幅 4.9m
全高 3.9m
乗員 2名
主砲 連装式155mm滑腔砲
副武装　13.2mm重機関銃（M-60 HMG）／7.62mm主砲同軸機関銃×2／M-299 分隊支援機関銃



乗員は車長兼砲手とドライバーのふたりでまかなわれ、ミノフスキー粒子散布環境下では本来の性能を発揮できなかった。



開発経緯 | DEVELOPMENT

61式戦車5型、あるいは「TYPE-61 5+」と呼ばれる制式名称M61A5 MBTは、地球連邦軍の主力戦車である61式戦車のバリエーションで、1年戦争開戦時には広く配備されていた。なお、61式戦車は「ろくいちしきせんしゃ」、61式戦車5型は「ろくいちしきせんしゃごがた」と読む。

61式戦車は、U.C.0061に制式採用された主力戦車で、初期のタイプは2門の150mm砲を持ち、乗員は3人だった。乗員の内訳は車長、砲手、ドライバーと思われ、この時点で砲弾の自動装填装置も採用されていたと考えられる（そもそも150mm砲用の巨大な砲弾を、ふたつの砲に人力で装填するのは不可能である）。また、車体後部を兵員室とし、限定的ながらAPC的な運用を可能としたのも、初期型から採用されていた仕様と思われる。

61式戦車のバリエーションである5型は、度重なる改修によって初期型をはるかに凌駕する性能を獲得している。主な改修点は、主砲を155mm滑腔砲2門へと換装したこと、乗員を車長兼砲手とドライバーの2名のみとしたことである。

乗員の省力化は、電子装備の発達によるところが大きい。特に衛星とのデータリンクシステムによる他車両とのデータ共有は、驚異的な長距離精密射撃を可能としていた。

初期型よりも少ないマンパワーで、より高度な性能を発揮できるようになった61式戦車5型は、「陸の王者」の名に相応しい兵器であった。だが、1年戦争の開戦とジオン公国軍によるミノフスキー粒子の広域散布、そして万能兵器であるMSの出現が、その運命を狂わせることになった。



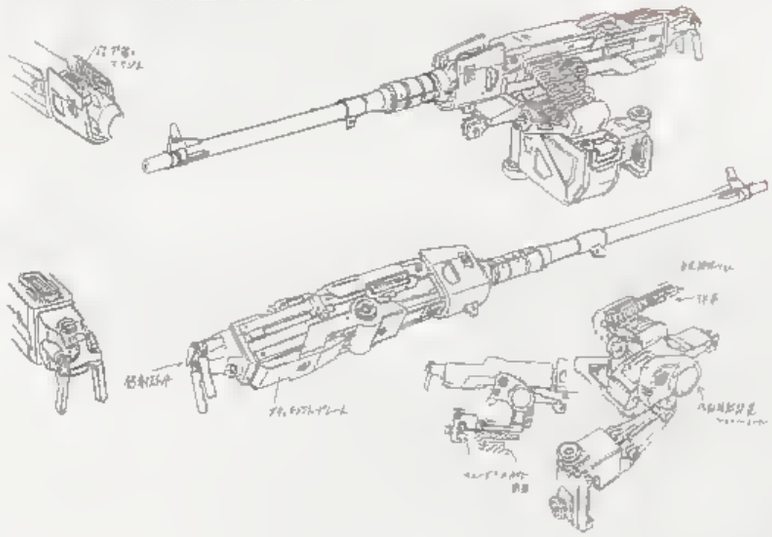
車長と砲手が兼任となったのは、2門の巨砲や自動装填装置などが砲塔内部を狭くしたことも一因となっている。



61式戦車は地球連邦地上軍の中核だった。5型は欧州や北米などに多数が配備され、U.C.0087頃まで使用されたといわれる。

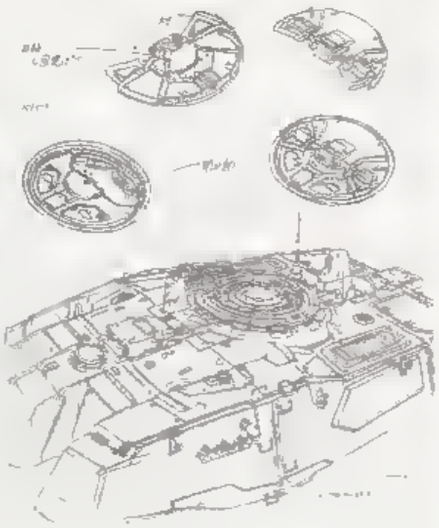
13.2mm重機銃 M-60 HMG

車長用ハッチに設置された重機関銃で，小隊支援火器として用いられるものを流用。歩兵の肉薄攻撃などに対応するための装備で，車内からのリモコン操縦も可能と思われる。



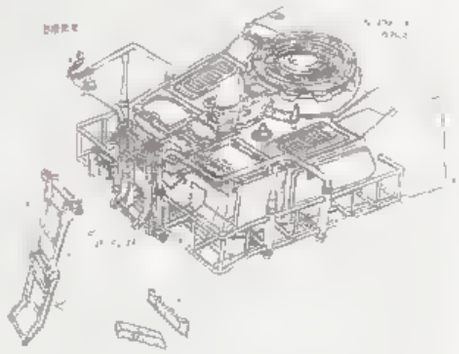
ドライバー・ハッチ

車長兼砲手が出入りするハッチ。ハッチは回転可能で，展開方向を変更できる。ハッチ周辺はキューポラとなっており，ハッチから身を乗り出さなくてもある程度の視界が得られる。



砲塔後部

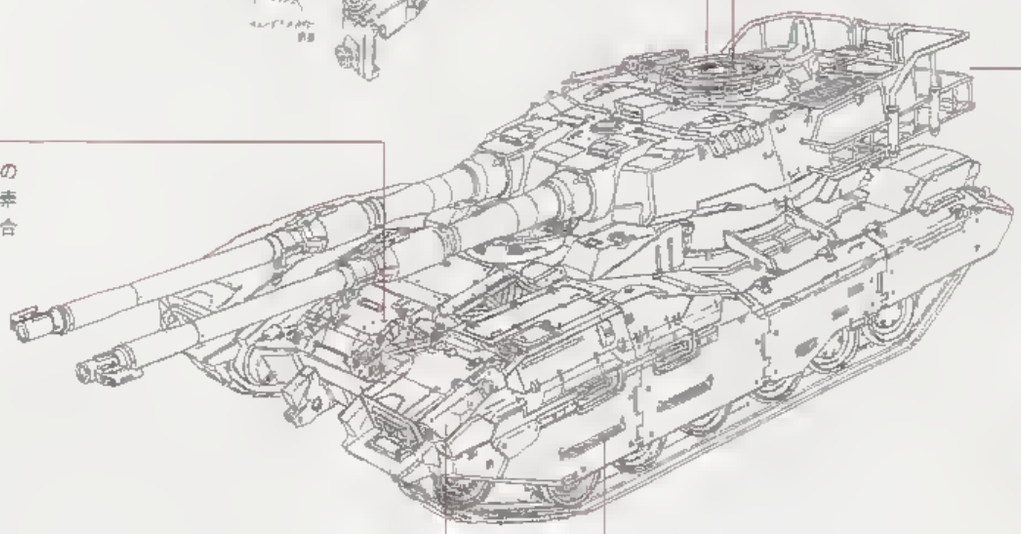
簡素なバスケットが配置されている。後部には，砲塔から地面に降りるための折り畳み式ラダーが設置された。軽機関銃用の銃架を取り付けることもあった。



ラベリングロック

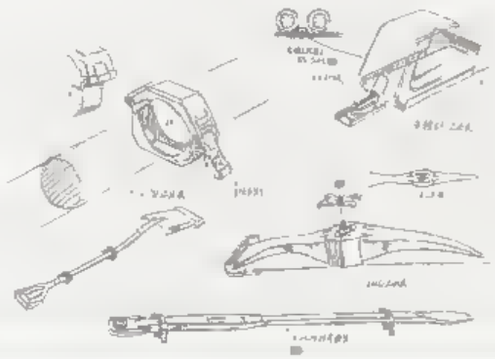
移動時に砲を固定するための装備。砲を下から支える簡素なタイプである。主砲数に合わせて2基を搭載する。





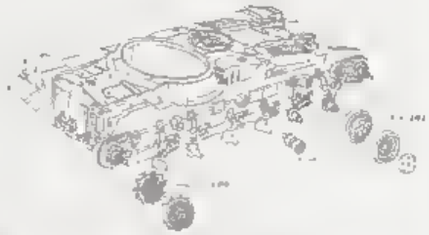
車載装備

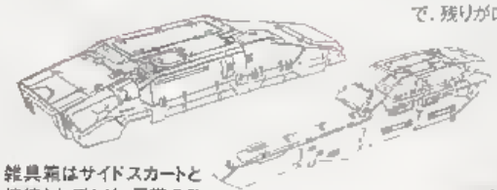
雑具箱の下には，ツルハシやスコップ，バールといった工具，車輪止め具などが搭載されている。これらの道具は，止め具でボディ上に取り付けられているため，自然には脱落することはない。



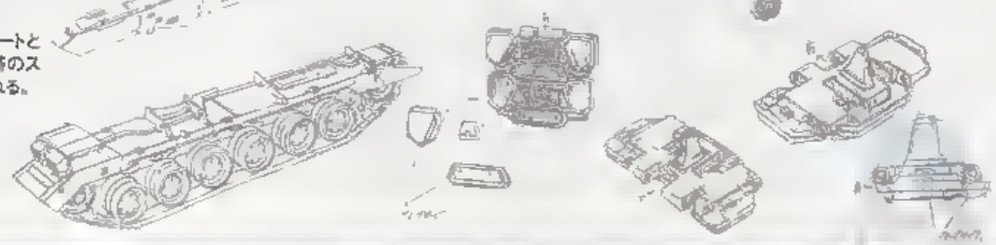
履帯

履帯は全金属製ではなく，舗装道路の走行を意識してゴムブロックが配置された。履帯を動かしているのは，後端の駆動輪で，残りがロードホイールだ。



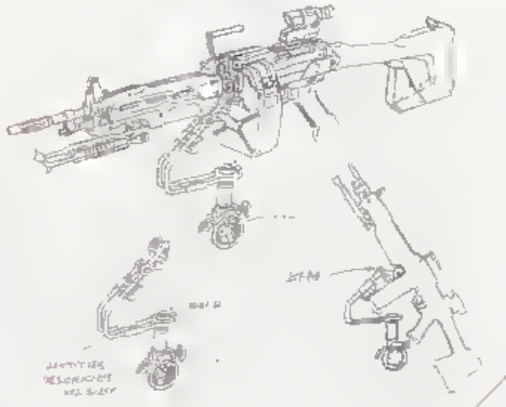


雑具箱はサイドスカートと接続されており，履帯のスカートの上に配置される。



M-299 分隊支援機関銃用銃架

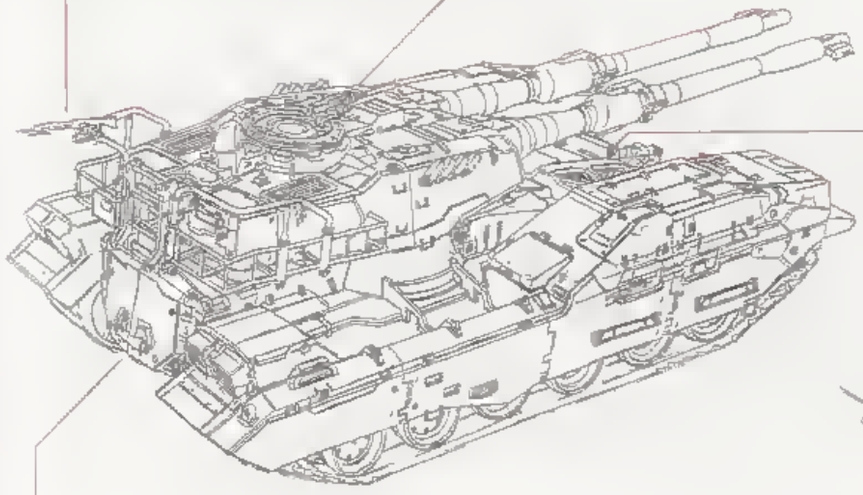
砲塔後部のバスケットに、車載銃架を介して取り付けられる軽機関銃。銃自体は、分隊支援火器として用いられるものと同じである。オプションの副武装で、全車に装備されていたわけではない。



ワイヤー

スタックや損傷により、走行不能となった車両を牽引するためのワイヤー。砲塔周りに2本が搭載されている。車両の前後にはワイヤー用のフックがある。





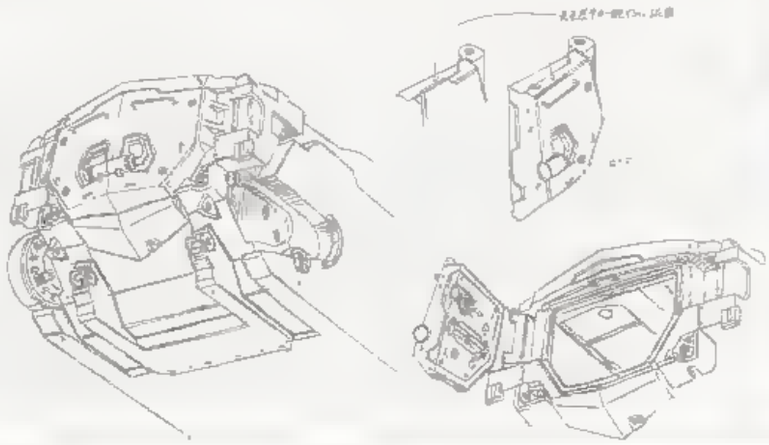
エンジンハッチ

61式戦車はフロントにエンジンを搭載しており（駆動輪は後端）、エンジンにアクセスするハッチも車体前部にある。



後部兵員室ハッチ

上述のように61式戦車はフロントエンジンであるため、車体後部には余剰スペースがある。ここは兵員室となっており、車体後端のハッチから歩兵などが出入りできた。ハッチは両開き式になっている。



高度な電子化が仇となった ミノフスキー粒子散布下の戦い

火砲の強化と電子化の恩恵により、突出した性能を獲得した61式戦車5型であったが、ジオン公国軍によるミノフスキー粒子の散布とMSの戦力化は、その優位性を喪失させてしまった。

レーダーを無力化し、精密電子機器の誤作動を誘発するミノフスキー粒子が、61式戦車5型の能力を担保していたデータリンクシステムをダウンさせたのだ。高度なデータリンクシステムを実装していた61式戦車5型は、1年戦争開戦以前こそ部隊全体が有機的かつ動的に接続されていたが、ミノフスキー粒子によって分断され、各機がスタンドアローンとなってしまったのだった。

結果、火力を司る155mm滑腔砲の命中率が低下したほか、電子機器に大きく依存していた性能全般が制限されることに直結した。これが乗員の負担増に繋がることは明らかだった。ただでさえ外部視界が悪い主力戦車を、電子装備のサポートが弱体化した中、たった2名で操らなければならなくなったのだから当然であった。

高性能化の要諦であった電子化が仇となり、ミノフスキー粒子散布環境下での苦戦を強いられた61式戦車5型を、更なる苦境に追い込む存在があった。それがミノフスキー粒子散布環境下での戦闘を前提としたジオン公国軍の新兵器、MSである。

ミノフスキー粒子散布環境に対応した有視界戦闘能力だけでなく、主力戦車以上の攻防力と機動力を持つMSは、5型を含める61式戦車シリーズを瞬く間に「陸の王者」から転落させた。それでも、61式戦車5型が火力、機動力の両面でMSに対抗できる数少ない陸戦兵器であることは間違いなく、様々な戦術を駆使してジオン公国軍に立ち向かったのだった。



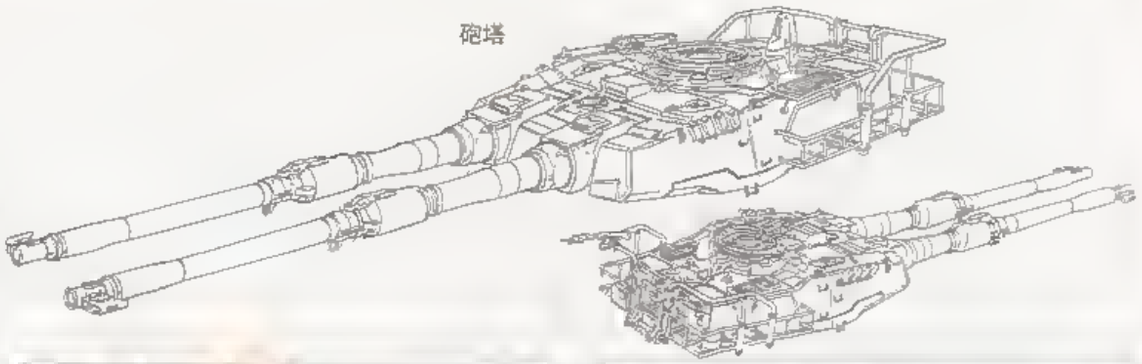
20m近い全高を持つMSだが、外部視界が悪い61式戦車からでは発見が遅れることも多く、奇襲や肇襲を許すことが少なくなかった。

省力化された火力の要にして司令塔

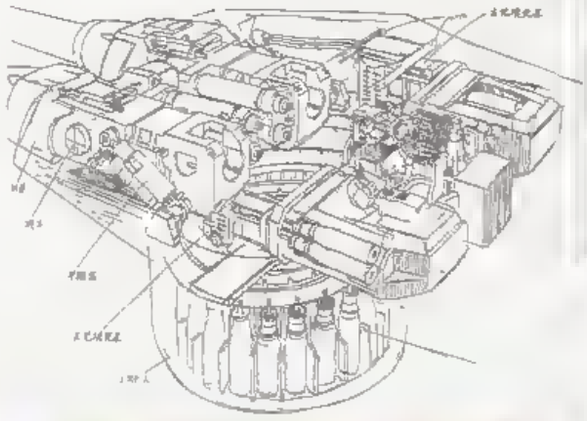
■ ■ ■

61式戦車5型の砲塔は、2門の155mm滑腔砲と自動装填装置を搭載する火力プラットホームであると共に、車長が乗り込む司令塔でもある。砲塔内の人員は車長兼砲手のひとりだけで、これは電子化に伴う省力化だけでなく、大型化した砲システムがもたらした弊害という側面もあった。

砲塔



砲塔内レイアウト





車長席正面のコンソールの向こう側は、砲システムとなっているが、自動化やスペースの都合により砲手も装填手もいない。



砲弾の装填は、自動装填装置が行う。装填装置は砲塔内左右にあり、砲弾は砲塔バスケットや砲塔後部に収納されている。

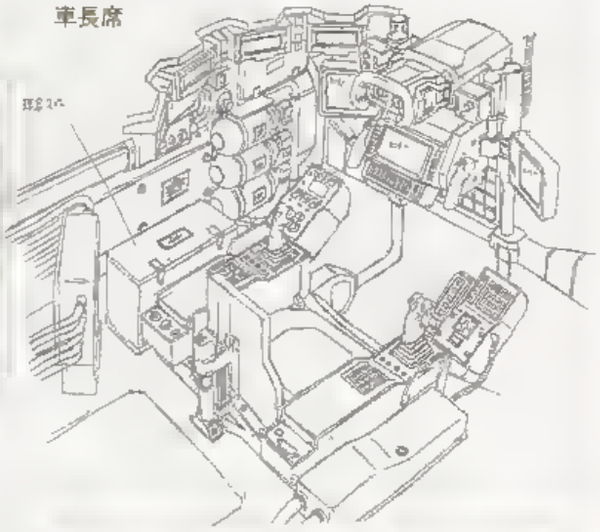


車長が砲手を兼ねるため、砲塔内のシートはひとつのみ。砲塔上部のハッチがひとつだけなのも、これが理由である。

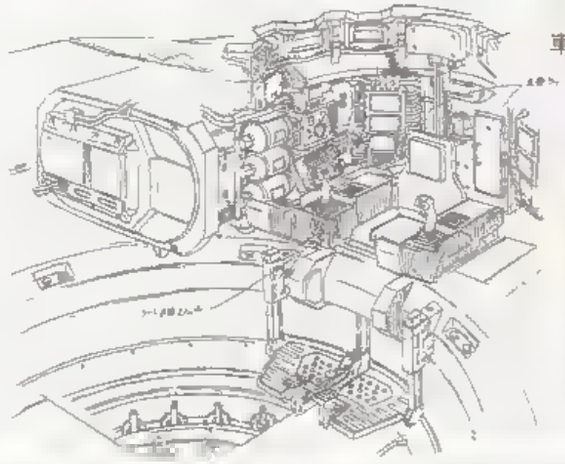


車長と砲手を兼任するため、車長席には砲塔操作装置やドライバー席との通信装置、照準装置、トリガーなどが設置された。

車長席



車長席





外部視界は、外部カメラの映像とペリスコープからの直視によって得られる。それでも視界は悪く、全周囲監視にはほど遠い。

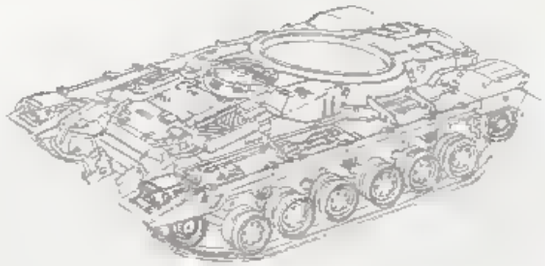


砲手席と統一されたにもかかわらず、車長席は極めて狭く、シートも簡素。これは砲システムの大型化が原因である。

車両内部

戦車の機動を任された車両部分

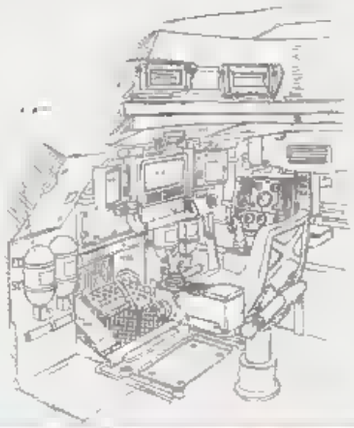
61式戦車5型の車体内部は，前からエンジンルーム、ドライバー席、砲塔リング，兵員室という配置になっており、戦車としては珍しい構造である。車長席が指揮と火器を統率しているのに対して、ドライバー席は車両の機動面を司り、車長の指示に従って運転が行われる。

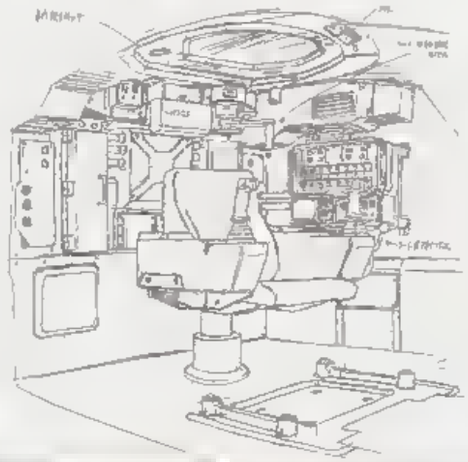




ドライバーハッチは，砲塔リングの直前に配置されている。ドライバー席の床には，脱出用ハッチも設けられている。

ドライバー席







車両の方向転換は一般車両のようなハンドルではなく、各履帯を別個に操作できる、シート左右の操縦桿で行う。



車長席同様，通信用や情報表示用を兼ねた三面モニターが配置されたドライバー席。外視用のペリスコープも設置されている。



モニターとペリスコープがあるとはいえ手狭で，特にミノフスキー粒子散布環境下の夜間戦闘では視界が悪かった。

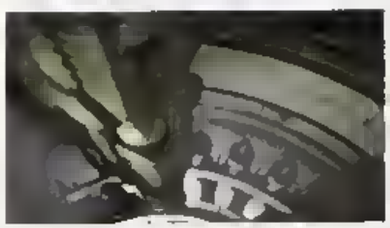


エンジンの始動スイッチはドライバー席にある。スイッチはレバー型が2個設置されており、双方をオンにすることで始動する。

砲撃シークエンス

❶目標の確認と砲弾の選定

車長兼砲手は目標を確認した後，ターゲットに適した砲弾を選択する。あらかじめ目標が分かっている場合には，遭遇以前に砲弾を選定，装弾しておくこともある。



目標がMSや主力戦車といったハードターゲットの場合，APFSDSなどの徹甲弾系が選ばれることが多い。軟目標なら榴弾系である。

❷砲弾の装填

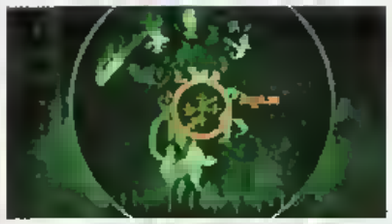
車長兼砲手の選定に従い，自動装填装置が砲弾を装填する。自動装填装置も2基あるため，2門同時に装弾することが可能。各砲に別種の砲弾を装填することも可能と思われる。



155mm砲弾は大重量だが，自動装填装置は一瞬で装弾する。装填した砲弾を取り出し、別の弾を装填することもできる模様。

❸照準と車体の安定化

車長兼砲手が照準スコープを覗き込み，目標を補足，照準する。この間，命中精度低下を避けるため，ドライバーは車長の指示に従い，直線的な移動か停止を行うことが多い。



照準スコープ中央の十文字に目標を捉えることで、照準が行われる。なお，焼夷榴弾や閃光弾では、精密な照準は必要ない。

❹射撃

照準後，車長兼砲手がトリガーを引くことで砲弾が放たれる（トリガーは砲ごとに設置されている模様）。2門同時に発射することも，各砲を別のタイミングで撃つことも可能だ。



照準が完全で，距離が近ければ高確率で命中弾が得られる。砲手の技量によっては，各砲で別の目標を狙うこともできたようだ。

「陸の王者」を駆った者たち

61式戦車5型の乗員の中でも特に有名な人物が、第44機械化混成連隊戦車小隊の指揮官で、車両ナンバー「131」の車長兼砲手を務めたハーマン・ヤンデル中尉である。ヤンデル中尉は、MS通算撃破記録7機を数える戦車エースで、味方にまで「死神と暮らしている」または「死神」と呼ばれた。

中尉はかつてジオン公国軍の"ホワイトオーガー"ことエルマー・スネル大尉のザクⅡに撃破された経験があり、それ以降、敵愾心を燃やし続けていた。最終的にはスネル大尉指揮のザクⅡ小隊を全滅させたものの、その直後、歩兵の対戦車兵器によって戦死している。



スネル大尉機との戦闘で重傷を負い、戦争で故郷も失ったヤンデル中尉は、スネル大尉を討つことですべてを清算しようとした。



ヤンデル中尉の技量は群を抜いており、61式戦車5型の連装砲を駆使し、2目標同時に命中弾を与えたこともある。



スネル大尉撃破に傾倒するあまり、気量しい人物と目された中尉だが、戦死直前、部下のスラー軍曹には胸の内を明かした。







ヤンデル中尉

エルマー・スネル大尉の白いザクⅡの撃破に執念を燃やした戦車隊指揮官。顔や腕には、スネル大尉機との交戦で負った傷跡が残っており、片足は義足であった。スネル大尉機との戦闘のため、連隊長に職動作戦を具申した。

戦闘車両乗務員用のツナギを着用したヤンデル中尉。ツナギの上には、革製のベストを身に着けている。

ドライバーの制服も、基本的に車長と変わらない。革製の戦車帽を着用するのが数少ない相違点である。



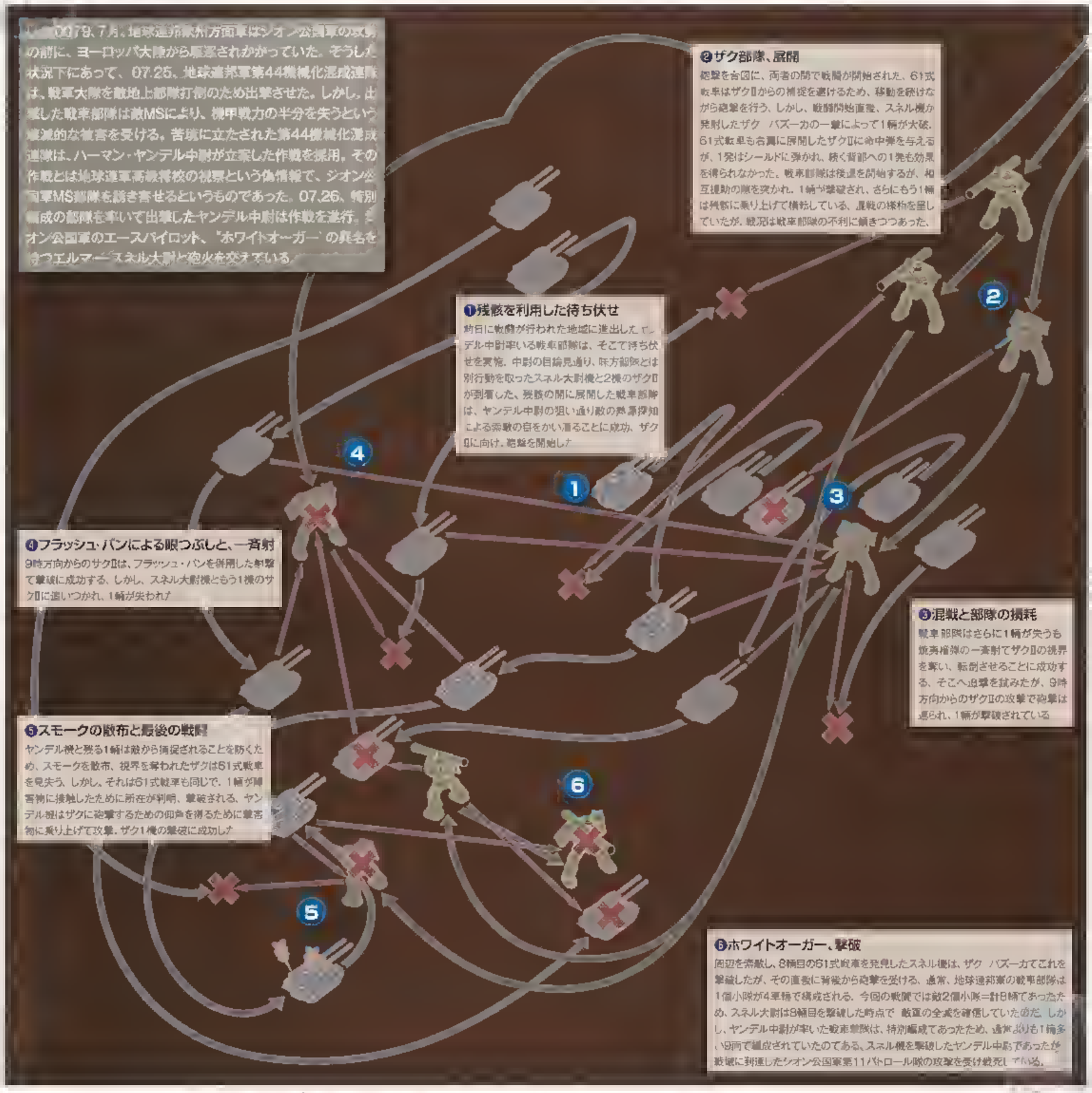


スラー軍曹

ヤンデル中尉が戦死する直前、ドライバーとして配属されたレイバン・スラー軍曹。中尉の行動に疑問を感じながらも、その指揮の下、優れた操縦技術を発揮した。中尉の戦死時には車外にいたため、九死に一生を得た。



61式戦車部隊とホワイトオーガーの戦闘



MS-06J ZakuII TypeJ White Ogre ザクII J型 ホワイトオーガー

ヨーロッパ戦線で勇名を馳せた「白き鬼＝ホワイトオーガー」こと、欧州方面軍所属エルマー・スネル大尉が乗機としたザクII J型。その異名の由来となった白いカラーリングと、頭部とシールドに施されたトカゲのパーソナル・マークが特徴である。エース・パイロット専用機だが仕様は通常のJ型と同じで、その名を轟かせた要因はひとえにスネル大尉の操縦技術によるものにほかならない。特に、彼は280mmザク・バズーカを愛用し、腰部ウェポンラッチには予備弾ケースを装備した。そして、その火力で地球連邦軍の61式戦車を次々と撃破し、「死神」と恐れられたのである。

SPECIFICATION

頭頂高	17.5m
本体重量	56.2t
全備重量	74.5t
ジェネレーター出力	976kW
装甲材質	超硬スチール合金
兵装	120mmザク・マシンガン／280mmザク・バズーカ／ヒート・ホーク／バズーカ用予備弾ケース／Sマイン

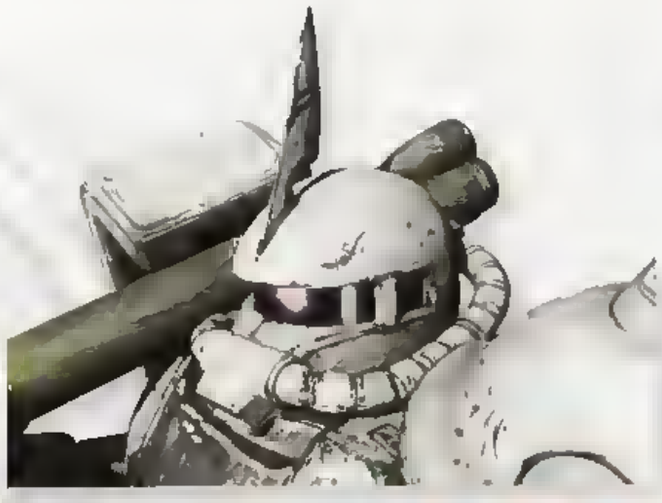


ホワイトオーガーの活躍はジオン公国国営放送で大きく取り上げられるほどであった。



過去にハーマン・ヤンデル中尉の片脚を奪い、恐怖の記憶を植えつけたのがスネル機だった。







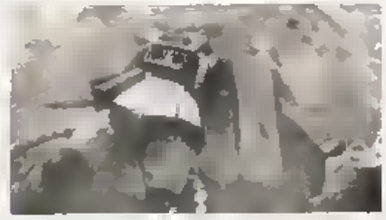
280mmザク・バズーカを構えるスネル機。頭部にはブレード・アンテナが装備されている。



小隊を率いて連邦軍第44機械化混成連隊の陽動に乗った本隊から離れ、ヤンデルの部隊と交戦。



僚機を失いながらも61式戦車2個小隊を殲滅したが、数を偽り残ったヤンデルに背後を取られる。



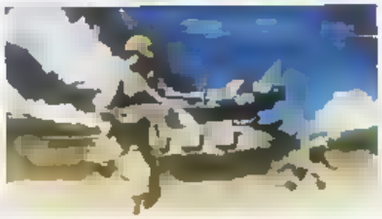
ヤンデルの61式戦車が放った155mm滑空砲の直撃を受け、ホワイトオーガーは大地に伏した。

Principality of Zeon Infantry ジオン公国軍 歩兵

ヨーロッパ戦線に従軍したジオン公国軍歩兵。ヨーロッパ北部地域に展開した欧州方面軍の主力はノイエン・ビッター大佐麾下の地上機動師団だったが、同時にMSを支援する歩兵や機甲部隊も進軍していた。また、占領地域を維持するための哨戒部隊の多くは歩兵によって構成されていた。なお、それらの歩兵はラングペル対戦車ロケット・ランチャーを携行することも多かった。



ジオン国営放送では、欧州方面軍の兵士の姿も伝えられた。



地球連邦軍第44機械化混成連隊の攻撃を受け後退する公国軍地上部隊。



第11パトロール部隊はスネル機を葬ったヤンデルの61式戦車を発見し、撃破している。

RTX-440 Gun Tank RTX-440 陸戦強襲型ガンタンク

窮余の策として生まれた対MS用陸戦兵器



開発中止に追い込まれた陸戦強襲型ガンタンクだが、その戦闘能力はザクIIを超えていた。

SPECIFICATION

全高 13.7m（通常形態）／ 9.2m（突撃砲形態）
全長 25.6m（通常形態）／ 32.9m（突撃砲形態）
全幅 10.9m
乗員 1名
装甲材質 チタン系合金
主武装：220mmキャノン砲×1／脚部4連装ホップガン×1　脚部2連装ホップガン×1／30mm機関砲×1　車載用大型火炎放射器×1
追加武装：MLRS×1、重地雷×4　56連装ロケットランチャー×1

■突撃砲形態



上半身を前傾させ、サブクローラーを接地した「突撃砲形態」は前面投影面積が小さく、機動力もMSを凌駕した。

開発経緯 DEVELOPMENT

RTX-440 陸戦強襲型ガンタンクは、RX-75 ガンタンクと異なり支援機ではなく、対MS戦闘用として開発された点が特徴といえる。

U.C.0071、ジオン公国軍はミノフスキー粒子散布環境下に対応した新兵器、後のMSの開発をスタートした。そしてU.C.0074.02、遂にMS-05 ザクIの試作機をロールアウトするに至ったのだった。

ほぼ同時期にMSの存在を察知した地球連邦軍は、秘密裏にMSの調査を始めると共に、次期主力戦車開発に代表される陸戦兵器の更新を模索していた。結果、地球連邦軍内で推進されたのが、次期主力戦車開発計画および地上兵器更新計画、そしてMS開発計画（後の「RX計画」）だった。これら地球連邦軍の動きは、U.C.0074 ～75頃のものである。

一連の兵器開発計画は本来別個のものだが、次期主力戦車開発計画と「RX計画」が融合し、MSというよりも巨大AFVに近い試作機RTX-44が完成する。RTX-44は後のRX-75 ガンタンクの基礎となった機体だが、実戦に耐えるものではなく、制式採用は見送られることとなった。

だが、1年戦争の開戦がRTX-44の運命を変えた。MSに苦戦を強いられた地球連邦軍は、ザクIIに対抗可能な兵器を求め、凍結されていた兵器開発計画を同時並行的に復活させた。

そのひとつがRTX-44で、機密漏洩というアクシデントに見舞われたものの、改良の末、地上強襲用兵器RTX-440として戦力化されたのである。しかし、RTX-440はMSともAFVともつかない存在で、かつ試作機でも量産機でもない急造兵器に過ぎず、その未来は閉ざされていたも同然だった。



220mmキャノン砲やMLRS、重地雷など搭載しており、当時の陸戦用機動兵器としては最高クラスの火力を誇っていた。



急造兵器とはいえ、対MS戦では高い性能を発揮した。しかし、その真の姿は、自爆装置を備えた特攻兵器であった。

対MS戦闘能力を付与する新機構群

RTX-44を原型とするRTX-440は、開発系譜を同じくするRX-75 ガンタンクと似た外見を持つ。これはポップガン内蔵の腕部や、下半身に相当する履帯式機動ユニット、背部形状などに顕著である。

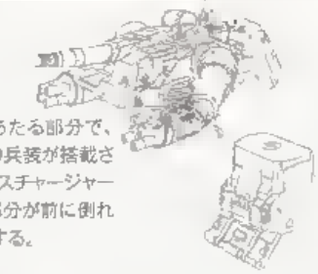
しかし、コア・ブロック・システムを採用せず、前傾姿勢を可能とした腹部や、機動性を向上させるサブクローラー、これらの機構によって達成された「突撃砲形態」なと、対MS戦闘能力と高度な機動力を付与するギミックが追加された。結果、RTX-440はRX-75とは異なる「戦闘兵器」となっている。



サブクローラーを使用することで、敵の戦闘車輌などを踏み潰しての走行も可能であった。



砲塔部
RTX-440の上半身にあたる部分で、砲塔やポップガンなどの兵装が搭載されている。スモークディスチャージャーなども装備する。この部分が前に倒れて突撃砲形態へと変形する。



センサーユニット
ガンタンクの頭部にあたる部分で、ふたつのセンサーが設置される。左右非対称の独特の形状となっていた。ここにもスモークディスチャージャーが装備されている。



燃料タンク
車載大型火炎放射器用の燃料タンク。車体後方の左右に1基ずつ設置されている。爆発ボルトも設置されており、使用後はこれを用いた取り外しも可能。

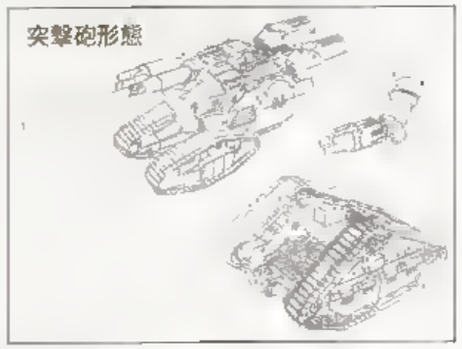


ポップガン
左右の腕部に内蔵された火器。右腕は4連装、左腕は2連装と車載用大型火炎放射器、30mm機関砲を組み合わせた複合火器となっている。



キャタピラ
RTX-440の移動を司る部位。メインのキャタピラと、その前部に装着されたサブクローラーのふたつで構成される。突撃砲形態では、サブクローラーが前に展開し、その上を上半身が跨う形となる。

突撃砲形態

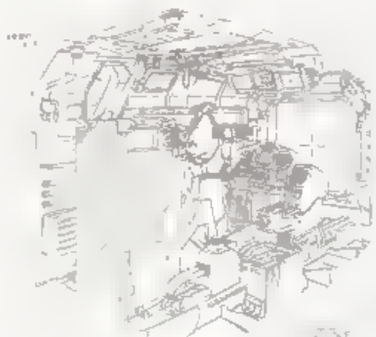


RX計画の影響が強いコクピット

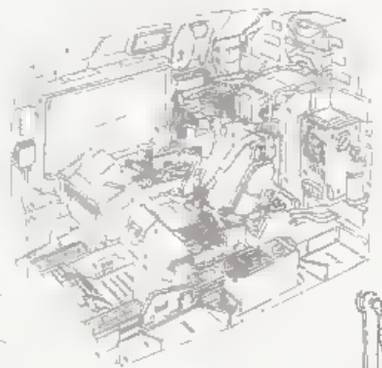
RXT-440は技術系譜上、「RX計画」の機体であり、各部にその影響が見受けられる。コア・ブロック・システム系、あるいはその後のRGM-79 ジム系MSに近いコクピットがそのひとつである。RTX-440のコクピットは、引き出し式の照準器やモニター類の配置、正面コンソールなどがほかの地球連邦軍系MSとほぼ同じだった。



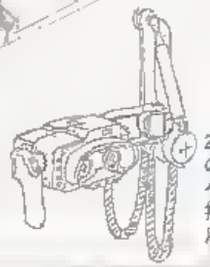
1年戦争時の連邦系MSのコクピットとほぼ同じ配置。自爆装置は独自装備である。



正面コンソールにコア・ファイター系コクピットの影響が見受けられる。多数のサブモニターも配置された。



正面だけでなく、側面にも大型モニターが配置されており、61式戦車と比べて遥かに外部視界が広い。



220mmキャノン砲用の照準器。シートのヘッドレスト側部に接続されており、使用時のみ引き出す。

コクピットハッチは、操縦席の天井部分にある。ハッチは機体左腕の上部に繋がっている。

陸戦強襲型ガンタンクの武装

RTX-440は、RX-75のように充実した固定武装を持つ機動兵器で、履帯側部に追加武装を施すことで更なる高火力を獲得した。RTX-440は、これらの武装を使い分けることで、あらゆる距離帯での戦闘に対応可能であり、対MS戦闘兵器の傾向を強くしている。ここで紹介するもの以外にも、30mm機関砲や車載火炎放射器、そして「自爆装置」が設置された。

ポップガン

右腕に4門、左腕に2門が搭載される機関砲タイプの火器。対MS用としては威力不足だが、マゼラ・アタック程度なら撃破も可能で、近接戦闘では特に有効である。



計6門が搭載され、制圧能力に秀でる。腕部に固定されているため射角も広い。



左腕部には、車載大型火炎放射器が内蔵されていた。その威力はマゼラ・アタックをも撃破した。

220mmキャノン砲

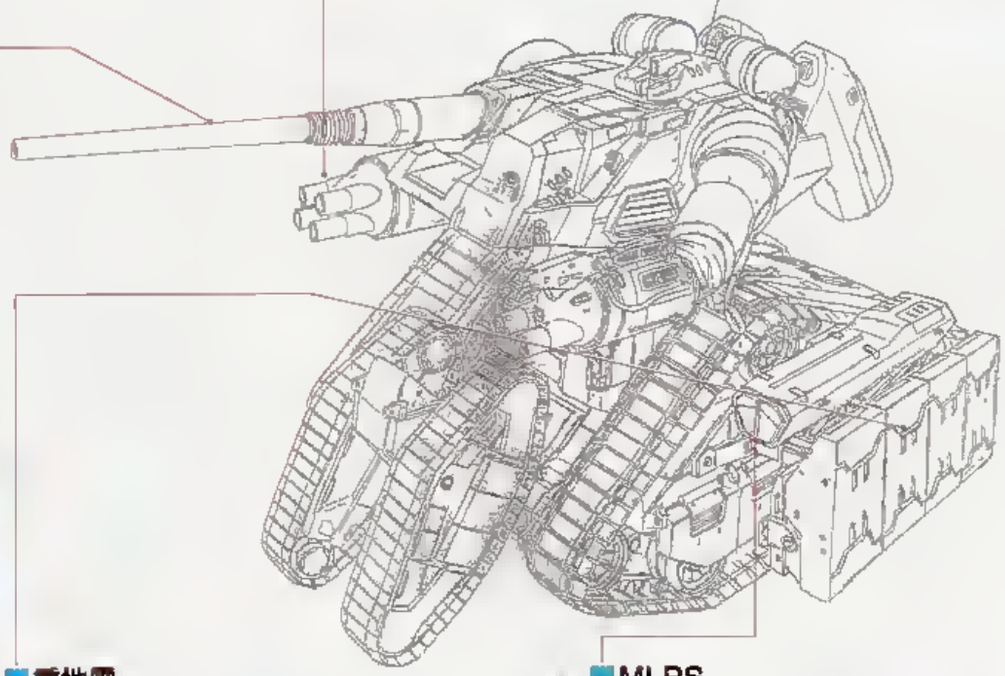
右胸に固定装備された大口径キャノン砲。交戦距離にかかわらず使用され、一撃でMSを撃破可能である。射撃時には照準器を用いることが多かった。



RX-75とは異なり、単装だったが、それでもMSを一撃で撃破するほどの威力を誇った。



ザクIIは当然のこと、装甲が強化されたグフ・タイプMSをも一撃で破壊した。

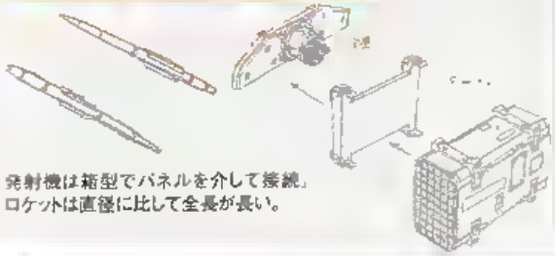


56連装ロケットランチャー

履帯左側面に外装された連装ロケットランチャー。MLRSと異なり、近～中距離のターゲットに直射する火器で、多数のロケットを連射するため制圧力も高い。



一度にすべてを発射するのではなく、20発程度を連続発射する方法が採られた。



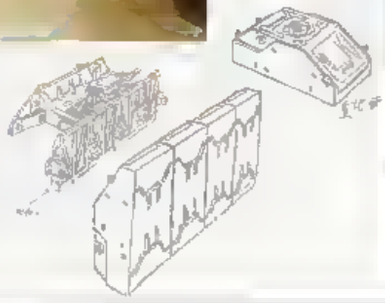
発射機は箱型でパネルを介して接続。ロケットは直径に比して全長が長い。

重地雷

マウントを介して履帯の横に搭載される重地雷は、4基が装備される。移動経路上に投下するもので、単発の破壊力はRTX-440用武装の中で最大級と思われる。



後方から追尾してくる敵機に使用することが多い、対MS用としても有効な兵器である。



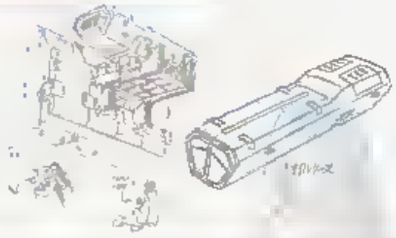
マウントの側面に搭載され、投下後数秒で爆発する。オデッサ戦では、右履帯側面のマウントに装備された。

MLRS

Multiple Launch Rocket Systemの略で、長距離攻撃用として使用された多連装ロケット発射機。履帯側部のマウント上に装備される。



射程を延ばすため、斜め上に向けて発射する。実戦では部隊単位で同時発射した。



陸戦型ジム用のミサイル・ランチャーと同型。重地雷用マウントのステー上に搭載されていた。

復讐に燃える囚人部隊

3機のRTX-440を任されたのは、アリーヌ・ネイズン技術中尉率いる囚人部隊であった。

ネイズン中尉は、RTX-440の機密漏洩を幇助したとして、終身刑をいい渡されていた。しかし、スパイ行為を働き、ジオン公国へ奔ったとされたのは中尉の恋人クライド・ベタニーであり、中尉自身は無実だった。収監された中尉は、RTX-440の搭乗員となることを条件に出獄を許され、ベタニーへの復讐心を胸に戦場に降り立ったのである。技術士官だったネイズン中尉だが、RTX-440の開発に関与していたためか、性能特性を心得ており、多くの敵機を撃破した。



RTX-440を駆るネイズン中尉ら囚人部隊は、各地を転戦し、オデッサに辿り着いた。



◀ミロス・カルッピ技術少尉

囚人部隊のひとりで、RTX-440の2番機を任された。技術士官であり、常時、前線での戦闘を強要された。



▶ドロバ・クズワヨ曹長

3番機に搭乗する同部隊のパイロット。ザクIとの交戦時に、機体を損傷させたため、自爆、最初の犠牲者となってしまった。







最初期型のMSパイロット用ヘルメットとジャケットを着用したネイズン中尉。恋人への復讐心が表情に表れている。

◀アリーヌ・ネイズン技術中尉

RTX-440の開発に携わった技術士官、恋人のスパイ行為に連座して収監されたが、囚人部隊隊長として復帰。RTX-440を操った。



オデッサ戦では独立混成第44旅団に配置され、陸戦型ジムの支援と敵防衛網の突破に投入された。

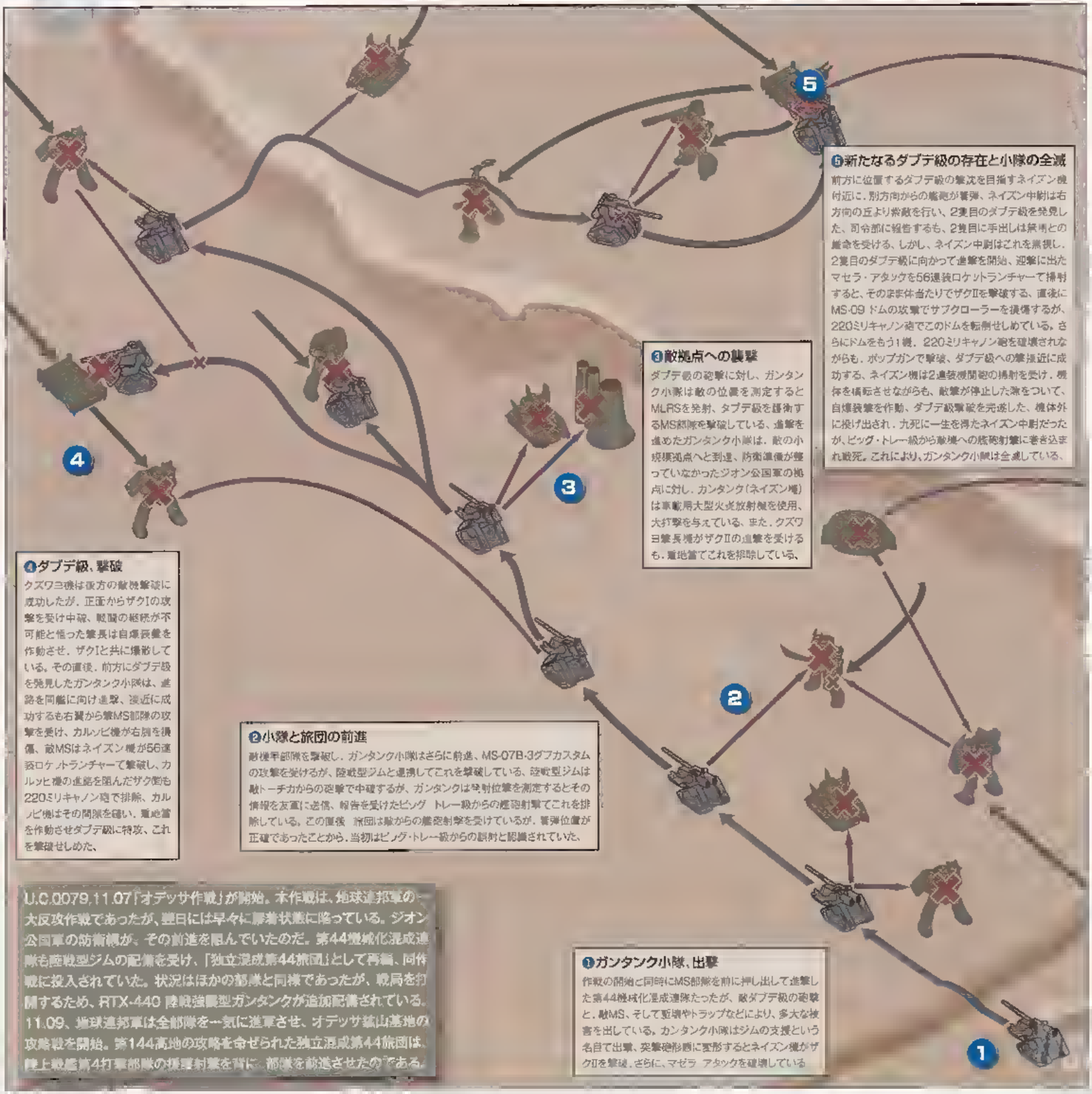


隊の先陣を切ったネイズン中尉機は、味方MS部隊を超える力を発揮し、ジオン公国軍のMSや戦闘車両を次々撃破した。



クズワヨ曹長は対MS戦で、カルッピ少尉はダブデ級陸戦艇への攻撃でそれぞれ自爆を行っている。

第144高地攻略戦



❶ガンタンク小隊、出撃
作戦の開始と同時にMS部隊を前に押し出して進軍した第44機械化混成連隊だったが、敵ダブデ級の砲撃と、敵MS、そして塹壕やトラップなどにより、多大な被害を出している。ガンタンク小隊はジムの支援という名目で出撃、突撃砲形態に変形するとネイズン機がザクIIを撃破、さらに、マゼラ・アタックを破壊している

❷小隊と旅団の前進
敵機甲部隊を撃破し、ガンタンク小隊はさらに前進、MS-07B-3グフカスタムの攻撃を受けるが、陸戦型ジムと連携してこれを撃破している。陸戦型ジムは敵トーチカからの砲撃で中破するが、ガンタンクは発射位置を測定するとその情報を友軍に送信、報告を受けたビッグ・トレー級からの艦砲射撃でこれを排除している。この直後、旅団は敵からの艦砲射撃を受けているが、着弾位置が正確であったことから、当初はビッグ・トレー級からの誤射と認識されていた。

❸敵拠点への襲撃
ダブデ級の砲撃に対し、ガンタンク小隊は敵の位置を測定するとMLRSを発射、ダブデ級を護衛するMS部隊を撃破している。進撃を進めたガンタンク小隊は、敵の小規模拠点へと到達、防衛準備が整っていなかったジオン公国軍の拠点に対し、ガンタンク（ネイズン機）は車載用大型火炎放射機を使用、大打撃を与えている。また、クズワヨ隊長機がザクIIの進撃を受けるも、重地雷でこれを排除している。

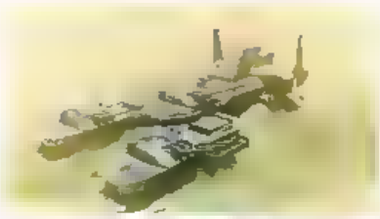
❹ダブデ級、撃破
クズワヨ機は後方の敵機撃破に成功したが、正面からザクIの攻撃を受け中破、戦闘の継続が不可能と悟った隊長は自爆装置を作動させ、ザクIと共に爆散している。その直後、前方にダブデ級を発見したガンタンク小隊は、進路を同艦に向け進撃、接近に成功するも右翼からMS部隊の攻撃を受け、カルッピ機が右脚を損傷、敵MSはネイズン機が56連装ロケットランチャーて撃破し、カルッピ機の進路を阻んだザク個も220ミリキャノン砲で排除、カルッピ機はその間隙を縫い、重地雷を作動させダブデ級に特攻、これを撃破せしめた。

❺新たなるダブデ級の存在と小隊の全滅
前方に位置するダブデ級の撃沈を目指すネイズン機付近に、別方向からの艦砲が着弾、ネイズン中尉は右方向の丘より索敵を行い、2隻目のダブデ級を発見した、司令部に報告するも、2隻目に手出しは無用との厳命を受ける、しかし、ネイズン中尉はこれを無視し、2隻目のダブデ級に向かって進撃を開始、迎撃に出たマゼラ・アタックを56連装ロケットランチャーて撃破すると、そのまま体当たりでザクIIを撃破する、直後にMS-09 ドムの攻撃でサブクローラーを損傷するが、220ミリキャノン砲でこのドムを転倒せしめている。さらにドムをもう1機、220ミリキャノン砲を破壊されながらも、ポップガンで撃破、ダブデ級への接近に成功する、ネイズン機は2連装機関砲の掃射を受け、機体を横転させながらも、敵撃が停止した隙をついて、自爆装置を作動、ダブデ級撃破を完遂した、機体外に投げ出され、九死に一生を得たネイズン中尉だったが、ビッグ・トレー級から敵機への艦砲射撃に巻き込まれ戦死。これにより、ガンタンク小隊は全滅している、

U.C.0079.11.07「オデッサ作戦」が開始。本作戦は、地球連邦軍の一大反攻作戦であったが、翌日には早々に膠着状態に陥っている。ジオン公国軍の防衛線が、その前進を阻んでいたのだ。第44機械化混成連隊も陸戦型ジムの配備を受け、「独立混成第44旅団」として再編、同作戦に投入されていた。状況はほかの部隊と同様であったが、戦局を打開するため、RTX-440 陸戦強襲型ガンタンクが追加配備されている。11.09、地球連邦軍は全部隊を一気に進軍させ、オデッサ鉱山基地の攻略戦を開始。第144高地の攻略を命ぜられた独立混成第44旅団は、陸上戦艦第4打撃部隊の援護射撃を背に、部隊を前進させたのである。

Heavy Fork-class ヘビィ・フォーク級陸上戦艦

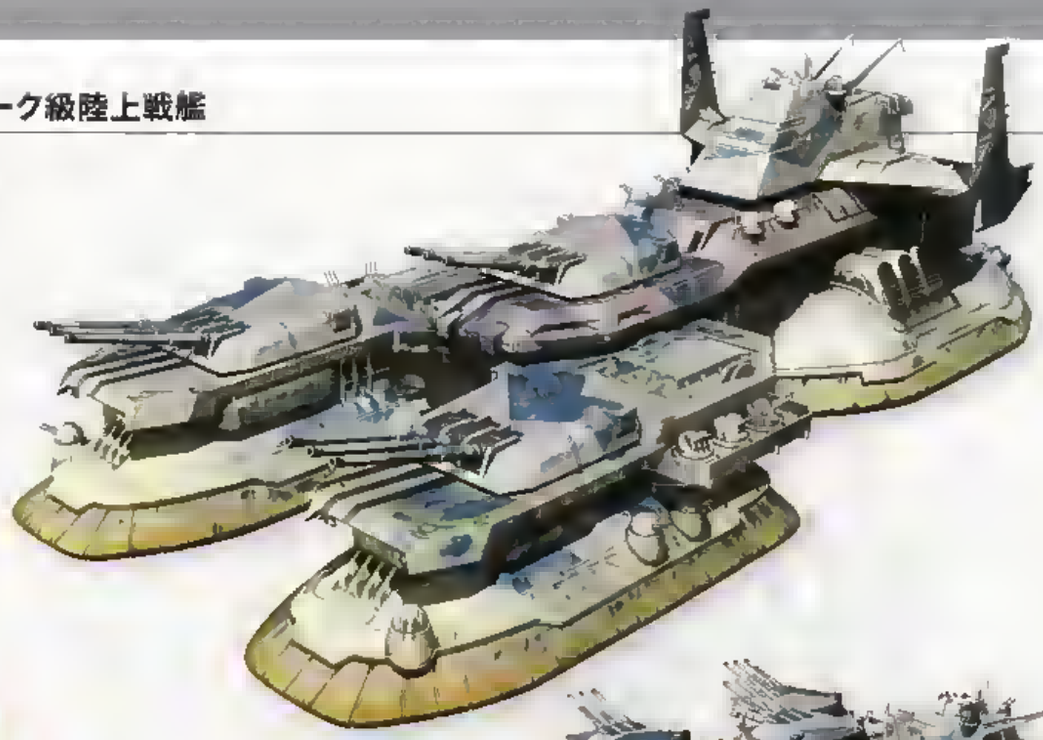
地球連邦軍が運用した陸上戦艦。艦首部分が双胴状になった特徴的な構造で、余裕を持たせた上部甲板に3基の3連装砲を配している。その設計は艦前方に対する打撃力を重視したものであり、攻撃型陸上戦艦と呼ばれる場合もある。ビッグ・トレー級と並んで地球連邦地上軍の火力支援を担い、オデッサ戦では陸上戦艦第4打撃部隊の戦力として投入され、機械化部隊の前進を支援した。



オデッサ戦に参加した第4打撃部隊のヘビィ・フォーク級。

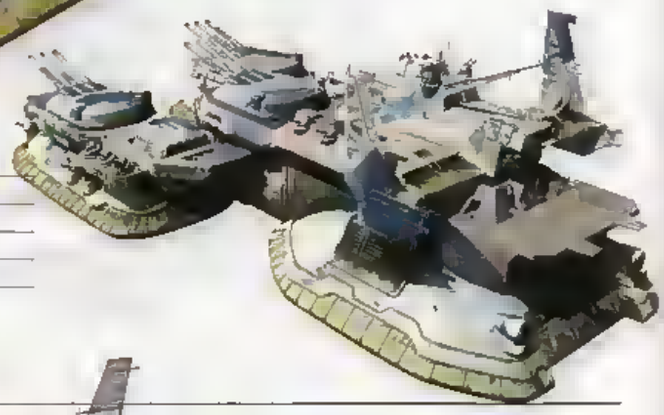


陸上兵器としては最大級の火力を誇り、支援砲撃に威力を発揮した。



SPECIFICATION

全長	210m
全高	66m
全幅	107m
兵装	3連装主砲×3／3連装砲×6／2連装砲×12



Big Tray-class ビッグ・トレー級陸上戦艦

地球連邦軍が地上戦力の要とした陸上戦艦。艦首に大型砲2基と艦体の前後に計3基の3連装砲塔を備え、大型ホバー・クラフトによって地上を移動する。主に地球連邦地上軍の移動司令部として運用された。オデッサ戦には、作戦総司令部として機能したレビル将軍の乗艦「バターン」のほか、陸上戦艦第4打撃部隊にも配備されていた。



ヘビィ・フォーク級2隻を従えた陸上戦艦第4打撃部隊のビッグ・トレー級。



ドラゴン・フライを索敵機として、ミノフスキー粒子散布下の指揮を行った。



SPECIFICATION

全長	215m
全高	85m
全幅	134m
兵装	艦首大型砲×2／3連装砲×3

RGM-79G GM Ground Type RGM-79G 陸戦型ジム

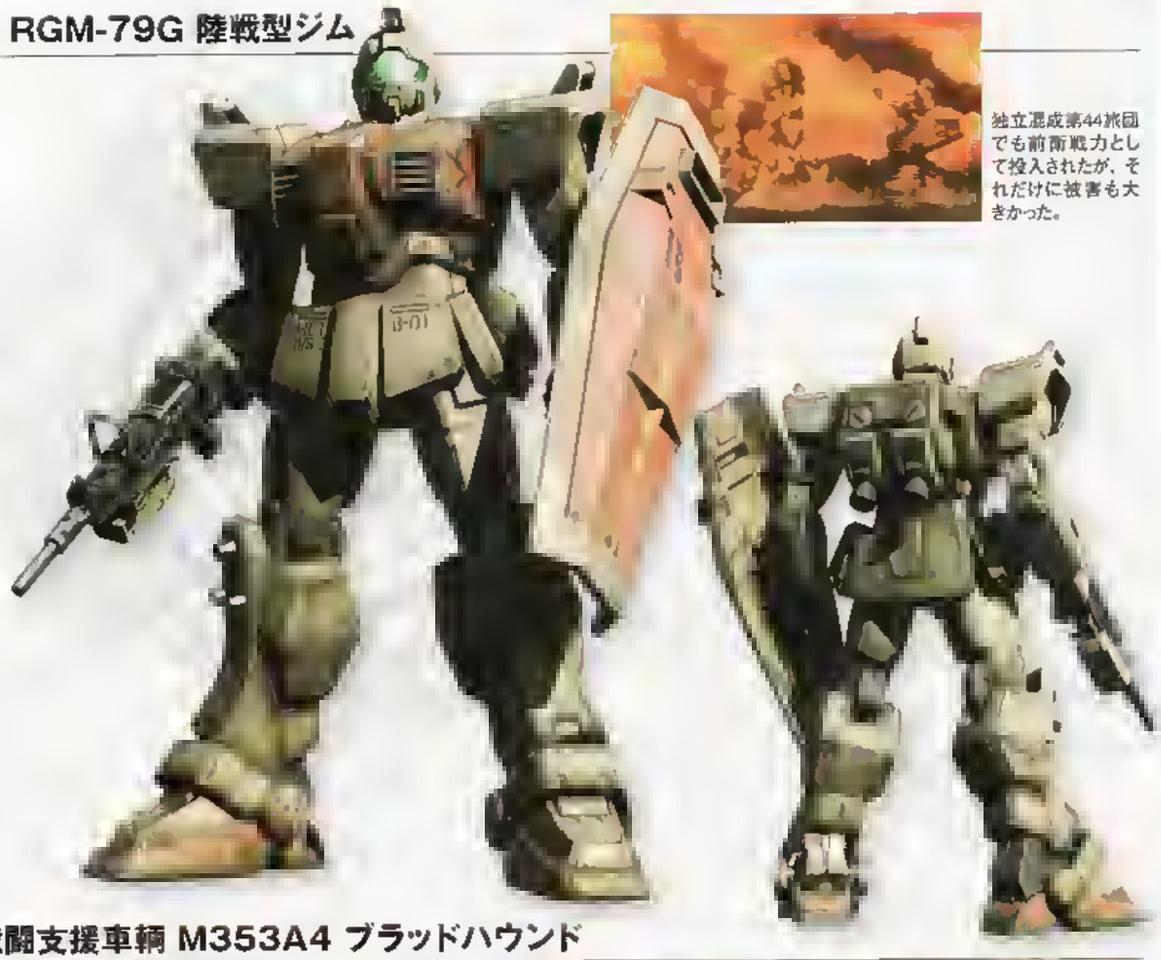
地球連邦地上軍の主力となった陸戦用MS。前線からのMS配備要求に応えて急速開発された機体で、RX-79[G] 陸戦型ガンダムの生産ラインとパーツの大半を流用している。RGM-79 ジムの先行量産型を上回る性能を有していたが生産性は低く、少数が一部の地上軍に配備されるにとどまった。また、独立混成第44旅[illegible]でも戦力の中核を担った。

SPECIFICATION

全高:18.0m
本体重量:53.8t
全備重量:66.0t
ジェネレーター出力:1,150kW
スラスター推力:49,000kg
装甲材質:ルナ・チタニウム
兵装:ビーム・サーベル×2、100mmマシンガン/シールドほか



オデッサ戦の陸戦型ジムは、投入数こそ少なかったが地球連邦軍の切り札として運用された。



独立混成第44旅団でも前衛戦力として投入されたが、それだけに被害も大きかった。

M353A4 Blood Hound MS戦闘支援車輌 M353A4 ブラッドハウンド

MSを支援するために開発された軍用特殊車輌。ホバー・クラフトの不整地走破性と、アンダーグラウンド・ソナーなどの装備による優れた情報処理能力を有し、連邦地上軍のMS戦術の中枢として運用された。また、オデッサ戦に参加した独立混成第44旅[illegible]では、ミケーレ・コレマッタ少佐がブラッドハウンドに搭乗して前線指揮を執っている。

SPECIFICATION

全長:9.4m
全高:3.3m
全幅:6.3m
兵装:20mmチェーンガン/スモーク・ディスチャージャー



MSの進出速度に追従可能な走行性能を有し、小隊との連携によって戦果を上げた。



右側ホバー・ユニットを省略した車体底面。ユニットは計4基を備える。



指揮を執る将校が露天状態になったカーゴ・ブロックに搭乗する場合もあった。

Dabde-class ダブデ級陸戦艇

ジオン公国軍地上戦力の中心となった大型陸上兵器。6基の3列式キャタピラによる安定した走破性能を誇り、地上部隊の移動司令部として運用された。また、2連装大型砲2基の支援砲撃能力も高く、MS部隊の展開を助けた。オデッサ戦にはマ・クベ大佐の乗艦をはじめ、多くが投入されたといわれている。

SPECIFICATION

全長 109m
全高 44m
全幅 93m
兵装 2連装大型砲×2／2連装機関砲×6



左右に張り出した独特の形状の砲塔を有する。砲塔は旋回も可能であった。





144高地には2隻のダブデ級が配備され、砲撃によって地球連邦軍の前進を阻んだ。



MSの運用能力は持たなかったが、後部に2機程度のMSを搭載可能。



MS-09 Dom MS-09 ドム

1年戦争後期に実戦投入されたジオン公国軍の局地戦用重MS。ホバー走行によって陸上で優れた機動性を発揮し、その高速性能を活かした一撃離脱を基本戦法とした。オデッサ戦の第144高地における攻防では、後方のダブデ級に肉迫したRX-440 陸戦強襲型ガンタンク（ネイズン機）に対して、2機のドムが防戦にあたっている。

SPECIFICATION

頭頂高 18.6m
本体重量 62.6t
ジェネレーター出力 1,269kW
スラスター推力 58,200kg
装甲材質 超硬スチール合金
兵装 ヒート・サーベル／拡散ビーム砲／360mmジャイアント・バズ



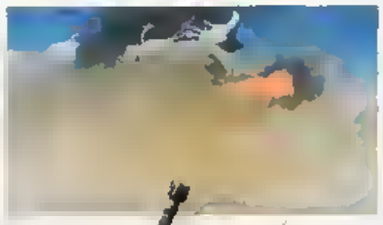
ホバー移動の高機動性は通常のMSを凌駕し、陸戦における強力な武器となった。



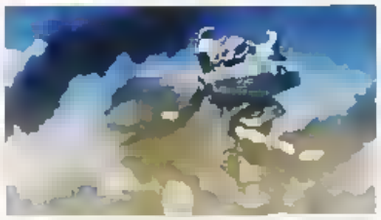
陸戦強襲型ガンタンクのキャノン砲を両断するも、反撃を受けて撃破される。

MS-07B-3 Gouf Custom MS-07B-3 グフ・カスタム

MS-07B グフに改修を施して汎用性の向上を図ったジオン公国軍の局地戦用MS。固定兵装に偏っていたグフの仕様を見直し、高い白兵戦能力を維持しつつオプション兵装の運用を可能としている。ただし、格闘戦重視の機体で高い操縦技術が要求されることから運用例は少なく、オデッサ戦にもごく少数が投入されたのみだったと見られる。



敵の機槍で脚を止められ、陸戦強襲型ガンタンクのキャノン砲の直撃を受けた。



第144高地に配置したジオン公国軍部隊の中にも、グフ・カスタムの姿が確認されている。





SPECIFICATION

頭頂高	18.2m
全高	18.7m
本体重量	58.5t
全備重量	77.6t
ジェネレーター出力	1,034kW
スラスター推力	40,700kg
装甲材質	超硬スチール合金
兵装	ヒート・ロッド／ヒート・サーベル／3連装ガトリング砲

PVN.44/1 Weasel 水陸両用装輪偵察警戒車 PVN.44/1 ヴィーゼル

ジオン公国軍地上戦力の斥候役を担った6輪駆動の軽装甲車。水密構造と航行用スクリューを有し、水上走破性能を備えることから「イタチ」を意味する車体名が与えられたとされる。地球侵攻のために開発された車輌であり、地球侵攻作戦の当初から地上の各戦線で偵察や哨戒、兵員輸送といった多様な任務に運用された。

SPECIFICATION

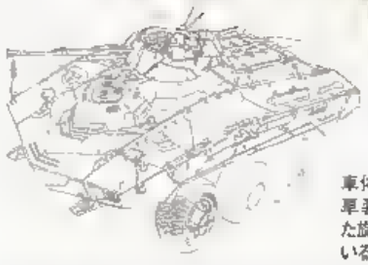
全長	6.9m
全幅	3.8m
全高	2.7m（アンテナを含まず）
兵装	37mm機関砲／マズラ MG74/S車載機関銃／スモーク・ディスチャージャー





下は収納式のスクリューで、左は車体底面のサスペンション周辺。





車体上面中央には、軽装機関砲を備えた旋回砲塔を有している。





兵器としての特性上、歩兵部隊と行動を共にするケースが多かったと見られる。

Magella-Eins マゼラ・アイン空挺戦車

ジオン公国軍がコロニーなどへの侵攻を前提に開発した戦闘車輌。「空挺戦車」の名称が表すように、空中輸送や空挺戦術を想定しており、運用性を高めるために車体の小型化が図られている。地球降下作戦において降下部隊の一翼として投入され、その性能を示した。また、オデッサ戦においても防衛戦力として運用されている。

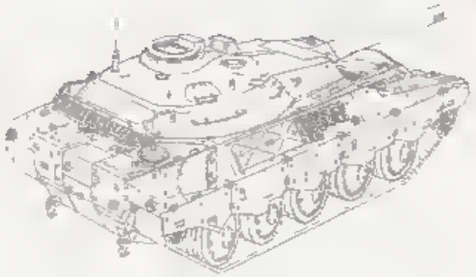


SPECIFICATION

全長 7.7m
車体長 6.6m
全高 2.4m（アンテナ、車載機銃を含まず）
全幅 3.4m
乗員 4名
兵装 133mm戦車砲　車載機関銃マズラMG74　主砲同軸機関銃／スモーク・ディスチャージャー



地球降下作戦では投下カプセルで地上に展開し、公国軍の版図拡大を支えた。





オデッサ戦では地球連邦軍の進撃に押されて、後退するマゼラ・アインも見られた。

Tochika トーチカ

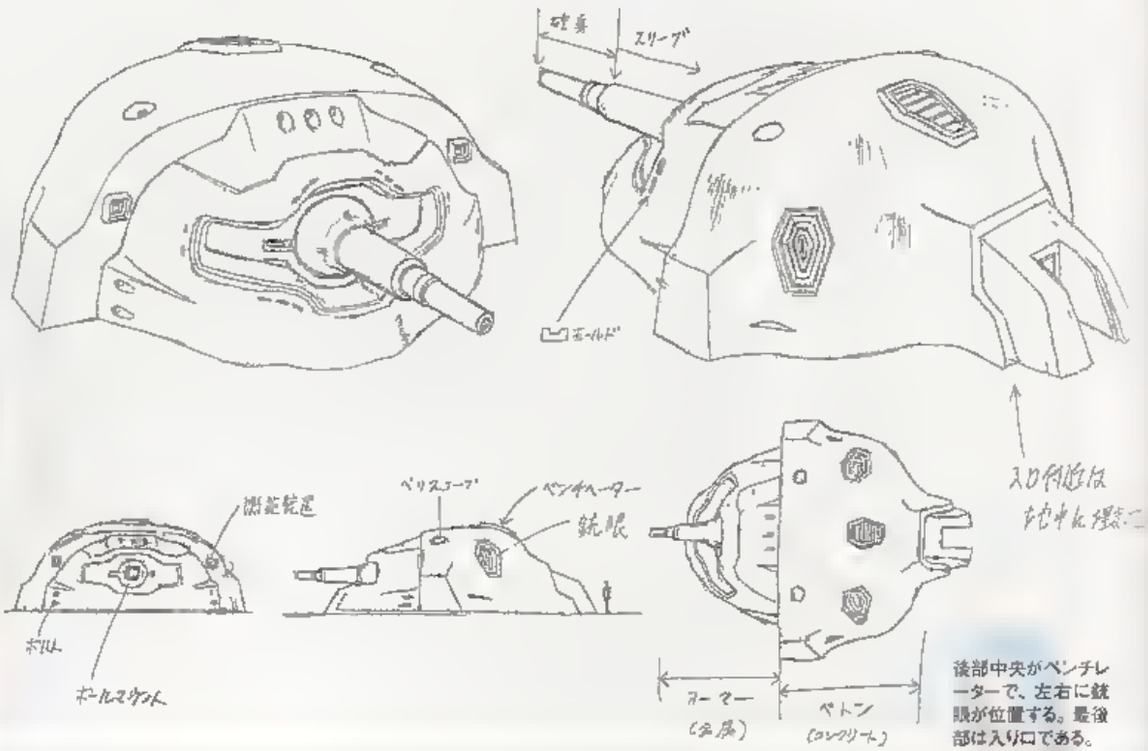
ジオン公国軍が地上の重要拠点に設置したトーチカ。単装砲で武装しており、前部が砲塔と金属製のアーマー、後部がベトン（コンクリート）のシェルターとなっている。また、ペリスコープや測距装置、銃眼、ベンチレーターを備えており、間に合わせの施設ではなかったと考えられる。オデッサにも多数のトーチカが配置され、地球連邦軍の進攻を食い止める役割を果たした。

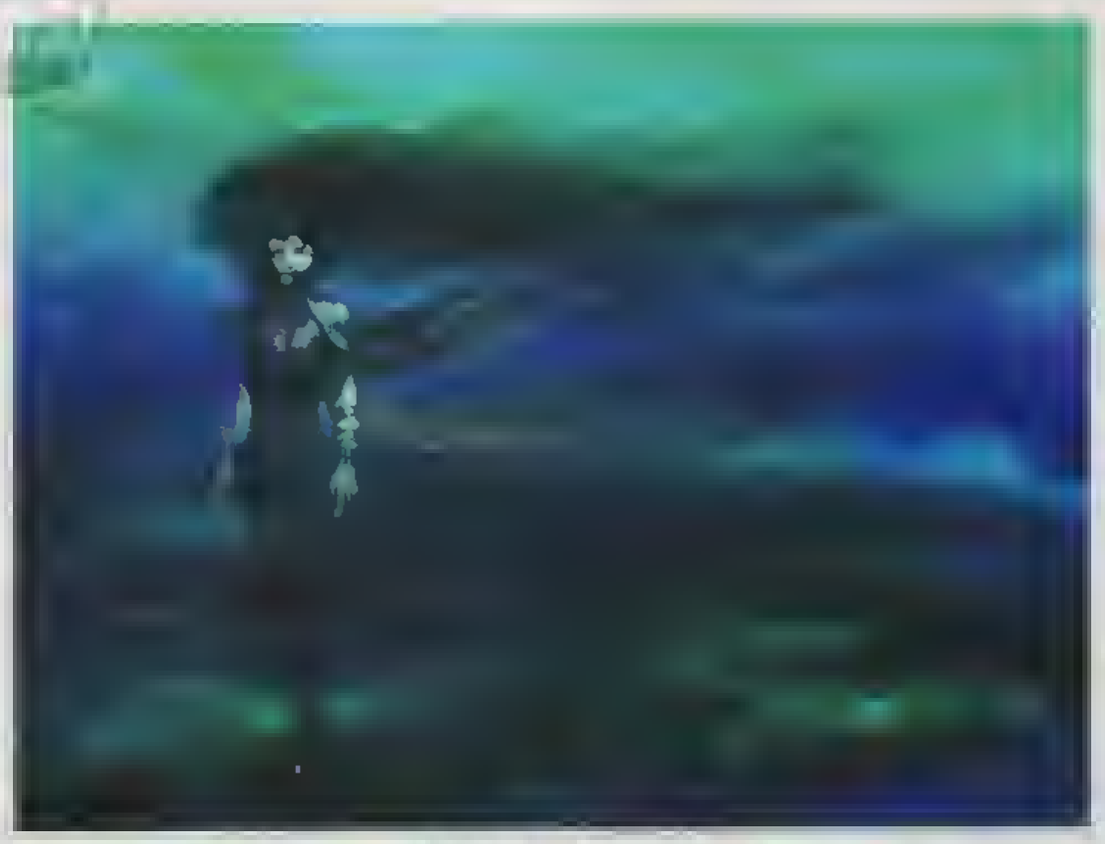


第144高地にも無数のトーチカが設置されており、独立混成第44旅団の前進を阻んだ。



固定目標となるため長距離砲撃に弱く、ビッグ・トレーからの攻撃で撃破された。



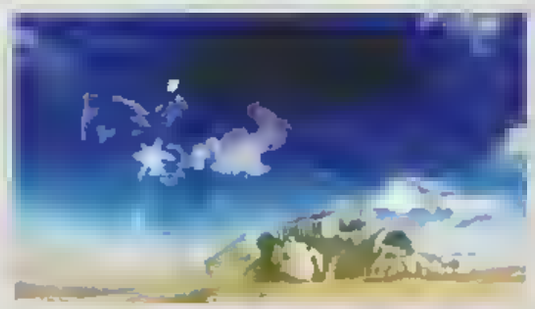


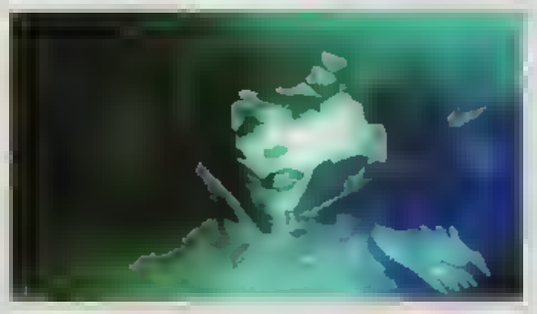
死神

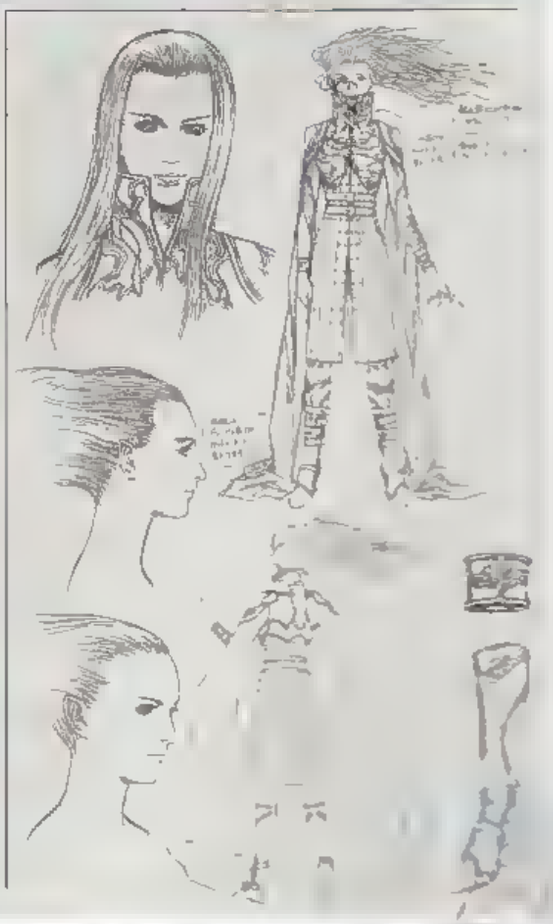
重力の井戸に顕現した魂の導き手

戦場を彷徨う兵士たちの魂。それに導かれるように、死神は重力の井戸の底――地球へと姿を現す。死神は強い想いを抱く兵士に憑付き、戦いへの衝動や復讐心、恐怖心をかきたて、彼らを死地へと向かわせたのである。オデッサにも姿を現した死神は最後にこう呟いた。「地獄の門は未だ閉じず」と……。









■死神に魅入られた人々

アリーヌ・ネイズン技術中尉



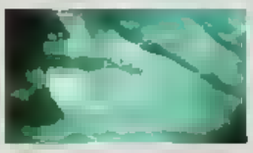
囚人兵で構成されたRTX-440陸戦強襲型ガンタンク部隊を率いた。情報と共にジオンに寝返ったかつての恋人クライド・ベタニーに対し、強い復讐の念を抱いていた。そして、オデッサ戦で、ベタニーの乗るダブデ級を撃破する。しかし、そこへ現れた死神にベタニーが二重スパイであったと知らされ、絶望に打ちひしがれる。

ベン・バーバリー中尉



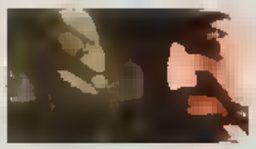
対MS特技兵小隊を率いる地球連邦軍士官で、多くの部下を戦場で失ったことから周囲に「部下の血を吸う死神」と噂されていた。彼は前線へと赴く車中で、死神と遭遇する。その後、ザクIIに向け発射しようと構えたリジーナのスコープに、死神の姿を認めている。

エルマー・スネル大尉



`ホワイトオーガー`の異名を持つジオン公国軍のエースパイロット。白く塗られた機体を愛機としていたことから、こう呼ばれていた。彼もまた死神に憑付かれており、毎夜、悪夢にうなされていた。ヤンデルの61式戦車を撃破したことで悪夢から解放されると考えたが、彼のモニターには笑みを浮かべる死神の姿が映し出された。

ハーマン・ヤンデル中尉



戦車小隊の指揮官。かつて`ホワイトオーガー`に撃破され、重傷を負う。それ以来、ホワイトオーガーに復讐心をたぎらせていた。その執念深さは部隊内からも「死神と暮らしている」といわれるほどであった。そしてヤンデル中尉の61式戦車のドライバーを務めたスラー軍曹は、彼に憑付いた死神を見ている。

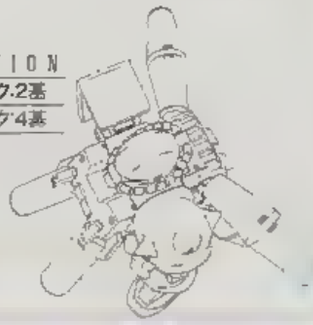
ザクII用試作プロペラントユニット

新技術の開発に一石を投じたシステムの功罪

ザクIIの戦闘継続時間や航続距離の延長するために開発されたものが、この試作プロペラントユニットである。胸部に2基、ランドセルに4基のプロペラントタンクを外装化することで、航続距離などの延長を図ろうとしたの。この試みは成功し、計算値では従来のザクIIの6倍もの作戦行動範囲の拡大に成功、「航続距離延伸評価試験」でも高い効果を発揮した。しかし、試験中に爆発事故を起こしたため、結果的にプロペラントタンクの設置は見送られている。

SPECIFICATION

胸部プロペラントタンク:2基
背部プロペラントタンク:4基



プロペラントタンクが前後に大きく張り出していることが分かる。



その効果は絶大であったが、構造上、被弾時の安全性などにも疑問が残る。

RB-79N フィッシュアイ

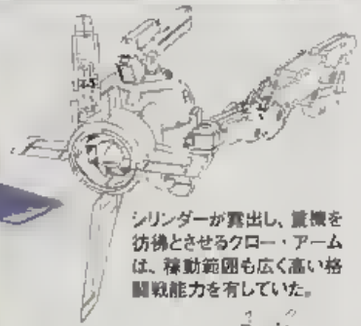
1年戦争中期の海洋戦略を担った水中用の機動兵器

RB-79Nフィッシュアイは、ボールを水中用に改造した機体である。元々、高い機密性に加え、生産コストが安価であることからもボールが水中用の兵器のベースに選ばれた理由とされる。水中用への改装に当たって、本機には大型の推進器とテール・ラダー、クロー・アーム、バンパーやライトが搭載された。また武装も「連装式ロング・スピア」に換装されている。こうして完成したフィッシュアイは、各地の海洋部隊に配備され、潜水艦などを母艦として活躍したのである。

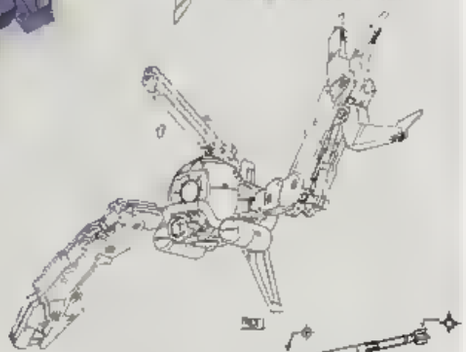
SPECIFICATION

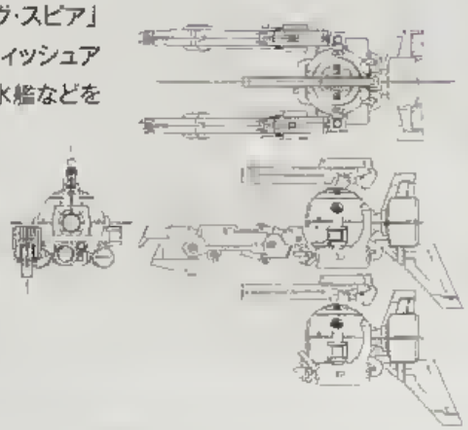
全高 14.1m（テール・ラダー含まず）
本体重量 28.2t
ジェネレーター出力:425kW
最大速力:29ノット（潜水時）
武装 連装ロング・スピア





シリンダーが露出し、筋機を彷彿とさせるクロー・アームは、稼動範囲も広く高い格闘戦能力を有していた。



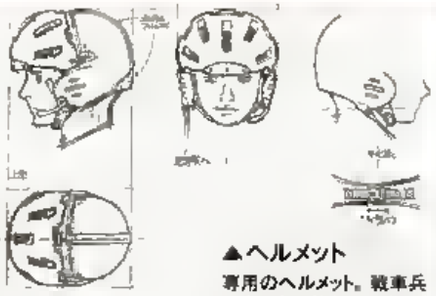




連装ロング・スピアの弾頭。名称と形状から炸薬を内蔵した射出式の銛状の兵器であったと推測される。

機動戦士ガンダム MS IGLOO
Mission Complete
設定資料集

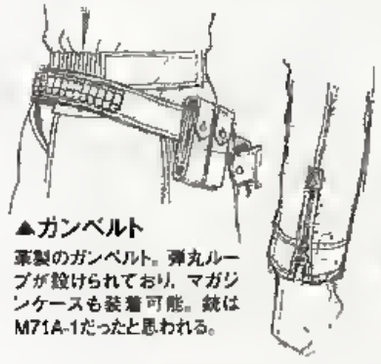




▲ヘルメット
専用のヘルメット。戦車兵のものとは異なり、バイザーなどが設けられている。ヘルメットには通信機が内蔵されている。



袖を下ろした図。肩の部分にワッペンを付けることもあった。



▲ガンベルト
革製のガンベルト。弾丸ループが設けられており、マガジンケースも装着可能。銃はM71A-1だったと思われる。

ガンタンク兵コスチューム

専用の制服ではなく、61式戦車搭乗員と同じツナギを着用していた。しかし、ヘルメットやベストは専用のものだったと思われる。また、ガンベルトも装備するパイロットもいたとされる。

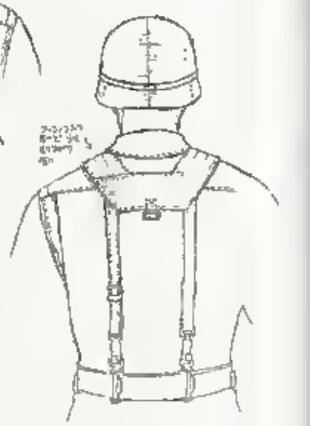


MSパイロット用とも異なり、アリーヌ・ネイズン中尉たちの使用例が知られる程度である。

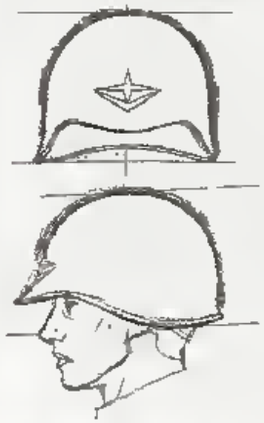




◀▼ウェブサスペンダー（H型ハーネス）
ポーチや小物類を装着するためのもの。肩にはクッションが入っており、ベルトとはフックで接続した。



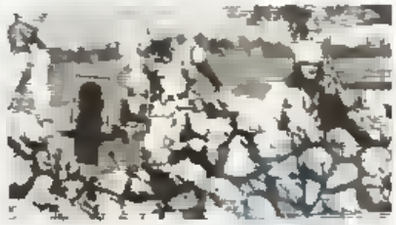




◀ヘルメット
地球連邦軍の標準的なヘルメット。ひさしの部分が高く、正面には地球連邦軍のマークが付いている。

地球連邦軍一般歩兵

地球連邦軍の歩兵に広く着用された制服。1年戦争を通じてこれが用いられた。左胸には個人名が、肩には階級章や部隊章が取り付けられた。また、ブーツはゲートル付きとなっている。半袖のものもあった。



一般の歩兵だけではなく、対MS特技兵もこの制服を着用していた。



▲▶車長用
ヘッド・セット

車長はベレー帽を着用し，その上からヘッド・セットを装着する。ベレー帽には，中心よりやや左側に地球連邦軍のマークが付いている。

▲操縦手用ヘッド・ギア

操縦手には専用の戦車帽が用意されている。縫面材を革で包んだもので，額には樹脂製のパッドを備える。

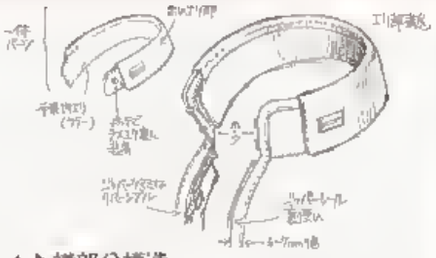
戦車長／操縦手用コスチューム

地球連邦軍の戦車長（上）と操縦手（下）が着用するコスチューム。特殊被服に分類され、戦車兵のそれは「タンカーズオーバーオール」と呼ばれる。ホルスターや大型のポケットが付いた革製のベストも身に付けていた。



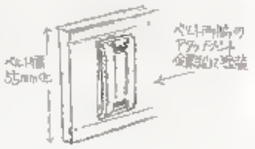
61式戦車をはじめ，戦闘車輌の乗員共通のコスチュームとして用意されていた。





▲▶襟部分構造

士官用制服の襟部分は2重構造となっている。制服の襟の上から階級章などが付いたカラーを装着する仕組みだった。









▶革製長靴

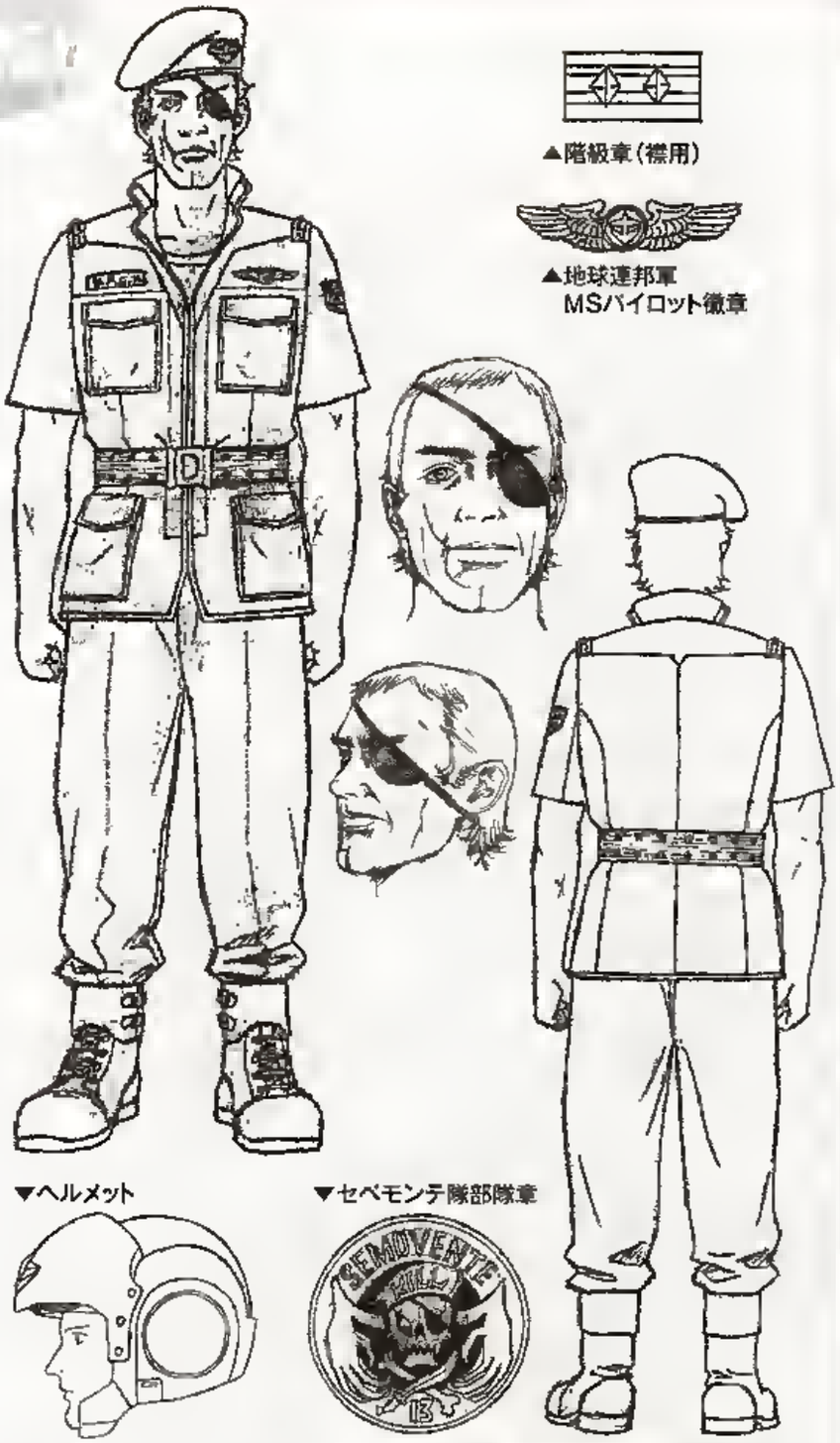
歩兵用とは異なり，士官以上は革製の長靴を着用した。くるぶしの位置に円形のパッドがあり，上部には長靴を履く際に指をかけるハンドルがある。

地球連邦軍士官用コスチューム

士官用の制服は一般歩兵用のそれとは異なっている。ヘルメットではなく、制帽が用意されており、靴も編み上げのブーツではなく、革製の長靴に変更されている。ズボンもサイドポケットのないタイプである。



士官以上は共通の仕様だったが，いくつかのバリエーションもあったようだ。



▲階級章(襟用)

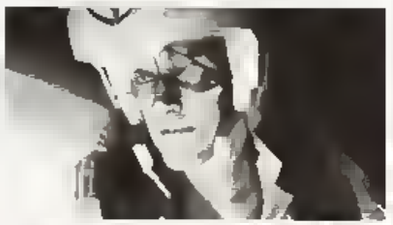
▲地球連邦軍
MSパイロット徽章

▼ヘルメット

▼セベモンテ隊部隊章

フェデリコ・ツァリーノ中佐

「セベモンテ隊」の隊長を務めたフェデリコ・ツァリーノ中佐は「M-199D サービスユニフォーム」を着用。一般歩兵用のバリエーションのようにも見える。ブーツにはレギンスが設けられるなど、細部が異なっている点が見受けられる。



この制服にヘルメットを着用し、MSを操縦していた。左目は負傷のためか、アイパッチを付けている。

地球連邦軍の装備類

歩兵は火器以外にも多様な装備を身に付けている。ここでは、地球連邦軍の地上部隊の兵士の装備の一部を紹介する。MSなどの様々な新兵器が登場した宇宙世紀の戦場だが、歩兵の装備は旧世紀とほぼ同じであった。



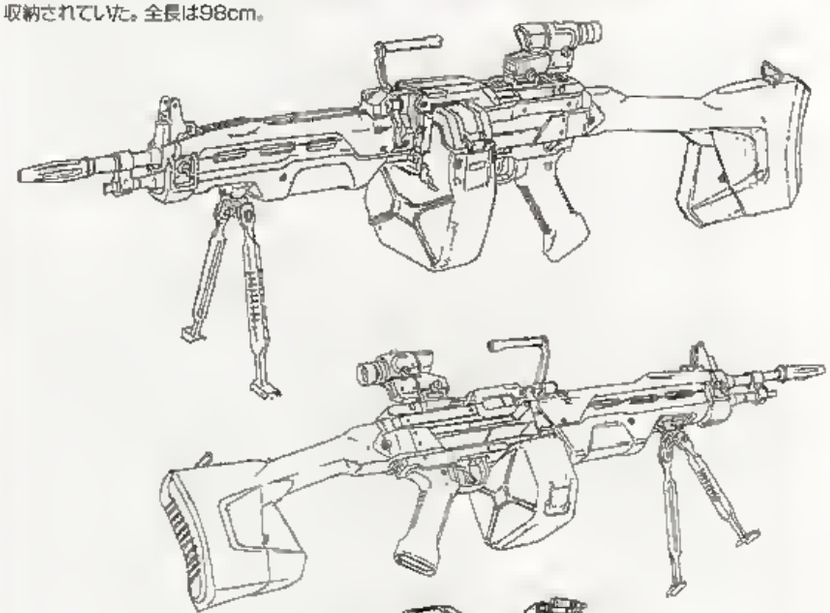
戦場の主役はMSであったが、歩兵も生き残るために様々な装備を駆使して戦い抜いた。

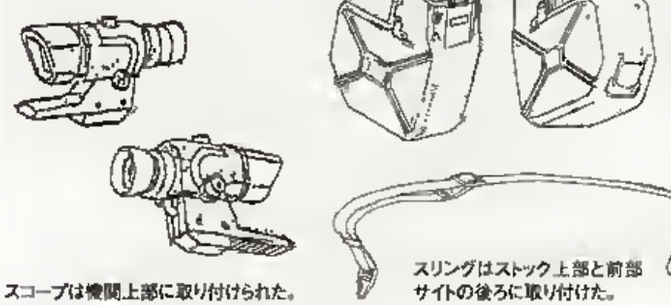
■M-299 分隊支援機関銃

地球連邦軍の歩兵が使用した支援機関銃。各分隊に一丁が配備された。スコープ(ダットサイト)の装着が可能で、通常はボックスマガジンを使用していた。ストックは分割式で、内部には整備器具が収納されていた。全長は98cm。



車載も可能で、ラコタなどに搭載して運用されることもあった。





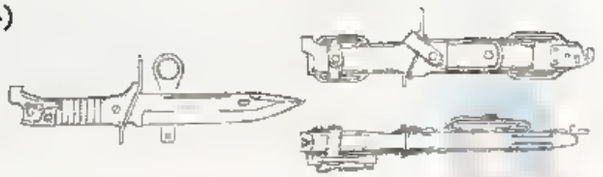
マガジンはプラスチック製であった。総弾数は不明。

スコープは機関上部に取り付けられた。

スリングはストック上部と前部サイトの後ろに取り付けた。

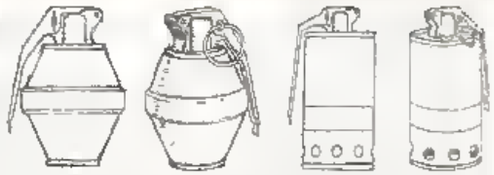
■ナイフ(バヨネット)

M-72A1に取り付けバヨネットとしても使用された。ポケットには砥石を入れるケースと、ワイヤーカッターを備える。全長30cm。



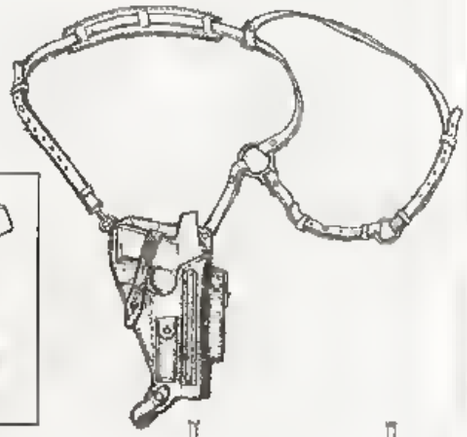
■破片手榴弾／発煙手榴弾

破片手榴弾(M-167A1/全高12cm)は、爆発後周囲に破片をばら撒くタイプ(左)。発煙手榴弾(M-81/全高18cm)は煙で目くらましや位置を知らせるのに使用(右)。



■ホルスター

士官や歩兵が使用したショルダーホルスター。表面にはメンテナンス用の小物入れ、側面には予備弾倉を収めたポーチを備える。

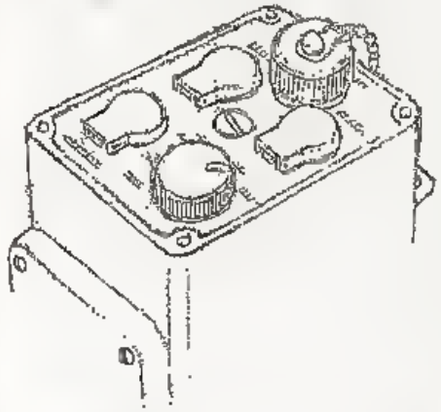


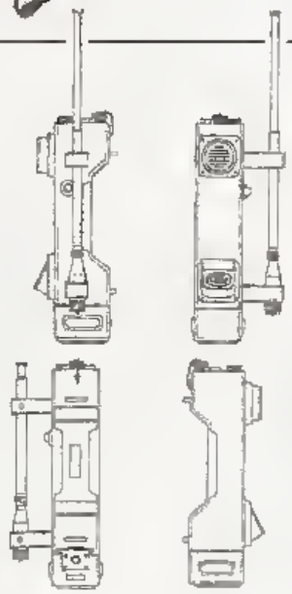


■M-71A1
制式拳銃

■トランシーバー

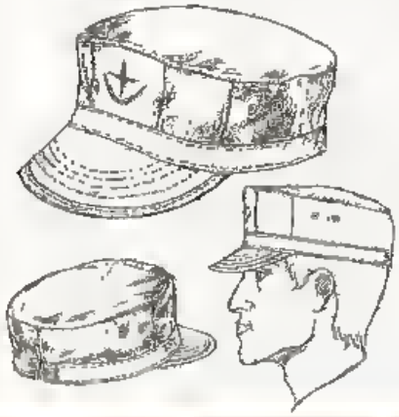
ミノフスキー粒子の影響のためか、トランシーバーなどの通信機は旧世紀のそれと同じかそれ以上に大型化している。上部にはダイヤルなどがある。





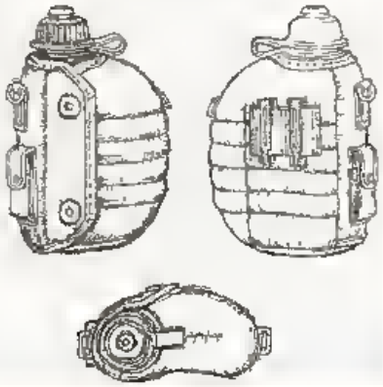
■作業用キャップ

M70やTYPEIIともいわれるが、制式名称は不明。コットン製の簡素な作りとなっている。後ろにはサイズ調整用の紐がある。



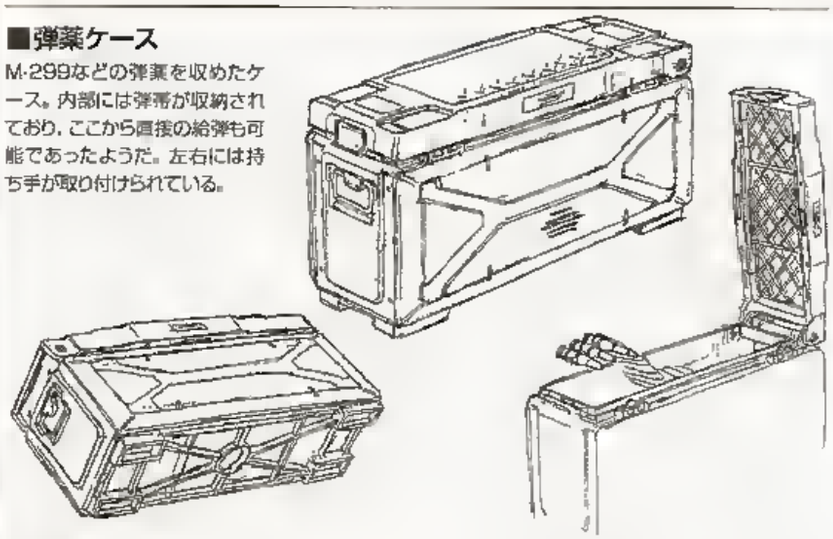
■水筒

ベルトなどに装着するため、体の形に合わせた形状となっている。前面のポケットは洗浄剤入れ。吸い口を除いた全高は18cm。



■弾薬ケース

M-299などの弾薬を収めたケース。内部には弾薬が収納されており、ここから直接の給弾も可能であったようだ。左右には持ち手が取り付けられている。



■各種ポーチ

ベルトやハーネスなどには各種のポーチが取り付けられた。これらは弾薬をはじめ、医療キットなどの小物を収納するためのもので、用途に合わせて様々なサイズのポーチが用意されていた。

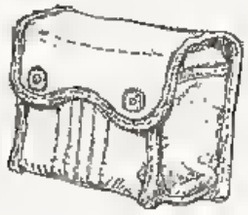


20連マガジンが3本収納できるマガジンポーチ。左右には手榴弾用のストラップを備える。

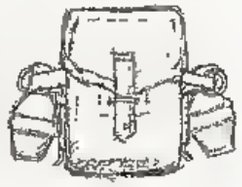




コンパスや小物を収納する汎用小物入れ。高さ11cm。



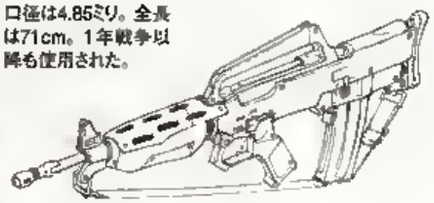




ファーストエイドキットや小物用の汎用ポーチ。高さ12cm。

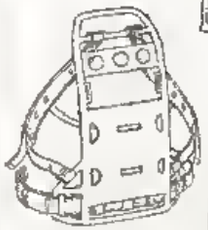


M-72A1の30連マガジン用のポーチ。高さは27cm、幅は10cm。



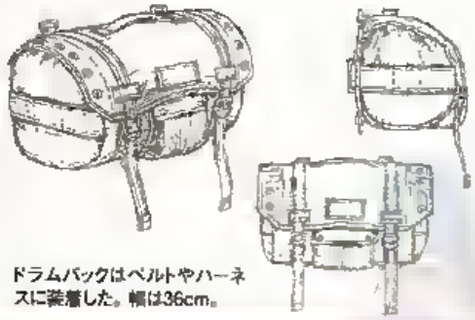
口径は4.85ミリ。全長は71cm。1年戦争以降も使用された。

■M-72A1制式ライフル





バックフレームは、リジーナの弾などの大型の荷物や大容量を運ぶ際に用いられた。



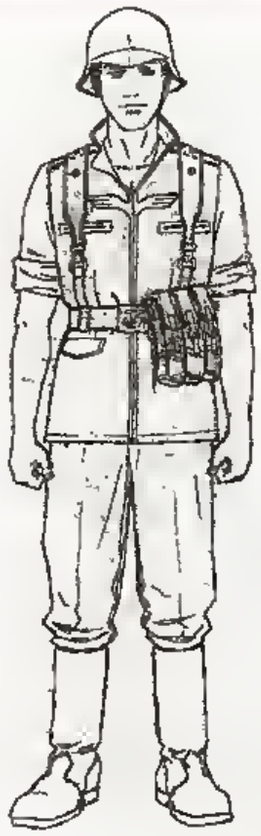
ドラムバックはベルトやハーネスに装着した。幅は36cm。





一般歩兵用のヘルメット。前面にひさしがあるほか、左右も広がった形状となっている。









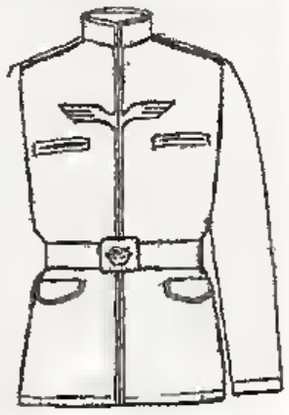




ヘルメットの下にはバラクラバ（目だし帽）を着用することもなった。寒冷地や砂漠などで多く用いられたようだ。



制服自体は詰襟のような形状であったが、兵士の多くは襟を開けてラフに着こなしていた。また、下士官や士官用には、襟に階級を示す紋様が付く。



ジオン公国軍一般歩兵用制服

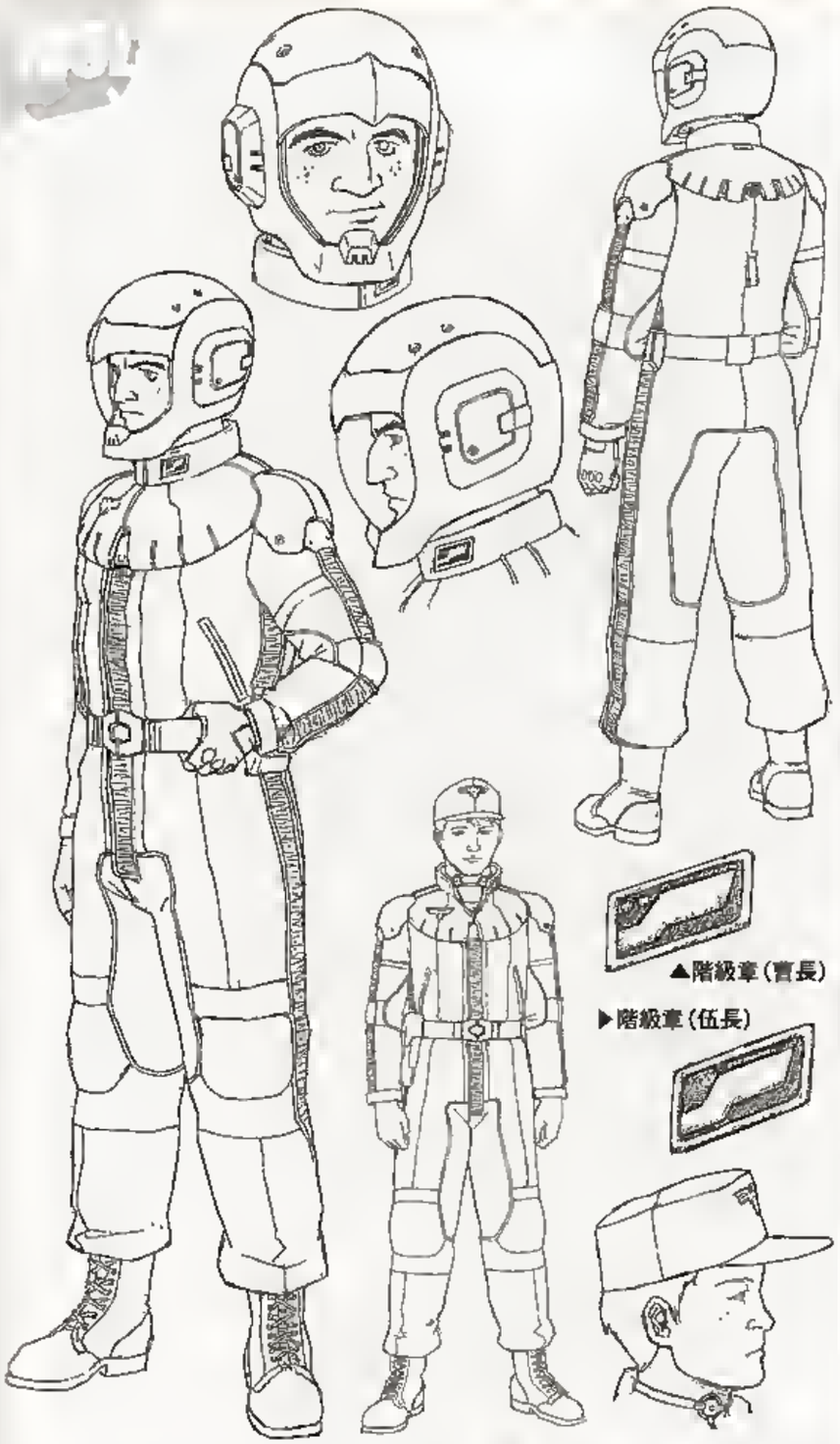
ジオン公国軍が使用した制服はいくつかのバリエーションが存在する。これはその中でもベーシックなものとされる「第2種戦闘服」と呼ばれる制服である。ヘルメットや帽子、サスペンダーの有無などの違いはあるが、歩兵の多くはこれを着用していた。また、ツナギタイプのもの加え、士官用やテストパイロット用の第2種戦闘服も用意されていた。



地球降下作戦に参加した将兵の多くがこの第2種戦闘服を着用していた。



ジャン・リュック・デュバル少佐は、士官用の第2種戦闘服と制帽を使用した。



▲階級章（曹長）

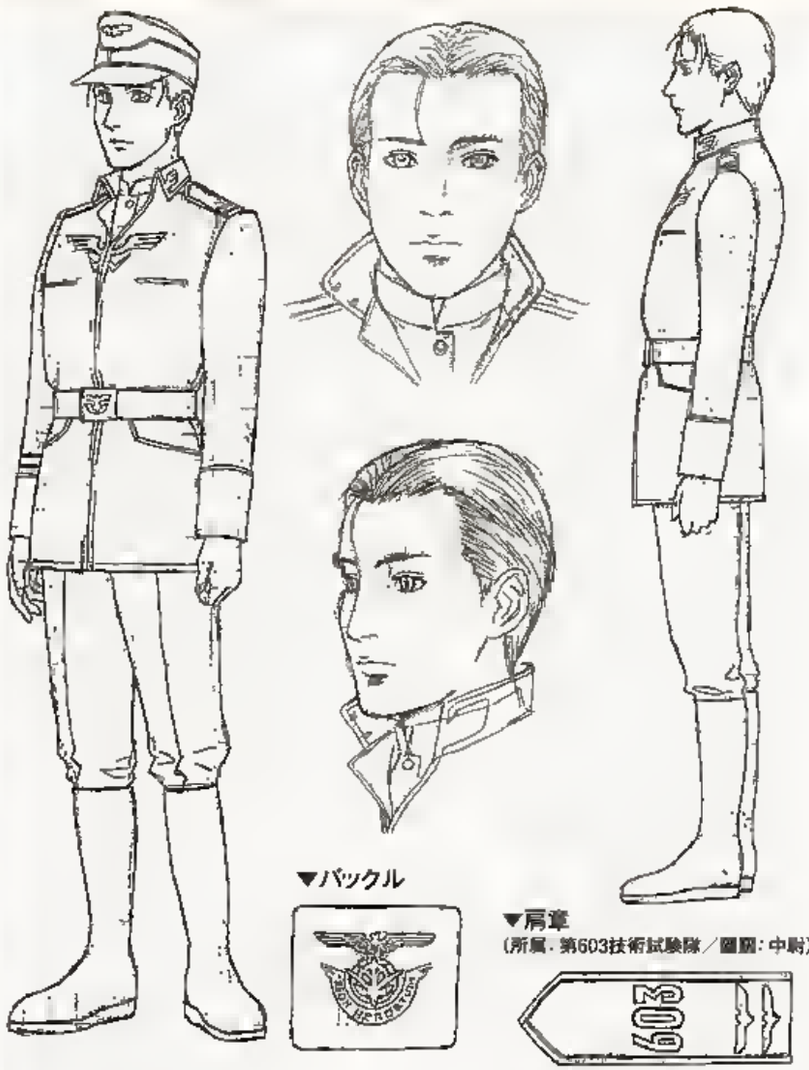
▶階級章（伍長）

フライトスーツ

機動浮遊機PVN.4/3 WAPPAの乗員が着用したコスチュームで、正式名称は「CWU-2/G　フライトスーツ」。ノーマルスーツ（M-73）から生命維持装置を省いたものである。ヘルメットはノーマルスーツ用を流用している。



地上用ノーマルスーツとも呼ばれる。地球で活用する着用者のストレス軽減にも役立ったとされる。



▼バックル

▼肩章
（所属：第603技術試験隊／階級：中尉）



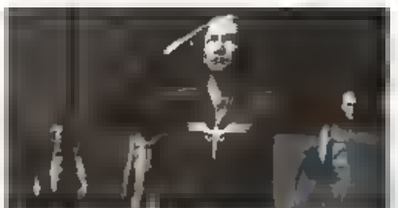
▲ハンナ・カリーナ
技術中尉

▲フィリップ・ブーランジェ
技術中尉

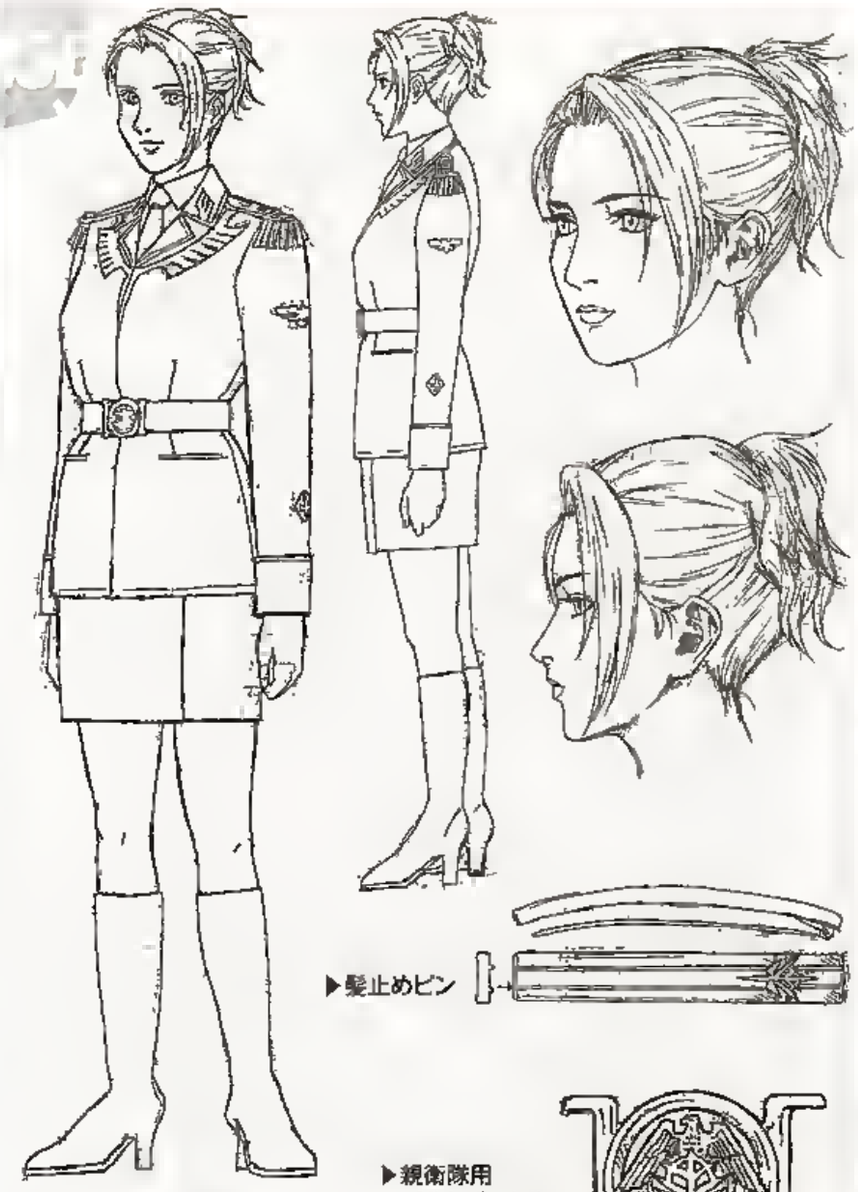
▲エドガー・ノーズ
技術中尉

オリヴァー・マイ技術中尉

ジオン公国軍の技術本部に所属する技術中尉で、第2種戦闘服を着用している。ヘルメットや制帽をかぶることはなかった。右腕には「Jotuneheim603」と刺繍されたアームバンドを付けている。



髪はオールバックに撫で付けられており、制服も襟元を開ける程度で、ラフな格好などはしていなかった。



▶髪止めピン

▶親衛隊用
ベルトバックル

▼親衛隊用肩章/階級章



▼アームバンド



モニク・キャディラック
特務大尉

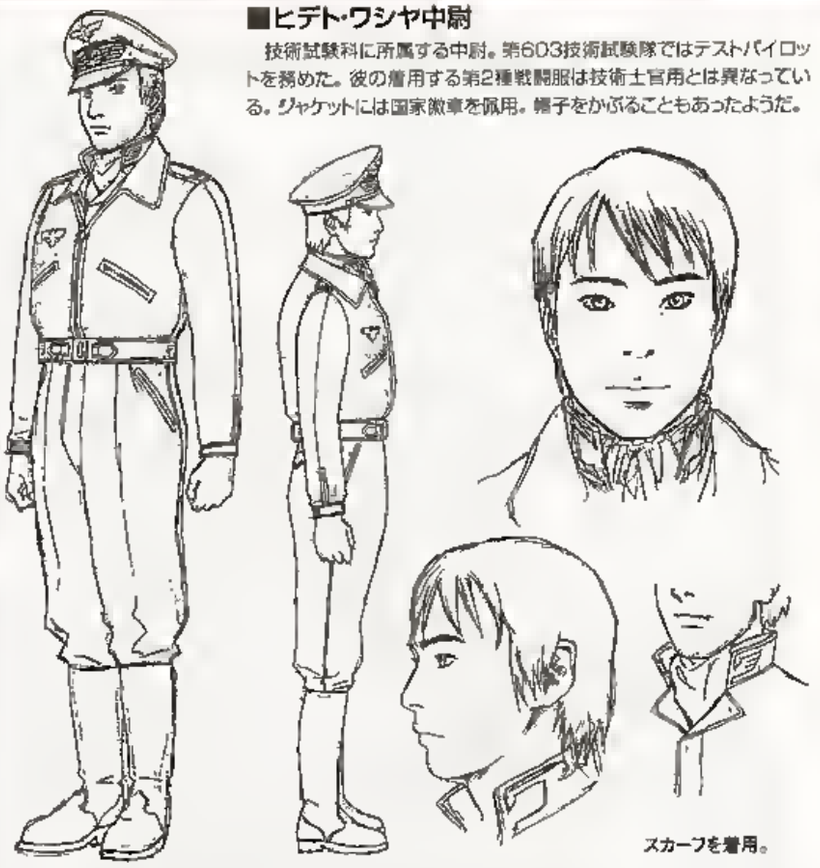
総統府から派遣された管理官。赤をベースとした制服を着用し、肩章も親衛隊用であった。左腕には国家徽章とペーネミュンデ機関の徽章が、右腕にはアームバンドを付けている。ブーツはハイヒールである。



キャディラック特務大尉の制服がほかと異なっていたのは、彼女の所属が総統府であったためと思われる。

■ヒデト・ワシヤ中尉

技術試験科に所属する中尉。第603技術試験隊ではテストパイロットを務めた。彼の着用する第2種戦闘服は技術士官用とは異なっている。ジャケットには国家徽章を佩用。帽子をかぶることもあったようだ。



スカーフを着用。

■マルティン・プロホノウ中佐相当官

ヨーツンヘイムの艦長。軍服のタイプは士官用と思われるが詳細は不明。上着を羽織っており、右胸に国家徽章のワッペンを、制帽には国家徽章と宇宙艦艇乗組員の徽章を佩用している。



▲肩章

■エーリッヒ・クリューガー大尉相当官

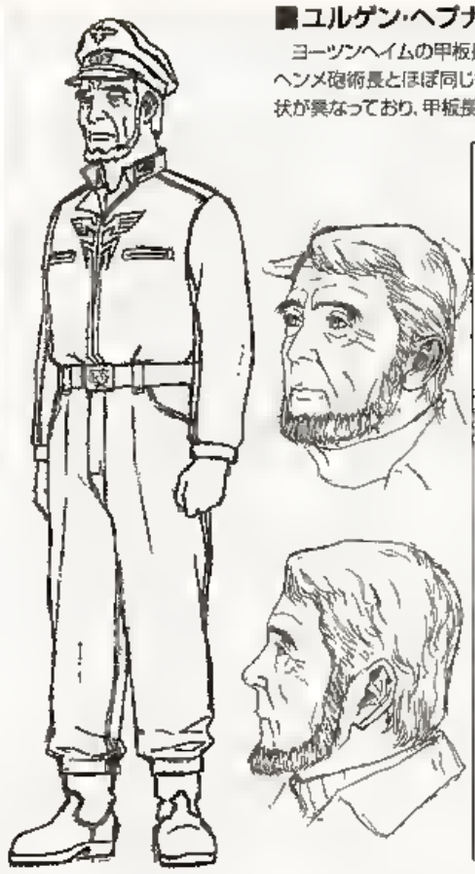
ヨーツンヘイムの副長を務めた。第2種戦闘服と思われるが、上着のデザインが異なっている。ズボンとブーツは、一般的な第2種戦闘服と同じものを■用している。肩の肩章は大尉を示している。



▶肩章

■ユルゲン・ヘプナー少佐相当官

ヨーツンヘイムの甲板長。ツナギタイプの第2種戦闘服で、砲術科のヘンメ砲術長とほぼ同じものであった。胸のポケットと尻ポケットの形状が異なっており、甲板長のみがこのタイプを着用していた。



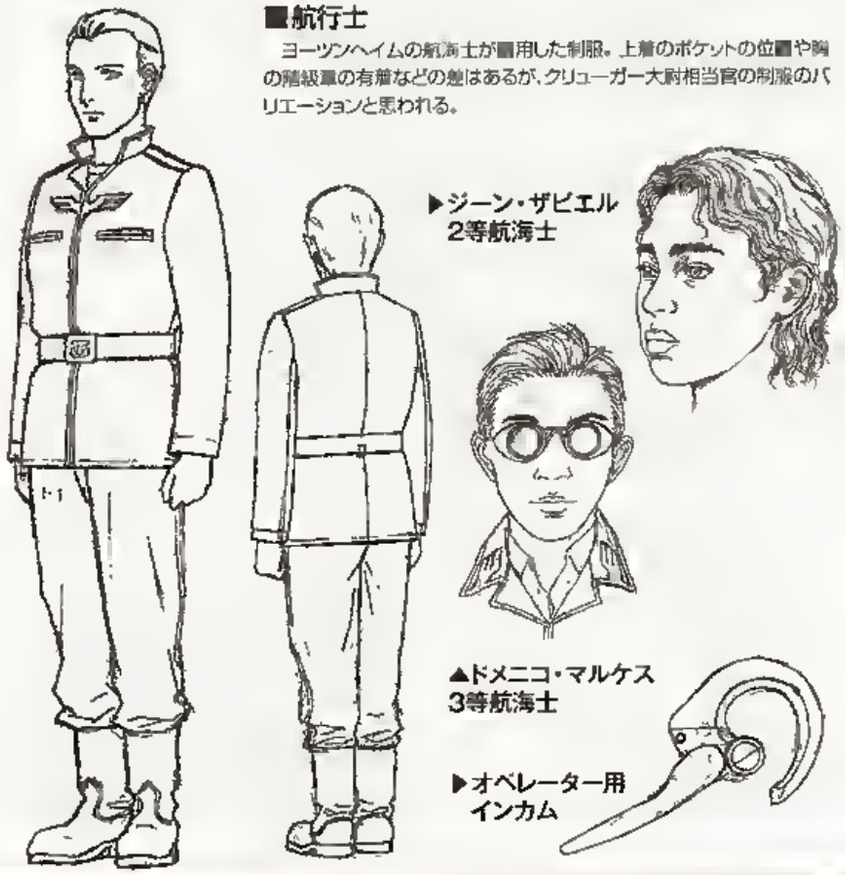


▲キム・ハラミ　▲ウィリアム・ファン2等航海士

甲板員用作業服。
背部に「DECK CREW」とプリントされる。

■航行士

ヨーツンヘイムの航海士が■用した制服。上着のポケットの位■や胸の階級章の有無などの違はあるが、クリューガー大尉相当官の制服のバリエーションと思われる。



▶ジーン・ザビエル
2等航海士

▲ドメニコ・マルケス
3等航海士

▶オペレーター用
インカム

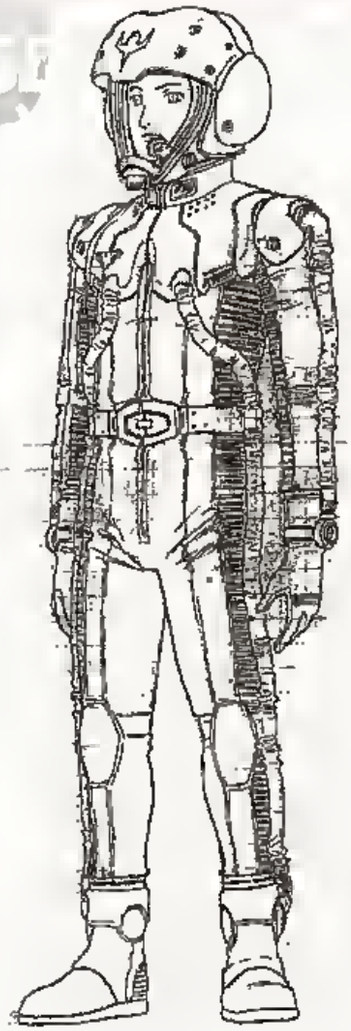
■アルベルト・シャハト技術少将

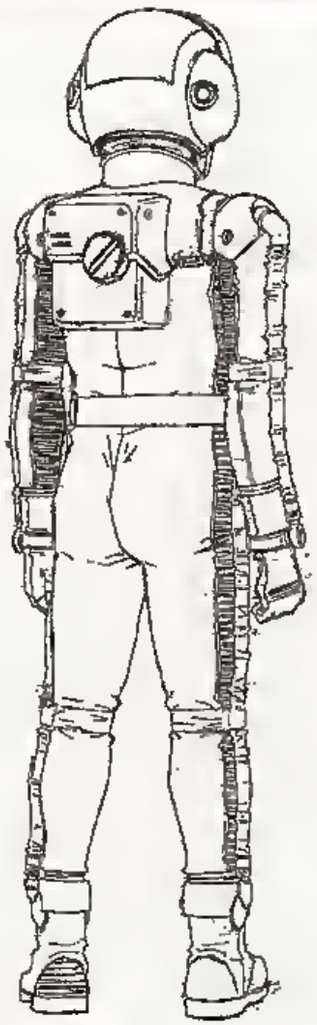
技術本部を統括する人物。軍服の形状はほかと大きく異なっている。胸に一級ジオン十字章を佩用。肩章も紐飾りが施されるなど、特殊な作りとなっていた。

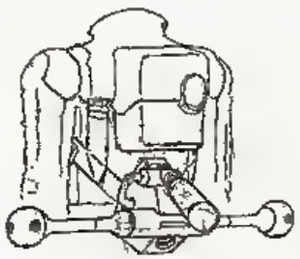


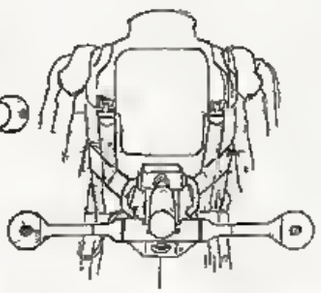
▲モノクル／フレーム

▲▶肩章









▲▶ランド・ムーバー



▶コントロール・ボックス



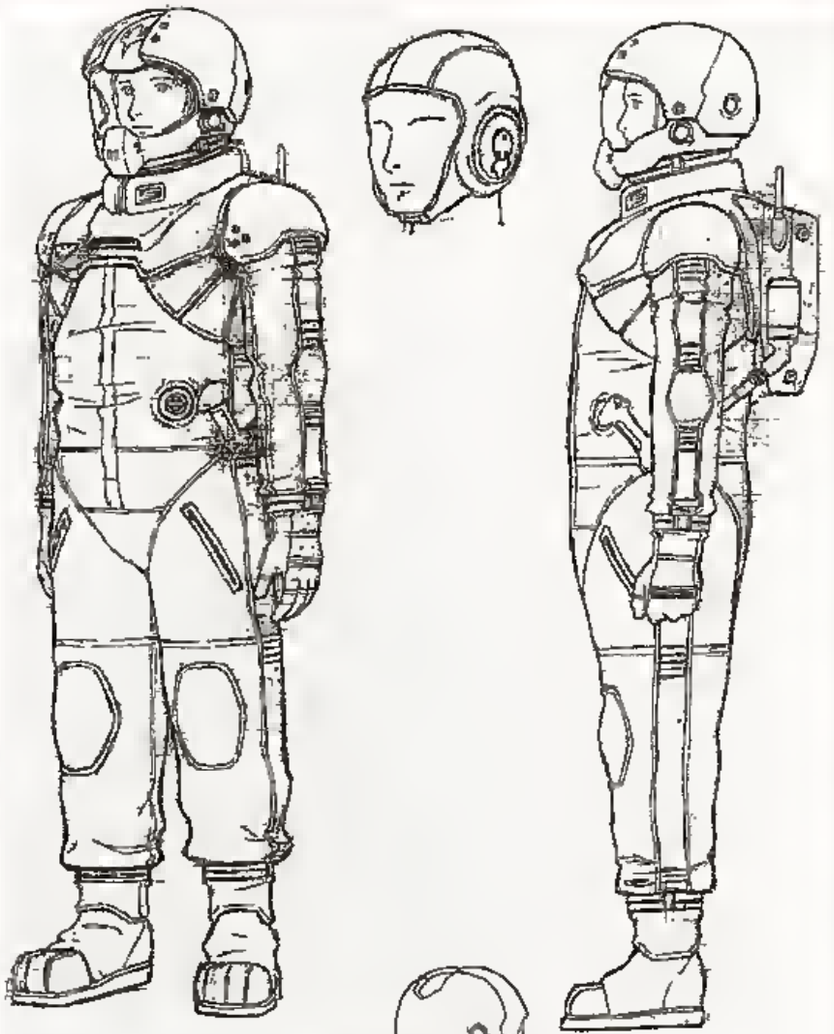
▼ベルト（前部止め金）

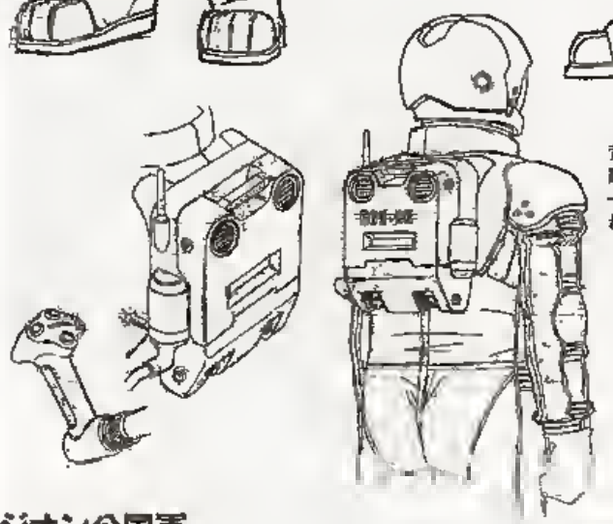
テストパイロット用 ノーマル・スーツ

ジオン公国軍のテストパイロット用のノーマル・スーツで、試作兵器のパイロットが着用した。各所に設けられたパイプや肩の形状などが、M-73とは異なる。ヘルメットも独特で、バイザー部分が大きくなっている。



テストパイロットだけではなく、マイ技術中尉やキャディラック特務大尉、ワシヤ中尉も着用している。





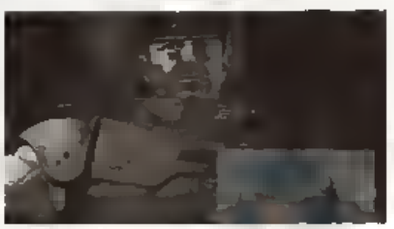
背部のランドセルには、移動用のスラスターとコントロール用のスティックが設けられている。



ブーツの裏には球状の磁力板が、5箇所に取り付けられている。

ジオン公国軍 一般用ノーマル・スーツ

テストパイロット用と比較して、大きめのシルエットが特徴。重装宇宙服ともいわれ、ヨーツンヘイムではブリッジ要員をはじめ、甲板員、砲術科などが着用した。ヘルメット内はインナーを着用する。



非常時には艦長をはじめ、ブリッジ要員もノーマル・スーツを着用した。

■アレクサンドロ・ヘンメ大尉

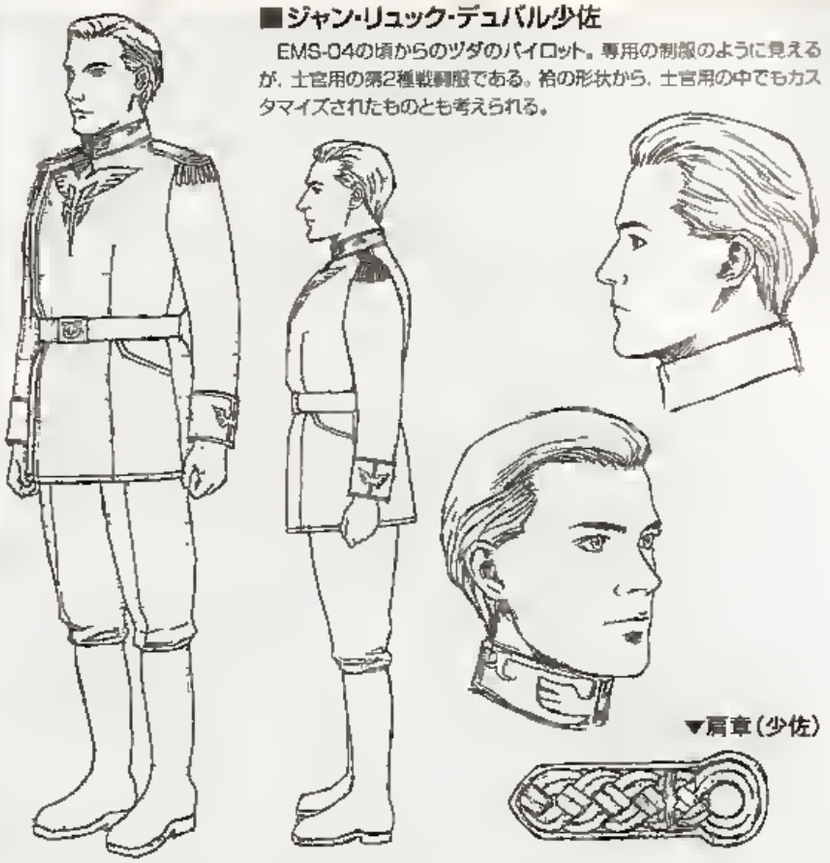
ヨーツンヘイムの砲術長。軍属の「担当官」ではなく、公国軍人である。甲板長と同じくツナギタイプの第2種戦闘服を着用している。帽子は略帽で、中心には国家徽章（ワッペンと思われる）が付いている。



左は砲術科員のゼン・ワーテルロー少尉。彼以外の砲術科員の名前などは不明。

■ジャン・リュック・デュバル少佐

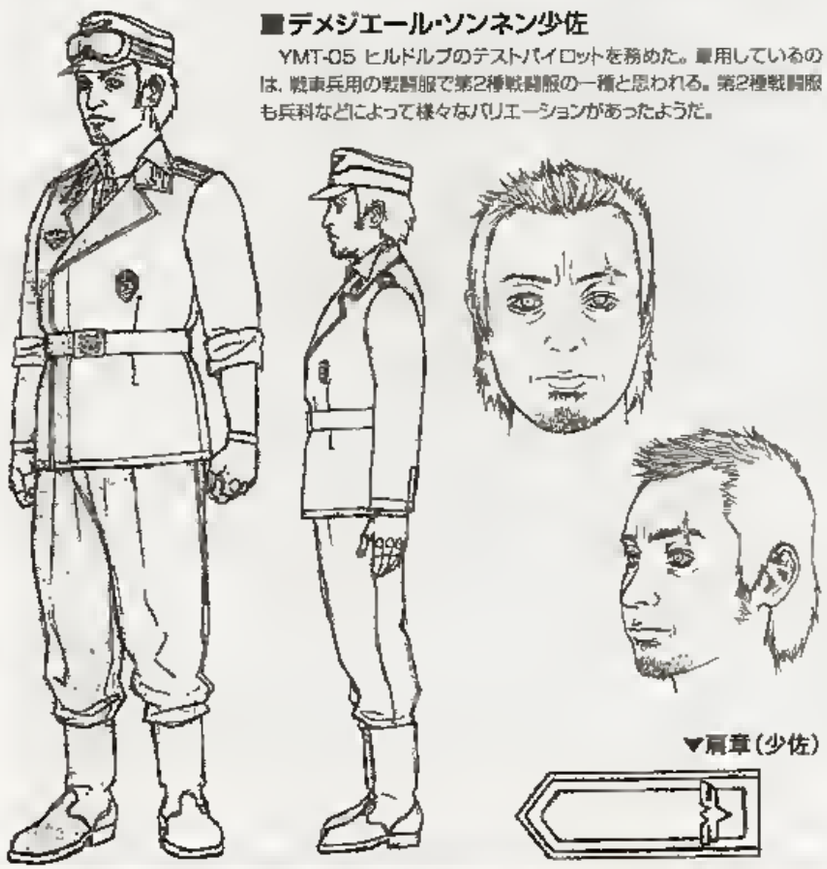
EMS-04の頃からのツダのパイロット。専用の制服のように見えるが、士官用の第2種戦闘服である。袖の形状から、士官用の中でもカスタマイズされたものとも考えられる。



▼肩章（少佐）

■デメジエール・ソンネン少佐

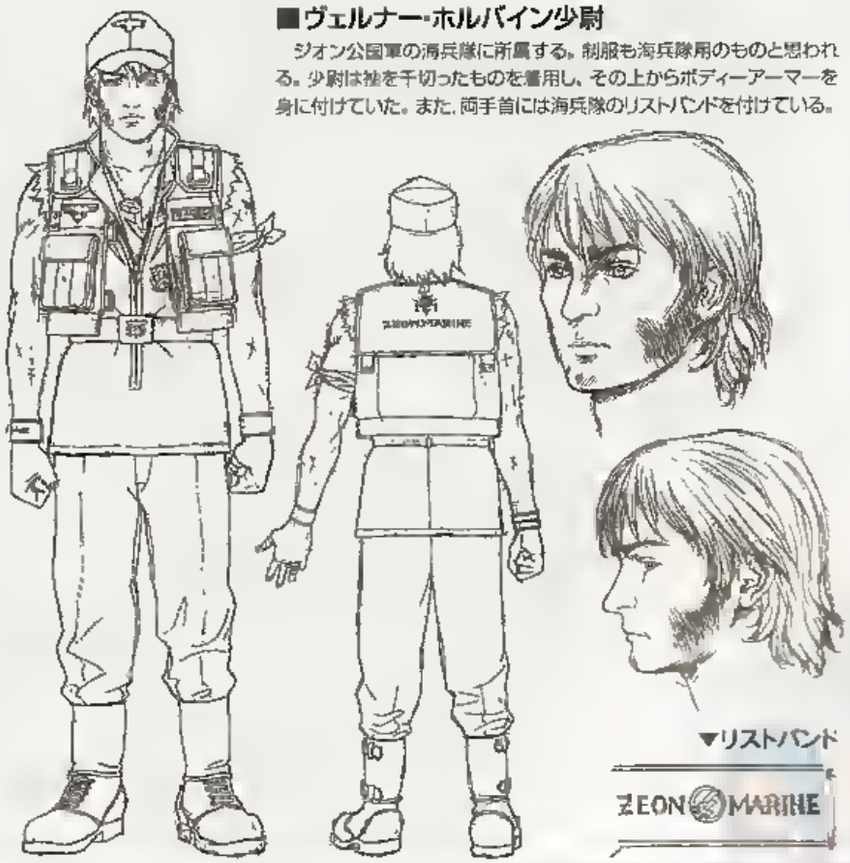
YMT-05 ヒルドルブのテストパイロットを務めた。着用しているのは、戦車兵用の戦闘服で第2種戦闘服の一種と思われる。第2種戦闘服も兵科などによって様々なバリエーションがあったようだ。



▼肩章（少佐）

■ヴェルナー・ホルバイン少尉

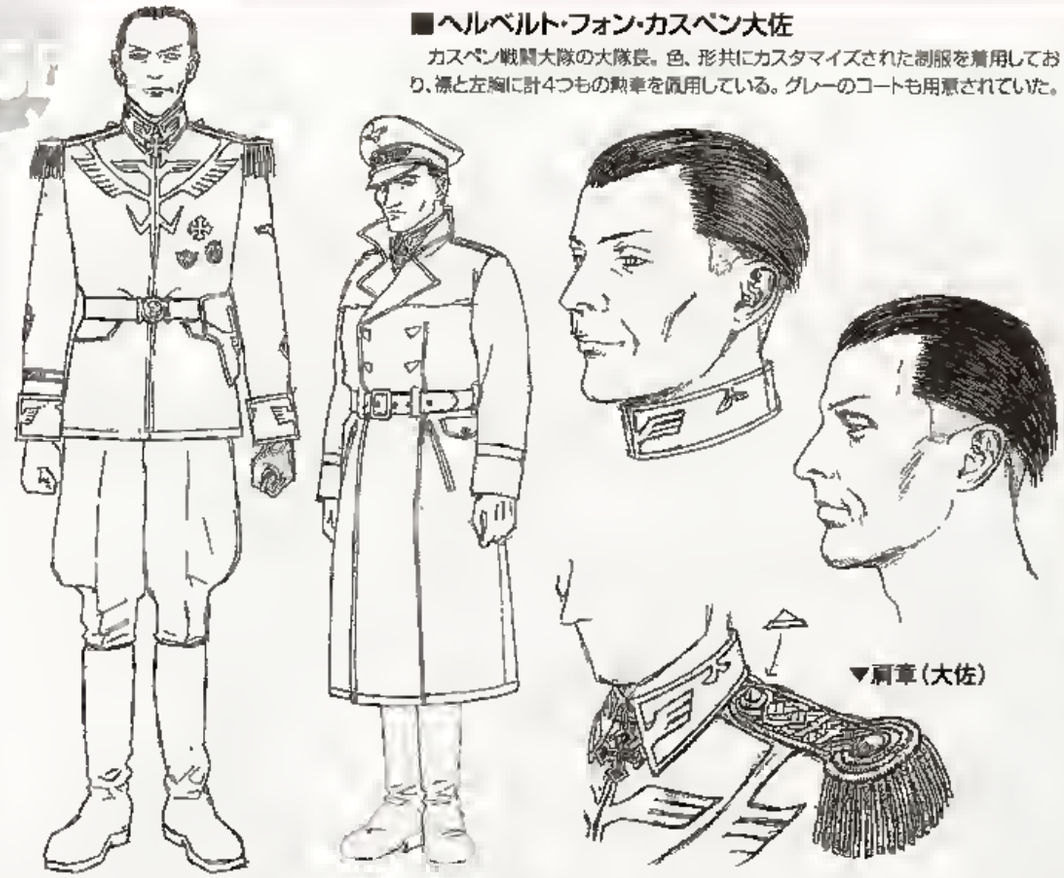
ジオン公国軍の海兵隊に所属する。制服も海兵隊用のものと思われる。少尉は袖を千切ったものを着用し、その上からボディーアーマーを身に付けていた。また、両手首には海兵隊のリストバンドを付けている。



▼リストバンド

■ヘルベルト・フォン・カスペン大佐

カスペン戦闘大隊の大隊長。色、形共にカスタマイズされた制服を着用しており、襟と左胸に計4つもの勲章を佩用している。グレーのコートも用意されていた。



▼肩章（大佐）

ジオン公国軍の装具類

地球連邦軍と同様、ジオン公国軍の歩兵も銃器をはじめとする様々な装具を使用した。特に銃器は多様なバリエーションがあったことで知られ、ここで紹介するものもその一部である。制服や勲章など、「大時代的」な装飾を好んだジオン公国軍の特徴はこういった装具類からも見て取れる。



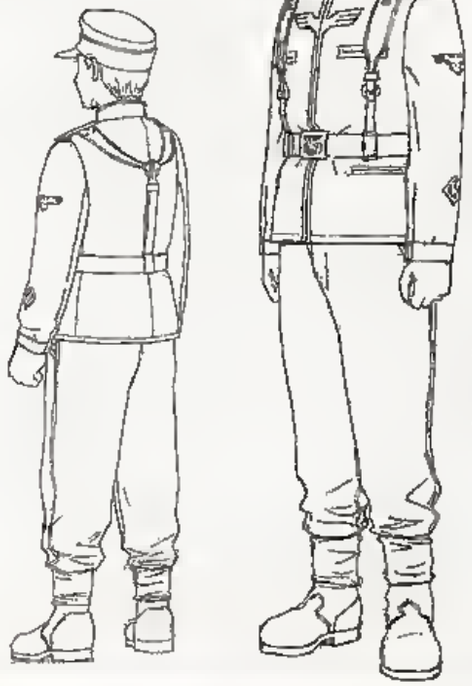
銃器のバリエーションは特に多く、制式ライフルや拳銃にもいくつかの種類があったとされる。

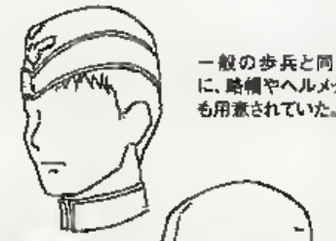


ロケット弾なども装備も用意されていた。地球連邦軍の歩兵と同様、ジオン公国軍の歩兵もこうした兵器を使用して地上戦を戦ったのである。

■年少兵

再編されたカスペン戦闘大隊に配属となった年少兵たち。第2種戦闘服に似た軍服を着用しており、制帽に加え、一般の歩兵と同じサスペンダーを身に付けていた。



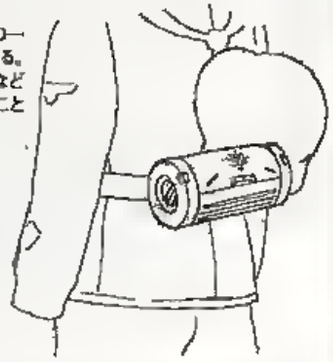


一般の歩兵と同様に、略帽やヘルメットも用意されていた。

▲略帽

▶ヘルメット

▼多用途マスクケース



汎用ポーチの一種と思われる。防護マスクなどを収納することもあった。

ヨーツンヘイムに配属となった年少兵（うちひとりは年長兵）で、名前が判明しているのは以下の7名である。



▲エルヴィン・キャディラック曹長



▲フランツ・ブラント伍長



▲フリードリヒ・カッテル伍長



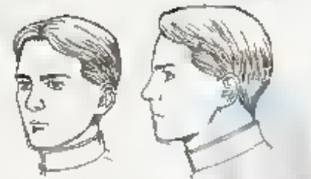
▲ヨセフ・デューイ伍長



▲ヘルマン・エッケルト曹長



▲エミール・フローリン伍長



▲フレデリック・ヤーン先任准尉

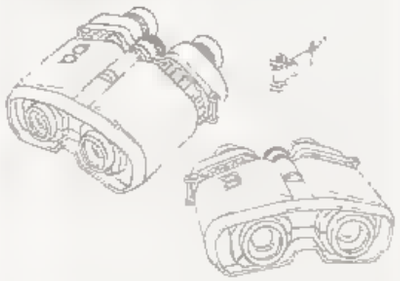
■小隊用小型無線機

背中に背負って使用するタイプの無線機。トランシーバーなどとは異なり、ミノフスキー粒子散布環境下でもある程度の通信範囲を確保できたと思われる。



■双眼鏡

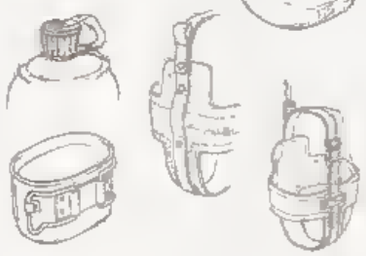
軍用多用途双眼鏡で正式名称は「Appe BC79EG binoculars」。カメラ機能やビデオ機能、コンパス機能、光信号機能なども備えた多用途双眼鏡。



■水筒

蓋にかぶせるようにして、カップを取り付ける。ケースにはベルトループやサスペンダーに取り付ける金具が設けられている。





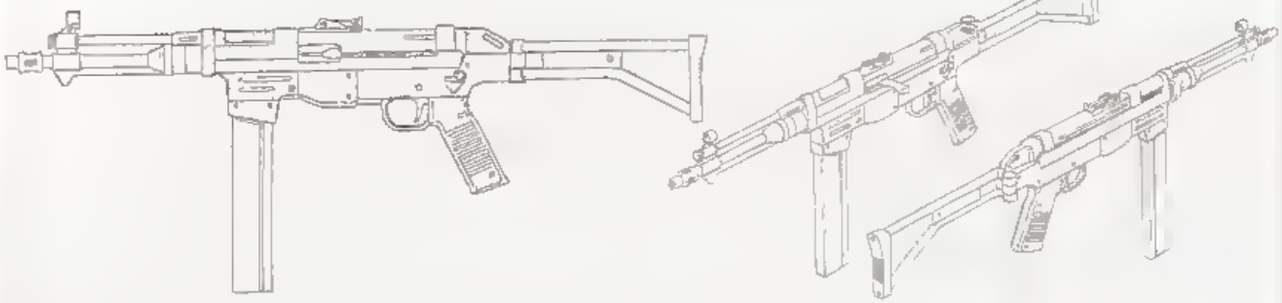


■バッグ

地球連邦軍のドラムバックと同じで、小物などを収納した。ストラップとベルトループがあり、肩かけやベルトに通して保持した。

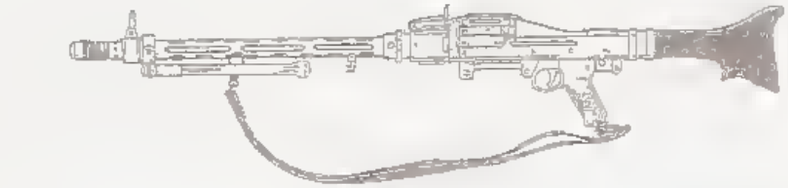
■スマルツァ MP-71

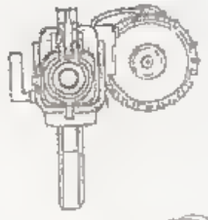
ジオン公国軍のマシンピストルで、細身のシルエットが特徴。マガジンの大きさから、小口径だったと思われる。折り畳み式のストックを採用。大きさや装弾数は不明。



■マズラ MG74

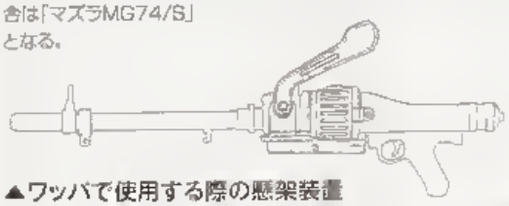
ジオン公国軍の多用途機関銃のうちのひとつ。歩兵用として使用されたほか、ワッパやサウロペルタに懸架しての運用も可能であった。また、ワッパでは、短銃身に変更し、ストックも取り外して使用した。その場合は「マズラMG74/S」となる。



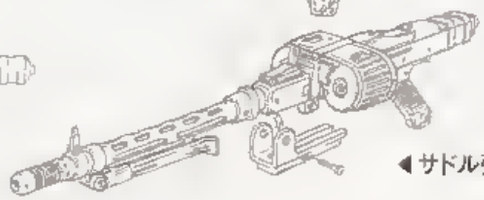




▲単発ドラム弾装(50発)



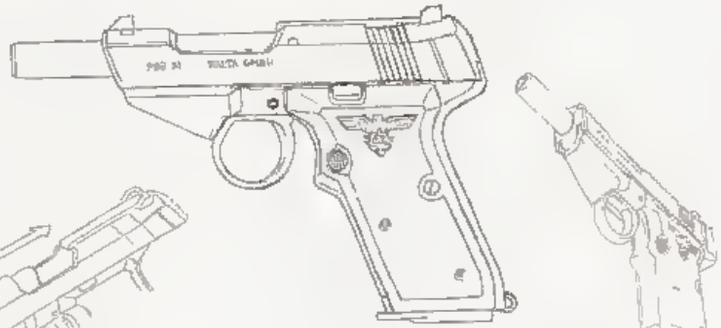
▲ワッパで使用する際の懸架装置

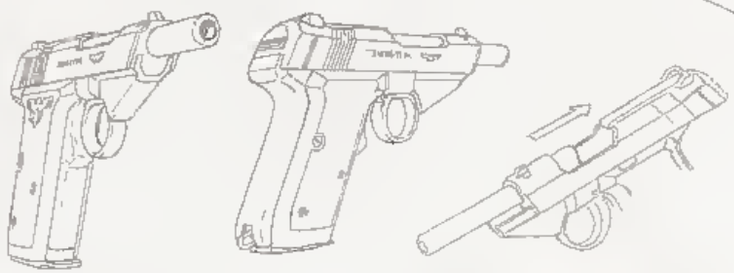


◀サドル弾装タイプ(80発)

■ ヴァルタ P08-M

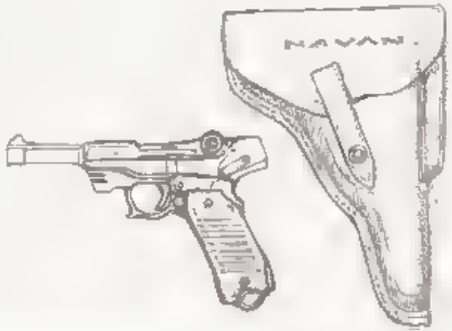
ジオン公国軍の制式拳銃。比較的小型で、トリガーガードがない独特の構造を持つ。高級将校用はグリップに国家徽章が付くの。





■ホルスター

ジオン公国軍の制式拳銃のひとつである、ナバンP-62M用のホルスター。カバーの部分に「NAVAN」の刻印が入る。



■マガジンポーチ

ジオン公国軍の制式ライフルであるStg78用のマガジンポーチ。二種類あり、サスペンダーやベルトに装着した。



◀単発式マガジンポーチ

▼3連装マガジンポーチ



多様な種類を誇る、ジオン公国軍の徽章、勲章

ジオン公国軍の制服は時として「大時代的」と揶揄されることがある。これは同軍が時代がかった衣装を採用することで、ある種の「英雄像」を演出しようとしたこととも関係がある。それと同時に様々な徽章や勲章は、その演出を高める小道具として用いられた。これらは戦功によって与えられ、兵士の士気の高揚にも繋がったのである。



戦功をあげたパイロットには、制服のカスタマイズやパーソナルカラーの使用も許可された。



パイロットが佩用する勲章は、その戦功や武勲、そしてそれらを成し遂げた力量を示すものであった。

■勲章や徽章の佩用位置

勲章や徽章を付ける位置についての厳密な決まりはなかったようだが、全員はほぼ同じ場所に佩用していた。これもジオン公国軍が、「大時代的」と呼ばれることと関係があるとされている。



襟
将兵によっては勲章などを付けることがあった。図のようにカスペン大佐は1級ジオン十字章を佩用していた。

肩
階級章を兼ねた肩章が付く。所属や階級などによって肩章の装飾そのものも異なっていた。

胸
勲章や徽章の多くはここに佩用した。カスペン大佐は2級ジオン十字章、白兵戦功章、ブリティッシュ作戦功労章の3つを付けていた。

左袖
戦功章やアームバンド（カフスタイ）を着用。カスペン大佐はルウム戦役シールドやカスペン戦闘大隊のアームバンドを付けていた。

右袖
所属部隊章を付けることがあった。キャディラック特務大尉はベーネミュンデ機関徽章を、カスペン大佐はカスペン戦闘大隊の略称を付けていた。

階級＼所属	国防軍	親衛隊
一般兵士（2等兵、1等兵、上等兵）		
下士官（伍長、軍曹、曹長）		
准尉		
少尉		
中尉		
大尉		
少佐		
中佐		
大佐		
少将		

■徽章

国家徽章はジオン公国軍将兵のほぼ全員が佩用する。それ以外は、所属部隊や技能などによって佩用するものが異なっていた。将校用は金属製で、下士官用はフェルト製の2種類があった。



将校帽用国家徽章(金属製)



親衛隊徽章(帽章)



MSパイロット徽章(帽章)



宇宙艦艇乗組員(帽章)



MSパイロット徽章



ベーネミュンデ徽章



ジオン海兵隊徽章



地上部隊用(帽章)

■勲章／戦功章

勲章は上げた戦功によって下賜されるもので、その中でも1級ジオン十字章などは最高クラスのもののひとつであった。戦功章は参加した作戦(もしくはその中で上げた戦功)によって与えられたとされる。



1級ジオン十字章



2級ジオン十字章



ブリティッシュ作戦功労賞



ルウム戦役シールド



第一次降下作戦シールド



宙雷戦功章



白兵戦功章



戦傷章

■部隊章

ジオン公国軍では部隊章やパーソナルマークなどの装飾については比較的自由に行われていたようだ。特にパーソナルカラーやパーソナルマークを持つパイロットは、積極的にプロパガンダに用いられた。



ヨルムンガンド運用部隊マーク



ソンネン少佐のペンダントヘッド



デュバル少佐のパーソナルマーク



エルマー・スネル大佐のパーソナルマーク



カスペン戦闘大隊の部隊章



カスペン大佐のパーソナルマーク



ホルバイン少尉のパーソナルマーク

STAFF&CAST

機動戦士ガンダム MSイグルー ー1年戦争秘録ー

STAFF

原作 矢立 肇 富野由悠季「機動戦士ガンダム」より
監督 今西隆志
脚本 大熊朝秀(1、3話) 大野木寛(2話)
演出 松田剛史
ベースメカニカルデザイン 大河原邦男
スーパーバイザー 出渕 裕
デザインワークス 出渕 裕・カトキハジメ・荒牧伸志・山根公利 藤岡建機
設定考証 永瀬 唯
CGスーパーバイザー 小畑正好
音響監督 藤野貞義
音楽プロデューサー 野崎圭一 真野 昇
音楽 大橋 恵
主題歌 "時空のたもと"歌 Taja
音楽制作 ビクターエンタテインメント・サンライズ音楽出版
プロデューサー 井上幸一 今西隆志 川口克己 久保 聡
製作協力 ボビー バンダイビジュアル
企画 製作 サンライズ

CAST

オリヴァー マイ 石川英郎
モニク・キャディラック 長沢美樹
マルティン・ブロホノウ 飯塚昭三
ヒデト・ワシヤ 福山 潤
エーリッヒ クリューカー 松本 大
ジーン・ザビエル 高橋美佳子
ドメニコ マルケス 志賀克也
アルベルト シャハト 大木民夫

第1話「大蛇はルウムに消えた」
アレクサンドロ・ヘンメ 宝亀克寿

第2話「運命えは落日に染まった」
デメジエール・ソンネン 天田益男
フェデリコ・ツァリアーノ 中田譲治

第3話「軌道上に幻覚は疾る」
ジャン・リュック・デュバル 土師孝也

機動戦士ガンダム MSイグルー ー黙示録0079ー

STAFF

原作 矢立 肇 富野由悠季「機動戦士ガンダム」より
監督 今西隆志
脚本 大野木寛(1話) 大熊朝秀(2、3話)
演出 松田剛史
ベースメカニカルデザイン 大河原邦男
スーパーバイザー 出渕 裕
デザインワークス 出渕 裕 カトキハジメ 荒牧伸志 山根公利 藤岡建機 柳瀬敬之
設定考証 永瀬 唯
CGスーパーバイザー 小畑正好
音響監督 藤野貞義
音楽プロデューサー 野崎圭一 真野 昇
音楽 大橋 恵
主題歌 "夢幻~ユメマボロシ~" 歌 Taja
音楽制作 ビクターエンタテインメント サンライズ音楽出版
プロデューサー 井上幸一・今西隆志 久保 聡
製作協力 バンダイビジュアル
企画 製作 サンライズ

CAST

オリヴァー マイ 石川英郎
モニク キャディラック 長沢美樹
マルティン・ブロホノウ 飯塚昭三
ヒデト・ワシヤ 福山 潤
エーリッヒ クリューカー 松本 大
ジーン ザビエル 高橋美佳子
トメニコ・マルケス 志賀克也
アルベルト・シャハト 大木民夫

第1話「ジャブロー上空に海原を見た」
ヴェルナー・ホルバイン 堀内賢雄

第2話「光芒の峠を越えろ」
ヘルベルト フォン カスペン 沢木郁也
エルヴィン・キャディラック 相田さやか

第3話「雷鳴に魂は遥る」
ヘルベルト フォン カスペン 沢木郁也

機動戦士ガンダム MSイグルー2 重力戦線

STAFF

原作 矢立 肇 富野由悠季「機動戦士ガンダム」より
監督 今西隆志
脚本 大熊朝秀
演出 松田剛史
ベースメカニカルデザイン 大河原邦男
スーパーバイザー 出渕 裕
デザインワークス 山根公利・出渕 裕 荒牧伸志 草薙琢仁 片貝文洋
CGスーパーバイザー 小畑正好
音響監督 藤野貞義
音楽 大橋 恵
協力 バンダイホビー事業部
製作協力 バンダイビジュアル
企画 製作 サンライズ

CAST

ミケーレ コレマッタ 東地宏樹
死神 井上喜久子

第1話「あの死神を撃て!」
ヘン バーバリー てらそままさき
パパ・シドニー ルイス 檜山修之
キシリア・ザビ 小山茉美

第2話「陸の王者、訪ヘリ」
ハーマン ヤンデル 藤原 啓
レイバン・スラー 小西克幸
エルマー・スネル 大塚明夫
キシリア ザビ 小山茉美

第3話「オデッサ、鉄の嵐!」
アリーヌ・ネイズン 井上喜久子
クライド・ベタニー 遊佐浩二
ミロス カルッピ 塙 大樹
ドロバ・タズワヨ 斉藤恒太郎

機動戦士ガンダム MS IGLOO Mission Complete

2009年12月29日初版第一刷発行

■ 編集 MEGALOMANIA
■ 執筆 MEGALOMANIA 杉山和繁 坂口徳仁
■ デザイン 海月デザイン(田村 宏 佐々木由美子 竹本青子)
■ 設定原案 今西隆志 永瀬 唯 小泉 聡 井上幸一(サンライズ)
■ 設定担当 瓜子英虎(サンライズ) 岩切泰助(サンライズ)
■ 表紙 扉絵CG画像制作 株式会社サンライズ デジタル制作部 DIDスタジオ
監修 今西隆志
表紙 3DCG:井上喜一郎
P009 3DCG:上地正弘
P049 3DCG 清水美男
P079 3DCG:宮薫慎一
2Dエフェクト 清水満政
担当 瓜子英虎
■ レイアウト 木下ともたけ
■ 図版作成 鶴沼安希雄
■ 協力 株式会社サンライズ

発行人 高橋一平
発行所 株式会社竹書房
〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-7-3
電話 03-3264-1576(代表)
03-3234-6244(編集)
振替 00170-2-179210
竹書房ホームページ http://www.takeshobo.co.jp

印刷 製本 図書印刷株式会社
● 定価はカバーに表示してあります。
● 乱丁 落丁の場合はお取替えいたします。
● 本書は品質保持のため、予告なく変更や訂正を加える場合があります。
● 本書に掲載される画像及び文章の無断転載、引用は禁止されています。

ISBN978-4-8124-4093-3 C0076
Printed in Japan
© 創通 サンライズ





監修:今西隆志
3DCG:井上喜一郎

© 創通・サンライズ

MOBILE SUIT GUNDAM

MS IGLOO
Mission Complete

機動戦士ガンダム MS IGLOO Mission Complete



TAKE SHOBO

ISBN978-4-8124-4093-3
C0076 ¥2500E

9784812440933

定価 本体2500円＋税

1920076025006

竹書房
B Media Books Special

MOBILE SUIT GUNDAM MS IGLOO Mission Complete

機動戦士ガンダム MS IGLOO
Mission Complete